

---

# 今宵、死神とダンスを

紫雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今宵、死神とダンスを

### 【Nコード】

N4079E

### 【作者名】

紫雪

### 【あらすじ】

舞台は東京、此岸しがんと呼ばれる裏社会。冥府より発行される死亡予定表と実際の生死の辻褃合わせをする死神・真雪と、イレギュラーと呼ばれるバケモノを狩るチェイサー・美冬の物語。パートナーを組む二人は、ある日奇妙な事件に巻き込まれて……？死が苦手な死神とキレやすい女子の恋愛もアリな、貴方の隣にひそむ少し不思議な現代ファンタジー。

## プロローグ：覚醒前夜

それはまるで美冬にとって影のようなものでもあった。

いつからかは思い出せないが、物心付いた時には既に彼女を知っていた気がする。

「……………貴方は誰？」

振り返った先には、自分を見つめる無感情な瞳。

黒い袴に黒く長い髪の少女。

雪のように白い肌は温もりさえ感じられないような作り物めいた雰  
囲気。

きつと人形だといわれれば信じてしまいそうな所さえある。

「……………」

ただ沈黙ばかりが流れる。

「いつもあたしを見てるよね。いつも側にいるよね。……………貴方は、  
誰？」

木々が歌う。

風に踊らされた木々が揺れ、その光景がスローモーションのように  
ゆっくりと流れた。

美冬が怪訝そうに少女を見つめる。

今は穏やかな光でさえ、頭上に咲き誇る桜でさえ目に映らない。

美冬にとっては自分と少女と、それが世界の全てあるかのように。

他のものは全て消えてしまったかのような錯覚さえ。

「貴方は」

『……………吾はウタカタ』

少女の唇が動く。

距離は離れているはずなのに、冷たさの混じる声は耳のすぐ側で響く。

美冬は思わず言葉を飲み込んだ。

『意識には消え、無意識には映る』

二人の間を風が割って入った。

『死近し者に死期を歌う』

目の前に少女の姿は見えているのにすぐ後ろにたたずんでいるように思える。

身体は動く事を忘れたように止まり、視線をそらす事さえも許されない。

「……………死、近し、者？」

うわごとのように口をついて出た言葉。

風にすらかき消されそうな大きさの声のはずだが、少女はその言葉にわずかに顎を引いた。

「あたしは死ぬの？」

『君は』

数メートル離れていたはずの少女が美冬の目の前で見上げている。

「……………っ！」

『死に、魅入られる』

感情のない闇のように黒い瞳が笑った。

『彼岸に憧れても、たどり着く事は、許されない』

少女は美冬を見つめたまま、目を細める。

子供の笑みとは思えない、艶然とした笑みを。

『死から、分かち、死と、共に、生きる』

「ちよ、待って！一体どういう……………！」

『……………君に』

言葉をさえぎる静かな声。

見ると、少女は白い指をわずかに手招きするように動かした。

「な、なに？」

美冬が思わず前かがみになり、少女に顔を近づける。

不意に。

美冬の胸元に少女が手を添えるように触れ、大きくまたたく美冬の唇に少女がくちづけた。

温度を感じないのに、何故か氷のような感覚を感じる。

ほんのわずかの出来事にも関わらず、数十秒間の出来事にも感じた。微動だにできない。

少女が美冬から離れても、美冬はまだ動けずにいた。

「……な」

あっけにとられたように、見つめる。

少女は微笑む事もなく、感情のない瞳で見つめ返す。

『死と、共に、生きる』

我に返ると、少女は美冬から数メートル離れた場所にたたずんでいた。

美冬は前かがみ姿勢のまま止まっている。

少女は美冬を一瞥すると、きびすを返し歩き始めた。

「ま、待って！」

その声は少女に届いたのだろうか。

ただ、そこにあるのは

春独特の酔ったような空気を運ぶ風と、屍のように咲き続ける桜。

美冬は何かを口の中で呟くように唇を動かし、何も無い目の前を見つめた。

## 1 moonlit night

「いつもみたいに嫌いって言わないのかよ」  
頬に触れる大きくしなやかな手。

耳元で聞こえる笑いを含み囁く声に、美冬は息苦しさを感じて目を伏せた。

体温を奪われるような冷たい鉄骨に背中をつけて。

「……馬鹿」

見上げる先にはアメジストの色に似た瞳が微笑む。

その先に見える半月。

美冬が怖々と伸ばした指に真雪の指が触れ、絡ませた。

指先に互いの温もりが伝わる。

青白い夜だった。

建築途中で放棄された工事現場に重なる影。

骨組みの鉄骨が月の光に照らされ、それはまるで遺跡のようにも見える。

「真雪」

美冬の唇が息を漏らすように甘く、名を呼ぶ。

絡む視線。

鼻先が触れ合う距離で見つめ合った。

息苦しさと正体不明の胸の鼓動を覚えるが、相手に聞こえてしまっ  
気がして

美冬は思わず息を殺す。

「じつしてると、すぐドキドキするの。どうして？」

切なげな言葉。

真雪は頬に手を当てたまま、親指で美冬の唇に触れる。

小声でかわす言葉でさえ響きそうな静寂が辺りを包んでいた。

人影はなく、まるで世界に2人しか存在しないように。

「教えて欲しいか？」

真雪がゆっくりと瞬きし、言葉をつむいだ。

微笑む。

美冬の空いた右手が真雪の背中に回され。

それに合わせるように目を伏せ、美冬の唇に真雪が顔を近づけた。

唇が触れ合うか、合わないかの距離。

互いの体温がほのかに伝わる。

静止。

閉じようとしていた二人の目が開き、至近距離で何かを会話するようにつめ。

「……」

次の瞬間。

どちらからでもなく、吐き出された大きなため息。

「またこのパターンかああ！」

美冬が真雪の胸元に手を置き脱力したようにうなだれると、怒気混じりの声を上げた。

「アレだ。この神がかり的なタイミングは国家レベルで俺たちの邪魔をしてくれるかと思えねえ」

「超同感だわ」

真雪が苦笑混じりで美冬の頭に手を置くと、大きく開かれた空間の片隅に視線を向けた。

景色と同化した『何か』の気配。

チエイサー 敵を狩る事を生業とする自分の体のどこかが敵がいる事を知らせる。

「どうして俺らがいい感じになると邪魔が入るんだらうな」

真雪が身にまとった黒いスーツのポケットから出した革の手袋をはめつつ、苦笑を漏らす。

「絶対誰かが裏で操ってるんだと思う。だって、異常よ？ この確率」

「美冬じゃないのか？」

美冬が真雪から少し離れた位置で伸びをしながら、真雪を一瞥する。怪訝そうな表情を浮かべて。

「何であたしが自分の邪魔しなくちゃいけないのよ。嫌だったらストリートに拒絶するわ」

「嫌だったら、ね。ふうん？」

「あ、あのねえ！ 別に……！」

「はいはい。仕事しようぜ、ラプターちゃん」

「人の話を聞けー！！ このバカ！」

頬を膨らませる美冬を、真雪が肩を揺らしながら笑った。そして。

その笑みは波のように引き、目を細めたまま前方を見据える。

美冬も真雪の視線に促されるかのように、空間がゆがんだように見える片隅を見つめた。

うごめく気配が、次第に大きくなっていくのが分かる。

透明だった「それ」は月の光を反射し、輪郭が鮮明になっていく。夜と同じ色をした岩のような巨大な塊が姿を現せた。

「前方1体、イレギュラー。特徴も事前情報と一致」

「ああ。こちらのお客さんが俺達のお相手つーワケか」

美冬の言葉に真雪がわずかに顎を引き、視線も動かさずに。髪を揺らす微風。

土ぼこりに混じる花の香り。



「今日は機嫌悪いからソツコーで仕事を終わらせるわ」

「それは名案だな」

胸の前で祈るように両手を握っていた美冬が、左手のひらに右手を突っ込む。

ゆっくりとした動作。

まるで水に手を入れるかのように。

そして左手は一本のグリップのついたナイフ　ジャマダハルを吐き出した。

ゆっくり開かれる翡翠色の瞳。

その瞳や口元に宿るのは、不敵な笑み。

「さあ、行こうか」

その声は、合図。

美冬は気配に向かって駆け、一気に間合いを詰める。

耳元で唸る風。

途絶える足音。

地面を蹴り、身体を宙に躍らせる。

「つつかまえた！」

嬉しそうに笑う声。

美冬が歪んだ気配の塊の上に着地、

すぐさま上空に掲げるように振りかぶりジャマダハルを突き刺した。

轟く轟音のような塊の咆哮。

重い手ごたえと、剣身が肉の間に割り込む感触。

噴き出し、顔や服をぬらす生温かい鮮血に眉一つ動かすことなく。

美冬はジャマダハルを握った拳に奥へ差し込んだ。

そして刺したまま手首を返し。

肉塊の中で剣身を動かし、えぐる。

「真雪！」

顔を向けることなく叫ぶ。

「『朱』をもつて『制裁』を！」

真雪の声。

空気を震わせるような悲鳴を上げる塊から美冬がジャマダハルを抜き、蹴る。

衣のように舞い散る赤い飛沫。

ゆっくりと景色が流れ。

身を翻し、美冬が着地したと同時に聞こえた上から何か落ちるような衝撃音。

足元に振動を感じ、周囲の鉄骨がざわめく様に揺れた。

美冬が地面に膝をついたまま、後方を伺う。

耳をつんざく爆発のような音の後に訪れる沈黙。

塊は動かず。

美冬も微動だにしなかった。

「こちらレイヴン、敵の沈黙を確認。お疲れ」

真雪が声が足音共に近づいてくる。

数分前の静寂を取り戻した月光に満たされた空間。

「……」

「どうした？」

立ち上がった美冬が地面に沈んだ塊をずっと見つめている事に気がつき、尋ねた。

身にまとった黒いスーツや髪、顔に浴びた返り血をぬぐう事もなく。

ただ、凝視する。

「……ちよつと気になったのよね」

「何が」

「こいつ、全然抵抗しなかった。本当にイレギュラーだったのかな。美冬が唇を噛み、わずかに眉間を寄せた。

イレギュラー、それは『人間に被害を及ぼす可能性のある生物』を指す。

化け物、妖怪、悪魔

さまざまな呼び名はあるが

この世界では迷信という一言で片付けられる生物。

「ううん。むしろ、本当に生きてたのかわかって」

美冬が握るジャマダハルの切っ先から血がしたたり、地面に赤いしみを作っている。

「どつという意味だ？」

「うまく説明できない。できないけど、おかしいの」  
考えをめぐらせながら、つむがれる言葉。

「生きてる感覚はあったし、動いてた。叫び声も聞いたし血だって見たわ」

「ああ」

「でも、違和感があるの。まるで魂が抜けちゃってみたいで」  
真雪がいぶかしげに目を細めた。

風が二人の間を通り過ぎる。

少しの間、訪れる沈黙。

「気分が悪い。抵抗しない敵を殺すなんて、ただのヒト殺しだわ」  
吐き捨てられた言葉。

「美冬」

ためらったように名前を呼んだ。

自分を見上げる顔についた鮮血を、真雪が指で静かにぬぐう。

「とりあえず帰って報告だ。その時に所長に話してみよう」

「……そうね」

「それと」

付け加えられた言葉に、美冬は首を傾げる。

「返り血くらい拭けよ。結構怖いんだぞ、それ。」

ずっとそんなものを見せられる俺の身にもなってくれ」

「面倒なんだもん。どーせ、こんなの他の人には見えないんだから問題ないじゃん？」

呆れた口調は、平然と吐き出された言葉で投げ返された。

真雪がため息をつき、口を開きかけた時。

「ホント、信じられないよね。あたしにはこうして敵だつて見えてるし」

血の匂いも温もりだつてあるのに周りの人には見えないなんてさ」「美冬は俯き、唇が自嘲気味に言葉を吐いた。

「……」

「周りの人には見えてなくて全部なかつた事になつてゐるんだとしたらあたし達は一体、何と戦つてゐるつて言うんだらう？」

目の前に手をかざし、空を仰ぐ。

深い水底に落ちたような夜。

真雪はただ美冬を見つめ、言葉もなく寂しげに笑つてみせた。

その視線に気がついたのか、月を見ていた翡翠色の目が照れたように細められ。

「帰ろう、美冬」

「そだね」

月光が地面に鉄骨の影を作り出す。

辺りは、闇に音を飲まれたように静かで。

並んだ二つの足音が、ゆっくりと遠ざかつていった。

「とりあえず顔についた返り血だけは拭いてくれ、マジで」

「面倒だつて言つてるじゃない。どうせ帰ったらお風呂はいるんだし」

「……お前、女だろ」

「だから何よ」

## 2 - 1 追憶 飛ぶ鳥

時は1年前、ちょうど今の季節にさかのぼる。

日常の景色を塗り替える幾重の叫び声。

その叫び声に呼応するかのよう周囲はざわめきで支配された。

普段は葬列のようにも見える人の波が、まるで魂でも抜かれたように  
一様に立ち止まり、空を仰ぐ。

「……」

薄紅の花弁の混じる柔らかな風も

眠りに誘うような穏やかな日差しも今は場違いでしかない。

13時22分、駿河通り 五条駅前。

美冬が周囲の視線に誘われるように見上げた先にあったのは  
灰色混じりの青い空と、天空へと伸びようとする建物。

駅ビルの屋上の端に立つ1人の人影。

「！」

思わず息を飲む。

体中を得体の知れない何か走り回るように、ざわついていた。  
鼓動が大きくなるのが分かる。

視線をそらす事は出来ず、ただ空を仰いだ。

立ち止まる人々の間を縫うようにして、

レスキュー隊や警察の制服姿の男達が駆ける。

緊迫した雰囲気をも更に際立たせる彼らの怒号のような指示の声。  
けれど周囲の人々は、その声すら耳に届いていないかのよう。

『自殺』

美冬の脳裏に単語が浮かぶ。

はじめは何かの見間違いかと思ったが

何度見ても、人影は柵を背にして縁に立っている。

胸騒ぎと得体の知れない恐怖感が体中を駆け巡っているにもかかわらず、

何故か、頭のどこかで目の前の光景は現実ではないようにも感じた。目に見えるものは全て現実だというのに。

「……っ」

突然、前触れもなく寒気を覚える。

全身を支配するのはしびれに似た感覚。

我に返った美冬が身体を縮めるようにしながら辺りを見回すとやがて冷気を帯びた視線に気がついた。

いつか、現実か夢か分からない中で出会った

黒髪、黒袴の少女が雑踏の中に悠然と立っている。

時が止まったような周囲の中で、その瞳は美冬を見つめていた。

溢れるほど人は居るのに彼女だけは異質で。

まるで彼女と自分以外はモノクロになってしまったかのような感覚。それ以外目に入らない。

何も聞こえない。

「あ」

声が漏れる。

少し離れた位置から美冬を射るように見つめていた。

感情を含まない黒い瞳。

好奇心でも抗議でもない、けれど何かを訴えかけるような視線。

「貴方」

何か言葉を探すようにわずかに動いていた美冬の唇が言葉を小さく

つむいだ。

けれど、その声は少女に届かなかったのか。  
絡む視線。

音が消え失せた世界。

少女は美冬から視線をそらすと、まるで宙に浮いているかのような  
足取りで

空を仰ぐ人の中に紛れ、消えた。

「彼女が見えるのかい？」

呆然と少女の消えた方向を眺めていた美冬を現実に戻したのは  
聞きなれない男の声。

いつの間にか、美冬の隣に黒いスーツ姿の男が立っていた。

「え」

不意に投げられた言葉に数度、大きくまたたく。

美冬が視線を向けると男は微笑むかのように目を細めてみせた。

「あの袴姿の女の子が見えるの？」

もう一度、投げかけられた言葉。

一見すると会社員のようにも見えるが、それとは雰囲気が違う。

黒いスーツに黒の細いネクタイ。

まるで葬儀か何かの帰りのようにも見え、非日常の空気を感じさせ  
る。

歳は40代半ばくらいだろうか。

「あ、はい」

「そうか。やはり見えているんだね」

この緊迫した空気の中、穏やかに微笑む。

「……あの」

遠慮がちな声。

「ああ、申し訳ない。」

彼女が見えているのが珍しくて、つい声をかけてしまったんだ」

美冬の不思議そうな顔に気がついたのか、男は照れたように笑った。遠くからサイレンいくつも近づいてくる。

けれど、美冬はそれらに視線を向けることもなく突然現れた男を眺めていた。

「あの子を知ってるんですか」

「うん。特別仲が良いというワケでもないんだけど、ね」

男は腕時計に視線を向けた後、空を仰ぐ。

未だにビルの屋上には人影が見えた。

屋上も、そして地上も多くの声が飛びかっている。

「彼女は『死』なんだ」

突拍子もない言葉だった。

ざわめきが消え、その声が妙に大きく響く。

「死、そのものといった方がいいかな」

美冬が怪訝そうに眉をひそめた。

男は、美冬の反応を楽しむかのように。

「死？」

脳裏に思い出す、白昼夢のような空気の中で聞いた声。

『吾はウタカタ』

『意識には消え、無意識には映る』

『死近し者に死期を歌う』

「ウタカタ」

無意識に口をついて出た名前。

美冬と男の間に風が踊り、通り過ぎる。

ブリーツスカートが小さく揺れた。

「そう、彼女は名はウタカタ。いわゆる死兆星というものだ」

「死兆星？」

「死期が迫る者の頭上に輝く星の事だね。」



彼女も死期が近い者だけに見える……一部の例外を除いては」  
顔を見合わせる。

翡翠色の瞳と、青い瞳がぶつかった。

「僕らのように」

耳元で風が唸り、髪を巻き上げる。

二人は微動だにせず見つめあった。

男は薄く微笑んだまま、表情を崩すことなく。

「あの、貴方は」

「13時31分。そろそろ時間かな」

美冬の声は、腕時計を一瞥した男の声に飲み込まれた。

「君はこの場から去った方がいいと思うよ」

屋上で何事か声が上がりに、にわか騒がしくなる。

つられて美冬も空を仰ぐ。

光に邪魔されてよく見えないが、人影は今にも飛び立とうとしているように見えた。

「え」

何かを予感しているかのような口調。

けれども、その顔に浮かぶのは微笑。

「どこかに行かなくちゃいけないんじゃないのかい？」

「あ」

美冬は思い出したように携帯をバッグから取り出し、液晶を見る。

待ち合わせは14時。

まだ時間に余裕はあった。

「話に付き合ってくれてありがとう。じゃあ、お気をつけて」

呆気にとられたような美冬を気にする様子もなく

男は、わずかに顎を引き会釈をする。

「は、はあ」

美冬は、きびすを返し人の中へと消えていく男の背中を眺めた。

ややあつてから、ため息一つ。  
まるで満員電車の車内のような道を歩き始める。  
聞くともなしに聞こえる話し声をかきわけ、喧騒に背を向けた。  
自分ばかりが逆を歩いているような、そんな感覚の中で。

刹那。

世界を砕かん勢いで聞こえるいくつもの叫び声。  
ざわめきが大きくなる。

足音が迫る。

空気が一気に動く、そんな感覚。

「!」

美冬がとつさに振り返った瞬間、見えたのは  
空から降る影と

まるで何か重いものが落下したような鈍い音、  
胸の奥に響く衝撃。

「な、に……今の」

泣き声に似た叫び声が更に強く、大きく響く。  
とつさに判断は出来なかった。

何が起こったのかも。

美冬は立ち尽くした。

人の往来が激しくなる。

怒号。

人々の足の隙間から見えた気がした地面に広がる赤い海。  
それを見て、美冬はようやく何が起こったかを把握した。

## 2 - 2 Chaser & Death

脳裏に焼きついた10分ほど前の景色。

耳に染み付いた怒号と悲鳴。

いまだ目の前で繰り広げられているようにも、どこか幻のようにも感じる。

美冬はため息をつき、思わず胸に手を当てた。

「……」

決して広くない、通りの両側に居酒屋や風俗店ばかりが密集する夜の街という例えがふさわしいこの周辺も。

昼間の時刻であるせいも人通りも少なく、誘うように灯るネオンも見当たらない。

ただ聞こえるのは犯罪に関する注意のアナウンスと、どこかのパチンコ店からの音の洪水。

美冬は携帯電話の液晶に表示された地図を一瞥し周囲に視線をめぐらせた。

小さな店舗が隙間なく身体を寄せ合い、同じ景色が広がるこの場所は住所などあつてないようなものにも思える。

「コンビニの2階、と」  
せわしなく動いていた目が止まった。

携帯と目の前の建物を見比べ、階段脇に記された『比良坂事務所』の文字を視線でなぞる。

長い髪を手で押さえ見上げた先には時の経過を感じさせる古ぼけた雑居ビル。

美冬はわずかに頷くようにして、スカートを揺らし奥へと進んだ。

「申し訳ありません。所長はただいま外出しております」

閑散とした室内、美冬がソファに座り遠慮がちに辺りを見渡してい

ると

硬い響きを持つ男の声が聞こえた。

思わず背筋が伸びる。

「いえ、あの。こちらこそ早く来てしまいまして申し訳ないです」

「とんでもありません」

目の前に湯気が穏やかに立ち上る紅茶の入ったティカップが音もなく置かれ。

美冬に向かい合うようにして座る黒いスーツに黒いネクタイを締め  
た男。

その風貌に既視感を覚える。

整った顔はどこか冷たい雰囲気を持ち、赤い瞳は美冬を射るように  
見つめた。

わけもなく動揺する。

「ラプターですね？」

「はい」

名を呼ばれ、反射的に頷いた。

美冬が生きる『此岸しがん』と呼ばれる裏世界では

実社会で使用する名前は一切通じず、もう1つの名を使う。

まるで世界に隠れ、誰かと共有する秘密のようだ。

心の中でそう呟く。

「そうですね。貴方が」

ゆっくりと頷き、観察するように視線を投げかけられ。

その視線に含まれる感情や意味を美冬は分からなかった。

戸惑いがちに視線を返す。

ただ男は何かを思索するように沈黙を口にして。

頭上から聞こえる響く唸る空調、窓をすり抜けて聞こえる喧騒。

「失礼しました。」

事前に伺っていた話と実際の貴方が随分違う印象を持ったもので

「え？」

「その……実際は、ずいぶんかわいらしい方なのだなと思ひまして」

男が言いすらそうに呟く。  
静止。

美冬の顔には驚きと、わずかな照れが浮かんだ。

「あの」

「はい？」

「事前に伺っていた話っていうのはどういう……」

その言葉に男は僅かな逡巡を見せた。

言葉を選んでいるような、ためらいのような沈黙。

「何と言いますか。所長が貴方の派遣元の丸井社長に  
眼鏡のブリッジを指の腹で押し返す。」

「一番獰猛な人材を頼む、とお願いしております」

美冬の動きが止まる。

数秒後、俯き加減に乾いた笑いを浮かべた。

「……あんの野郎……」

「はい？」

「い、いいえ。失礼しました」

顔を上げると視線の先に男の苦笑に似た笑み。

「おそらく物の例えなのでしょう。」

けれど私共の業務を考えると、その方がいいんですよ」

美冬の動きが止まった。

この部屋はまるで世界から隔離されているかのように静寂が溢れて  
いる。

時間の流れさえ忘れてしまいそうで。

「えっと、質問なんですが」

「どうぞ」

「仕事って何をやってるんですか？」

ずっと疑問に思っていた事を口にする。

今度は男が動きを止める番だった。

首を傾げる美冬と、男が見つめ合う。

「ご存知ありませんか」

「は、はい。一応事前に聞いたんですけど

こちらで聞いてくれ、としか言われてなかったのよ」

「と、いう事はご自分の仕事も把握されていらっしやらない？」

「ある程度は分かります。その、出来る事は限られているので」

美冬の戸惑いの混じる口調に男が数度軽く頷いた。

「なるほど。では、そこからお話をさせて頂く必要がありますね」

組まれた足の上で指を絡ませ、伏せられていた瞳が美冬に向けられた。

見つめられると心まで見透かされてしまいそうな。

無意識のうちに張りつめていく空気。

「我々は死神です」

男は短く言い放った。

声を張り上げている訳でもないのに、大きく響く言葉。

思わず息を飲む。

「我々は死神と呼ばれ、死を司る業務を行っております」

「……」

「死神と言っても単なる名称であり、実際は神ではないのですが。いわば便宜上の名前といったところでしょうか」

「死神、ですか」

「ええ」

瞳に浮かぶ戸惑い。

わずかに眉間にしわを寄せ、口の中で言葉を繰り返す。

「人の死というのは生まれた時に既に決められています。死亡予定日、死因、場所など」

男は目を細め、美冬の様子を楽しんでいるかのように口の端に微笑を浮かべた。

お互いの間にあるテーブルにおいてあったノートパソコンを開くと軽やかな手つきでプログラムを起動する。

小さくモーター音が唸りをあげた。

「それが全て冥府から発行される予定表に記載されています。ご覧下さい」

促され、転じた視線の先には表計算のアプリケーションソフト。無数の数字と文字の羅列。

よく見ると、そこには人の名前と日付等が無感情に並んでいた。

「……これが」

「ええ、これが死亡予定表です」

身を乗り出すように美冬が見つめる。

見知らぬ名前、漠然とした日付。

何度見ても、これが人の運命を記したものだとは思えず。

言葉もなく男と画面を見比べる。

「よく分からない、ですか？」

「は、はい」

「それが普通です。はじめから実感として感じられるものではありません。」

ですが、人の死というものは実際に予定表通りに動いているのですよ」

外の世界が全て消えてしまったような静寂。

まるでこの部屋だけが世界に存在しているかのようにさえ感じる。

「ただ例外もあります」

男の長く骨ばった指がノートパソコンのタッチパネルを撫で、画面が流れた。

人々の死が次々と現れては消えていく。

不意に指が離れ、止まる画面。

モノクロの中に浮かぶ赤い1列を男の指が示した。

男の名前と日付が並び、その隣には穴が開いたような空欄。

「例えば、この方は死亡予定日を過ぎても今なお生きています。

そういった事も稀に起こるのです」

「……」

「そういった予想外の事態を処理していくのが我々、死神の仕事という事ですね」

美冬が大きな目を数度瞬かせ、首をかしげる。

髪が肩から零れ落ちた。

「処理、ですか？」

「ええ。簡単に言うると死亡予定表とのつじつま合わせでしょうか。命数が尽きてもなお生き続ける人を処理し、予定外の死を迎えた人を復活させるのです。

たまに聞いた事がありませんか？突然死や、奇跡の生還などという話を」

男が前かがみの姿勢から、身体を起こす。

「昨日まで元気だった人が急に亡くなった、

ほとんど助からないといわれた仮死状態にあった人が息を吹き返した。

これも死神が予定表に基づき、処理を行っている場合がほとんどです」

淡々と冷たい声音が言葉をつむぐ。

「現実味のない話だと思われそうですが、れっきとした事実なんですよ」

「……」

美冬は口元を手で隠し、何かを思案するように黙った。



頭の中を整理しているかのように何度か頷く。

その間も男は背筋を伸ばしたまま、美冬を冷たさをたたえた瞳で見つめていた。

「なんだか分かったような、分からないというか……」

「簡単に説明してしまいましたし、

予備知識がなくては分かりにくい話ですから当然の反応です。

いずれ分かるようになるでしょう」

「そ、そうですか」

「実際見て頂ければ早いのですけれど、そう焦る事ではありませんし」

苦笑を浮かべた美冬に男が微笑むように口の端をあげた。

男がティカップを持ち上げたのを見て美冬も思い出したかのようにティカップに唇をつける。

多少ぬるくなってしまうが、温かなダージリンティー。

紅茶の甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「ところで」

男の声が、わずかに硬さを含んだ声で切り出す。

「はい」

「顔色が悪いように見えますが大丈夫ですか？」

美冬が驚いたように目の前を見つめ。

紅茶を一口、口に含むとティカップをソーサーの上に静かに置いた。感情が読み取れない赤い瞳が見つめ返してくる。

「え？」

とっさに、両手を頬に当てる。

「申し訳ありません。少々気になりましたもので」

「あ、いえ」

美冬は曖昧に微笑んだあと、視線を窓の外に投げ理由を探る。

思い当たる節があるとすれば。

「実は、ここに来るまでに……その、飛び降り自殺を見てしまいま

して」

「飛び降り自殺ですか。どちらで？」

男の顔に驚きの表情は浮かばず、その声にはごく日常の事のような響きさえあった。

「駅前です。東口のロメルの上から飛び降りた人がいて」

「なるほど」

「あ、でも。しばらくすれば大丈夫だと思います」

美冬が肩をすくめるような仕草で苦笑を漏らす。

目を伏せ、小さくつुकため息。

「それでは、そろそろ所長も戻ってくるかもしれませんね」

「え？」

突拍子のない言葉に美冬が短く声を漏らした。

目の前の男の表情から、その言葉の意味を探ろうとするが  
ポーカーフェイスから何も知る事が出来ず。

ただ時間だけが流れた。

「……どうやら帰ってきたようです」

独り言のように聞こえた言葉。

男が身体をひねるようにして何もないドアに視線を向けた。

美冬が呆気にとられたように男とドアを交互に見比べていると。

近づく足音。

ドアの小さなすりガラス越しに見える人の気配。

「やあ、駅前は大変な騒ぎだ。

帰りにドルニエのモンブランを買おうと思っていたのに、あれでは無理だな」

ドアを開ける音と共に、穏やかに微笑む声が聞こえた。

後ろに流した亜麻色の髪、海のように深い青の瞳。

目の前の男と同じ、黒いスーツに黒いネクタイを身にまとう40代

頃の男。

見忘れるはずもなかった。

「あ」

美冬は目を見開くようにしながら凝視し、思わず声を漏らした。

あの飛び降り自殺の現場にいた男だ。

「ノクティルカ、こちらは丸ちゃんの所から来た派遣の人かな？

ああ」

美冬と目が合い微笑む。

ノクティルカと呼ばれた男は立ち上がり、2人の様子を眺めていた。

「あ、貴方は」

「また会ったね」

呆然としたまま美冬がソファから立ち、見上げる。

「はじめまして、と言うべきかな？

僕は比良坂事務所の所長のダンデライオン。先ほどは失礼したね」

ダンデライオンが美冬の前で立ち止まり右手を差し出す。

戸惑い気味に美冬が手を差し出して握手した。

大きく暖かな手。

同うように見上げた先には、まるで日差しのような笑顔があった。

「驚いたかい？」

「え、あ。はい」

悪戯っぽい視線が覗き込んでくる。

「とりあえず座ろう。ラプター、どうぞ」

「は、はい」

ダンデライオンがあいた手で、今まで座っていた場所を示す。

「所長、紅茶でよろしいですか？」

「うん。ああ、確かグリーレのワッフルがあったよね？」

あれも一緒に出してくれないかな、3人分。一緒に食べよう」

「分かりました」

ノクティルカが軽く会釈をした後、奥へと姿を消した。

その様子を眺めていた美冬が視線を戻すとダンデライオンと視線がぶつかる。

目線の先の笑顔につられて、笑顔を浮かべ。

「でも本当に君がラプターだったなんてね」

「……あの。駅であたしに声をかけたのは、ここに來るって分かってたからですか？」

「いや、多分そうなんじゃないかって思っていただけだよ。

此岸と血の匂いを持つ女の子なんて、そうそういないから」

戸惑い気味に問う美冬をよそに背もたれに身体を預けながら笑いを含んだ声で言った。

遠くで支度をしているらしい物音が聞こえる。

「気付いてたんですね」

「もちろん。曲がりなりに君と同じ世界に住んでいるから」

美冬が苦笑に似た照れ笑いを浮かべた。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。どこから話せば良いだろう」

「あの、先ほどの方がこちらの仕事　死神の話をして下さいました」

美冬が遠慮がちにいうと

ダンデライオンの眉間にしわが寄り、動きが止まる。

何かを考えているように。

自分の言動に何か問題があったんだろうかと美冬が怪訝そうに見つめていると。

「なんだ、自己紹介してないのか。ノクティルカは」

低い声が不満そうに漏らした。

その声を聞いていたかのようなタイミングで姿を現すノクティルカ。二人の視線を感じ、足が止まる。

「……何か？」

その言葉とは裏腹に表情は変わらず、感情を読み取る事は出来ない。

「ノクティルカ、彼女に自己紹介してなかったのかい？」

「ああ、そういえばそうですね。忘れていました」

「相変わらずだなあ」

苦笑の混じった視線をはがし。

「紹介するよ、こちらの彼はノクティルカ。比良坂事務所に所属する死神だ」

「よろしくお願いします」

ノクティルカの声に美冬が慌てて会釈を返した。

「彼はうちの事務所のエースだね。優秀な死神なんだ」

「所長の言い方だと、全員エースじゃないですか」

ノクティルカがテーブルにワッフルの載った皿や

紅茶の入ったティカップを置きながら、わずかに苦笑を漏らした。

「だから、みんなエースだって言ってるじゃないか。

他にもメンバーはいるけど今は生憎、席をはずしててね。後々紹介するとして」

言葉を区切り、笑顔を引っ込める。

「君の仕事について話そう、ラプター」

「はい」

ダンデライオンの青い瞳が見つめる。

その瞳は美冬を見ていながら、美冬の奥深くも見つめているような視線。

どこか居心地の悪ささえ感じてしまうような。

「うちの仕事に関してはノクティルカから聞いたよね？ 人の死を扱う大切な仕事だ」

「はい」

「君にやってもらうのは死神業ではなく、

バケモノ退治　つまり君の本業であるチェイサーの仕事。

イレギュラー認定を受けた危険因子になりうる人外生物の討伐をお願いしたい」

美冬が思わず姿勢を正し、背筋を伸ばす。

低い声音が何かを宣言するかのように響いた。

「うちにも死神とチェイサーの仕事兼任しているメンバーがいるんだけど

一人ではなかなか追いつかなくてね。そこで彼と組んで仕事をして欲しいというわけだ」

「死神の会社がチェイサーを？」

その声ににじむのは戸惑い。

数年チェイサーを生業としているが、そんな例は聞いた事がない。もともと死神という仕事さえ聞いたことがなかったのだから当然かもしれないが

美冬は心の中で考えをめぐらせた。

「まあ、疑問はもつともだな。

死神業とチェイサーの仕事は結構深い関係があつてね。

手元にチェイサーが居た方が色々と仕事がしやすいんだ。

フリーに外注を出してもいいんだけど急な仕事にはなかなか対応できない。

それで、うちのチェイサーと君の出番と言つわけだ」

「はい」

「どうだろう、やってくれるかな？」

美冬に注がれる2人分の視線。

室内には穏やかでありつつも非現実的にも感じる空気が流れていた。

「もちろん、こちらは出来る限りの支援と保障をさせて頂こう。

是非、君の才能をうちで活かして欲しい」

考えをめぐらせ、黙る美冬にダンデライオンが言葉を重ねる。

「……」

それぞれが思いをめぐらせるように訪れた沈黙。

美冬が、伺つように上目がちに目の前の2人を見つめた。

「あ、あの。宜しく願います」

「ありがとうございます」

遠慮がちに切り出された言葉に、安堵の声が重なる。

ダンデライオンがティカップを手に取り、心底安心したように微笑んだ。

「所長」

その動きを止めるのはノクティルカの声。

「レイヴンは欠勤していましたがどうでしょうか？」

なるべく早く顔合わせを済ませ、いつでも動けるようにしておいた方が良くと思います」

「そうだな。今日、彼が休みじゃなければ良かったんだけどね」

隣のノクティルカを眺めてから美冬に視線を転じる。

少しの沈黙の後、軽く頷いた。

「ラプター、これから予定はあるかい？」

「いえ、特には」

「そうか、ならちょうどいいな。」

急な話で悪いんだけど行って欲しい場所があるんだ」

「ど、どこでしょう？」

緊張したように美冬が数回しばたたき、手を握る。

「うん、レイヴンの家だ」

思いがけない言葉にわずかに口が開いた。

「レイヴンの家ですか？」

「そう。ああ、レイヴンとは件のチェイサー兼死神の彼の事だ。」

今、風邪で倒れて自宅療養中だね。何も食べてない状態らしいから君に顔合わせを兼ねて陣中見舞いに行つてほしいんだけど」

思わず静止した。

美冬が戸惑ったようにダンデライオンを一瞥し。

「えーと。あたしが行っても大丈夫ですかね？」

「うん、むしろ君に行ってもらえる方が助かるんだ。

レイヴンの様子も気になるんだけど、こちらも忙しくて手が離せなくてね。」

支援物資を適当に渡して、彼と顔合わせたら連絡してもらえばいい。」

逡巡と迷い。

自分に向けられた視線に多少の息苦しさを感じながら唇に指を当て考える。

いきなりの話に驚きつつも、自分はどうするべきか。

「……分かりました」

小さく、搾り出すように美冬が呟いた。

「ありがとう、ラプター。本当に急で申し訳ない」

「い、いえ」

「けれど、いつでも動けるようにしておかないと何があるか分からないからな。」

ノクルティカ、何か書くもの貸してくれるかい？」

向かい側で何かにペンを走らせる音、頭上からは空調が吐き出した温度を感じない風。

美冬は何となしにダンデライオンの手元を見つめる。

「レイヴンの家は若葉町にある。最寄り駅は……」

「五条村雨線の緑ヶ丘駅です」

「そうそう。駅から学校を目指して歩くと途中にお花屋さんがあるんだ。」

そのこの2階に住んでいるから。すぐに分かると思うよ」  
ダンデライオンが差し出した名刺を受け取り、眺める。

名刺の裏に書いてあるのは電話番号と住所、そして『立花 真雪』の文字。

美冬の横顔には不安と戸惑いが入り混じっていた。



「何かあつたら事務所までご連絡下さい」  
ノクルティカが目を細め、事務的に言葉をつむぐ。  
美冬は曖昧に微笑むと、髪を押さえるようにしながら名刺の文字を眺める。  
遠くで聞こえる他人事の街の声に耳を澄ませながら漠然と不安を感じていた。

「ラプター、ね」  
事務所の窓辺。

ダンデライオンは窓の外に見える美冬の背中を眺めながら呟いた。  
「いいんですか？彼女1人で行かせて」

「ああ、彼女は丸ちゃんのところの隠し球だ。何かあつたとしても問題ないだろう」

「いえ、そういう意味ではなく」

背中に投げられたノクティルカの声に、顔を上げ前を見据えた。

「レイヴンの事かい？」

「はい」

「レイヴンは彼女に何か出来る子じゃない事くらい、君だって知っているだろう？」

ましてや風邪で倒れている状態だ。

それに、多少強引でも手は早いうちに打っておくべきだよ」

息を漏らすように微笑む。

「確かにその通りですが」

何か言いたげな声。

ダンデライオンはそれが聞こえていないかのように目を細めた。  
その瞳に宿るのは笑みではなく。

「さて、ファースト・インプレッションはどうだろうね？」

まるで墓標のようなビル群と灰色の空。

「面白くない事になるといいんだけど」

## 2 - 3 First impression

「あたし、何してんだろ」

買い物袋を持ったまま、美冬は立ち尽くし呟いた。

背には緑ヶ丘駅から吐き出される雑踏。

自分を避けるように追い抜く多くの人影を見て美冬は慌てて歩き始める。

五条駅より電車で4分。

学園都市としても知られるこの場所には

学生の姿やビジネスマンの姿も数多く見受けられた。

バスを待つ人の列を横目に人ごみから逃げるように歩く。

比較的新しく、企業ビルばかりの整然とした印象があるこの町も

駅に寄り添うように存在する商店街には人々の生活の匂いや活気があった。

まるで壁のように、所狭しとさまざまな店が道を囲んでいる。

美冬は、大きな瞳を左右に向けながら飽きもせずに通り過ぎる店を眺めた。

「何だかな」

わずかに沈んだ声がつむぐ本音。

歩くたびに重さを感じる買い物袋が乾いた音を発している。

買い物袋の中にはスポーツ飲料のペットボトルや、ゼリー飲料等。

美冬が思いつく限りの風邪の時の必需品を買ったつもりだ。

派遣先の会社でパートナーを組む予定の男の風邪の見舞いを頼まれ、彼の自宅へ向かう。

知っているのは名前だけで、どんな人物であるかは全く知らない。もちろん顔でさえも。

明確なのは『同種』であること。

存在していないはずのバケモノを狩り、戦いの中で生きる人間。男であるということ以上に、その要素が美冬に不安を抱かせていた。敵ではない事は分かっているが、何が起こるかは分からない。

「チエイサーって変なヤツ多いからイヤなのよ」  
ふて腐れたようにごちた。

多くの人は美冬の独り言を気にする様子もなく、無表情で足早に通  
り過ぎる。

まるで美冬自体が見えていないかのよう  
に。  
数分歩くと、町の色が変わった。

店が乱立し楽しい空気振りまいていた景色からビジネス街とい  
った感のある景色へ。

無個性で硬質なビルが連なっている。

それでも都心のビル群に比べ、どことなく殺風景に感じないのは  
この町が持つ穏やかな空気がそうさせるのだろうか。

「若葉町2」と

美冬がジャケットのポケットから取り出した名刺と電信柱の住所表  
を見比べた。

事前に聞いた道案内や、住所からいって目的地はそう遠くないはず  
だ。

空へ通じるような、なだらかな坂がまっすぐ続く。

この先には学校があるらしく、数多くの学生たちの姿を見かける。

こっちの学校はもう授業始まっているんだ　美冬が通り過ぎる顔を

一瞥した。

耳には笑い声や話し声。

唇に笑みを浮かべかけたところで、表情がこわばる。

妙な匂い。

美冬がわずかに眉間にしわを刻むと視線だけを動かして周囲を見渡し

た。

それは物理的に感じる匂いではなく、感覚的なもの。  
事実、美冬以外の人間は匂いに気がつき訝しがる気配もない。

「……」  
それは日常的に戦い、チエイサーとして生きる美冬の勘だった。  
敵の気配を感じる。

そして、それは自分をどこかで見ている感覚さえ。  
息を殺して周囲に気を配りながら再び歩き出す。

日差しに似た、穏やかでいつもとは違うゆっくりとした空気。  
美冬にはそれを味わう余裕はなかった。

「あれ？」

突然、美冬が立ち止まる。

顔を横に向けると生気を感じられない景色の間に存在する、花に溢れた空間。

ビルとビルの隙間に突如現れた異国の雰囲気を漂わせる花屋は  
美冬の警戒した表情を笑顔に変えた。

視線は、店先に並ぶ鮮やかな色の花々から外壁に掲げられた『D o  
uleur』の文字をたどり

店舗2階部分に注がれる。

比良坂事務所の人間が『レイヴン』と呼ぶ男が住んでいるのは、こ  
こだろう。

名刺の裏に記された店名とも一致している。

無意識に唇を噛む。

警戒する必要はないと分かっているけど、体のどこからか湧き上がる  
不安。

美冬は何かを決意するように見上げていた視線を戻した時だった。

「あ」

そこではじめて美冬は、店舗の中から向けられている視線に気がつ  
く。

この位置からでは表情はよく見えないが  
おそらく店員らしき人物は不審な視線を向けているのだろう。  
店先の花を眺めているわけではなく、ずっと店を凝視しているのは  
明らかに奇異に映る。

美冬は照れ笑いに似た笑顔を作りながら、やや早足で店から離れた。

「か、階段階段」

口の中でまるで歌うように節をつけ繰り返す。

ビルと花屋の隙間に空間を見つけ、美冬の足が自然とそこへ向かった。

顔に微かな狼狽を浮かべて周囲を眺める。

足元のコンクリートが土に変わった感触に、顔を正面に向けると。

息をするのも忘れ、立ち止まった。

わずかに見開かれる瞳。

驚きに満たされた美冬の顔に次第に笑顔がにじみ出る。

まるで波紋のように。

眼前に広がる花の洪水。

先ほどの景色からは想像できない花園が広がっていた。

「……なに、ここ」

呆気にとられたまま、言葉が零れ落ちる。

開かれた空間、まず目に飛び込んでくるのは目にしみるほどの緑。

そして数え切れないほど咲き乱れる無数の花々。

優しい色が見界一杯に広がっていた。

一見すると無造作で咲くに任せているようにも見えるが、隅々まで  
手入れされている庭。

だが、管理されているのが分からないほど自然な景色がそこにはあ  
る。

ここに漂う空気さえ、今までのものとは違う。

時間も場所もぼかしてしまう瑞々しい花の芳香。

「す、ごい」

口元に手をあてて虚ろな口調で呟く。

立ちすくみ、何もかも忘れて目の前の景色を見入っていた。

どのくらい時間が経過した時だろう。

「こんにちは」

背後から聞こえた声に美冬は驚いたように肩をすくめ、恐る恐る振り向いた。

「あ」

そこに居たのは赤い瞳を細め、穏やかに微笑む青年だった。エプロン姿、ジヨウ口を持つ手。

それから察するに先ほどの花屋の店員だろう。

「す、すいません！ か、勝手に入っちゃって」

美冬は青年に向き直ると申し訳なさそうに頭を下げた。

髪が肩から滑り落ち、流れる。

顔を上げ、伺うように見上げた視線の先には楽しげに自分を見つめる顔。

その表情につられるように、美冬も思わず安心したように微笑んだ。

「いや、別にいいよ。花はみんなに見てもらいたくて咲いてるんだから」

その笑みの浮かんだ声に美冬は振り返って花を見る。

「ここって無料で解放してるんですか？」

「え？」

美冬の言葉に青年が聞き返す。

意外な言葉だったらしく、声に怪訝な響きをにじませた。

「ここは趣味の庭。おれが好きで世話してるだけだよ」

「ええ?!」

「意外？」

「意外っていうか、ここが趣味のお庭っていうのが信じられなくて」

驚きの声。

花々から視線をはがし、青年に視線を向けた。

目の前の彼は言葉の意味が分からなかったらしく意味を探ろうと美冬を不思議そうに見つめる。

思わずその視線に慌てた。

「あ！ えーと。凄く素敵だから、他の人に見せないのがもったいないなって」

微風が吹くたびに感じる水分を含む空気。

美冬が再度、庭園に身体を向け。

「うまく言えないですけど、すごく好きです。……」

「ありがとうございます」

見上げた先にあるのは花が咲くような笑顔。

日差しを受け、光を放つような金色の髪に目を細めた。

「ね、店でハーブティー飲んでいかない？ ご馳走するけど」

青年の言葉に美冬がにわかに慌てる。

「あ！ その、是非そうしたいんですけど……これから行かなきゃいけない場所があつて」

視線が上を向き、花屋の2階部分を見つめる。

「まゆ君の友達？」

「え、あ、はい」

曖昧に微笑み、頷く。

確かそんな名前だったはずだ。

美冬の動揺も気にしてない様子の青年は惜しそうな笑みを浮かべると。

「そっか。じゃあ次に来た時にでも、是非」

「は、はい」

「おれは店に戻るから、ゆっくり見て行ってね」

「……あの！」

きびすを返しかけた青年を声が呼び止める。

言葉を促すかのような視線。



美冬は気まずそうに上目がちに見つめ。

「階段、どこですかね？」

教えられた階段を登ると2階部分にはドアが2つ並んでいた。美冬はその一室のチャイムを押すと、ため息をつく。遠くでチャイムが響き。

沈黙。

「……………」

もしかしたら寝ているかもしれない。

美冬の心に一抹の不安がよぎる。

鳥のさえずる声を聞きながら、目の前の冷たい黒いドアを無言で見つめた。

数秒後。

ドアの向こうに人の気配がある。

足音が近づいてくるのを感じ、思わず姿勢を正した。

何と言えはいいんだらうか。

美冬は宙に視線を漂わせ、考えを巡らせていると目の前で小さく開く音。

「あ」

こちらを探るように、少しづつドアが開いていく。

美冬が首をかしげるようにして顔を向けると。

眉間にしわを寄せ、まるで睨むかのような視線があった。

思わず、その眼光の鋭さにすくむ。

昼下がりの空気とは明らかに違う雰囲気。

涼しげな瞳と、どちらかと言えば中性的にも感じる顔立ち。

美冬と同じ位の歳にも年上のようにも見える。

「あ、あの。あたし……………」

「何の用？」

言葉をさえぎり、真雪という名の青年は尋ねた。押し殺した声が明らかに警戒している。

彼は出かけようとしてもしていたのか　美冬が違和感を覚えた。事務所では彼は風邪で寝ていると言っていた。

けれど、目の前にいるのはシャツと黒の細身のパンツ姿の青年。

決して今まで寝ていたという格好ではない。

何かがおかしい。

「事務所で言われて、その。これ、お届けもの」  
提げていた買い物袋を持ち上げてみせる。

「所長から持って行ってほしいって言われてて」

「……」

「あ、あたし比良坂事務所に新しく……」

「入れ」

静かな声が短く告げ、ドアが大きく開いた。

美冬が戸惑いがちに見上げると視線がぶつかる。

「……」

迷いが動きを止める。

「入れよ」

もう一度発せられた言葉は有無を言わせない口調だった。

突き動かされるように頷く。

美冬がドアに手をかけ、部屋に足を踏み入れた。

部屋に音はなく、外の音が他人事のように遠くに聞こえる。

「……」

美冬の背でドアが閉まり。

目の前を見ると壁にもたれかかった真雪が美冬を観察するように凝視していた。

あまり気持ちがいいものではないが仕方がない。

おそらく彼は美冬が来る事はおるか、美冬のこと自体知らないはずだ。

「えーと」

美冬が息苦しい沈黙に耐え切れなくなったかのように切り出す。そこで気がついた。

彼の殺気に。

何故今まで気がつかなかったのだろうか。

美冬は思わず唇を噛んだ。

目の前の男と、2人きりになった途端に気がつく漠然とした殺気。それは警戒ではない。

何度も美冬が味わってきた殺気にもよく似ているが、何かが違う。言われるがまま部屋に入った自分を悔んだ。

なにか『支援物資を適当に渡して、彼と顔合わせたら』か。話が違う。

「所長に言われたって？」  
思考が遮断された。

美冬は我に返ったように真雪に視線を向ける。

「うん。今度からあたし、貴方と仕事で組む事になって。顔合わせを兼ねて陣中見舞いに行つてほしいって言われたの」  
いぶかしげに細められる瞳。

どことなく苦しそうに大きく息を吐いた。

「あたしはチエイサーで……」

「なるほど。随分とかしいレギュラーだ」

一瞬言葉の意味が分からず、瞬きも忘れて静止する。

真雪は絹のような細い髪をかき上げて口元に苦笑を浮かべていた。

「部屋まで来て、人を騙すなんてな」

「な」

空気を求めるように、口だけが数度動く。

「人のフリは出来ても血の匂いは隠せねえか？バレバレだぞ、お前」  
「な、に言ってるの？」

美冬の眉間にしわが寄った。

その顔に浮かぶのは不審と焦燥。

驚きで空白になった頭の中に思考が戻ってくる。

「俺、そこまで恨み持たれるような覚えはねえんだけど」

誤解だ。

美冬が真雪を睨む。

「誤解してる。あたしはイレギュラーなんかじゃないわ」

「ふうん？」

「チエイサーなら血の匂いがして当然じゃない？」

「イレギュラーだって血の匂いはするだろ？」

探りあい、見つめあう瞳。

「とにかく、あたしはイレギュラーじゃなくてチエイサー。

敵じゃなくて、むしろ仲間なの」

「証明できるか？」

その声には明確な殺気が含まれていた。

彼の肩越しに見えるのは黒いインテリアで埋め尽くされた色彩のない部屋。

美冬は大きく肩でため息を吐いた。

「あたしの名前はラプター。貴方の名前は立花真雪、此岸名レイヴン。」

所属は比良坂事務所でメンバーの名前はダンデライオンとノクティルカ。

「どう？ これで信用できるでしょ？」

「信じる材料にはならねえな」

怒気の混じる口調を冷静な声が切り捨てた。

美冬の顔に苛立ちが浮かぶ。

視線が言葉を求めるようにさ迷った後、真雪を見据える。

「いい加減にしてよ。貴方、あたしが何言っても信じないんでしょ

？」

必死に怒りを抑え、つとめて冷静を装う。

拳を白くなるまで握りしめる美冬を真雪が腕組みをして見つめた。  
凍るような瞳。

「そんなのちよっと調べりゃ分かる話だ。それに」

「は？」

「ラプターは男だろうが」

動きが止まる。

「チェイサーのラプターは男だ。でたらめ抜かすんじゃないよ」

瞬間。

美冬が持っていた買い物袋を力任せに真雪に投げつけた。

「でたらめはどつちだ！」

怒号。

美冬は背中に手を回し、ベルトに手をかける。

その動きと呼応するように真雪は身体を壁から離すと手のひらを上  
に向けた。

離れた位置で床に重い物が落下し、滑る音が響く。

「本性表したか？ イレギュラー」

「あんたがふざけた事、言うからじゃない！」

部屋の中に美冬の声が響く。

歯を強く噛み締め、真雪に鋭い眼光を向けた。

背中に手を回した美冬の指の先には、投げナイフの硬い感触。

怒りに任せて投げナイフに手をかけたが、ここで戦うのは良策では  
ない。

この狭い空間で、実力も分からないチェイサーを相手にするなど。

しかも相手はキャスター　魔法使用者でいつでもスキルを発動で  
きる状態。

何より、人と戦うのは自分の主義に反する。

美冬は微動だにせず、考えた。

真雪も美冬を睨んだまま、様子を伺うように動かなかった。

けれど時折苦痛に耐えているかのように表情が歪む。

「こんな所で後先考えずに攻撃するなんて出来ねえよな？」

唇が動く。

「こんな所でリスクが高いのにスキルなんて打てないわよね？」

瞳に宿るのは焦りの混じる笑み。

「方法なんていくらでもある」

目を逸らさずに、相手の一挙一動を見つめた。

「あのね、あたしは話がしたいだけなの。」

そのスキル出そうとしてる状態、どうにかしてくれない？ 目障り

なんだけど

自分が少しでも動けば相手も動く。

「それはこっちの台詞だ。」

お前こそ腰に手エかけてんの、どうにかしろよ。気分が悪い」

相手が少しでも動けば自分も動く。

沈黙。

息をするのもためらう。

美冬は目の前の男の瞳の動きや指先を見つめていた。

少しの変化を見逃せば圧倒的に自分が不利になる。

何かの変化に気を取られれば相手に攻撃させる隙を与える事になる。

いまだ均衡は崩れず、この部屋で動いているものはない。

「繰り返すけど、あたしは顔合わせに來ただけなの。」

それを頭ごなしに疑われて、はつきり言って凄く不愉快だわ」

「……」

「そんなに疑うなら聞けばいいじゃない」

投げやりに言葉を放つ。

美冬は真雪の表情の変化を見逃さなかった。

「そうすれば、あたしが嘘ついてないのが分かるから  
畳み掛けるように言う。」

彼は微動だにしていない状態でありながら視線を落ち着きなく動かしていた。

美冬の言葉に迷っているのだろうか。

静けさが再び訪れた。

先ほどまでの緊迫感は次第に薄れているのが分かる。

「……それも」

真雪が押し殺すような声で沈黙を破った。

刹那。

足元から突き上げるような振動。

言葉は続かず、お互い顔を見合わせ。

思わず構えていた姿勢から身体を起こし、天井を仰ぐ。

振動を体感する時間の長さや

次第に近づいてくる感覚が、それが地震でない事を知らせた。

「近い」

美冬が息を殺し、呟く。

振動と共に獣のような匂いが鼻についた。

無意識に背後を睨む。

「ああ、かなり近いな」

「ここに来る途中に嗅いだ匂いと同じだわ」

「最悪だ。調子悪い時に限って、どいつもこいつも」

真雪も周囲に視線をめぐらせながら憎々しげに吐いた。

二人を張り詰めた空気が包む。

「片付けるしかないみたいね」

「いや、イレギュラー認定されてるかどうかも分からない。

そんな状態でむやみに手エ出すわけにはいかねえだろ」

「ギルドに問い合わせるの？ そんなの時間がかかりすぎる。

そんな事してる間にヤツがどう動くか分からないじゃない」

ため息混じりに壁に背中を預けた真雪がとがめるような目を向けた。

抗議と嫌悪が浮かぶ。

「何でも殺せばいいってモンじゃねえだろ」

「危険因子は早めに潰すべきよ。何かあってからじゃ遅いんだから」

「もしイレギュラーじゃなかったら？ 仕方ないで済ませるのか」

「そうよ」

遠くで聞こえる咆哮。

真雪が放つ、自分を批判するような視線から逃れるように。

美冬は肩をすくめ、ドアに向き直った。

「どこ行くんだよ」

美冬の動きが止まる。

「片付けてくるの。あのまま放っておいたら被害が出る」

「出ない可能性だってあるだろ」

顔をわずかに動かし、真雪をみる。

静かな表情。

冷たささえ感じる。

「嫌ならそこにいれば？ これはあたしの独断。貴方には迷惑かけ

ないから」

触れたドアノブは冷たく、体温を奪う。

「一人でも片付ける」

吐き捨てるように放たれた言葉にため息が重なった。

視界の端で真雪がうなだれるように俯いているのが見える。

髪が顔を覆い、表情は見えない。

何故、そこまでかばうのか。



倒すべきものを。

ドアを開けると、眼下にはまるで幻のようにも見える花園。けれど今は目に入らなかつた。

日差しも花の色も微風さえも。

ただ、身体に響き渡るような振動と鼻につく嗅ぎなれた匂いに憑かれたように。

それに誘われるがままに。

ストレートの髪がなびく。

「……待て」

背後の声は諦めたように言った。心配が動くのが分かる。

「俺も行く」

その声は咆哮の中で聞こえた。

美冬は後ろに視線を送る。

その顔には微笑みも疑問もない。

町のまどろむ様な時間は、戦慄の色へと塗り替えられていた。

肩でため息を吐く真雪に視線を向け、  
ジャケツトから取り出した真紅の手袋をきつくはめる。

「ねえ、聞きたいんだけど」

二つ重なって響く階段を下りる音と遠くに聞こえる地響き。

「この辺でやれる場所、ない？」

「やれる場所？」

「そう。適度に広くて人がいない戦える場所」

その言葉に真雪は立ち止まり、睨むように横に視線を走らせた。  
背には咲き誇る花々。

二人の表情はそれらを楽しむものとは程遠く、場違いな印象すらある。

「東は駅、西は学校。どっちも行くことは出来ねえな」

「うん」

「まして、この場所でやる訳にもいかない」

唇を噛んで一点を見つめる。

思案する静寂を鳥のさえずりと下校途中らしい学生の笑い声が引き立てた。

美冬は周囲を見渡し、眉を寄せる。

敵の臭気が次第に濃くなっていく。

時間はあまりないのかもしれない。

「神社、か」

真雪の動きが止まり、うわごとのような言葉が吐き出される。

「神社？」

「ああ。あそこなら人はこねえし、広さも問題ないはずだ」

「どこにあるの？」

後ろを振り返り、一点を指差す。

真雪が言葉を切って見上げる視線を見つめ返した。

「裏だ。この下にあるが……」

「何？」

「いや、どうやって奴を神社まで向かわせりゃいいだろうってな。まさか町中でスキルぶっ放して誘導させるわけにもいかねえし」

「あたしがやればいいんじゃない？」

当然のように吐き出された言葉に鋭い視線が向けられる。

轟音が、まるで遠雷のように響く。

反射的に音の方向に2人は顔を向けた。

「あたしがイレギュラーの前まで行って、おびき寄せるよ。」

それが一番早いわ」

「何言ってるんだ。危ねえだろ」

「そんな事分かってる。まさか、偶然に任せて待つなんて悠長な事してられないじゃない」

睨むような真雪の視線に、美冬も睨み返した。

「時間がないの」

美冬は身を翻すように大通りへと歩き始める。

その表情には冷たさと苛立ち。

「待て」

「否定するだけなら馬鹿だって出来る。それが駄目なら代案出してよ」

「待てって!」

ため息混じりの声が美冬の腕をつかむ。

瞬きも忘れ見上げた後、我に返ったように睨み付けた。

「とにかくその方法は駄目だ。下手したら町のと真ん中でやりあう羽目になるだろ」

「あのね、あたし素人じゃないんだから。そんな事……」

「音でおびき寄せる。多分、それで問題はない」

「……」

「だろ？」

数秒の間の後、美冬は真雪の手を振りほどくと渋々頷く。大通りに面した花屋とビルの隙間の歩道に出たところで二人は並んで立ち周囲に視線を巡らせる。

足元に伝わる一定間隔の振動は、敵が近いことを物語っていた。けれども周囲の人間や町の空気はそれを感じている素振りも見せない。

「音を出して敵が近づいているのを確認しながら神社に行く。いいな？」

そう言つて、真雪は人差し指と親指をくっつけた右手を口元に当てる。

その横顔はどこか嫌悪感が滲んでいた。

昼下がりの日常をつんざく指笛。

長く、耳鳴りを誘うような鋭い音に空気が一気に変わっていくのを感じる。

遠くを見るような目をしていた美冬が弾かれたように。

「反応した」

短く言つた。

その言葉が表すように、地響きの間隔が狭まる。

何か大きなものが速度を上げ、近づいてきているようにも感じた。

真雪は小さく頷く。

「ああ。行くぞ、こつちだ」

声が張り詰めていくのが分かる。

周囲のいぶかしがるように向けられた不審な目など、目に入らなかつた。

真雪の部屋から徒歩で数分。

その神社は昏なお暗く、濃い木々に隠れるように存在していた。

まるで忘れ去られているようだ　美冬はあたりを見回しながら思う。

「なるほど。確かにここなら人目につかないね」

日差しも届かない、現実とは遮断された場所。

使われている気配のない錆びた遊具を目にしながら小さく呟いた。

真雪が耳を澄ましているかのように宙を見つめ、何度目かの指笛を吹く。

木々にぶつかり、空へ立ち上っていく音。

「こつちに来てるみてえだな」

「うん。すぐ近くにいます」

確実に足音は近づいている。

まるで鼓動と連動しているかのようにも感じる震動。

緑の隙間から見える空を仰ぎ見ていた美冬は、不意に視線を感じて真雪に顔を向けた。

「何？」

自分を見つめる目。

それはどこか潤み、苦しげで。

走ったわけでもないのに肩を上下させて呼吸が荒いように見えた。

「いや、俺は勘違いしていたかもしれない」

「は？」

「お前のことだ」

「どういう……」

美冬の言葉は最後まで発せられることはなかった。

言いかけた言葉を飲み込んだのは

二人を突如覆った巨大な影と

何かが風を切り、墜落する音。

「上！」

「避ける！」

二人が同時に叫ぶ。

けれど、その声すら地面に隕石でも落ちたかのような怒号にかき消された。

飛び退くと同時にバランスを崩さん勢いの衝撃が地面に走る。

「大丈夫か!？」

辺りを土ぼこりが包んだ。

真雪が着地すると声を張り上げるようにして前方に尋ねる。

そこにあつたのは

巨大な人型をした岩。

そして

それに立ちほだかる小柄な少女の姿。

「こんにちは」

美冬は見上げて満面の笑みを浮かべた。

後ろに手を組み、肩をすくめるようにして。

先ほどの衝撃などなかったかのように悠然と立っている。

まるで鑑賞しているかのようにも見える背中。

「お散歩中、呼び出しておめんね。でも放っておくわけにはいかなかったから」

目の前の巨岩に顔はなく。

けれど美冬や真雪を凝視しているのが分かる。

微量に冷気を含んだ風が葉ずれの音を誘い、静けさを運んだ。

美冬の甘さを含む高い声音だけが響く。

「おい」

真雪が後方から低く声をかけた。

美冬の髪がわずかに揺れ、視線だけを動かしてこちらを伺っているのが分かる。

「こいつ、イレギュラーじゃないんじゃないのか?」

「どつして?」

「殺気をまったく感じねえ。こんな至近距離でも攻撃して来ねえんだから」

「さあ、どうかしら」

美冬は目を伏せ、かすかに口の端を上げた。

再度、斜め上を見上げる横顔には不敵な光が宿る。

「おい」

「ごきげんよう、出来損ない」

真雪の怪訝そうな呼びかけが聞こえてないかのようにつむがれる言葉。

鮮やかな新緑の中、微動だにしない景色。

巨岩はそこに元から存在していたかのように見える。

「邪魔なのよね。こんな時間に、こんな場所にいるなんて身の程をわきまえていないにも程があると思うんだけど？」

顎を上げ、口の端をゆがませた。

その言葉に真雪は眉間にしわを深く刻み、息を飲む。

「目障りよ。出来損ないは出来損ないらしくお家に帰ってほしいわ」

口を開きかけたと同時に発せられる言葉。

そこには明確な攻撃性が見えていた。

そして不敵な笑みを浮かべた唇が、ある単語を口にする。

正面に立つ巨岩と真雪が同時に反応した。

それは、人外生物を忌み嫌う者達が口にする蔑みの言葉。

「おい、お前！」

声を荒げ、美冬の肩を掴みかけた時。

巨岩の腕が空を切り、振り下ろされた。

その速さは身体の大きさからは想像できないほど早く。

拳が美冬の横に叩きつけられたと同時に

衝撃がまるで寒気のように身体を走り抜けた。

「！」

真雪は啞然とした。

それは巨岩の一撃ではなく、目の前の少女に対して。

美冬は微動だにせず眼前を見据えていた。

攻撃を避けようとする事も、自身もまた攻撃をする事もなく。

悟った。

これは挑発なのだ。

美冬は巨岩に攻撃させる事で戦う理由を得たのだ。

美冬は俯き、口元を大きく上げた。

けれどその瞳はどこか飢えた色さえ浮かんでいる。

「かかったわね」

背中をそらすように、後ろに組まれた手が動く。

右手が左手の中に潜り込んだ。

まるで出来のいい手品でも見ている気分になる。

そして、右手がバスタードソードを取り出した。

剣身が目を射るような光をはね返す。

「先制攻撃により、前方一体をイレギュラーと判断。ラプター、討

伐を開始する」

「待て！」

その言葉は宣戦。

真雪の声はもはや届いていなかった。

美冬は剣を構え、巨岩との距離を詰めると一閃。

力任せに後ろに振りかぶり、なぎ払った。

「挑発して、わざと攻撃させたな！」

「だったら何だっていうのよ！」

巨岩はその攻撃を手のひらで受け、押し返そうとするかのように。

肌は岩のように硬いのか、剣身が当たった瞬間に硬質な音を響かせた。

「最悪だ、お前」



吐き捨てられた言葉。

真雪はストレッチパンツのポケットから取り出した黒の皮手袋をはめながら

顔を不快そうに歪ませる。

「多少強引なやり方でも片付けておくべきでしょ！？ 話なんて通じないんだから！」

「イレギュラーでもねえ奴をイレギュラーに仕立てて何が楽しい！？」

「人を戦闘馬鹿みたいに言わないでほしいわ！」

叫ぶように交わされる言葉。

奥歯をかみ締めながら美冬が叩き切ろうと剣身を巨岩に押し付けるが、

わずかずつ足がずり下がっているのが分かった。

押し返されている。

おそらく敵は物理攻撃に強いタイプだ。

方法によっては倒せないことはないと思うが、武器が剣では難しいだろう。

岩のような肌に剣では歯が立たない。

突き刺せばいけるだろうか。

スキルを使うのが一番有効かつ早く倒せるはずだが……

「何が違うんだ？ お前がやってんのは殺しであって討伐じゃねえ」

この男はスキルを撃たないだろう。

ましてや敵を殺す気なんて、ない。

「一匹を取るか、大勢を取るかだって事よ！ そんなことも分からないの？！」

「被害が出るなんて決まったわけじゃねえだろうが！」

「被害出てからじゃ遅いの！ 可能性のあるものは早めに処理するべきよー！」

再度叩き切ろうと、剣を巨岩の肌につける。

跳ね返される反動でバックステップで美冬が後退した。

バランスを崩しながら地面に手をつき、真雪と並ぶ。

舌打ちをする美冬を冷ややかにみる鋭い視線。

腕組みのまま、真雪は美冬を見下ろしていた。

巨岩はゆっくりと歩みを進め、二人に近づいてくる。

「……ずいぶん優しいのね、レイヴン。」

チエイサーなんてやめて宗教家にでもなったらどう？」

美冬が体勢を整えると、苦笑を浮かべた。

底から湧き上がるような咆哮が身体に響く。

「人もイレギュラーも分け隔てなく愛せよ、なんてね。」

ぜひ愛で平和な社会を作ってもらいたいわ　ねえ、スイート？」

「な」

真雪の啞然とした表情の中に怒気が滲んでいく。

握られる拳。

美冬の唇にかすかに笑みが浮かんだが、それはすぐに消え。

剣を持ったまま、身体の重心を落とす。

前を見据える強い視線。

動きを止め、まるで迫る巨岩との間合いを計っているようにも見え

た。

そして。

巨岩がこぶしを二人に向けて繰り出したと同時に。

美冬は地面を蹴ってその身体を空中に躍らせた。

空中で剣を持ち替え、剣身を下に向ける。

「逝っけえ！」

巨岩の上に着地。

そのまま身体を大きくそらせて頭上に剣を振り上げると、勢いのまま

突き立てた。

苦悶の声が周囲を震わせた。

美冬は更に突き立てた剣を奥に押し込む。

その痛みに巨岩が身体をよじらせながら、渾身の力で吼える。まるで泣き叫ぶかのような声が轟き渡った。

「ぐー！」

美冬は激痛に暴れる巨岩の振り回される形で地面に投げ出される。

地面に落ちた先は敵の目の前。

剣ははまだ刺さったまま体勢も尻餅をついた形で咄嗟には立ち上がれない。

踏みつけられる可能性も、こぶしが飛んでくる可能性もある。

痛みを覚えつつ立ち上がるうとしながらも唇を噛む。

覚悟した時、だった。

「『朱』は仇を燃やす『業火』」

静かな声が告げるように響く。

同時に巨岩に向かって、1本の火柱のような光が立ち上った。

耳鳴りを覚える巨岩の悲鳴。

まるで炎のように揺らめく光の中でシルエットが身悶え、苦しむ。

美冬はただ啞然とした表情を浮かべ。

「……………」

真雪がかぶりを振り、大きくため息をつく。

目の前に出された右手をゆっくりと下げ、視線を落とした。

やがて、巨岩は仰向けに倒れる。

その音は神社を抜け、広がる住宅地にも鳴動した。

今までの嘘のような静寂。

美冬はへたり込んだまま、目の前の敵が光と共に跡形もなく消えるのを見つめる。

「怪我は？」

顔の横に手が差し出されているのに気がつき、見上げる。

苦しげに肩で息をする真雪が見下ろしていた。

顔にかかる髪で表情は良く見えないが、どこか悲哀が漂う。

「平気だけど」

呟くように言葉を発して、真雪の手を掴み立ち上がった。

そこで気がつく。

「……ちよつと、大丈夫？」

「何が」

覗き込むように見つめる美冬に返される乱暴な調子の言葉。怒っているわけではないと直感的に感じる。

息切れの中の言葉、青白い顔。

「あんな、お前」

「何？」

「お前の考えは、チェイサーとして間違っただけねえのかもしれないが」握っていた手が払いのけられ。

「そのやり方は間違ってる」

美冬が眉をひそめたまま、見上げた。

気がついたら風の中の敵の気配は跡形もなく、穏やかなものになっている。

「……」

「倒さなくていい奴まで傷つけるぞ」

美冬自身、分かっているつもりだった。

誰かを傷つければ自分も同じように傷つけられることも。

自分も同じだけ血を流すことになるであろうことも。

どれが正しい考え方でやり方かなど分からない。

おそらくどれも正しくて、どれも間違っているのだろう。けれど。

「今回だって……」

突然、真雪の身体が傾いた。

咄嗟に支えるが、真雪が拒むように美冬を押しつけようとする。

「ちよ、ちよっと!」

「大丈夫だ」

「大丈夫じゃないでしょ!？」

「少し熱がぶり返しちまつただけだ。問題な……」

言葉は続かなかった。

真雪がそのまま美冬にもたれかかるように倒れる。

思わずバランスを崩しそうになるが、かろうじて身体を支えた。

「ちよっと!」

美冬の手が真雪の額に触れる。

手のひらに、伝わる異常とも思える熱さ。

「……悪い……」

真雪の唇がわずかに動く。

絞り出すような声。

額を伝う汗と、力の抜ける身体。

真雪は視界が暗くなっていくのを感じた。

どのくらいの時が経ったのだろうか。

真雪が薄く目を開くと、そこは自分の部屋だった。

窓から差し込むのは黄昏時のオレンジ色の光。

自分はベッドに寝ていた。

「……らでイレギュラーと判断し、処理しました」

多少手荒な手段を使ってしまったとは。申し訳ありません」

加湿器の音に混じり、遠くで声がする。

覚醒しきれない意識の中で声の断片を聞いていた。

「分かっています。ご迷惑をおかけしました。はい。レイヴン、ですか？」

階下から聞こえる子供の話し声。

花屋の店先で話しているのだろうか、時折笑い声が響く。脈を打つ頭痛の中で天井を見つめた。

「戦闘後、熱が上がってしまったらしくて現在は寝ています。少し落ち着くまで、ここにしようと思つてますけど」

寝返りを打つたびに頭の中が揺れるような感覚。

「え？ 変わった様子？ 体調が悪化してしまった以外は特に。私も特に問題はありませんが」

しばらく経ってから、会話が途絶えると同時に遠くから足音が近づいてくる。

「あ」

目が合う。

携帯電話を手にした美冬がベッドサイドに歩み寄ると、真雪を覗き込んだ。

「ごめんなさい。起こしちゃった？」

「いや」

起き上がるつとめる真雪を美冬の手が制する。

穏やかに微笑むように瞳が細められていた。

「少しは体調マシになった？」

「ああ。運んでくれたのか、ここまで」

「苦労したんだから。死ぬかと思った」

真雪は自分の額に冷却シートが貼られている事に気がつく。頬を撫でる風。

「正確には、あたしだけが運んだわけじゃないんだけど。

花屋の店員さんに手伝ってもらったの」

「ニーナか？」

「名前は分からないけど、ちょっと鋭い感じの人」  
真雪が言葉もなく軽く頷く。

美冬がベッドサイドに座り、うつむいた。

静かな時間が流れる。

お互い視線も合わせず、どこかを見つめた。

「あのね」

「なあ」

同時に視線を合わせ、言葉を発する。

「あ、先に言つて」

「何だよ。お前が先に言えよ」

「……」

美冬がためらったように唇を噛んだ後。

「さつきは助けてくれてありがとう。それと、ごめんなさい」

真雪はうつむく美冬を眺めた。

「あの、強く言いすぎた。貴方は間違つた事言つてたワケじゃないのに。」

なんか悪かつたなつて。あたし、すぐかっとなつちやうから」

「別に気にしちやいねえよ」

汗で張りついた髪をかき上げる。

「間違つてねえんだ、多分。俺も、お前も」

「……」

「考え方が違うだけで。それだけだろ」

「そっか。ありがとう」

「むしろ、謝らなきゃいけないのは俺の方だ」

時刻を伝える定時の放送が街に幾重にも響く。

夜が始まる気配がある。

美冬は顔を上げ、言葉もなく真雪を見つめた。

「勘違いして悪かつたな」

部屋がオレンジ色に染まる。

照らし出される横顔。

不意に訪れた空白。

「……」

ややあつてから、美冬は首を横に振った。

それにあわせて髪がしなやかに揺れる。

「そんな、別にいいよ。驚いたけど」

もれた苦笑に、つられて笑う。

「あ、ごめん。体調悪いのにいっぱい話しちゃって。

何か飲む？ 飲み物とって来るよ」

問う声に頷く。

それを見た美冬が立ち上がる気配を感じる。

足音、遠ざかるシルエツト。

「なあ」

「ん？」

「名前、聞いてなかったな。お前の」

無彩色の部屋の中で、翡翠色の髪が見える。

振り向く気配。

「あたしは藤堂 美冬。此岸名はラプター。

言っておくけど男なんかじゃないからね」

苦笑う声。

「なんか長い付き合いになる気がする、貴方とは」



### 3 - 1 天使が笑う

跳ねるように歩く度に髪やプリーツスカートが軽やかに揺れる。夕暮れの駿河通りは、まるで夜が来るのを恐れるように人々が早足で通り過ぎた。

熟れたような赤い空の下、街に灯りがともりはじめる。

「ちつきしよう、思い出ただけで腹立ってきた」

ピンクのグロスを塗った唇が毒々しげに言葉を吐く。

美冬は両手を拳で身体の側面を叩くようにして、リズムを取っていた。

「何が」

隣に歩くのは黒いスーツに黒いネクタイといった風貌の真雪がいる。わずかに蒸した空気が肌にまとわり付く。

4月上旬であるにも関わらず、今日は5月下旬並の気温らしい。

「真雪と初めて会った時の事思い出しちゃった。最悪」

「ああ、そう？」

「きつと厄日ってああいう日の事を言うんだ。

仕事の相棒になる人に難癖つけられて、その上敵と戦うハメになつて」

「あのな」

「しかも倒れるし、クソ真雪が。氣イ失った野郎運ぶのがどれだけ大変だったか！」

「あのな、美冬」

息つく暇もなく話し続ける美冬を一瞥し、ため息をつき言葉を挟むが。

彼女は聞こえていないのか正面を向いたまま眉をひそめている。

「そういえば、あたしの使ってた武器だって敵ごと消されたしさ。

いくらだと思ってるのかしら。バカバカバカ！ 死ねばいいのに、マジで」

「聞けよ」

片目をいぶかしげに細めた真雪が見下ろすと翡翠色の視線に睨まれた。

「むしろ死ね」

「だから謝ってるだろ、1年前から。いい加減執念深いんだよ」

「ふざけんな、このバカタレ。あたしの心の傷は深いの！」

「なーにが心の傷だ」

耳に入ってくるのは店から漏れてくる賑やかなアナウンスとすれ違う人々のざわめきのような話し声、車の走る音。

音が洪水のように溢れ、耳に遠慮なしに飛び込んでくる。

「ていうかね」

美冬は唇を尖らせ、人差し指を当てる。

何かを考えるとときの癖。

視線が見上げてくる。

「この件ですっと不思議に思ってる事があるんだけどさ」

「何だよ」

「あの時、どうしてあたしをイレギュラーだと思ってたの？」

その声に真雪の歩くスピードが遅くなる。

意外な問いだったのか、面食らったような表情を浮かべた。

美冬を見つめていた視線が街並みに向けられる。

思い出そうとしているかのような無言の時間。

「改めて考えると変だなーって。普通に敵だって疑われるならまだ分かるけど」

真雪はあたしをイレギュラーと間違えてたわけじゃない？」

「まあな」

「なんか、それってどうなんだろ？ 普通ありえないよね。」

人間とイレギュラーの違いも分からないほどのバカなら話は別だ  
「ど」

美冬が眉をしかめて言った。

日はすでに落ちていながら

名残を惜しむように空を照らしている光に真雪が目を細める。

「あの日、仕事休んでたじゃねえか」

ゆっくりと口を開いた。

遠くを見る瞳。

「うん」

「所長から電話があつたんだよ」

「何て？」

「『イレギュラーがチェイサーに化けて襲う事件が起きてるから注意しろ』って」

「……何それ。いつ、かかってきたの？」

その言葉に美冬が眉をひそめる。

数秒の沈黙の後、吐き出された戸惑いを含む声。

「お前がウチに来る十分くらい前だな、確か」

二人が立ち止まった。

次々と追い抜かれる人の波の中で顔を見合わせ。

「いや、ちよつと待て」

真雪が低く呟く。

「おかしい」

「うん、おかしいよね。」

そんなの風邪でぶつ倒れてる人間にわざわざ言う事には思えないんだけど」

「ああ。寝てる人間には関係ねえ話だ」

「しかもさ」

美冬が歩くのを促すように真雪の腕に軽く触れ、再び歩き出す。

笑うような華やいだ街の雰囲気とはかけ離れた空気。

まとう黒いスーツとそれが混じり合い、明らかに2人は浮いていた。

「10分前って事務所を出て真雪の家に向かつてるの、あたし。」

そのタイミングで電話したら普通、あたしが行く事くらい言いそ  
うな気がしない？」

「そうだな」

「更に言っちゃうと」

気がつけばあたりは夜が広がっていた。

先ほどまでの夕暮れは幻のように消え、灯りが浮かび上がる。

「あたし……そんな事件、聞いた事ないんだよね」

ためらうような沈黙の後、言わずらそうに美冬が呟く。

「何だそれ」

困惑の中、搾り出すように。

「イレギュラーがチエイサーに化ける事件なんて知らないもん。

1年前もその前も、今も」

「いや、でもあの親父が言ってたぞ？」

「うーん。もしあったとしたら知ってるはずなのよ。

チエイサーのギルドやコミュニティの中で、そんな大事な話が流  
れないはずないもん」

真雪は啞然とした表情から次第に眉間に深くしわを刻む。

唇を噛み、視線を横に向けた。

「……どういう事だ？」

手で口を隠すようにしてうめく。

「親父の意図が全然読めねえ」

「もしかしたら本当にそういう事件が起きてたのかもしれないし、  
もしくは所長が何かの目的で仕組んだのかもしれない」

「仕組む？ そんな事して何の得があるつつうんだよ？」

「分からないけど。なーんか引つかかるんだよね」  
上の空の声。

美冬が首を傾げるとポニーテールが大きく揺れた。

「けど、あの人ってたまに変に隠してるっぽい時あるんだよね。

何かたくらんでるっつーか……」

そこまで言って真雪が黙った。

不意に訪れた静寂に美冬が怪訝そうな表情を浮かべる。

「どしたの？」

「いや、やめよう。なんかこのまま話してると

所長が悪い奴みたいに思えてきちまいそうだ」

「でも、ある程度可能性は考えておいた方がよくない？

何かに巻き込まれた後じゃ遅いんだし」

美冬の言葉に真雪はため息混じりに首を横に振った。

「所長を疑いたくねえ。やめよう、この話は」

疲れたように吐き出された声。

真雪は止まってしまうような歩調を心なしか速める。

「ねえ、そっいえば」

後ろから慌てたような靴音が近づき、隣に並んだ。

美冬が真雪の腕をつかんだ後、顔を覗き込むようにして。

「あ？」

「今日、真雪が事務所に来る前にノクティルカさんが真雪の仕事のミス修正してたよ。」

文句言いながら」

「うーわ、マジか」

空を仰いで顔をしかめた真雪を見て声を上げて笑う。

「……奴、なんつってた？」

「効率が悪すぎるとか仕事の量少ないはずなのに一番ミスが多いって」

「これだから落ちこぼれは、とか言ってたかったか？」

「うっん。それは言ってたかったけど」

ため息を漏らす横で嬉しそうに視線を宙に漂わせている。

まるで鼻歌でも歌い始めそうな表情だ。

「『死ねばいいのに』とは言ってた!」

口の前で両手を合わせ、そのまま真雪を見上げる。

「おい」

「ん？」

睨む視線と笑う視線がぶつかった。

「それはお前が言ったんだろ？ 死ねばいいのにつて」

「違うよ。『死ねばいいのに？』つて聞いたら頷いてたもん」

目の前の信号が赤になったのを見て、立ち止まる。

まるで川のような車の流れ。

光が長く尾を引く。

真雪はため息をついて、美冬を横目で眺めた。

「そりやお前が聞いたからだろ。でも、何つーか」

「ん？」

「……アイツは仕事が出来るからそう言うんだ。

みんな自分と同じように仕事が出来ると思って欲しくねえな。

いつもフォローしてくれるのはありがたいんだけど」

苦笑混じりの声に自嘲的な響きが見え隠れする。

美冬は真雪の横顔を一瞥し、視線を正面に向けた。

信号が青になると同時に、多くの足音に包まれる。

それに紛れるように歩き始めた。

「ノクティルカさんは仕事に厳しいからね。自分にも他人にも」

「まあな」

目の前に見慣れた看板が建物の影から現れた。

全国展開しているコーヒーチェーン店『ルフトバツフェ』

窓から溢れたオレンジ色の光が歩道にまで伸びている。

人気のある店だけあり、店内には数多くの人影があった。

足を踏み入れると人々の歌うような話し声と低く流れる音楽に包まれる。

「ね、所長は何だったっけ？ 頼まれたモノ」

美冬が自分の背後に立つ影に尋ねる。

「あの人はいつもと同じだ」

店員と目が合い、真雪が美冬の背中を軽く触れた。カウンターをはさみ、向かい合う。

「こちらでお召し上がりですか？」

「いや、持ち帰りで。今日のコーヒートのツールにエスプレッソショット追加と、

俺はアイスラテのツール。美冬はどうする？」

その問いにメニューを見ていた美冬が顔を上げる。

真雪を眺めた後、店員に視線を向けて笑顔を浮かべた。

「えっと。ホットのラテのショットでホイップとヘーゼルナッツシロップと」

エスプレッソショット追加、低脂肪乳に変更で！」

「……相変わらず呪文みてえな注文だな、お前」

一気にまくし立てるように言葉を紡ぐ美冬に苦笑を漏らす。

「だって好きなんだもん、甘いの」

唇を尖らせて抗議するように言う。

その後、顔に広げる機嫌のよさそうな微笑み。

それにつられるようにして真雪も笑った。

「ね、聞いた？」

注文を終え、店の片隅にたたずんでいると美冬が真雪の袖を引っ張った。

空調が頭上にあるのか、髪がわずかにそよぐ。

「何が」

「昨日ポリ公、動いたらしいじゃん。すごかったらしいよ。何気ない調子で発せられた言葉に真雪の動きが止まる。

その顔に驚きが広がった。

「マジ？ どこで？」

「東雲通りだって。なんかポリ公だけじゃなくて普通に警察も出てきたらしいし。」

えーらい騒ぎだったってギルドで言ってた」

「警察まで動くんだったらよっぽどだな、そりゃ」

立ち込めるコーヒーの香りが鼻腔をくすぐる。

真雪は壁にもたれたまま、自分のかたわらにある商品の並ぶ棚を眺めていた。

「ちなみにポリ公って誰が動いてたんだ？」

「アブちんだって」

「……アブソルト？」

思わず美冬を見つめる。

「うん」

「あのアブソルトが動いたって何があったんだ？」

「それがおかしいんだよね。だって……」

その次の言葉はなく。

美冬表情が一気に固まった。

「美冬？」

急に黙った事に不審に思い、名を呼ぶ。

けれど、その声ですら届いていないかのように

美冬はただ目の前を見つめたまま動きを止めていた。

「……」

「おい、美冬？」

身体を乗り出すようにして隣にたたずむ美冬を覗き込み。

その顔には怪訝と困惑。

唇が小さく動くのが見えたが言葉にはならなかった。

真雪が肩を掴む。

「あ」

そこで初めて我に返ったように美冬は大きく瞬いた。

「どうした、大丈夫か？」

「う、うん」



ぎこちない笑みを浮かべながら、再び視線を泳がせる。

こわばる顔。

まるで何かを見てしまったかのような表情。

先ほどから同じ方向ばかりを気にしていた。

一体何を見たというのだ。

視線の先は店の中央、ケーキの入ったショーケースの辺り。

真雪は彼女の見つめる方向に視線を転じ。

真雪にも見えた。

「ああ」

思わず声が漏れ、視線をそらす。

美冬は真雪の反応に疑問を持った様子で視線を向けたが、すぐに同じ方向を注視していた。

そこに居たのは1人の女性で、年齢は20代だろうか。

職場の休み時間を利用して買い物に来たらしい彼女は店員に向かってショーケースを指差しながらケーキを注文していた。

穏やかに笑みを浮かべながら話している姿は別段、違和感を感じるものではない。

普通ならどこにでも居る女性だと言う印象を持つだろう。

そう、普通ならば。

「美冬、あんまりじーっと見るな」

「え？」

「変な奴だと思われるぞ」

真雪は身体をひねるようにして窓の外を眺め、呟いた。

窓の外には夜が広がっている。

車を作る光の川と、街並みを作る無数の星。

その中を途絶えることなく人々が往来していた。

「お待たせしました」

目の前に突然現れた店員の声に思わず体勢を整える。

美冬は目を細めるようにして微笑むと、紙袋を受け取った。

「ありがとうございます。お気をつけてお持ちください」

そんな声を投げかけられても、どこか上の空のように見える。

軽い会釈の後、どちらからともなく店のドアへ向かう。

ドアが開くと、わずかに冷気を含んだ風を感じた。

夜の匂い。

「美冬」

「ん？」

「お前、何見た？」

髪をかきあげて正面を向いたまま尋ねる。

その声はため息混じりで、何かを考えているかのよう。

美冬は、困ったように唇を上げた。

無理をして笑っている。

「あー、時々あるんだよね。自分でもよく分からないんだけど、たまに……」

「白いベールをかぶったように見える奴がいる、か？」

美冬が驚き、薄く口を開いたまま見上げる。

それとは対照的に無表情で見つめ返す赤紫の瞳。

「えー!? ど、どうして分かるの?」

美冬は瞬くことも忘れ、目を丸くした。

「聞きたいのはこつちだ。お前、ただのチェイサーじゃなかったのかよ」

「どついう、意味?」

疑問符とため息が交錯する。

「……普通の人間じゃねえっつー事だ。変態の世界へようこそ、美冬」

「ええ?! 意味分からないんだけど! 分かるように説明してよ! 面白くなさそうに吐き出された言葉に、真雪の背中を掴む。首を傾いで顔を下から覗き込んだ。

一瞬だけ視線が交わり、すぐにそらされる。

「俺も見えるんだよ、それ」

「真雪も?」

「ああ、こつやって人の多い場所に出るとよく見る事が多いな。

他の奴はいたって普通なんだが、そいつだけは白いベールかぶってんだ。

もちろん他の奴は気が付いてない」

時折、話しかけてくる居酒屋の店員らしき男を手で制しながら大通り沿いの歩道を歩く。

駅に近くになるにつれて喧騒が一段と強く、人通りが多くなった。

まるで自分達など見えていないのではないかとさえ感じる。

「当たり前だよな、他の奴には見えてねえんだから」

「白いベールって何なの?」

言葉を選ぶような沈黙。

視線を合わせようとせず、何かをずっと思索しているかのような横顔。

「人の死期だ」

長い沈黙の後の言葉。

一瞬で姿を消した形のない言葉が全身を駆け巡るかのように。啞然としたまま、ただ見つめた。

「……え?」

「あの白いベールっつーのは死期の近い人間に見える。

死神連中は、ああいう奴らを天使って呼んでるんだけどな。

死に近づくとつれてベールが濃くなっていくんだ。見ていて気持ちのいいモンじゃねえ」

「白いベールかぶった人は、もうすぐ死ぬ人なの？」

真雪が美冬を見下ろす。

無表情な瞳の奥に存在する苦しさ。

息をつく、わずかに。

「ああ。もって数日つてところだ」

「じゃあ」

焦りを帯びた声がまるですがつくように響いた。

「真雪。じゃあ、さっきの人も？ あの人も死ぬの？」

「そうだな」

先ほどの店に居た女性が2人の脳裏に浮かぶ。

鮮明に思い出す、あの違和感と白いベール。

心が波立ち、わけも分からないまま動揺した。

視線がさまよい言葉を懸命に探すが見つからない。

考えている側から、何を考えているのか分からなくなる。

「このハタ迷惑な特殊能力は」

どのくらいの間、黙りこくって歩いていたか分からない。

大通りから一步路地に入った所で、真雪が口を開いた。

「普通は死神がもってるモンなんだけどさ」

「……」

「うちの事務所の奴らが見えるのは当たり前としても」

言葉を飲み込んで宙を睨む。

周囲には小さな店舗の飲み屋ばかりが隙間なく連なり

閉ざされた店内から笑い声が聞こえた。

漏れる灯りの穏やかさとは裏腹の暗い雰囲気。

「なんで死神でもないお前が見えるのかが分からねえ。

普通の人間が持つてるなんて、そんな話今まで一度も聞いたことな  
んざねえぞ」

独り言のように呟き、真雪は立ち止まった。  
美冬が数メートル後ろで立ち尽くしていたことに気が付いたからだ。  
振り返り、彼女の方に身体を向ける。

何かを訴えるように見つめる瞳。

泣きそうなわけでも痛みを感じているわけでもない。

切なさや動揺の入り混じった表情を浮かべ、ただ耐えているように見えた。

何か言おうとしてみながら言葉が見つからず、唇だけが動く。

「美冬」

車も通れないほどの広さの道。

立ち止まる2人を通り過ぎる人々が不審と好奇の視線を投げる。

「……ごめん。自分でもどうしてこんなに動揺してるのか分からないや。」

実感とかないし、全然分かってないくせにショックなんだ。どうしてだろ」

まるで泣いてるような顔で笑う。

「真雪だつて見えてるんだし、ただちよつと死期が見えるだけなのにね。」

あは、あたしらしくないね。こんな……」

「美冬」

自分を落ち着かせようとしてもしているのだろうか。

取り繕うように笑いを含んだ声で、うつむきがちにまくし立てる。  
それをさえぎる声。

驚いたように顔をあげ、見つめ合う。

「悪い。言わなきゃ良かったな」

まるで自分を責めているかのように。

切なさすら漂わせた声。

「知らなくてもいい事だつてある。知らなければ辛い思いしなくて

済んだのに」

「やだな。あたしが聞いたんだもん、真雪は悪くないよ」  
慌てたように勢いよく首を横に振る。

苦笑に似た笑みを浮かべ、真雪に向かって歩き始めた。

「あ、コーヒー冷めちゃう。所長待ってるし早く帰ろ？」  
明るさを装う声。

まるでいつもの自分を演じているかのように。

後ろに手を組み、美冬は立ち止まった真雪を残して先を歩く。  
徐々に離れる背中を見ながら、ため息をついた。

「……氣イ遣ってる場合じゃねえだろ、お前」

独りごちた。

肩で息を吐き、聞こえるはずもない言葉を向ける。

いつもと変わらないはずの彼女の背中が、どことなく寂しげで。

「真雪？」

離れた場所から声が聞こえる。

空を仰いだあと、離れた位置で振り返る美冬に視線を投げた。

「今行く」

響く靴音。

夜気の濃い微風が髪を揺らした。

### 3 - 2 Wheel of Fortune

「所長、聞きたいことがあるんだけど」

ソファに座ったダンデライオンの頭上から声が降り注いだ。

顔を上げると真雪がコーヒーの入ったカップを手に、伺うような視線を向けている。

「なんだい？」

「天使が見える能力を普通のヤツが持つてるのってありえる？」

対面のソファに真雪が座りながら、尋ねた。

体重を預けると小さくソファが鳴くようにきしむ。

「死神以外の人間が？」

「そう」

ダンデライオンは口の中で唸ると、視線を横に向けた。

何かを思案するように黙り込む。

窓の外には繁華街の賑わい。

夜の闇と不自然なほど鮮やかなネオンの光が混じり、危うげな色を放っていた。

「ありえない話ではないけれど僕は聞いたことがないな。

調べれば、どこかの事例であるかもしれないが」

「そうか。やっぱりそうだよなあ」

「レイヴン」

カップをテーブルに置いてソファに背中をうずめる。

眉をひそめていた真雪は名前を呼ばれ、ダンデライオンを見た。

「この話題はラプターの様子が変なのと関係あるかい？」

ソファから離れた自分の席に座っていた美冬が顔を向けているのが分かる。

自分を指差し、首を傾げた。

「まあね。美冬、ちょっと来い」

「なあに？」

靴音が室内に響く。

二人の視線が美冬に注がれた。

「さつき、買い物いつたら店に天使が居たんだわ。それが美冬にも見えたらしくてさ」

「ラプターにも？」

「ああ」

「本当かい？ ラプター」

真雪の隣に座った美冬は、ためらいがちに小さく頷いた。

「1人だけ頭からすっぽり白い布をかぶってる人が見えたの」

「完全に見えてるな」

吐き出されるため息混じりの言葉。

「そうだね。ラプター、それが見えるようになったのはいつ？ こ最近の話かな？」

「ううん、少し前から。初めは一瞬しか見えなかったから気のせいだと思ってたんだけど、どんどん見えるようになって。一番最初に見えたのは……」

唇に指を当てて視線を宙にさまよわせる。

その瞳はどこか力が抜けているようにも感じた。

数秒の沈黙の後、目の前のダンテライオンと視線を合わせ。

「1年前」

「ちょうどウチに来た時期、か？」

「うん。あの日は真雪と初めて会った日だから覚えてるの。」

家に帰る時に見えてさ、いろいろあつて疲れたせいだと思ってた」

その言葉に真雪とダンテライオンが顔を見合わせた。

互いの顔には疑問と戸惑いが浮かぶ。

「これって死神と会ったから見えるようになったってワケじゃないの？」

「んな事ねえだろ。それだったら周りの人間、みんな見えるようになっちまってる」

真雪が顔の横で手を左右に振ってみせる。



けれど、顔は厳しいままで何かを考えているように。

「だからってあの日、能力が目覚めるようなきっかけがあったわけでもねえし」

独り、宙に向けて呟く。

不意に。

それまで微動だにせずソファにもたれかかっていたダンデライオンが視線を上げた。

真雪と美冬の視線が自然と彼に向けられる。

「ウタカタ」

呟いた言葉。

息のように漏れた言葉が室内に響き渡るような錯覚。

「ウタカタって、あの黒いガキか？」

「ああ。確かラプターは五条駅前で僕と初めて会った時にウタカタが見えると言っていた。

そうだったね？」

「う、うん」

「もしかしたら彼女が原因なんじゃないだろうか」

鼻と口を隠すように手をあてる。

顔には微量の陰しさがにじんだ。

「でも」

美冬はあわてたように身を乗り出す。

向けられる青い瞳。

「あの日、はじめてウタカタを見たワケじゃないの。ずっと前から見てたから」

「ずっと前っていつだよ？」

美冬が目をつせ、微かに目を細める。

その表情はどこか寂しげにも見えた。

「小さい頃かな。いつからかは忘れたけど気が付いたら彼女が見え

てたんだよね。

気がつくとも側にいて、こっちを見てた。あたし達が両親に言っても信じてもらえなくて」

「ふむ。では、事務所に来た日かその周辺で変わった事は？」

ダンデライオンの問いが合図となるように、静寂が訪れる。

うつむき、考える美冬を見る2つの視線。

遠くに聞こえるサイレンと喧騒。

「あ」

美冬は何かに思い当たったように顔を上げた。

肩にかかる髪が流れ落ち、しなやかに揺れる。

「何かあつたんだな？」

美冬は呆然としたまま頷く。

まるで、その動作はまるで夢でも見ているかのよう。

「ウタカタに言われたの。『君は死に魅入られる』って」

詠唱のように言葉をつむぐ美冬の横顔を真雪が見つめる。

「『彼岸に憧れても辿り着くことは許されない』」

にわかには空調が強く風を吐き出した。

「『死と共に生きる』」

美冬がひざの上に置いた手を握り締める。

瞳は正面に座るダンデライオンに向いていたが、どこか遠くを見つ

めるように。

「そつだ。そつ、ウタカタにキスされたんだ」

「キス？」

「うん。ウタカタにキスされたの、あたし」

視線が合った。

真雪は美冬を見つめていた視線を尋ねるようにダンデライオンに向ける。

「もしかしたら、それが原因かもしれない」

「ウタカタが？」

「ああ。僕はウタカタとそれなりに付き合いは長いけれど彼女が喋るのを聞いたことがない。ましてや人にキスするなんて」考えをめぐらせているのか、せわしなく動く視線。

美冬が口を硬く閉じた。

戸惑いが滲む。

「ウタカタのその言葉の意味を考えると、あながち間違っていないと思うんだ。」

その言葉や行為が能力を植えつけ、人間とは違う何かに変えたんじゃないかって」

思わず息を飲んだ。

わずかに見開かれる瞳。

「え？」

美冬の口から声が漏れる。

「ああ」

感嘆に似たため息を漏らし。

驚く美冬を真雪が硬い表情のまま、見つめる。

観察するような瞳。

何かを見つけたように、わずかに眉にしわを寄せた。

「そうか、今まで気が付かなかった。言われてみりゃそうだな」

「レイヴンも気が付いたか。うん、多分そうということなんだと思うんだ。」

僕がはじめて会った時にラプターを見て感じた違和感は……」

「あ、あの！」

「ん？ なんだい、ラプター」

穏やかに見つめてくる視線と、横から注がれる視線。

美冬は2人を慌てたように交互に見る。

「ど、どどういう意味？」

「どどういう意味とは？」

「その、人間とは違うとか」

まるで時が止まったかのように3人は動きを止めた。

音もなく、考え込む沈黙。

「ラプター、もしかして分かってないのかい？」

「分かってないって？」

わずかな驚きを含んだ質問に、美冬が困った表情をダンデライオンに向ける。

恐る恐る問いを返した。

「……分かってないのか」

「所長、そんなもんだって。俺だってそうだったじゃねえか」  
ため息が混じる声。

真雪は見つめる美冬の視線から逃れるように上を仰ぐ。

何か言葉を選んでるように動きを止め、ただ天井を見つめた。

「なんつーかな」

肘掛に置かれた指が小さくリズムを取るように動いている。

「要するに、お前は人間じゃねえっつー事だよ」

啞然とした。

口をわずかに開いたまま動きを止め、ただ見つめる。

「人間らしくねえ人間かと思ってたが、そうじゃないらしいな。

死神に似ているが死神じゃねえ。人間のようで人間じゃねえ」

真雪の顔から表情は消え、ただ淡々と言葉を吐く。

「つまりウタカタのいった言葉、そのままなワケだ」

「ウタカタの？」

不安が広がっていた。

その声にも、表情にも、体から発せられる空気にも。

真雪は眉間にしわを寄せたまま美冬を一瞥すると、すぐに視線をそらす。

自分に向けられた視線はまるで助けを求めているようだ。  
けれど自分はどうする事も出来ず

ただ、顔を背けた。

この罪悪感のような感情はなんだろう。

真雪は小さくため息をついた。

「彼岸に憧れても辿り着くことは許されない、だっけ」

不意に投げられた言葉に美冬はダンデライオンを見た。

「つまりはそういう事なんだ」

身体を乗り出すようにして、ひざの上で指を組む。

口の端を上げてみせた。

けれど瞳は笑うことなく、まっすぐに見つめる。

「僕らのように死ぬ事を忘れた　君も」

「死ぬ事を忘れた？」

「そうだよ。まあ、此岸では人間じゃないのも珍しい話ではないんだけどね。」

みんな隠してるだけで、僕らみたいな存在はいくらでもいるから美冬は思わず、隣に顔を向けた。

背もたれに乘せられていた手が美冬の頭を軽く叩くように触れる。

真雪が微かに苦しげにも見える笑みを浮かべ。

「気にするなっつーも無理な話だろうけどな。」

まあ、今は分かるうとしなくてもいい。別に何が変わるわけでもねえんだし」

「そうだね」

真雪の言葉にダンデライオンが穏やかに頷いた。

「焦らなくても、いつか分かる。お前も」

「そう？」

「そんなもんだ」

諦めに似た響き。

真雪は足を組みかえるとテーブルの上に放置していたカップを手を取った。

殺風景で無機質な印象の室内は、どこか時が止まってしまったよう

に感じる。  
まるで音も時間も忘れた錯覚。

「そうだ、すっかり忘れていた」

沈黙を破ったのは、立ち上がる気配と足音。

ダンデライオンは自分の席から封筒をつまみ上げた。

「2人はチャリオットという名前に聞き覚えはあるかい？」

カップに口をつけたまま真雪の動きが止まる。

視線がダンデライオンの動きを追う。

「……聞き覚えも何も、アイツだろ？」

「うん、そのチャリオットだ。ラプターは？」

「えーと」

美冬がソファにもたれかかると、天井を睨んだ。

大きな目が左右に動き、何かを思い出しているように。

「名前は聞いたことあるよ。確かBランクのナイフ使いじゃなかったっけ？」

「ご名答。さすがラプターはチェイサーをよく覚えているね」

部屋を歩いていた靴音がやみ、ダンデライオンは先ほどと同じ位置に座る。

「チャリオットはラプターと組む前、レイヴンと何度か組んでいたんだ。」

それなりに腕が立つフリーで、ウチにちよくちよく出入りしててね」  
火の付いていないタバコをくわえたまま、言う。

どこか懐かしむような口調で。

「へえ、そうなんだ」

「なんか軍人みてーな奴なんだよ。もしかしたらマジで軍人上がりなのかもしれねえけど。」

硬いっつーかストイックな野郎でさ」

真雪がネクタイの結び目に指をかけて、目を細めて言った。

「で。そのチャリオットがどうかしたのか？」  
2人の視線がダンデライオンを見る。

目の前にある備え付けられた深いブラウンのテーブルに置かれた葉書。  
黒い縁取りが見えた。

「彼がね、亡くなったんだ」

ダンデライオンの口調は穏やかで、微笑にも見える表情を変えることなく告げる。

真雪は葉書をとろうとした姿勢のまま止まった。

向けられる呆然とした視線。

「死んだ？」

「ああ。確か一昨日だったかな？ チェイサーギルドの方から連絡が来てね」

テーブルの上に置かれたままの葉書は無感情に死を知らせていた。視線がさまよう。

「……そっか」

呟き、ソファにもたれる。

うつむくと髪が流れ、顔をおおった。

「死因は？」

「詳しくは分からないんだけど、チェイサー同士の抗争に巻き込まれたって説が濃厚らしい」

美冬の問いにダンデライオンが腕時計をいじりながら、答える。

その口調に感情は見えない。

まるで世間話でもするかのように。

死神でなくても、此岸に生きる者にとって死は身近だ。

ニュースでこそ流れないが

チェイサーが命を落とす事など日常茶飯事で別段珍しい事でもない。

「一昨日、か。ポリ公が動いてたって言ったから

それ絡みかと思っただけど、それは昨日の話だし日付が合わないや」

「エクスキューションナーが？」

「うん。警察も動いてて結構大きな騒ぎだったみたい。

でも関係ないだろうなあ、多分」

真雪は2人の会話を上の空で聞いていた。

嘘のようだと思いつながら衝撃を覚える自分がいる。

頭のどこかに穴でも開いてしまったかのように、抜け落ちる思考。

「それか、もしかしてレギオンだったりして」

顎に手を当てて呟く。

その言葉にダンデライオンが動きを止めた。

「レギオンが動いたらもつと騒ぎになるはずだよ。

こんな1人や2人の被害じゃ済まないんじゃないかな？」

「そっかあ」

美冬が息を漏らしながら呟く。

その表情に疲れが見え隠れしていた。

誰からともなく、黙り考える時間が流れる。

「それで、2人に頼みがあるんだけど」

ダンデライオンがゆっくりと切り出すと、真雪が顔を上げた。

「何？」

「今日、チャリオットの通夜があるから出席して欲しいんだ」

動きが止まり、美冬と真雪が無言で視線を合わせて何かを相談するかのよう。

時計が時を刻む音ばかりが大きく響く。

視界の端で観葉植物が空調の風に触れ、葉をわずかに揺らしているのが見えた。

「ずいぶん急だな」

呟いた後、身体を起こし体勢を整える。

美冬もつられるように座りなおし、ひざに手を置いた。



「俺らが出てもいいのかよ。普通の奴らだっているだろ？」

「うん、此岸からも参列しているはずだから問題ないはずだ」

「俺はともかく、美冬も？」

その言葉に美冬も頷く。

ダンデライオンは笑うように目を細めた。

言葉を選ぶような間。

ややあつてから、首を縦に振る。

「会いたがってたからね、チャリオットが」

遠くを見る視線。

「3ヶ月前くらいに会ってレイヴンにパートナーが出来たって話をしたんだ。

その時に会ってみたいって言ってたから、ラプターが行けば彼も喜ぶと思うよ」

静かな口調に美冬は目を伏せた。

言葉がたちまち静寂に飲み込まれていく。

いつもは感じないはずの重苦しささえ感じた。

言葉を発しなれば、言葉を忘れてしまうような。

「死神が葬式に出て嫌がられないかね」

真雪は誰ともなしに呟くと立ち上がった。

テーブルに放っておかれた葉書を手に取ると紙面に視線を走らせる。

住所は霧島区の隅に位置する地区。

ここから徒歩でいける距離だった。

「美冬、ちよつと行ってくるか。手エ合わせてこよう」

「うん」

窓の外にはいつもと同じような景色が広がっている。

匂い立つような夜の気配。

ネクタイを締めなおすと、肩で息をついた。

「では、よろしく頼んだよ」

「ああ」

何かに思いをはせる言葉。

何かを言いたげな視線。

ここに立ち込めるのは、ため息と疲弊した沈黙。

19時20分。

まだ、夜は始まったばかりだった。

迷路のような住宅地に響く靴音が二つ。

どの家にも灯りがとまり、人の気配を感じる。

夜の闇はどこにも等しく訪れ、すべてを包んでいた。

「場所、分かる？」

美冬が隣を見上げた。

この声音に普段のはじけるような明るさはなく、どこことなく沈んでいるように感じる。

真雪は彼女を一瞥すると正面を向き静かに頷いた。

「ああ、さつき地図見たから大丈夫だ。それにある程度は匂いで分かる」

「そうだね」

目的地へと歩みを進めるにつれて鼻腔に僅かな死臭が届く。

それは死が持つ独特の匂いであり、死のある場所には必ず漂うもの。無意識のうちのため息をついた。

「美冬」

「ん？」

「悪かったな」

突然投げられた言葉に美冬は意味も捉えかねて黙った。

何を指しているのか分からず、ただ声の主を見つめる。

「どうして謝るの？」

「お前、ずっとへこんでるみてえだからさ」

「真雪のせいじゃないじゃん」

軽い抗議を含む声。

等間隔で並んだ街灯がアスファルトを無機質な光で照らしていた。

真雪が風に乱される髪を手で押さえながら、美冬のほうを向く。

「俺が所長にあんな事聞いたから、お前が傷つく羽目になっちまっただろ。」

知りたくない事まで知ったつっつかさ。悪い事したなって  
自己嫌悪がにじむ。

「結局、余計へこませた形になったから」

視線をそらし、電柱の住所表示を眺める横顔。

美冬は驚いた表情に笑いを滲ませた。

「気にしすぎだよ」

俯き気味に浮かべる笑み。

顔を上げるとぶつかる視線に目を細めた。

「あたしは大丈夫。ていうか、全然実感もないし何かが変わった訳  
じゃないから

そんなこと言えるのかもしれないけど」

言葉を切り、訪れる沈黙。

「それに、真雪がいるから」

美冬が自分の足元を見つめ、呟く。

湿気混じりの風の中に雨の香りを嗅いだ気がした。

天気予報はなんと saying していたらどうか。

夜に紛れて分からなかったが、空には厚い雲が広がっている。

「あたし一人だったらどうだったか分からないけど

真雪がいるから大丈夫な気がする」

「そうか」

「根拠はないんだけどね」

照れたように微笑む。

溝のような狭い川に沿う道を後ろに手を組み、歩く。

耳に届く水の流れる音。

突然、足音が止まった。

それにつられるように美冬も足を止めて怪訝そうな視線を向ける。

「あのさ」

真雪が向き直り、迷うような表情を浮かべた。

言葉でも選んでいるのだろうか。

視線がせわしなく動く。

「うん」

「あんまり無理するなよ」

「無理？」

「うまく言えねえけどさ。氣イ遣いすぎるのもいい加減にしろって話」

真雪はその言葉を残して再び歩き始めた。

呆氣にとられた表情を浮かべていた美冬が慌てて真雪の背中を追いかける。

「へ？何の話？」

「分かんねえならいい」

「どういう意味？」

「だから」

隣に並び、見上げてくる美冬の頭をやや強めに撫でる。

髪の毛を乱す、大きな手。

「へこんでる時、無理して元気なフリとかする必要ねえって事だよ」

「やめてよお。髪の毛ぐしゃぐしゃになっちゃう」

「ぐしゃぐしゃにしてんだよ」

困ったような口調に笑いを含んだ声が答える。

目を合わせて同時に微笑んだ。

「ありがと。でもね」

手櫛で髪を整えながら、美冬が目を伏せる。

真雪が見下ろすと、いたずらっぽい視線があった。

「それはこっちの台詞だよ」

「あ？」

「真雪だって無理してるじゃない。本当は辛いのに人の心配ばっかしてね」

驚き、見つめる。

そして視線をそらした。

「……ラプターのくせに生意気だ」

「うっさい。人の心配するなんて百年早いんだよ、レイヴン」

吐き捨てるような、ため息混じり言葉と笑う声。

どこからか漂う調理をしているらしい香りに、今の時刻が夕飯時であつたことを思い出す。

すべての景色が夜に溶けて紛れる中で

家々の灯りだけがまるで魂のように浮かび上がって見えた。

瞳を細め、その灯りを眺める。

「いつまで経つても慣れねえなと思ってな」

空を仰ぎ。

スラックスのポケットに手を突っ込んだまま歩く。

歩みを進めるにつれて死臭が一段と濃く、強くなっていく。

知らず知らずのうちに顔をしかめた。

「死神のクセにこんなに人の死が辛いとかどうなんだろうな、俺。

分かつてんだけどさ。もつとドライになんかきゃいけねえっつーのも、

こんな風にいちいちへこんでたらキリがねえっつーのも」

「真雪」

「マジで俺ってダメだな」

自嘲気味に口の端を上げた。

美冬は唇を噛み、首を横に振る。

「そんな事ないよ。だって仕方ないもん」

腕をつかむ華奢な手。

「割り切ることが出来たら今回だって辛くならずに済んだかもしれねえのに」

「そんな事、ない」

ゆっくりと言い聞かせるように美冬が言った。

覗き込んでくる翡翠色の瞳は何かを訴えるように。

「真雪は優しいからだよ。だから、そんな風に思っちゃうんだ」

「優しくなんかねえって」

「あたしの勝手な意見だけど、それでいいと思うの。」

真雪は辛いかもしれない。でも、考えはすぐになんて変えられないから。

それに今回は知ってる人なんだから辛いのは当たり前だよ」

その言葉に小さく笑った。

「美冬」

「ん？」

「ありがとな」

美冬が困ったような微笑を浮かべたままで曖昧に頷いた。

視界の端に、電柱にもたれかかるようにしてモノクロの看板が立っている。

『川島家 通夜 19時30分』

いつもなら他人事に思えるこの表示も、今日ばかりは心に暗く影を落とす。

その看板の示す矢印の方向に目を向けると、

静まり返った家々の中で一つだけ、異質な場所があった。

「少し急ぐか。もう始まってるし」

「そうだね」

非現実的な景色だった。

塀を隠すようにして並べられた色彩のない花輪。

眩しいほどの照明で照らし出された家。

そこがチャリオット 川島良一の自宅なのだろう。

美冬が急に立ち止まる。

数メートル歩けば、通夜の会場だという地点で。

「美冬？」

不審を浮かべた声の名前を呼ぶが、美冬は何かに警戒したような目をしていて。

唇を噛んで家を見据える。

真雪も彼女の隣に並び、気が付いた。

イレギュラーの臭気。

「真雪」

「ああ、言いたい事は分かる」

「嫌な匂いが二つあるわ」

死臭と敵の気配。

それらは溶け合い、嗅覚を麻痺させるほどの強い臭いを放っていた。無意識のうちに顔が歪む。

「これは酷いな。こんなにくせえの、滅多にねえぞ」

「うん。あたし、臭いがすごくて気持ち悪くなってきた」

「大丈夫か？」

美冬が口を手で押さえたままで、数回頷く。

つばを飲み込むのが見えた。

「イレギュラーが出たらどうする？」

「やるしかねえが他にもチエイサーはいるだろうからな。」

とりあえずは様子見って所か」

真雪は周囲に視線を巡らせた後、美冬の背に触れる。

「そんな事、考えたくねえけど……まあ、とりあえず入ろう」

「そうだね」

足元から立ち上るような悪寒が全身を駆け巡る。

正体不明の胸騒ぎ。

入るのを拒む意識に抗い、二人は敷地に足を踏み入れた。

「ほとんど此岸の人間っぽいな」

庭の隅。

目の前に広がるのは通夜の光景。

焼香を済ませ、人の輪から外れるようにたたずみ美冬に耳打ちした。美冬が頷くのが見える。



幕が張り巡らされた庭には十数人の人影があった。

庭に面した居間は開放たれ、そこで通夜が執り行われている。

庭と広間を区切るように設置させた焼香の場。

今もなお、焼香をする人の姿は絶えない。

沈痛な静寂を裂くようにして聞こえる低い読経の声が周囲に響き。

重くのしかかるような空気がここには漂っていた。

「真雪」

離れた位置に見える、うなだれて座る親族達を見つめたまま美冬が囁く。

「さつきから、ずっと見られてるんだけど」

真雪が視線だけを動かして背後に視線を投げる。

二人の背後には幕があるだけで人はいない。

真雪にも分かっていた。

この会場に入ってからずっと視線を感じている。

何者かの気配と、射るような強い視線。

それはおそらく背後から。

死臭とイレギュラーの臭いに身を潜めるように、息を殺してこちらを伺っている。

「背後だ」

小さな動作で頷き、唇を動かした。

ため息のような声は読経にかき消されそうになる。

「気配は1、2。二つ」

「ああ」

「死臭に誘われただけならいいんだけどね」

美冬が睨むように前を見据えた。

まるで周囲は時が止まったように動かず、言葉もない。

世界が死んでしまった気さえする。

「普通の奴らもいる。ここでやるのは避けてえな」

わずかに前かがみになり、美冬の耳元で呟く。

「相手もお利口さんなら助かるんだが」

この言葉は背後に向けての言葉。

真雪が美冬の背中に腕を回すと自分の方へ軽く押した。

驚いたように見上げる視線に、真顔で頷く。

「俺の前に立ってる」

美冬が数歩移動して真雪の前に立つ。

彼女を正体不明の目から避ける為だが、おそらく気休めにもならな  
いだろう。

「…………でも、変だ」

「何が？」

「はつきりとイレギュラーかどうかすら分からねえ。

普通だったら、それくらい分かりそうなもんだろ？」

美冬が振り向き、首を縦に振った。

穏やかにゆれる髪とは裏腹に、その表情は険しく。

「イレギュラーだといわれればそうだし、違うと言われ…………」

刹那。

耳を突き刺すような音。

体の中を掻き回すかのような耳鳴り。

ただ目を見開き、

顔を歪めた。

すべての音が消える。

歯を強くかみ締め、眉間に深く刻まれるしわ。

「ぐー！」

声が漏れる。

痛みを伴う耳鳴りは収まることなく、真雪は片耳を抑えた。

「な、にこれ…………！」

自分の近くで美冬の絞り出すような声がする。

そこで気が付いた。

この音は自分以外にも聞こえている事実だ。

周囲を見渡すと、やはり他の人間にも聞こえているらしい。耳をおさえる者、辺りを見渡す者と反応はさまざまだ。

耳鳴りはやむどころか、次第に強さを増していく。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫、じゃない」

美冬は身体を曲げ、頭を抱えるように。

真雪が美冬の肩に手をかけたまま、辺りに視線をめぐらせた。

こんな時に敵に襲われては被害が大きくなる。

背後には2つの気配、イレギュラーの臭い、監視されているかのよ  
うな視線。

そして耳鳴り。

これらは何か関係でもあるのだろうか。

直感がおかしく叫んでいるが、鋭い音に思考が麻痺しかける。

注意深く観察していた真雪の視線が止まった。

庭にいる人間は一樣に音に気をとられているが

自分達の目の前の部屋にいる親族の様子がおかしい。

こちらに背を向け、身乗り出すようにして何かを見ている。

音など聞こえていないのか。

それとも音よりも気になるものでもあるのだろうか。

「……何だ？」

自然と言葉が漏れる。

思わず身乗り出すようにして、目を細めて見つめた。

気が付くと、波が引いていくように耳鳴りが消えていくのを感じる。

美冬が抱えるようにおさえていた手を解き、身体を起こし。

それに合わせるかのように周囲も平静が戻ってくる。

しかし。

読経は再開されることなく、室内の人間達はひたすら注視していた。棺を。

「どうかしたの？」

美冬が視線を逸らそうとしない真雪に怪訝の声を向ける。

「様子がおかしい」

「え？」

張り詰めた声に美冬が眉をひそめた。

真雪の視線をなぞるように、彼女も目の前の光景を見つめる。

「何なんだ、あれは？」

「なにかあつたのかな」

白菊に囲まれた祭壇を囲む人々。

式は中断され、経を読み上げるべき僧侶ですら立ち上がり棺を凝視していた。

静止する室内に反して、庭にはざわめきが広がる。

明らかにおかしい。

葬儀社の社員らしい人間が室内へと疑問の声を投げているが、答える声はない。

気がつけば、手に汗をかいていた。

得体の知れない不安に似た予感めいたものが打ち寄せる。

真雪は目を離す事が出来ないまま、ただ立ち尽くした。背後に感じる視線も気配もすべて忘れ。

音が鳴る。

何かを落としたような小さな音。

聞き逃しそうなほどのそれが、なぜか離れた位置に居るはずの真雪

にも聞こえた。

錯覚かと心の中で呟く間もなく、再び乾いた音が聞こえた。

短く一回、間隔をあけて再度。

「何だ？」

どこからか漏れた言葉。

視界から動くものが消えた。

木々の揺れる音もすでにただ沈黙を引き立てるものでしかない。音は木を叩くような音に変わる。

次第に間隔が狭まり、音も大きくなっていく。

まるで鼓動と連動しているかのようだ。

木を叩く音。

ノックするような。

内側から聞こえる。

棺から。

「棺、から……聞こえる」

その声は棺の近くに立っていた男が呟いたものだった。

各所で短く声上がる。

戦慄する周囲。

その中でも音は消えることなく、ひたすら打ち鳴らされていた。

誰もが目を見開き、見守る。

動く事など出来ない。

「何だ、これは」

突然、棺全体が揺れ始めた。

そこだけ地震が起きたかのような。

棺が暴れる。

激しい音が恐怖感を煽った。

囲んでいた人の輪が乱れ。  
座り込む者、後ずさる者、更に覗き込む者が見える。  
各所で恐怖に憑かれたような声が上がった。

刹那。

棺が鳴動した。

破裂するような音と共に見えた、白い衣。  
起き上がる影。

金切り声に彩られた周囲。

人垣が一気に崩れた。

呆気にとられた人々の真ん中に、棺の扉が落ちる。  
すべてがスローモーションに写った。

空白になる脳裏。

瞬きを忘れた瞳。

ただ目の前にあるのは。

棺に手をかけ、立ち上がる白装束。

肩で息をする長身の男の顔色は紫に近い。

「な」

やっと搾り出した声は言葉にならなかった。

真雪は口を半分開いたまま、微動だにせず。

「一体、何が」

男が動くたびに周囲の人間が退く。

大きく響く畳を歩く音。

うつむき加減の顔からは表情は見えないが、口の端が笑うようにゆがんでいるのが見えた。

男以外、死んだように動きを止める。

目の前を歩いてくる男は間違いなくチャリオットだ。  
彼は死んだはず。

何よりも強く放たれる死臭がそれが証明している。

けれど、目の前の光景は。

何故動いている？

何故笑っている？

何故……

「避ける!!!」

その甲高い怒号は真雪のすぐ前から発せられた。

誰もが我に返った、その声で。

状況が飲み込めず次の瞬間見たものは。

舞い散り、噴出す鮮血。

腕を押さえて倒れる黒装束の男。

笑い、大型ナイフを持った腕を掲げる白装束の男。

赤く染まる畳。

モノクロの中に生まれる赤。

「彼岸より帰ってきたぞ」

歯を食いしばり、目を見開いてチャリオットは笑った。

ナイフの血が腕をつたい白装束を染める。

耳をつんざく狂ったような叫び声と乱れる足音の中、

真雪と美冬はただ目の前を見つめた。

ぶつかる視線に、震えさえ覚える。

「死神よ、ダンスの時間だ」

目の前にいるのは死んだはずの人間。  
二人には状況を理解する間も与えられなかった。



3 - 4 beginning of the end

「だ、誰か！誰か救急車！」

怒号、悲鳴が飛び交い、辺りは騒然とした。

足音が幾重にも重なって響く。

血しぶきがはねる壁、静かに広がる血の海。

周囲の空気に混乱と緊張が混じる。

チャリオットは自分の背後の騒ぎに視線を向けた。

彼を捕らえようとすることは誰一人なく、ただ彼を遠巻きに見つめる人々の目がある。

そうさせるのは目の前の怪異へ警戒感が

それとも、むせるほどの死臭がためらいを生んでいるのか。

「久し振りだな、レイヴン」

愉悦と狂気の同居する声。

内側から響く鼓動で周りの音が消え、

全身が脈打つ度に大きく震える。

真雪は言葉もなく、金縛りにでもあったかのように正面を見据えた。

チャリオットは二人を、二人はチャリオットを見つめる。

それ以外は一切存在していない。

「久々の再会だ。もつと喜べ」

顎を上げて笑う。

真雪の視界の端に映る美冬の手。

チャリオットから隠すように背中に回された手が、小さな動作で手袋をはめていた。

真紅の手袋。

それはいつも彼女が戦闘時に使っているものだった。

何かの予感がそうさせるのか。

ここからは表情は見えない。

けれど背中には張り詰めた空気が漂っていた。

「なあ？」

チャリオットの足が少しずつ動く。

二人に悟られないように、音もなく摺るように。

その時。

チャリオットが大きく足を踏み出す。

焼香の置いてあるテーブルをけり、その身を宙に躍らせた。

振りかざされたナイフ。

全てがスローモーションになる。

長い一瞬。

聞こえるのは地面に何かがなぎ倒された音、叫び声、空中を切り裂く何か。

「くうう！」

美冬の口から苦しげに声が漏れる。

腰が落ち、踏みとどまろうとする姿勢で。

顔がゆがみ、歯を食いしばる。

静止した真雪が見たもの。

それは。

振り下ろされたチャリオットの攻撃を刀で受け止める美冬の姿だった。

「きつさま……!!」

「ほう？女、多少は出来るのか」

額をつき合わせるように交わされる言葉。

歌うような声とは裏腹に、美冬は歯の隙間から言葉を搾り出した。

軍用の大型ナイフを振り下ろさんとするチャリオットと、

それを受け止め食い止める美冬との今にも崩れそうな均衡。

ぶつかり、こすれ合う刃が鋭く音を立てる。

美冬の腕が震えていた。

「『朱』は」

「撃つな！」

真雪が眉間に深くしわを刻んだままで呟いた詠唱は、美冬の叫び声に打ち消された。

真雪は右手のひらを上に向けた状態で美冬を見る。

「絶対、絶対ここでスキルは撃つちゃダメ！」

つばぜり合いのまま、視線を向けることなく放たれる言葉。

真雪は思わず舌打ちした。

分かっている。

ここでスキルを撃つことがどんなにリスクが高いか。

一般人もいる、狭い空間、つばぜり合いの状態にある二人。

撃ってしまったら被害が出ることは間違いない。

けれど、どうすればいいのか。

この状態で自分は何も出来ないというのか。

「どうする？レイヴン、お前は見ているだけか？」

チャリオットが唇を噛む真雪をせせら笑うようにゆっくりと尋ねた。

視線が向けられる。

「この女が斬られるのをお前は眺めているだけか？」

白くなるまで強く握られた拳が震えた。

「ダメ！撃たないで！」

「見殺しにするのか？この女も、周囲の人間も」

温度の感じない風が通り過ぎる。

背中につたう汗。

真雪はただ正面を睨んだ。

微動だに出来ない。

動けば、どうなるか分からない。

チャリオットがどう動くか。

美冬がどうなるか。

けれど、おそらく長くは持たない。

「撃たないで！撃っちゃダメ！」

考える真雪の思考をさえぎるように美冬が目の前で叫ぶ。

「くっそ……！」

思わず声が漏れる。

その声を、チャリオットがあざ笑う。

「遠距離から撃てば周囲を巻き込む、近距離から撃てばこの女も巻

き添え。

ただ見ているだけでは、この周囲の人間は皆殺しだ！楽しいなああ

！！」

「

声周囲に響き渡る。

震えるこの身体は怒りか、それとも恐怖か。

「どうする？どうするんだ、レイヴン」

「撃つな！撃つな、真雪！撃つたらこいつの思うツボだ！！」

声を、声が打ち消そうとするように叫んだ。

せめぎあう心。

真雪は歯を食いしばったまま、チャリオットを睨む。

そして。

「美冬、離れる！」

均衡は破られた。

その声と共に美冬が身体をひねるようにして、力任せに腕を持ち上げる。

大きく響く刃同士のぶつかる音。

目の前の巨体がわずかにバランスを崩しかけたところを真雪が足で払う。

そこから流れるように顔を鷲掴みにし、  
地面にチャリオットの身体を叩きつけた。

「ぐー！」

「さすがに寝起きはつれえか？チャリオット」

真雪が倒れるチャリオットの顔を掴んだまま地面に押し付けた。

大きく踏み出し、前かがみになり顔を近づけるような姿勢。

鼻につく死臭に吐き気をもよおす。

あまりに強い臭気にめまいを覚えた。

視界の端でチャリオットの手からこぼれたナイフが地面に転がって  
いるのが見えた。

手を伸ばして届く距離ではないが

何かの拍子にチャリオットの手に渡れば、どうなるか分かったもの  
ではない。

離れた位置から真雪やチャリオットを囲むようにつかがう黒装束達  
の足が見える。

チャリオットを自由にさせてはいけない、絶対に。

真雪は目の前の男を睨みながら唇を噛んだ。

「誰だ？あんだ」

真雪が低く呟いた。

眉間に深く刻まれたしわ。

手に込められる力。

「分かっていることを聞くな」

「お前なんざ知らねえ。お前、誰だよ」

「俺は俺だ。チャリオットだよ」

「嘘だ。チャリオットは死んだ」

押し殺した声を投げる。

真雪の力のこもる右手が慎重な動きで下に移動し、チャリオットの  
首を掴んだ。

締め付けられ、小さくうめくような声を上げたまま笑う。口の端を大きく吊り上げ、真雪を見つめるギラついた瞳。正気ではない光を放つそれに、戦慄が走る。

「だが生き返った」

なにかを味わうように呟いた。

反応を楽しんでいるのか。

「こうして生きてるじゃないか」

「何でだ」

「何故と聞く？何故と聞くか、死神！」

のた打つように身体を反らせて笑う。

真雪は思わず首を掴む手に力を込めた。

言葉に含まれた笑いが、膨らむように次第に大きくなっていく。

堪えきれないとしても言いたげな笑い声。

「じゃあ聞くぞ！それならお前は何故生きている！？

それと同じだ！愚問だ！その問いはまったく意味がない！」

「認めねえ。認めねえぞ！死んで生き返るなんざ認めねえ！」

張り上げられた声につられて思わず大声になった。

痛いほどの緊迫感。

なぜか息苦しく、呼吸が荒くなる。

「ほう、認めないか」

チャリオットは軽く息をつくと、真顔に戻した。

瞳に宿るのは殺意。

「認めなければどうすると言っただ？」

真雪が眉間に更に深くしわを刻んだ。

「殺すか？」

足を動かし、砂利を踏みしめる音ですら響く静けさの中で。ただ睨んだ。

「お前に殺せるか？レイヴン」

視界の端に映るナイフ。

「息をし、動き、人の形を成す者をお前は殺せるか？」

温度の分らない汗が滲む。

鼓動が早まる。

あえぐように吐き出される言葉が止んだ。

お互いの視線がぶつかり、探り合うように。

目で会話をするように。

自分を食らおうとする死臭に、真雪は視界がぼやけかけるのを感じた。

歯を食いしばる。

「殺せまい！」

チャリオットは怒鳴った。

憑かれた笑みを浮かべ、肩をしゃくらせる。

「人外は殺せても人は殺せまい！」

耳鳴りを引き起こす程の怒号が周囲に響く。

真雪は震えるようにこみ上げる怒りを必死に抑えていた。

わななく指先に無意識に力がこもる。

「殺してみる！やれるものならやってみろ、死神！」

額が触れそうになる距離で。

生気のない顔が言葉を放つ。

突如、真雪の身体が反応した。

前触れもなく、無意識に、はじかれるように。

半ば反射的に握り締めた左腕で顔を隠すように防御の姿勢をとった。

次の瞬間、その腕に走る衝撃。

チャリオットの拳が力任せに殴る。

「ぐー！」

痺れる間隔に一瞬動きが止まり。

チャリオットはその瞬間を逃さなかった。

自分の首を締める右手を払い、手に力を込めて反動で起き上がる。

真雪はバランスを崩しかけながら、顔をゆがませた。

「や、ばい！」

無意識に漏れる歯軋りの間からすり抜けた言葉。

視界の端でチャリオットが動くのが見える。

「美冬！」

とっさに名を呼んだ。

美冬はその声に呼応するように刀を構えようとするが、動きを止める。

「くっ！」

ここで武器を使えば周囲を巻き込む。

悔しげに息を殺してチャリオットを睨む。

分かっているのだ、彼は。

自分以外は武器が使えない事も、自分を殺せないのも承知の上で。

「ここで息絶えるわけにはいかない」

チャリオットは時の止まった世界の中で低く、言った。

そして二人を一瞥した後、身を翻し走る。

向かうは門の方向。

視界から白い影が消えた。

「追っぞ！」

真雪は叫ぶように告げると走り出した。

自分のすぐ後ろに美冬らしい気配を感じる。

耳元で風が切る音と、遠くから近づいてくるサイレン。

微かに届く死臭を頼りに走る。

どこか浮き足立つ住宅街を縫うように。

どこを走っているかなど、二人には見当も付かなかった。

ただ見えない影を追い駆ける。



息切れの中、視線だけがせわしくなく動き続けた。

「やばい。見失った」

美冬が肩で息をしながら立ちすくみ、住宅街の真ん中で呟いた。どのくらいの距離を走っていたのだろう。

汗の浮かんだ額に髪が張り付く。

死んだように眠る周囲に響く切れた息。

「臭いが消えたな」

何度も頷きながら真雪は唾を飲み込んだ。

「ごめん、真雪。あたしがあそこでアイツを攻撃してれば……」

美冬が真紅の手袋の中に刀を飲み込ませながら、視線を地面に落とす。

思い出すのは、彼が葬儀会場から姿を消す十数秒前。

武器を構えながら攻撃できずに固まった自分の姿。

「いや、あの判断は正しい。あそこで攻撃してたらどっちにしてもけが人が出てた」

大きく吐かれるため息。

「下手すりゃ死人が」

真雪は周囲を睨むように見渡す。

そこにあるのは、いつもと変わらない夜。

今まで立ち込めていた臭いも、騒然とした空気もない。

「一体、何が起こったの……?」

「俺も分からねえ。死人が生き返ったなんて」

「しかも人を攻撃して逃げた」

「ああ」

空を仰ぐ。

不意に頬に雫が一つ、落ちた。

「あれは本当にチャリオットさんのの？」

「……多分」

「多分って？」

「俺もよく分からない」

不審そうに尋ねる美冬に、真雪は疲れたように短く答えた。

無意識に右手が、殴られた左腕の患部に触れる。

雨が降り出したらしい。

落ちてくる雨粒が数を増し、辺りに静かに雨の気配が広がっていく。

「腕、大丈夫？」

「大丈夫ではないな」

今になって思い出したように、うづく。

痺れるような感覚と脈を打つ重みを感じる痛み。

「けど、今はそれ所じゃない」

包み込むような雨音の中、美冬に視線を向けた。

心配そうに見つめる視線に笑いかかけようとするが顔がこわばったまま。

平静を取り戻した呼吸。

いまだ動揺する心と、混乱する思考が自分の中を駆け巡る。

真雪はジャケットのポケットから携帯電話を取り出す。

短い動作の後、耳にあてると聞こえる無機質な呼び出し音。

『はい、比良坂事務所』

3コール目で聞こえるダンデライオンの声。

真雪は立ち並ぶ家々に視線を向け、ため息をついた。

事務所を出たのがひどく以前であるような錯覚。

「親父、俺だ。レイヴンだ」

『ああ、お疲れ様。終わったのかい？』

真雪の前に立つ美冬が疲れた瞳を向けていた。

「終わったつつつか、始まったつつつか」

『どつという、意味かな？それは』

今まで穏やかだった口調が張り詰めていくのが分かる。

「所長。後で詳しく話すが、簡単に言うぞ  
言葉を選ぶ短い沈黙。」

渴いた口の中で唾を飲み込んだ。

「死人が生き返った」

「……なんだって？」

「チャリオットが生き返って、逃げた」

髪をかきあげてうつむいた。

それ以上、説明のしようがなかった。

説明できるほど自分達だって状況が分かっているわけではない。  
むしろ説明してほしい。

真雪はぼやける頭の中で思った。

「死んだはずなのに生き返ったんだ。なんか、別人みたいに  
雨が髪や肌を濡らしていく。」

「……これは、夢か？」

呟くかすれた声。

降り注ぐ雨。

長い夜。

うつろな瞳は、ただ空を見上げた。

#### 4 - 1 疑い

『16日未明、東京都中津区で会社経営・須藤 邦明さん52歳が死んでいるのが発見された事件で』

テレビから流れる無感情なニュースが室内に響く。

「わ、すっこ……どうしてこんなに硬いの？」

美冬がノクティルカに触れ、わずかに驚きの声を上げ。

細い指がゆつくりと肌を押しした。

「さあ？」

「こんなになつててよく平気だね、ノクティルカさん」

「平気ではありませんよ。結構辛いんです」

目を閉じたままで答える。

息を漏らすように。

「気持ちいい？」

美冬が触れる。

ノクティルカの顔を覗き込もうとするように顔を傾け。

耳元で甘さを含む声が聞こえる。

肩からこぼれた長い髪はノクティルカの頬にあたり、

その感触にかすかに口元に笑みを浮かべた。

「ええ。随分ラプターは上手くなりましたね」

「ホント？」

「はい」

「それはノクティルカさんが教えてくれたからじゃない？」

こっぴどい風になると気持ちいいって」

首筋に指が触れ、声が笑う。

「……あのねえ、君達」

死神統括機構 東京支部、比良坂事務所。

ソファに座ったダンデライオンが新聞から視線をはがすと、正面を呆れたように眺めた。

「会話だけ聞いていると、非常にいかがわしく感じるんだけど」  
その言葉は、向かい合って座るノクティルカと彼の後ろに立つ美冬に向けられていた。

「えー。肩揉んでるだけだよ」

「いや、そうかもしれないけどね。他人が聞いたら誤解しそうな会話だなと思って」

「そうかなあ？」

美冬がノクティルカの肩を親指で押しながら首をひねる。

力を込めるたびに、スカートや髪が小さく揺れた。

「所長の考えすぎですよ、それは」

「うん、あたしもそう思う」

「いかがわしい事ばかりを考えてるから、そう聞こえるんです」

「やれやれ、僕の脳みそが原因か。それは困ったな」  
苦笑を漏らして外に視線を投げた。

窓の向こうは傾きかけた日差し。

じきに訪れるであろう夕焼けの気配を感じる。

「ノクティルカさん、ホントに肩がちがち。仕事しすぎだよ」

「そうですね？あまり自覚はないのですけどね」

「ヤバイよ。絶対、過労で死ぬね」

「死ぬのは決定なんですか」

目の前のやり取りにダンデライオンが目を細めた。

タバコをくわえたまま、二人を見て穏やかに微笑む。

「ところで、ラプターがノクティルカの肩を揉んでるなんて珍しいね。何かあったの？」

ダンデライオンから投げられた問いに、表情を輝かせるように。

「あのね、あたしのデータ入力の仕事やってくれたから代わりに肩揉んでるの」

「なるほど。ギブ・アンド・テイクというやつだね。」

けれど、そんなに肩が凝っているんだったら

女の子の力ではビクともしないんじゃないのかい？」

「大丈夫ですよ」

ソファにもたれ、ノクティルカは俯き加減で笑いを漏らした。

「女性とは思えないほど力強いですし」

「なんだとおお!？」

「……痛いです、ラプター」

「ノクティルカさんが失礼なこと言うからじゃん!」

「そうか。確かにラプターは馬鹿力だから問題ないね」

「んもお! 所長までそういう事言うー!」

「ですから痛いです」

声を上げるたびに肩を揉む手に力が入る。

それに合わせて聞こえる、押し殺したような声。

「ラプター、もう結構ですよ。ありがとうございます」

振り向くように投げられた声に美冬が唇をとがらせた。

「もういいの?」

「あまり長時間やりますと疲れてしまいますよ」

「大丈夫なのに」

「また今度お願いします」

背後で頷く気配がある。

響く靴音が回り込み、ノクティルカの隣に美冬が跳ねるように座った。

『邦明さんの妻であるAさんは3度の結婚歴があり、いずれも元夫は死亡。』

死因は

淡々とニュースを読み上げる声に視線を向ける。

前かがみになり、ひざの上で頬杖をつけてテレビを見つめた。

「まーたやってんだ、この保険金殺人の話」

独り言のように呟く、あどけなさの残る声。

そこにはどこか呆れた響きさえ。

「まだ、そうと決まったわけではないようですよ」

「え？でもこの奥さんが殺したんじゃないの？旦那さん全員。

ニユースとかで言ってたじゃん、『死神』って」

「マスメディアはそう決め付けているようですよですけど、

実際のところは本人たちしか分からないでしょうね」

口元だけで薄く微笑み、足を組むノクティル力。

つられるようにテレビを見つめる。

「ともあれ、やったかどうかすら分からない人間を死神と呼び

犯人に決め付けるのは随分と乱暴だとは思いますが。

私には興味本位で煽っているようにしか見えません」

「まあね」

唸るような相槌に、新聞のページをめくる音が重なった。

テーブル越しに青い瞳が見つめてくる。

「旦那さんではなくて彼のお金に恋をしたのかもしれないし、

または『そういう人』なのかもしれない、という事だね」

ダンデライオンの言葉に視線を向けた。

美冬の顔に不思議そうな色が浮かぶ。

「愛する人が次々と死んでしまう人だっているかもしれないだろう？

例え、限りなく黒に近かったとしても黒だと決め付けてはいけな  
ね。

思い込みは人を狂わせてしまうから」

「ええ、何も見えなくなってしまうすしね」

「そっかあ」

そう呟き、テレビに顔を向けた。

流れているのは代わり映えのしないものばかりだった。

憶測が飛び交い、神妙な面持ちで事件を解説する。

真実に近づいているようで、遠ざかっている気さえした。

「ん？どうかした？」  
隣からの視線に気がついた美冬が、体を起こすと首を傾げた。  
一見すると何の変哲もないオフィスのようにも見える事務所には  
午後特有の穏やかな空気が流れている。

見つめ合う沈黙の後。

ノクティルカが美冬に手を伸ばし、髪に触れた。

思わず息を止めるように見つめる。

ノクティルカの表情からは感情は読み取れずに美冬はただ戸惑った。  
動揺している自分に気がつく。

目をみはるようにながら、せわしなく視線だけを動かして。

「ラプター」

わずかに耳に指先が触れる。

「ピアス、新しいものですか？」

「へ？」

「いえ。いつもしている物ではなかったので新しく買われたのかな、  
と思ひまして」

ノクティルカは手を引つ込めると、目を細めるようにして微笑んだ。

「あ、そうなの！ずっと悩んでただけど、昨日買っちゃったんだ  
よねえ」

「いつもさされているものも可愛いですけれど、こちらも素敵ですね。  
よくお似合いだと思います」

「ドウフフ、ありがとー！嬉しいっ！」

思いがけない言葉に一瞬驚いた表情を浮かべたが、次第に笑みが顔  
中に広がっていく。

心なしか頬を赤くして口元に手を当てた。

「ね、所長。ノクティルカさんに褒めてもらっちゃった！」

「それは良かったね。僕のかわいい天使は何でも似合うからな」



笑顔向けられて口の端を上げたままダンテライオンがタバコに火をつける。

閑散とした事務所内、遠くで足音が聞こえた。

「でも、よく気付いたね？新しいピアスだって」

「分かるものですよ」

平然と答える声に感心した視線が注がれる。

「いつも見てるからね、ノクティルカは」

「……所長」

「へ？何が？」

「何でもありません。こちらの話です」

咎めるような視線と言葉に紫煙を天井に吐き出しながら笑うダンテライオン。

美冬は取り残され、二人を見比べた。

「え、なーに？どういう意味？」

「ラプターは気にしなくて結構ですよ」

「ええ？気になるよ」

不満そうな声を上げた時だった。

「お嬢、態度がハツキリしない坊主からノクに乗り換えちまったらどうだい？」

足音が近づき、落ち着いたアルトの女性の声が降りてくる。

美冬が見上げると、漆黒の髪を無造作にまとめ

黒い着物を身にまとう女が楽しげに目を細めていた。

「サーペント」

「え？乗り換えるって何？」

「さアて。これ以上言うと、ノクに叱られちまうからね」

「えええ？！なんの話？やだ、分かってないのあたしだけえ？！」

「分からなくて結構ですから」

顔を背け、ため息をつくノクティルカがサーペントを軽く睨む。

何かを視線で語るように。

「真雪から乗り換える？ノクティルカさんってチエイサーだったけ？」

「いえ、違いますか」

「呆れた。まったくどれだけ鈍いんだい、お嬢」

サーペントはダンデライオンの隣に座ると苦笑を漏らした。

キセルをくわえた赤い唇がわずかに上がる。

「まあ、その鈍さもラプターの魅力だよな」

「なんか微妙に悔しい上に褒められてる気が全然しないんだけど」

唇を尖らせ、不満そうに言う美冬を他の3人が笑う。

頭上の空調が柔らかな空気を吐き出していた。

「そつだ。昨日なにか相談があつたんじゃなかったのかい？」

窓の外を眺めていたダンデライオンが思い出したように美冬に顔を向けた。

「昨日は忙しくて話が聞けず済まなかつたね。今、ここで話せる内容かな？」

テーブルの上の灰皿に灰を落としながら尋ねる。

美冬は動きを止めた後、急に表情を曇らせた。

「……まあ、話せると言えば話せる事なんだけど」

「けど？」

言わずらそうな声。

窓の外から差し込む日差しがオレンジ色を帯び始めていた。すぐそこまで迫る夕暮れ。

窓辺に置かれた鉢植えの葉に強い日差しがとまる。

「何か、自分でも変なこと考えてるなああって思っ」

「まずは話してみたいかがですか？一人で抱えていても解決しませんから」

「ノクの言う通りさね。話してごらんよ、お嬢」

促され、戸惑いがちに頷く。

翡翠色の瞳がダンデライオンを見つめた。

数秒間の空白の時間。

部屋には音が消えた。

「あのね、所長」

唇がゆっくりと言葉をつむぐ。

集中する視線と、次第に色を変えていく空気。

「真雪って、実は女の子じゃないかって思っただけど」

言い終わるかどうかのタイミングで、美冬の隣から噴出す声が聞こえた。

ノクテイルカが俯いたままで、肩を震わせている。

目の前には唾然としたまま静止するサーペントとダンデライオン。

「どっから出てきたんだい、その突拍子もない考えは」

「……何故そんな事を？」

向けられた疑問に美冬は目を伏せた。

言葉を選ぶように、ためらうように。

落ち着きなく髪に触れる。

「始めはね、冗談みたいな思い付きだったの。」

真雪って神経質で細かいじゃない？ じっくりも悩んでる所あるし、几帳面だし。

何かの拍子に『アイツ、女なんじゃね？』って思ったら気になっちゃって」

「そういう目で見れば見る程、そうにしか見えなくなってしまったという事ですか？」

「そうなの」

ため息混じりに頷いた。

それぞれが何かを考えているかのような沈黙が漂う。

「なんてエか、すぐに否定できない所が悲しい所だね」

「確かにレイヴンは男らしいというタイプではないな。」

けれど、れっきとした男の子じゃないか。ラプターだって、裸くらい見たことあるだろう？」

「な、ないよ！そんなの！！」

平然と尋ねるダンデライオンに、美冬が慌てたように首を横に振って答える。

まるで立ち上がるうとするような勢いで。

「それに、うーちゃんが言ってたもん。『男は自分の部屋の中では全裸だ』って。

でも、アイツ全裸どころか上半身裸になった所も見た事ないしさ」

「……ウオークライ、間違った知識を教えてください」

「ああ。でも、坊主の声は男じゃアないか」

「でも、ああいう声の女の子だっているよ？うちのクラスの小池さんとか」

美冬が唇に指を当てて小さく唸る。

「お料理とかパンとかお菓子も作るでしょ？冬はマフラー編んでくれるしさ。

名前だって、女の子って言っちゃえば納得できる気がするし」

「下手するとラプターよりも女の子らしいよね」

「……所長、噛むよ」

タバコを指で挟んでダンデライオンが押し殺すように笑う。

何かを言おうと口を開きかけた時、何者かが階段を上ってくる気配を感じた。

そして。

「たでーま。いやー、鶏肉と醤油が安かったわ」

ドアを開ける気配と共に

食材を入れた袋を肩にかけた黒いスーツ姿が鼻歌混じりで姿を現した。

「なんだ。美冬が居るんだったら一緒に行って、もう一本くらい醤油買ってくりゃ良かったな」

「おかえりなさい、レイヴン」

「おう。今日さ、豆腐屋で油揚げ買ったらオカラもらったんだよ。何にすつかな？卵の花作るか、それともクッキーかパウンドケーキでも焼くか」

機嫌のよさそうな笑みを浮かべて真雪は、ソファの間に備えられたテーブルにバッグを置く。

そして、しばらく経ってから自分に視線が集中している事に気がつき片眉を上げた。

「……なんだよ、みんな俺見て。真面目な話してた？」

「そういうわけではないよ」

「そう？なんだ、空気ぶち壊したんかと思っちゃった」

一瞬動きを止めたが、自分を観察するような場の空気には気にも留めずに

口の端に笑みを浮かべる。

美冬は目の前の自分のパートナーを観察するように凝視した。

何も言われず、何の疑問も持たずに彼を見れば誰もが男だというだろう。

どちらかと言えば細身の体型で、中性的な顔立ちはしているが。けれど、もし女ではないかと疑問の目で見たらどうなる？

一気に違うものに見えてこないだろうか。

「美冬？どうかしたか？」

我に返った美冬の目の前に、うかがうように見つめる真雪の顔があった。

「腹でもいてえか？」

「そんな事ない」

「多い日？」

「ぶん殴るわよ」

「あ、分かった」

真雪は袋をまさぐると美冬に煎餅とレーズン入りのビスケットの袋

を手渡した。

おもわず怪訝な瞳で見上げる。

「腹減つてんだろ？ああ、でも夕飯前だから1枚だけだぞ」

「あのね」

「感謝はいらねえつて。このくらいお見通しだ、俺には」  
顔を仰ぐように手を振ってみせる。

真雪には、美冬の隣で笑いかみ殺しているノクティルカは見えていないらしい。

「レイヴン」

ダンデライオンがタバコを灰皿に押し付けながら声をかけた。  
手元の煙が名残惜しそうに消えていく。

「君の席に仕事の詳細を置いておいた。早速、今日の夜にでも宣告してほしい」

「ああ、死神の方ね。了解」

真雪は軽く数度頷くとソファの側から離れた。  
遠ざかる靴音。

「さて、ラプター。君にも仕事を与えよう」

真雪の背中を見ていた美冬がダンデライオンの声にはじかれたように姿勢を正す。

自然とサーペントとノクティルカの視線も二人に向けられた。

「仕事？」

「そうだよ、僕のかわいい天使。君にしか出来ない仕事だ」

額に落ちる髪を手で軽く払い、伏し目がちで微笑む。

「あたしにしか？」

「ああ。今回の仕事は、レイヴンが本当に男かどうか確かめる事」  
「いいい！？マジですか」

「僕はいつだつて本気だよ。いつまでも疑ってるより、  
ひん剥くなり握ってみるなりして多少強引にでも確かめる方がいい  
と思うんだ」

のけぞる美冬にダンデライオンが満面の笑顔で頷いた。  
自分のデスクの前で書類に目を通す真雪が見える。

「いや、あたしが握ったり揉んだりするのは問題あるんじゃないかなあ？」

「だって僕やノクテイルカがやったら、そっちの趣味があるみたいで危険だし」

何よりもサーペントが確かめようものなら本気でレイヴンが食われるからね」

「……どういう意味だい、そりゃア」

サーペントが低く呟き、ダンデライオンの腕を軽くつねる。

美冬が思案するように唇を噛んだまま、微動だにしない状態でやがて。

「分かった」

立ち上がると、スカートの裾がやわらかく揺れる。

「不肖・藤堂 美冬！確かめてくるでありますっ！」

「健闘を祈る、ラプター」

靴音が近づいてくる。

「今回のターゲットの中津区の須藤ってどっかで聞いたんだけど、何だっけ？」

真雪が書類片手に呟きながらソファへと歩いてきた。

髪をかきあげる仕草。

ふと、視線を感じて書類から顔を上げる。

「なんだよ、美冬」

「ちょっとツラかせ」

「ダメだ。買ってきたモン冷蔵庫に入れて、肉小分けにしなきゃいけないだっつーの」

「それは後。ね、隣の部屋いこ？」

「すぐ終わるから待ってるよ。しかも俺、まだ手洗ってねえし」  
言葉も終わらないうちに美冬が真雪の腕を掴むと強引に奥に見える

ドアへ向かう。

整然と並ぶデスクの間をよるけるように引つ張られていく真雪。

「おい！ちよ、待て！こら！」

ノクティルカ、そのバッグに入ってんの冷蔵庫に入れといてくれ  
！」

わずかに慌てたような声を残し、ドアは閉じた。

残された3人の視線はドアに張り付いたままだった。

「……毎回言うが、何でお前は話をするとき人に押し倒すんだ」  
ソファに仰向けに寝そべったまま、呆れたように呟く真雪の声が響く。

正確には寝そべっているわけではなく、ソファに押し付けられているのだが。

美冬はソファにひざを乗せ、真雪の肩を押さえつけたままで顔を覗き込んだ。

「ねえ、真雪」

二人の顔を隠すように、美冬の髪が垂れる。

辺りに響く、まるで足音のようにも聞こえる時計が時を刻む音。

硬質な色ばかりの何もない部屋に、外からの毒々しい色の光が入り込んでいた。

もうすぐ訪れる終末の時刻。

その色は、終わりを告げる鮮烈のオレンジ。

「あやし達、組んでからのくらい経つ？」

「1年じゃねえの？」

「うん、そつだよね」

ネクタイの結び目に手をかける白く華奢な指。

それを一瞥した後、真雪は自分を見つめる顔を眺めて苦笑を漏らす。

「どうい風吹き回しだ？美冬」



「なにが？」

「誤魔化すな。何考えてんだよ」

美冬は真雪の上に覆いかぶさるような姿勢のまま、眉を上げてみせる。

「あたしね、隠し事って良くないと思うの」

「ああ、そうだな」

ネクタイがほどかれ、そのまま地面に落ちる。

「どんな理由があるにしろ、あたしと真雪の間に秘密はいらない。でしょ？」

「ああ。つーか、この体勢でする会話じゃねえと思うんだけど」

「そう？まあ、いいや」

「よくねえよ」

美冬の指が真雪のシャツのボタンを外す。

見つめ合う時間。

息の詰まる視線。

「真雪、あたしに隠し事してるでしょ？」

美冬の唇が動く。

口元に苦笑を浮かべていた真雪が真顔になる。

わずかに眉を潜め。

「浮気はしてねえぞ」

目を細めるようにして再び笑った。

美冬は視線を泳がせた後、睨む真似。

「付き合ってもいないのに浮気もクソもあるか」

「ま、そりゃそーだ」

「そうじゃなくて。他に隠し事あるでしょ？大事なこと」

「あのなあ。普通、話すのに他人押し倒したりしねえんだぞ。

しかも忘れてるかもしれないねえけど、お前は一応女だろ」

「話をそらすな、ばかちん」

指同士をこするようにしてボタンを外していく。

真雪の胸元が少しづつあらわになる。

「つつか、俺はお前に隠し事してるっつー自覚はねえから。

お前が何を指して隠し事っていつてるか……」

「あれ？男だな」

言いかけた言葉は美冬の独白にかき消された。

真雪が怪訝そうに見つめる。

その先には、自分のシャツの中を覗き込む美冬の姿。

「待て。今、何て言った？」

怪訝と微量の怒気の混じる低い呟き。

美冬はシャツから顔を上げると、わざとらしい満面の笑みを浮かべていた。

「あたし、真雪君のコトだーいすきっ」

「ごまかすな」

「いやー、素敵な青空」

「目をそらすな」

「ドウフフ。美冬ちゃん、ちよつくらカワヤへ」

逃げようとしているのか、真雪から身体を離して後退しようとしている。

美冬の手首を真雪が掴んだ。

「待て」

睨む視線。

「……お前、もしかして隠し事ってそれか？」

「な、何のことよ」

「さつき言ってたじゃねえか、隠し事はどーのこーのって。

そりゃ、アレか？実は俺のこと女だとか疑ってたっつーオチか？」

「そ、そんな事ないもん」

真雪が身体を起こしてソファに座りなおすと、美冬をまっすぐに見

据えた。

「お前が視線をそらす時と逃げる時は嘘ついてる証拠だ」  
立ち上がる気配。

美冬が見上げると、真雪は彼女の両肩を軽く押すようにしてソファに座らせた。

何かが落とされるような音が大きく響く。

「え、な、何よ」

「俺が男だつて証明すりゃいいんだよな？」

「え……いや、その」

覗き込む赤紫色の瞳。

美冬はソファに座ったままで慌てふためいた。

「わ、ちよつと！待つて！ちが、やだ。ごめんなさい」

「遠慮すんなつて。知りたいだろ？」

「わああああ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

戸惑いの声が次第に大きくなる。

悲鳴にも似た謝罪の言葉が響く。

真雪は美冬のジャケットのボタンを外すと、肩を揺らすように笑った。

「お仕置きだ、美冬」

「ぎいいいいやあああああああああ！」

## 4 - 2 Hide and Seek

「美冬、何度も言うけどな」

真雪はスティック状の香に火をつけながら、ため息混じりに呟いた。香の先に蛍のような火がともる。

まっすぐ上へと立ち上る緩やかな煙と共に鼻腔をくすぐる森林の香り。

「死神の仕事は直接お前とは関係ねえんだから、別に付き合ってくれなくてもいいんだぞ？」

テーブルの上に置かれた香立てに、手に持っていたそれを差した。

深夜、真雪の部屋。

そこに居るのは黒いスーツ姿の真雪と、何か言いたげな瞳を向ける美冬。

周囲に音はなく、世界が死んでしまったようだ。

「でも、何かあったら大変じゃない」

「そうだけどさ。俺が寝てるの見てるだけってのも暇だろ？」

宣告って言ったって、ターゲットの夢の中に入るだけなんだから」

「もし何かあったら助けられるかもしれないでしょ」

美冬はラグに座った姿勢で、唇を尖らせるようにして真雪を見上げた。

抗議しているようにも聞こえる言葉のニュアンス。

死神の仕事の一つである死亡宣告。

それは予定日を過ぎても尚、生き続ける人物の夢の中に入り死を告げる作業を指す。

本人が覚えているか否かは別として

宣告する事で彼らに死を与えるスイッチの役割を果たしている。

「じゃあ、もし向こうに引きずり込まれそうになったら助けてくれ」

真雪が苦笑を浮かべながらソファに座った。

その言葉に過敏に反応した美冬に顔を覗き込まれ、わずかに慌てる。目の前にある顔は不安に満ちていた。

「そ、そんな事……あるの？」

「さあ？ ないとは言えねえんじゃねえの？」

「変な事言わないでよ」

睨む視線。

窓ガラスを叩く風の音が聞こえる。

「さて始めるか。じゃあな、美冬」

「『じゃあな』とか言わないで。縁起でもない」

「元気でな」

「もつと駄目！ 怖い事言うな！」

「……なんて言えばいいんだよ、じゃあ」

ソファに寝転び、呆れたように眉を寄せた。

視界にうつるのは白い天井と、心配そうに見つめる美冬の顔。

「とつとと済ませて早めに帰ってくる」

「うん、気をつけてね」

手が伸び、美冬の頭を撫でる。

ゆっくりと掻き回すような動きの後、軽く数度叩く。

真雪は静かに瞼を閉じた。

意識を集中させると周囲の気配や音が一切自分の中から消え失せる。

肢体が重く、自由が利かなくなる錯覚。

まるで水底へ深く沈んでいくようだ。

イメージするのは死亡宣告のターゲット。

ドアを開け、違う場所へ入る光景を脳裏に描きながら。

意識は途切れた。

気がついた時、初めて感じたのは肌を刺すような冷気。視線をめぐらせて見えたのは荒涼と広がる何も無い大地。

「……随分と寂しい場所だ」  
無意識に言葉が漏れる。

どうやら他人の夢の中に入り込む事が出来たらしい。真雪は地面を掘るように、つま先で軽く数度蹴った。見上げた先にある空には今にも降り出しそうに暗く、重く潰されてしまいそうな雲の波。

周囲を見渡しても何があるわけでもない。時折存在する、屍のように立ったまま枯れる樹木。地面は乾いてひび割れ、枯渴していた。

自分が発する足音が響く。  
歩く度に、辿り付けるのかと不安を覚える。  
鋭い刃のような風にスーツのジャケットが翻った。

真雪は数メートル歩いた所で足を止めた。  
いぶかしげに瞳を細めて周囲を見渡す。  
音を聞いた気がした。

耳元で唸りをあげる風の他に、何かか聞こえる。  
等間隔で何かを掘っているらしい音。

「あれ、だな」  
目の前に人影が見える。  
距離にして数十メートルという所か。

よく目を凝らせば、その人影の足元には何かがあるようにも見えた。  
真雪は軽くため息をつくと再び歩き始める。

「失礼ですが、須藤明美様でいらっしゃいますね？」  
真雪が背後から声をかけると、目の前の女の動きが止まった。

背中越しに見えるのは彼女が掘っているらしい穴と

周囲には黄色い布で覆われた大きな塊が4つ。

蛹のようにも見えるそれは、ちょうど人間ほどの大きさにも見える。

「……そうだけど。貴方は？」

振り向いたのは、派手な印象のある30代中盤から後半くらいの女。化粧を施した顔には明らかな警戒が滲んでいた。

華やかな顔立ちと離れた位置からでも匂う香水、ワンピース姿の彼女と

穴を掘る作業は違和感がある。

「私は本日、貴方様の死亡日の件で伺いました死神でございます」

呆気にとられたような静止の後、真雪を観察する明美の視線。

不自然なほど整えられた眉が歪む。

「なん、ですって？」

真雪はその問いに、無表情のまま顎を引いた。

感情を隠した瞳で目の前を見つめる。

二人の間をすり抜ける風。

「須藤明美様、貴方様は去る4月15日に死亡が予定されておりましたが

何らかの手違いにより、予定日を過ぎた現在も生存が確認されております。

つきましては3日後 4月18日、

14時02分に死亡処理をさせて頂きます事をお知らせいたします」  
無感情な声が一帯に響き渡る。

微動だにせず、唇が言葉を事務的につむぐ。

明美は目を見開いたままで真雪をただ見つめた。

唇が空気を求めるように動く。

力の抜けた手元からシャベルが離れ、派手な音を立てて倒れた。

沈黙。

「当日、確認の為……」

「私は！」

言いかけた言葉を荒げた声が飲み込む。

真雪にすぎるように明美が肩に爪を立てて掴んだ。

目を見開いたまま、肩で息をする。

「私は死ぬの？」

「左様でございます」

「どうして？どうして私は死ぬの？」

「死亡予定日を過ぎておりますので、その処理のためです」

「どうしても？」

「残念ながら特例は認められておりません」

問い詰める明美を、まるでかわすような口調。

それでも彼女は視線を逸らす事なく睨んでいた。

「私が、私が保険金殺人の容疑をかけられているから？」

あの人達を私が殺したってみんなが言うから死ぬの？」

まるで死人のように感情を表に出さず、微動だにしなければならなかった真雪が

反応する。

遠くを見つめるような視線が明美に向けられた。

突如吐き出された『保険金殺人』『殺した』という言葉。

名前を見たときに感じた既視感に似た何か。

もしかして いや。

おそらく彼女は連日ニュース等で報道されている連続保険金殺人疑惑の渦中の人物だ。

たしか、先日亡くなった男の姓は彼女と同じ須藤であったと記憶している。

「知らないの？」

わずかな反応を察した声が尋ねる。

明美は真雪の肩から手を離すと、複雑な笑みを微かに浮かべた。自嘲にも不敵にも映る。

「私ね、あなたと同じ死神なの。」



もつとも、私の場合は勝手に外野がそう呼んでいるだけだけれど」その言葉に、真雪は内心頷いた。

やはり保険金殺人の容疑がかけられている、件の女だ。

「3度結婚して今度で4度目。けれど私と結婚した男はみんな死んでしまうの。」

それまで元気だったはずなのに、ある日突然ね。死因は心不全」歌うような口調で、どこか他人事にも聞こえる。

その場をさまようように歩いていた。

俯き加減の顔から表情を読み取る事は出来ず、口元だけしか見えな

い。

微笑むように口角を上げる唇。

「私は彼らを愛していたのに、周りにはみんな殺したって言うのよ。お金目当てだって。失礼しちゃうわ……周りの人間なんて勝手よね」言葉もなく明美を視線で追った。

広がる荒野にたたずむ二つの人影。

それ以外に人の居る気配はない。

「死神さんはどう思う？」

「どう、とは？」

「貴方は私が殺したと思う？自分の夫を、お金のために」瞳を覗き込んでくる。

その眼差しは挑むようですらあった。

真雪は眉一つ動かす事なく目の前の女を見る。

けれど、その視線は明美が見えていないようにも。

メディアや世論は彼女の犯行と決め付けていると言ってもいい。

逮捕は時間の問題と言っている媒体さえある。

けれど、それを鵜呑みにしていいのか？

「お話を聞いた限りでは判断できかねます」

「そうよね。誰にも分からないわ、私以外の人間は」

答えに満足したように、軽く頷くと肩にかかる髪を払いのけた。  
昼も夜もない空。

風にあおられ、土ぼこりが舞う。

「もしかしたら私が死に魅入られた女なのかもしれないもの。  
悪い魔法使いに、愛した男が死ぬ呪いをかけられている可能性だっ  
てあるわけだし」

「ですが」

真雪は楽しげな女に声に言葉を重ねた。

地面に転がっている黄色の布に包まれた物体を一瞥し、明美を見る。

「貴方様はこの件に関しまして、何かをご存知なのではないかと私  
は考えます」

布の隙間から見えるのは硬く閉じられた蒼白の肌を持つ瞼。

皺や肌の質感などから言って、物体はおそらく成人男性だろう。

ここは夢の中だ。

現実的ではないものや死体が転がっていても不思議ではない。

けれど、ここに存在しているという事は明美と関係があるのは間違  
いないだろう。

他の物体も似たような大きさをしている事から、人間である可能性  
は高い。

彼女は穴を掘っていた。

これを埋めようとしていたのか？

そういえば、亡くなった彼女の夫は4人である事を真雪は思い出し  
た。

この物体も4つ。

まさか。

夢の中の出来事だ。

全ての理由を考える事は難しく、現実とは違うかもしれない。  
けれど、考えるのをやめる事は出来なかった。

「……確かに私は誰も知らない事実を知ってる。

でも、それを公言するつもりはないわ。私だけの秘密にするの」

「須藤様」

明美はわずかに間をおいて顔に不敵な笑みを広げた。

ぶつかる視線。

「ご自身さえ隠し通せば、その事実は公にならないとお思いですか？」

「……どういう意味？」

風が二人の髪を揺らした。

真雪は前で手を組んだままの姿勢を崩す事なく、直立不動を保つ。

「死者は語りません、真実を」

怪訝そうに見つめた。

言葉もなく、視線だけが何かを求めさまよう。

「死者は真実を語るためなら、どんな手段も用います。

貴方様が隠そうとするなら真実を語り、嘘をつくのならそれを暴こうとします」

二人は睨むようにお互いを見つめた。

探り合う視線と何かを考える沈黙。

静寂が重く流れる。

「じゃあ何？」

口を開いたのは明美だった。

「貴方がこうして私の前に現れたのも

死亡予定日がどうとかって3日後に死ぬと言うのも、あの人達がしたとでも言うの?!」

怒鳴るようにぶつけられる言葉。

その中でも、表情を一つ変えずに明美を見つめる。

「そんな事あるわけじゃないじゃない！何よ、いきなり死ぬとか言ってきたと思えば

今度は脅し？いい加減にしてちょうだい」

真雪はゆつくりと瞬くと、視線だけを動かした。

明美を無言で見据える。

「死ぬのは罰？私が逃げるから死んで裁かれるってわけ？」

「……それは違います」

さほど大きくないはずの聲が辺りを支配するように静かに響いた。

セピア色の世界に浮かぶ黒と赤。

それらは対峙し、見つめ合う。

「死は生まれた日に交わされた契約。罰や裁きではありません」

明美が何かを言いたげに口を開き、地面に視線を落とした。

「貴方様がもし、罪を犯したのであれば裁かれるべきだと私は考えます。」

人を裁くのは人です。死や神ではない」

「何が言いたいの？」

苛立ちが言葉の端に浮かぶ。

真雪はもう一度地面に転がる物体を見た。

明美に顔を向けて息の詰まるような沈黙を口にする。

語るの口ではなく、視線。

「本当に、殺したのですか？」

止まる世界。

明美の視線が落ち着きなく動き、手はさかんに髪を触る。

せわしなく瞬き、平静を懸命に保とうとしているようにも見えた。

真雪は、目の前の女を傍観する。

微動だにせず、冷酷にさえ見えるその瞳で。

「……」

ワンピースの裾が軽やかにひらめく。

その色と動きはまるで炎のようにも見えた。

「……何を……」

うわごとのように発する。

全身からみなぎる不安と恐れ。  
ややあつて、何かを決意したように真雪を見つめる。

「そうよ」

その言葉は開き直りだった。

「けれど、それが何？だから何だって言うの？

ここで私が貴方に罪を告白しても、誰にもどうすることはできないわ。そうよね？」

彼女の手は小刻みに震えていた。

それを隠すように拳を握り、強い口調で真雪に詰め寄る。

「凶器や証拠は見つかってないし、アリバイもある。

カンや推測で逮捕なんて出来ないわよね。それとも貴方が証言する？」

憑かれたように、言葉が次々と流れ落ちた。

声だけを聞けば自信に満ち溢れたようにも聞こえるが、これは偽りだ。

その証拠に彼女の目は怯えている。

「『私は死神で、須藤明美が罪を告白したのを聞きました』って。

誰か信じるかしらね」

真雪は無表情のままに視線だけで睨んだ、明美を。

まるで固まったように動かさず、口をつぐむ。

「隠し通すの、全てを。証拠さえ出なければ何の問題もない」

宣言のように響く声。

「今までだって隠せたのだから、今度だって大丈夫よ」

まるで自分に言い聞かせるように。

「私が死ぬわけなんてない。死亡予定日？死神？……そんなの知らないわ」

再び無言の時間が流れた。

包み込むように巻き上がる土ぼこりに目を細め、空を仰ぐ。

自分を潰そうとする曇天。

「私は逃げてみせる」

明美の言うとおりだ。

罪を告白されてもどうする事も出来ず、なす術はない。

だからこそ彼女はここで罪を打ち明けたのだ。

そこにあるのは隠し通せるという自信。

真雪は内心、苛立ちを覚えていた。

「……お時間を取らせてしまい、申し訳ありません」

真雪はそう呟き、一步退いた。

瞳に一瞬浮かんだ苛立ちの色は既に消えている。

無表情の仮面、押し殺した声。

「死亡日には確認に伺いますので宜しくお願ひします」

真雪が軽くお辞儀をする。

立ちすくむ明美を残し、真雪がきびすを返した。

どの方向にも同じ景色が広がっている。

ただまっすぐ前を歩いていく。

黒い死神の後姿が小さくなり、景色の中に消えた時。

明美は地面にへたり込んだ。

うなだれるように、地面の一点を見つめる。

「死者は語る……？」

その声は風の中に溶け、聞いた者はいない。

広い大地にたった一人残された姿は、さながら花のようにも見えた。

目を開いて最初に見えたのは見慣れた景色だった。

無彩色で統一された室内。

ぼやけた視界が次第に鮮明になってくる。  
それにつれ、意識が覚醒していくのを感じた。

戻ってきたのか、自分の部屋に。

真雪は心の中で呟く。

身体がひどく重く、身体を動かす事さえも億劫に感じる。

こみ上げてくる吐き気に顔をゆがめた。

他人の夢に入る事は慣れている。

けれど、それに伴う副作用のような身体の不調は何度味わっても気分が悪い。

「真雪？」

恐る恐る尋ねる美冬の声。

「ただいま」

「……大丈夫？顔、真っ青だよ」

真雪はため息混じりに呟いて、美冬に視線を向ける。

そこで動きが止まる。

驚いたように凝視する瞳。

「どうした？」

声がかすれる。

「何で泣いてんだよ」

ソファのそばに座り、顔を覗き込む美冬の頬は濡れていた。

そして、怪訝そうに尋ねた言葉が引き金になったかのように涙がとめどなく流れる。

時計の秒針の音、押し殺した嗚咽が部屋に響いた。

話そうと口を開くが、言葉は泣き声に変わり。

美冬は俯いたまま手の甲を目に押し当てた。

「大丈夫だ、美冬」

自然と口をついて出た言葉。

手を伸ばして髪に触れる。

「もう大丈夫だから」

吐き気を飲み込むようにしながら繰り返して呟いた。  
しゃくりあげる声は、まだやみそうもない。

小柄な美冬が、いつにもまして小さく見えた気がした。

「待つてたら、もう真雪が目を開かないんじゃないかって……怖く  
なった」

数分後、泣き止んだ美冬が赤い目のままで呟いた。

ソファに寝たまま自分で自分を見つめる真雪に視線を向けることもなく。

「馬鹿。すぐ帰ってくるって言っただろ」

「でも、本当に怖かったんだもん。死んじゃうんじゃないかって」

「寝てるだけだったっつうの」

大きく肩で息をつく。

「だから、別に付き合ってくれなくても……」

真雪が目を閉じて呆れた口調で言いかけた時、髪が頬を撫でた。

肩には何かが乗ったような感触と温もり。

怪訝に思い、目を開けると美冬が倒れ込むように真雪の肩に顔を埋  
めていた。

「どうした？美冬」

微動だにしない様子に小さく尋ねる。

返事はなく、まるで眠ってしまったかのように。

疲れで麻痺しかけた思考を動かさそうとする。

美冬を片手で抱くように、後頭部に触れた。

「……真雪は」

不意に聞こえた声に動きが止まる。

どこか硬い響きさえ感じる声。

「どこにも行かないよね」

美冬の指が真雪のジャケットを強く握り締めた。



「あたしを置いて、どこにも行かないよね」

震える指、助けを求めるような声。

真雪が彼女の言葉を心の中で繰り返す。

何故、そんな事を言うのか。

自分が夢の中に入っている間、彼女は何を考えていたのか。

戸惑いの中で言葉を懸命に探す。

唇を開き、再び飲み込む。

どうしたら、不安がる彼女を安心させる事が出来るのかと。

「……行くわけねえだろ」

首を傾げるようにして、頬で美冬の頭に触れる。

「俺はここにいる」

重く立ち込める静寂に飲まれた室内で、寝転んだまま答える。

すぐ近くで頷く気配。

気が付けば強まったらしい風が何度も窓を叩いていた。

まるで中に入れてくれといわんばかりに。

カーテンも閉めていない窓に見えるのは漆黑。

掻き回されるような眩暈の中で、真雪は死亡宣告で交わされた会話を思い出していた。

を思い出していた。

「あー」

「……どうした？美冬」

鼻をすする美冬の声で我に返る。

顎を引くと、すぐ近くにある美冬の頭の辺りを一瞥した。

「ごめん、真雪の服に鼻水ついちゃった」

「鼻かめよ！つうか、きつたねえな」

比良坂事務所のドアを開けると、そこには不気味な沈黙があった。いつもであれば、事務所にいる誰かしらの挨拶が飛んでくるはずだが今日に限って言葉をかけてくる者はいない。

「おはよーござまー……って、留守？」

ドアのノブに手をかけたまままで身体を乗り出して、室内を大きく見渡す。

高校の制服姿の美冬は恐る恐るといった風に足を踏み入れた。音を立てないよう注意を払い、ゆっくりとドアを閉める。

付いたままの空調、部屋に残る気配。

直前まで誰かがいたように感じる。

普段は気に留めない音にまで注意深くなってしまう。

こんな得体の知れない事務所に忍び込む人間がいるとは思えないがこのご時世に施錠もせずに無人にするとは無用心すぎないだろうか。美冬はため息をついた。

手に持っていた買い物袋を冷蔵庫にしまおうとした所で足が止まる。視線は、並ぶ事務機の群れへ。

そこにいたのは。

「ノクテイルカさん？」

パソコンのキーボードに手を置いたまま俯く銀髪の青年の姿。美冬の位置からでは表情を伺う事は出来ないが、微動だにしていな事は分かる。

怪訝そうに尋ねた声に返事はなく。

「やだ、誰も居ないのかと思っちゃった。静かなんだもん」

無言である事を気に留める様子もなく、美冬は笑いを浮かべながら近づいた。

足音が止まる。

美冬はノクティルカの隣に立つと周囲を見渡した。見る限り、この事務所に居るのは彼のみのようだ。そして当の本人は。

「……寝てるし」

まるで手元に置いた書類を見るような姿勢のまま固まっていた。ディスプレイには立ち上げたままのアプリケーションと点滅するカーソル。

美冬は身をかがませるようにして顔を覗き込んだ。

眼鏡の奥の瞳は閉じられたまま。

穏やかに繰り返される呼吸がわずかに聞こえる。

思わず、声もなく笑う。

気配を感じたのだろうか。

突然、ノクティルカの指先が大きく震えるような反応を見た。

美冬は驚いたように目を丸くして動きを止める。

観察するように様子を伺う。

「ん」

ノクティルカが短く唸って眉をしかめた。

薄く開かれた瞳は数秒間、呆然と目の前にある美冬の顔を眺める。

そして大きく見開かれた。

「……」

肩が一度大きく揺れて、のけぞる身体。

小さく動く唇。

だが何も発する事はなく、呆気にとられた表情のまま固まる。

「ごめん、驚かせちゃった？」

美冬は身体を起こすと、首傾げて微笑んだ。

「……おはようございます。恥ずかしい所を見られてしまいました

ね」

わずかに照れたような笑みを浮かべる。

美冬は隣の席の椅子に座り、身体をノクティルカに向けると楽しげに目を細めた。

「珍しいモノ見ちゃった。レアだよ？居眠りしてる上に驚くノクティルカさんとか。

なんか今日は良い事ありそうな気がする」

「からかうのはやめてください。恥ずかしいんですから」

「ふうん？」

「ラプター、意地悪な顔になってますよ」

目を細めて笑う美冬に顔をしかめてみせる。

ノクティルカはわずかに椅子を引き、足を組んだ。

背を伸ばすように背もたれに身体を預け。

「ね、仕事のしすぎじゃない？ちゃんと寝てる？」

「寝てますよ、もちろん」

「本当かなあ」

疑いの眼差し。

「あ、そういえば

所長が徹夜してまで仕事するようなら鈍器で殴ってでも止めさせろって言ってたよ」

「……それは息の根が止まりそうですね」

困った表情を浮かべたまま、ノクティルカが言った。

そして隣から身を乗り出すようにして手元の書類を眺める視線に気付いたように。

「昨晚、冥府の方から死神業と討伐に関する報告書を至急提出するように言われました。

その作業をやっていたんですよ」

「報告書？」

美冬が動きを止め、デスクの上に置かれたカレンダーを一瞥する。

顔には怪訝な色が浮かんでいた。

「まだ月末じゃないよね。何でこんな変な時期に出せなんていうんだろ？」

「分かりません。理由を伺っても『至急』の一点張りでしたし」

「何だそりゃあ？全然意味分かんないね」

不満気に吐き出された声。

窓の外から聞こえる他人事の街のざわめきが耳をすり抜けていく。

二人はどちらからともなくため息をついた。

「もしかしたら最近、此岸が妙に騒がしい事と

関係しているのではないかと思っただけなんです」

美冬を見つめていた視線をディスプレイに移し、独り言のように言う。

止まっていた指がキーボードの上を滑るように動き始めた。

響くタイピングの音。

「へ？此岸が？」

「ええ。気付きませんでしたか？」

「ううん、なんか変だとは思ってたんだけど。」

……そっか、あたしの気のせいじゃなかったんだ」

何かを納得するように美冬が数度頷く。

上の空のような動きで。

「ほら、チャリオットの一件があつたじゃない？」

アレがあつてからチェイサーギルドとかコミュニティ行く度に皆か

ら聞かれてさ。

そればかり気にしてて、他におかしいなーと思う事があつても

あんまり気にしてなかったっていうか、気のせいかと思つてた」

注がれた疑問の眼差しに眉間にしわを寄せたまま答える。

まるで話しながら頭の中を整理しているかのように。

「この間まで、生き返り事件の話題で持ち切りでしたからね。」

ましてや貴方は当事者だ。周囲の人間が興味を持って当然です」

「そうなんだけどさ、あたしは何も知らないんだよね。」

あれからチャリオットを見た訳でも、何か情報を掴んだわけでもな

いし」

「けれど、聞きたくなるのが人ですよ。もっともラプターにしてみれば同じ事の繰り返しでウンザリしてるでしょうけど」

「ホントだよお。みーんな打ち合わせしてんじやないかって位同じ事ばっか聞くんだもん。」

「一時期、ギルドとコミュ行くのが嫌になってた」

美冬がデスクに手を突いて顔をしかめた。

その傍らで押し殺したような笑みを浮かべるノクティルカ。

「……でも、確かに最近おかしいよね。」

何がつて聞かれるとうまく答えられないけど、いつもと違う」

表情を引き締め、呟く。

ノクティルカ越しに窓の外を見つめる瞳。

「表面上は平和だつて言うのが不気味なの。何も無いのが逆に変わっていくか」

「そうなんです。一見、平和そうに見えるんですが」

その陰で動いている方々がいるのが気になるんですよね」

「単にいつもの小競合いなら構わないんだけど、妙に……」

「胸騒ぎがしますか？」

手を止め、見つめるノクティルカの視線の先には

険しい表情のまままで視線を合わせずに頷く美冬がいる。

腕組みをした指先が小さくリズムを取った。

時が止まったような光景。

「違和感があるの。つーか、なんだか分からない事が多すぎて気持ち悪いや。」

結局、チャリオットの件も何も分からないままだし」

「あながちラプターの違和感は外れていないかもしれませんかよ？」

口の端を上げる。

言葉に何か含みを感じて思わず視線を向けた。

「……野生の勘って言うじゃないですか」

ノクティルカの目は笑っている。

美冬は一瞬、呆気にとられた表情を浮かべた後。

「何それえ!？」

拳を握り締めて思わず立ち上がった。

怒っている事を相手に伝えようと睨むのに、自然と笑いがこみ上げてくる。

「そのままの意味ですよ」

「ノクティルカさんはすーぐ野生児扱いするー!!」

「間違つてないじゃないですか。普通の女の子はドアを蹴り壊したりしないんですよ?」

「蹴り壊してないもん!あれはねえ……!」

ノクティルカの腕をつかんで揺さぶりながら抗議していると。

携帯電話の着信音が軽快に響いた。

「ラプターの携帯でしょう?」

笑いながら美冬のジャケットのポケットを指差すノクティルカ。

言葉を飲み込み、何か言いたげな表情のまま美冬はポケットをまさぐった。

見ればメールの着信のようだ。

送信者は立花真雪と表示されている。

「あれ?真雪からメールだ」

「いつもの遅れる旨のメールですか?」

美冬は椅子に座ると携帯に視線を走らせた。

何かを考えているような沈黙の後、壁に掛かった時計を一瞥する。

「気分転換にお茶飲みに行かないかってさ。んもー、ノンキだなあ  
まるで相手が液晶に写っているかのように睨み。」

「しかも行き先が真雪の家の下の花屋さんって何?……あたし事務所にいるんだけど」

「まだ時間がありますから行ってきてはいかがですか?せつかくの

「お誘いですし」

「うーん。でもなあ」

「そして、お帰りの際には私に鞍馬のみつ豆を買ってきて下さると嬉しいですよ」

「買い物頼んでるだけじゃん！」

「ノクティルカの言葉を笑う。」

そこで何かを思い出したように笑顔が固まった。

不思議そうに尋ねる視線と、何か言おうと見つめる視線がぶつかる。

「思い出した」

美冬は携帯電話をポケットにしまうと、改まったように座り直した。

「聞きたいことあったんだ、ノクティルカさんに」

「なんですか？」

不意に変わる室内の空気に、笑顔を引つ込める。

マウスを持ったまま動きを止めた。

「その、死神の仕事の件……なんだけど」

「はい」

「数日前に真雪が死亡宣告した後、倒れるんじゃないかってくらい具合悪そうにしてたのね。」

「すぐ顔色悪くて座ってられないみたいでさ」

美冬は落ち着かない様子で髪をいじりながら、目を伏せる。

「死神の仕事ってそんなに辛いのか？いつもあんな感じなのかな？」

「はじめて、あんなの見たから心配になっちゃって」

「さほど大きくないはずの沈んだ声が部屋に響いた。」

自分を見つめる不安そうな色をたたえた瞳からノクティルカは顔を背ける。

思い出したように聞こえるキーボードの音。

「………なんと言えはいいのでしょうか」

「言葉を選ぶように切り出した。」

「人それぞれ、としか言いようがないですね。」



死亡宣告は他人の夢の中に入るので体力を消耗します。

そして、それには副作用のように反動があるんです」

「うん」

「頭痛や吐き気だったり、症状はさまざままで大きさも個人差があります。」

それがレイヴンの場合には酷いようで」

眼鏡を指の腹で押し上げる。

息をつきながら話す声は、どことなく辛そうにも聞こえた。

「私や所長は反動がないに等しいのですが、レイヴンは相当辛いようです」

「じゃあ、どうにも出来ないの？」

「残念ながら」

頷く横顔に美冬は唇を噛んだ。

膝に手を置いて何かを考えるように俯く。

「心配ですか？」

「うん。あたし、何も出来ないから。」

少しでも真雪の痛みとか軽く出来たらいいなって思ったんだけどね。

あんな辛い顔、見たくないし」

辛さを隠すように明るさを装う口調で話す。

それでも、ぎこちなく聞こえる声。

人が少なく、広く感じる事務所が何故か余計に寂しく感じた。

ノクティルカは目の前で俯き、黙りこくった美冬を見つめた。

何かを考えるように目を閉じた後、薄く微笑む。

「羨ましいですね」

美冬は思いがけない言葉に驚いたように顔を上げた。

意味が理解できず、ただ言葉の主を凝視する。

「レイヴンが羨ましいです。」

貴方にそこまで思ってもらえる彼は幸せだなと思ひまして」

「え？」

「仕事でもプライベートでも良い関係だからなのかもしれないけど」

目をわずかに見開いたまま、呆然としていた美冬は我に返り目の前の空気をかき消すように手を振った。

「え！？な、何言ってるかな、もう！」

頬を赤くして、慌てたように笑う。

「た、確かに真雪と仲いいけど違うよ！そんなんじゃないってえ！」

「そうなんですか？」

「うん、そうだよお！仕事で組んでて、じゃれ合ったり小競合いとかしてるけど」

特別な関係でも何でもないんだから」

さきほどまでの苦しげな表情は影を潜め。

今は紅潮した顔で、しどろもどろになりながら言葉をつむいでいる。落ち着かないのかリズムを取るように身体を前後に揺らしながら。

「っーか第一、真雪がそんな気ないの。1コ下のクセに人の事すぐガキ扱いするし。」

恋愛感情なんて全くないんだと思うよ？」

肩をすくめ、口に手を当てて笑う。

重くなった空気が一気に消えていくように。

「なるほど……それでは」

ノクティルカは顎を引くように頷くと、立ち上がるうとしているのか腰を浮かせた。

不意に、美冬の肩に触れる手。

身を乗り出すように。

「少しは私にも望みがあるのかもしれないね」

耳元で聞こえた言葉に美冬の動きが止まる。

不思議そうに自分の近くにある顔を見つめた。

空白の時間。

絡み合う視線。

「……ラプター、レイヴンが待っているのではないですか？」  
ノクティルカの言葉が美冬を現実に戻す。  
わずかに口を開き、何かに気がついたように眉をよせた。

「すっかり忘れとつたああ！」  
「いつてらっしゃい。あまり待たせるとレイヴンがキレますよ？」  
「うごあ！ご、ごめん。ちょっと行ってくる！」

慌てて立ち上がり、デスクの上に置いたバッグを掴むと落ち着きなく周囲を見渡す。  
思考に行動が追いついていないようで、気持ちばかりが焦っているようだ。

ノクティルカは椅子に座りなおすと苦笑混じりで美冬を眺めた。

「はい、お気をつけて」

「うわーん、急げ自分っ！え、えーと、鞍馬のアンミツだっけえ？」  
「！」

「みつ豆ですよ」

慌しい足音が部屋中を動き回る。

乱暴にドアを閉める音とともに何事かを言う美冬の声を聞いた気がしたが

ノクティルカには聞き取れなかった。

再び訪れる静寂。

一人残され、何かを思うように微かに笑みを浮かべる。  
窓の外の日差しには、まだ黄昏の気配はなかった。

五条村雨線 緑が丘駅。

ちよつど学生の帰宅のピークなのだろう。

駅周辺は多くの学生で溢れ、花の咲くような賑やかな声が耳に届いていた。

「これは何だよ」

真雪は人の流れに逆らうように歩く。

手には魚肉ソーセージの赤いパッケージ。

それを見つめる顔は困惑していた。

「馬鹿ね。魚肉ソーセージに決まってるじゃない」

「いや、それは見れば分かる。何でこんなモノ俺に渡すんだよ」

「ひもじそう」

「ひもじくねえ」

美冬は笑い声を上げ、呆れる顔を見ながら歩く。

商店街の狭い歩道を通り過ぎる人影をかわすように通り抜けた。

もうすぐ夕暮れのはじまる時刻、二人を包む周囲の空気は

どこことなく安堵感と活気に満ちている。

普段は気にも留めない、店から聞こえる音楽も楽しげに聞こえるから不思議だ。

「随分待たせちゃったじゃない。そのお詫びって事で」

「……お詫びがこれか？」

「何が不満なの？」

「俺を魚肉ソーセージで買収できるとでも思ってたのかよ」

靴音が追いかけてくるように響く。

真雪は自分の歩く速度に美冬が遅れ気味な事に気付き、歩調を遅くした。

「んもあ、怒ってるの？謝ってるのに」

美冬は軽く眉間にしわを寄せて唇を尖らせる。

そしてポケットの中をまさぐる右手。

「まったくワガママなんだから」

その言葉と同時に真雪の手に新たに何かのパッケージが握らされた。反射的にいぶかしげに凝視する。

「貝ヒモなんていらねえっつーの！」

「いいのよ、真雪がソーセージだけで満足しないのは想定済みだったんだから。」

あたしのお詫びの気持ちと共に海の恵みを噛み締めなさい」

「そうじゃねえ。っーか、お前のチョイスは親父くせえんだよ、いっつも」

無意識にため息をつく。

何を言っても無駄な事は真雪は重々承知していた。

「まあ、別に怒ってるわけじゃねえんだけどな」

「よかった」

「……とりあえずソーセージと貝ヒモは貰っとくわ。後で噛み締める」

真雪がスーツのポケットにしまいながら言った。

髪を巻き上げる、わずかな冷たさと暖かさが同居する風に目を細める。

視線を向けた空は不気味なほどに青く、まるで偽りのようにも見えた。

『Douleur』はカフェを併設している生花店である。

モノトーンのビルに挟まれた鮮やかな色の洪水。

まるでその場所だけ、どこかの異国から来たようにも見えた。

その店は駅から多少離れてはいるものの、

周辺住民やカフェ愛好者などに愛されているようで客足は絶えないようだ。

「どれにしようかなあ。悩みすぎて具合悪くなりそうだ」

メニューを睨みながら低く唸る美冬を眺めて真雪が笑う。

白を基調にした店内は花が溢れるように置かれ

大きな窓からは眩しいくらい光が差し込んでいた。

二人の他に客の姿はなく、まどろみを誘う静寂が流れる。

ナチュラルな素材でまとめられたノスタルジックさを感じる空間。

シンプルで、どこか洗練された印象さえ受ける。

「直感で選べよ。あんまり見てると選べなくなるぞ」

「もう手遅れだよ。どれも美味しそうなんだもん」

拗ねたように唇を尖らせた。

「真雪はもう決まったの？」

「カモミールティーと抹茶のマーブルシフォン」

「うわーん！あたし、まだ決まんないよう」

「焦らなくていいっつーの。ゆっくり決めろよ」

苦笑混じりに言葉を投げ、テーブルの上に飾ってあるガーベラを軽く指先で触れる。

窓をすり抜けて聞こえる子供の歓声と足音に耳を澄ませた。

「決まった？」

二人の席の傍らに人の気配を感じたと思うと聞こえてくる無邪気な声。

見上げると赤い瞳を細め、金色の髪 of 青年がにこやかに立っていた。

メニューから顔を上げた美冬は彼を見て不意に思い出す。

一年前の事を。

ちょうど一年前、比良坂事務所に派遣されて早々に

この店の2階部分に住む真雪の元に挨拶に訪れた。

その際にこの店の庭に迷い込んだ美冬に声を掛けたのが、この青年だ。

それからというもの、真雪の所に遊びに来ると彼と会う機会も多くよく挨拶を交わすのだが、その度にあの日の事を思い出して苦笑し

てしまう。

「美冬が決まってねえってさ。ニーナ、何かおすすりめある？」

「あんね、本日のケーキがオススメ！」

今日はチーズケーキで、すっげえ濃厚なタイプなんだ。

クリームチーズいっぱい使うから定番には入れられないんだけど人気があるよ」

ニーナと呼ばれた青年は美冬の手にしたメニューの一文を指差して声を弾ませた。

「後はね、ローズティーかな。先週から紅茶を違うのにしてさ。

これがね、すっげー相性いいんだよ！前より美味しくなったの」

「じゃあローズティーと本日のケーキにしようかな」

「うん、ありがとー！ローズティーと本日のケーキのセットね！」

まるでスキップをするように、足取り軽く去りかけたニーナの服を真雪が掴む。

一歩踏み出そうとした所で後ろに引つ張られ、ニーナはバランスを崩しそうになった。

不思議そうに見つめる眼差し。

「待て」

「ん？」

「俺の注文は聞いていかないのかよ」

半分笑みを口元に浮かべ、片眉を上げてみせる。

その視線の先には、何かを思い出して照れ笑いを浮かべる顔。

「あ！まゆ君、ごめーん！」

「俺は空気か」

「そんなんじゃないよー。オススメして満足しちゃったただけだもん」  
笑う二人をよそに、ニーナは顔の横で手を振ってみせた。

「別にいいけどな。えーと、抹茶のマーブルシフォンとカモミールティー。」

ミルクも一緒に頼むわ」

「了解っ！いつものセットだね！」

機嫌のよさそうな足音が遠ざかる。

振り返りながらニーナの背中を眺めていた美冬が顔を戻すと。

「アイツ、お前と似てるんだよな」

「へ？そうなの？」

「テンション高い所とか暴走癖のある所とか」

「……どういう意味かしら、それは」

眉間にしわを寄せる。

薄笑いを浮かべる真雪に美冬は不満そうに頬を膨らませた。

「そつえば。待ち合わせの時、何であんなに遅かったんだ？」

「謝ったじゃんか」

「いや、怒ってるんじゃないねえって。不思議に思ったただけだ。

なんか用事があったのに無理に呼び出しちまったかなって思ってたな」  
椅子を引くと室内に大きく音が響く。

花を扱うスペースから吹いてくる風が髪を揺らした。

どこか涼しさを感じる。

「事務所でノクティルカさんと話してたの」

メニューに視線を走らせていた美冬は何かを思い出したように動きを止める。

何かを考えるように空中を見つめる瞳。

「どうかしたか？」

「いや、なーんか変な事言ってるさ。どういう意味だったのかなあ  
って」

「寝言か？」

「うっん、そういうんじゃないよ。なんか真雪のことが羨ましいと  
か」

「……なんだそりゃ」

次は真雪が動きを止める番だった。

遠くで聞こえるやり取りが耳をすり抜けていった。



「死亡宣告した後、真雪って超具合悪くなるじゃない？その話してたらそう言われたの。」

あたしにそこまで思ってもらえる真雪は幸せだとかどーとか」

「……」

「あえ？どした？」

考え込むような沈黙。

美冬はテーブルに両手をつき、真雪の顔を覗き込む。

「ノクティルカ、他になんか言ってたか？」

「何かって……あー」

「なんつってた？」

合点がいったような声に真雪がわずかに強い口調を向けた。

いぶかしげに片目を細める。

「どしたの？急に」

「いいから。なんて言ってたんだ？」

「『少しは私にも望みがあるのかもしれないね』って。どーいう意味なんだろうね」

「それ、何の話してた時？」

「え？確か、真雪とあたしの関係の話してた」

唇に指を当てて首を傾げる美冬。

真雪の真剣な調子の意味が分からないらしく、数度大きく瞬いた。空白のような時間。

「……最悪だ。思ったとおりかよ」

美冬の顔を凝視していた真雪は、何の前触れもなく机に突っ伏す。額と机の表面をくっつけたままの状態で呻くように呟いた。

「わ、ビックリした！ど、どうしたの？！」

美冬は目を見開いたまま、身体をのけぞらせる。

「なるほどな。所長が言ってたのはそういう事か」

「何が？」

「俺はナチュラルにシヨックを受けてる。後にしてくれ」

「ちよつとお。分かるように説明してよ！」

うなだれた真雪の肩を美冬が身を乗り出すようにして掴むと、前後に揺さぶった。

肩越しに見えるのは観葉植物の艶やかな深い緑色。

風に踊るように震える。

「お前、マジでわからねえの？」

「だから何が」

美冬の手を払いのけ、髪をかきあげる真雪。

その顔は疲れているように見えた。

二人の口調は無意識のうちに強さを増し、まるでケンカでもしているようにも聞こえる。

睨むような間の後、ため息をついたのは真雪だった。

「……馬鹿だろ？そんなだからお前、国語の成績悪いんだよ」

「うつさい、クソ真雪！ワケわかんないことばっか言つと顔に味噌塗るからね」

呆れかえった口調に怒る。

苛立った表情を浮かべる美冬が口を開きかけた時。

「おまちどうさまー！」

弾むような声と共に足音が近づいてくる。

美冬が視線を向けると目の前には満面の笑み。

つられて微笑を浮かべた。

「ずいぶん盛り上がったね。何の話？」

「……美冬が馬鹿だって話」

「ちよつとお！だから何を根拠にそんな事言つてんのー!？」

両手で拳を作り、身体の横で抗議をするように振ってみせる。

真雪は息をつき吹き出すように笑った。

「ひどいんだよ、ニーナさん。真雪って自分だけ納得して、人のコ

「馬鹿呼ばわりするの!」

「あー、それは良くないっ!馬鹿って言う人は自分が馬鹿なんだよ」

「ほら見るー!真雪のバーカ!」

「お前、自分も馬鹿つつってんじゃない」

「二ナがカップやケーキの載った皿をテーブルに置く音が聞こえる。

真雪は背もたれにもたれかかったまま、窓の外に視線を向けていた。

その横顔は、何となしに思いを巡らせている風でも

ゆっくりと流れる時間を楽しんでいるといった感じでもない。

眉間にしわを寄せたまま、食い入るように見つめる。

「……………どうしたの?真雪」

違和感を感じて怪訝そうに尋ねるが、声を向けた先は微動だにしない。

穏やかな辺りの空気がわずかに変化していく。

「真雪?」

何度目かの呼びかけで、何か言いたげな視線が美冬を見つめた。

声にならない何かを発するように動く唇。

二人の視線が真雪に集まる。

「あんな」

言葉の端々に迷いが見える真雪の声。

その視線は美冬と窓の外を見比べるようにせわしなく動いていた。

「どうしたの?」

「いや、自分でもよく分からねえんだ。何か急に……………」

真雪が微かな苛立ちの中で言いかけると。

にわかに外が騒がしくなる。

叫び声とざわめきが大きく響いた。

思わず3人は顔を見合わせる。

真雪が窓に張り付くように身を乗り出して、外を伺うと。

「何だ?」

思考が口をついた。

人通りが増え始めた通りは明らかに様子がおかしい。全ての人間が足を止めて上を見上げている。

その顔に浮かぶのは驚きと苦痛に似た何か。

身体の機能が停止してしまったかのように固まり、動けない。

ただ内側で大きく鼓動が聞こえる。

頭の中で何かが喚きたてているかのような錯覚。

必死で混乱を沈めようとするのに、更に不安と動揺が自分の中で渦を巻く。

息苦しさを感じた。

ざわめきが波のように広がり、騒然とした雰囲気は窓越しに店内にも流れ込む。

張り詰めていく空気。

その時。

どこからともなく聞こえた判別不明の怒号。

それと重なるように聞こえた何かを訴える叫び声。

さらに、それらを包むのは何かを見上げていた人々からの悲鳴。

何が起こったか理解する前に聞こえた

重いものが地面に叩きつけられる音。

裂けるような悲鳴が耳をつんざく。

「人が飛び降りたぞ！」

「救急車！」

止まりかける思考を引き戻した、外からの叫び声。

真雪は席を蹴るように立ち上がると呆然とする美冬を睨んだ。

「お前は、ここを動くな」

反論さえ許さない、強い口調で。

「え？あ……」

「いいな？絶対、動くんじゃないぞ」

まるで美冬に怒りを向けているかのよう。

真雪はそう言い残すと店を飛び出した。

何故そうしたかは自身も分からない。

けれど、何かに動かされるように向かった　音の発生源へ。

「息はまだある！」

真雪が外へ飛び出した時、

二ナが望と呼んでいた青年が近くのビルの屋上に立っている人影に叫んでいた。

波のように声が辺りを包み、遠巻きに人の輪が生まれる。

その中心は血の海。

二人の青年が赤く染まった、同じくらいの体型の男を囲んでいた。

「生きてるか？」

「ああ」

歩く度に水音が靴にまとわりつく。

真雪は望と短く会話を交わすとしやがみこんで、血に浸したような男の手を掴んだ。

「大丈夫か？意識、あるな!？」

耳元で叫び、手を強く握る。

その行為はまるで『向こう側』へ飛び立つ事を阻止しようとしているかのようだった。

「救急車がもうすぐ来るとは思うが……時間との戦いって所だな」  
誰ともなしに呟いた望の声が聞こえる。

周囲はもう目に入らない。

ただ、手に伝わる冷たさが焦りを生んだ。

「起きろ！」

血にまみれた男の顔を直視する事を本能が拒んだ。

その顔や身体の様子から衝撃の大きさが伺える。死体など仕事柄見ることも多いが目の前の光景は思わず目を背けたくなってしまう。

真雪は、この状態でも男が生きている事が信じがたかった。

「……笛、吹き……は」

幻聴かと思った。

真雪は弾かれたように顔を上げるが、声の主らしき人物はどこにもいない。

「……ねず、みをおびき……出、し……川に」

途切れ途切れの声が苦しげにうめく。

声の主は、目の前の男だ。

地面に倒れた男が生気の乏しい目を薄く開き、真雪を見つめていた。鼓動が一層、加速する。

「バカ！喋るんじゃない！」

温度を感じない風が頬を撫でる。

目を射る光に夕暮れが訪れている事を知った。

オレンジ色の光に染め替えられ、辺りは赤とオレンジの色に支配されている。

「喋るな！もうすぐ救急車が来る」

念を押すように真雪は怒鳴るが、男には聞こえていない様子だった。

「怒った笛……男は、また……ハーメ、ルンの街に……」

「おい！」

「戻って、と」

口から血が溢れ、とめどなく流れる。

真雪が眉間にしわを寄せ、口を開きかけた時。

男は空いた手に持っている物を渡そうとするかのように

懸命に手を持ち上げようとしていた。

わずかしか上がらず、震える手。

「これって」

男の様子に気がついたニーナが、彼の手の中をゆっくりと開いて何かを摘み上げた。

それは摘み取られたような花だった。

血に濡れているが、ところどころに眩しいくらいの白さが見える。丸みを帯びた花卉。

波立つ心のどこかで違和感を覚えた。

「……………プルメリア。どうしてここに？」

いぶかしげな独白を背中であらきながら、真雪は男と花を見比べた。

「この花がどうした？」

「笛、を吹きなら……………し、子供、連れ……………去った」

問いに答えず、憑かれたように呟き続ける。

口元に顔を寄せながら眉間に深くしわを刻んだ。

「一人、残ら……………ず」

血の匂いが充満し、吐き気がこみ上げる。

「……………み、な」

他の音も、景色も、人も、何もない。

「誰も、いなく……………」

語尾が小さくなっていく。

まるで火が消えていくようにも感じ、真雪が肩を掴んだ。

「おい！起きろ！」

力がこもる。

気がついたら男が目を閉じていた。

「しっかりしろって！」

この場所めがけて近づいてくるサイレンの音。

それにかき消されないように耳元で再度、怒鳴るが。

答えはなく沈黙する。

再び騒然とする輪の中で真雪は空を仰いだ。

空は何も知らずに燃えていた。



## 5 - 3 確信へ

「何してんだ、ノクティルカ。具合悪いのか？」  
怪訝そうな声が響く。

もの寂しい空気が漂う比良坂事務所に到着し、  
真雪が見たのはソファに仰向けに寝そべるノクティルカの姿だった。  
いつも多くの仕事をこなし、他人に疲れた様子を見せない彼が  
こんな風になっているのは珍しい。

「お疲れ様です、レイヴン。具合悪いですね……お腹がすきすぎて  
「は？」

ため息混じりの声にソファを見下ろしていた真雪の動きが止まる。  
予想外の返答に思わず眉を寄せた。

遠くの窓から街の夜の音が漏れ聞こえている。  
凝視する視線と、疲れたように見える視線。

「レイヴン、人は空腹になると切なくなるものなんですね」  
「そうだな。これからの人生、何一つ良い事がないような気分にな  
るな」

ノクティルカはソファから起き上がると座りなおす。  
ネクタイを締め直しながら伏し目がちに苦笑を漏らした。

「先ほどまで仕事をしていたんですが、  
あまりの空腹に集中力が続かなくなっただけでサボっていたんです」

「つつか、そうなる前に食えって」  
「何かあったら食べるつもりだったのですが、生憎この事務所には  
食材と酒類と謎の物体以外ありませんでした。  
かと言って外に買いに行くのも面倒ですし」

「生きる為の努力は惜しむなよ。」  
そうか、昨日はウォークライが事務所待機だったから食っちゃまった  
んだな。

あんだだけあったのに全部食ったのか、あの大食いは」

部屋を歩き回る靴音に呆れた声がついて回る。

真雪は台所に入り、冷蔵庫を開けて何かを考えるように視線を走らせた。

「なあ、念の為に聞くけど最後にメシ食ったのっていつ？」

「たしか昨日の朝だったでしょうか」

「馬鹿か、お前！何でメシ食わねえんだよ！」

お互いの姿の見えない状態で言葉を交わす。

聞こえずらい為に声を張り上げるが、それがまるで怒っているようにも聞こえる。

今までの沈んだような空気が次第に色づいていくように変わっていく。

「仕事に追われていた事と面倒なのが重なって、食べそびれ続けていました」

「マジで栄養失調になるっつーの……しょうがねえな、作ったら食うだろ？」

「はい。ありがとうございます、レイヴン」

扉のない台所の入り口から真雪が顔だけを出して尋ねる。

視線の先にある、眼鏡越しの笑顔に苦笑を浮かべた。

「ところで、ラプターは一緒ではなかったのですか？」

ガスコンロに水の入った鍋をかける真雪の後方で、ノクティルカが壁にもたれて問う。

「あー、美冬はちょっと仕事にならなそうなんで休ませたんだ。

所長には連絡してあるけど」

「仕事にならない、ですか」

「ああ。動揺しちまっててさ、あの状態で仕事するとヤバそうだから」

野菜を切る音に重なる上の空の声。

不意に真雪が奥のスチールラックを指差し。

「悪い、セイロ出してくれねえ？」

「はい」

ノクティルカはセイロを持ち上げながら、何かを考えているかのように空中を見つめた。

「もしかして殴り合いのケンカでもしました？」

冷静な声で吐き出された言葉に真雪が包丁を持つ手を止める。

ゆっくりと顔を向けて、首を傾げた。

「へ？」

「違いましたか。私はてっきりラプターを病院送りにしたのかと思つたのですが」

「い、いやいやいやいや！待て！何でそうなる！？」

「ラプターの欠勤、レイヴンの疲れた様子、血の臭い……この3点から考えて」

殴り合いのケンカが妥当かと思ひまして。はい、セイロどうぞ」

「お、サンキュ。つーか、んなワケねえだろ！

女と殴り合った上に病院送りにする男ってどんなんだよ！」

真雪がセイロにキャベツを入れると、鍋の上に置く。

ため息をつき見上げる天井。

「貴方から血の臭いと死臭がしているのであれば、イレギュラーに絡まれて

討伐でもしたのかと思うのですがね。けれど血の臭いだけである上に

それは人間の物です。そうなると、私の考えも自然じゃないですか」

「不自然だよ。そっか、やっぱり着替えてきただけじゃ血の臭いはとれねえか」

数秒間音がやんだ後、再び野菜を切る音が聞こえる。

「さつき、アイツと俺の部屋の下の花屋でお茶飲んでただけだよ。隣のビルから飛び降りた奴がいたんだよ。これが変で……」

「また、ですか」

「え？」

意外な言葉に顔を上げた。

ノクティルカは顎に手を当てて、正面を見つめたまま。

「またってどういう意味だよ」

「いえ、何でもありません。それで何が変なんですか？」

真雪は何かを思い出したように手を動かし始める。

まな板の近くに置かれたバットのの上には色とりどりの野菜が乗せられていく。

「あー、なんか変な事言ってたんだよなあ。

それさ、あとで花屋の子に聞いたら童話らしいんだ。ハーメルンの笛吹き男っつーヤツ」

「……あの子供達を笛でさらっていく男の話ですよ」

「そう。普通、自分が死にかけてる時にそんな話するか？」

「意味が分かりませんね」

背中に投げた言葉に頷く気配がある。

「だよな。しかもさ、そいつ花持ってたんだぜ？」

真雪が顔の横で何かをつまむ仕草を見せ、

振り返って後ろにいるノクティルカを一瞥した。

炒める音と、セイロの乗せられた鍋の火を止める音が重なる。

「花屋さんで買われたのではないのですか？」

「いや、それはないらしい。花の部分だけ摘んできたみたいな状態だったし」

ニーナのトコで扱ってる花じゃねえんだと」

「ますます分かりませんね。ですが」

ノクティルカがため息混じりに呟き、真雪の隣に並ぶ。

換気扇のスイッチを入れると頭上から低い唸り声のようなモーター音が聞こえた。

「理解できない考えの方なんて山ほどいますよ。自ら命を落とそうとする人なら尚更です」

「まあな」

「もつとも、一度の人生ですから好きなようにすればいいと思いますが」

一瞬、その声が冷たさを増す。

視線を向けると見えるのは俯き加減で唇の端をわずかに上げた横顔。表情から感情は読み取れない。

真雪は聞き流そうとするかのように、動かす手を止めずに曖昧に微笑んだ。

「それよりも私はラプターの方が心配です。大丈夫なんですか？」

「どうだろうな、さすがにショック受けてたみてえだったから。」

いつもイレギュラーを見てるとはいえ、やっぱり人間ってなると話は別らしい」

「それはそうでしょう。私達のように日常的に死体を見ているわけではないですし。」

忘れると言うのも無理な話ですが、早く普段の彼女に戻って欲しいですね」

軽く息をつくノクテイルカを真雪が眺める。

突然訪れた沈黙。

調理の音ばかりが響き、無言の時間が続いた。

不意に。

自分を凝視する視線に気がついたのか、ノクテイルカが真雪の方へ顔を向ける。

穏やかに微笑みながらも何うような瞳。

「どうしました？」

「あ、いや……」

「何か言いたそうですね、レイヴン」

その言葉に迷いを覚えた。

視線をそらし、休んでいた手を動かす。

合わせた調味料を入れると甘酸っぱい香りが周囲に広がる。

「相談でしたら話くらいは聞けますよ？」

「いや、相談つつーか」

視線をフライパンに落としたまま、口ごもる。

せわしなく動きながら、にわかには動揺する気持ちを整理しようとした。

ノクティルカに聞くべきなのだろうか。

美冬が好きなのか、と言う事を。

もともと予感めいたものを感じる事はあったが推測の域を出なかった。

だが彼女の話聞いて、予感は確信に変わり。

自分は複雑な場所に立っている事に気がついた。

彼に気持ちを問うた所で何になる？

そう思う反面、確かめたいと思う自分自身に真雪は迷っていた。

「あのさ、ノクティルカ」

「どうしたんですか？急に改まって」

フライパンを振りながら、懸命に言葉を選んでいるかのように。

不思議そうに見つめる視線を避けるように調理に集中しようとする。

「お前、美冬のこと好きなの？」

ノクティルカの動きが止まった。

一瞥した先にあるのは眼鏡越しの微量の迷いが見え隠れする瞳。けれど、それはすぐに冷静な色へと変化する。

真雪を見つめ、何かを考えているように微動だにせず。

ややあつて息をつくように声もなく笑った。

「それは恋愛感情と言う意味で、ですよね？」

「ああ」

真雪はガスコンロの火を消して入り口にもたれかかった。

感情を押し殺した瞳で相手を見つめる。

黙り込むと聞こえる、いつもと変わらない喧騒に耳を澄ませ。

「でしたら答えはYESですね。」

……ですが、それは貴方もでしょうか？レイヴン」

眼鏡のブリッジを指の腹で押上げて穏やかに頷いた。  
普段と同じ、掴み所のない口調。

真雪は思いがけず聞き返されて戸惑ったように視線を泳がせる。  
唇が小さく動くが、すぐに迷ったように止まった。

顔に浮かぶのは誤魔化そうとしているように見える笑顔。

「何言ってるんだよ。俺はそんなんじゃないやねえって」

迷った沈黙の末に出たのは半笑いの言葉。  
けれど目は笑っていないかった。

探るような視線を感じるが、気付かない振りをする。

騙すのだ、相手を　そして自分を。

「そうですか。それを聞いて安心しました」

予想もしなかった言葉に思わず目を合わせる。

静かでありながら何処か不敵さが潜む響き。

ノクティルカは腕を組んだ姿勢で、

わずかに身体を乗り出すように真雪の顔を覗き込んだ。

「彼女に聞いたら貴方とは特別な関係ではないと言っていましたし、  
貴方も恋愛感情はないという事ですので、

これからは隠す事も遠慮する必要ありませんね」

口元を歪ませるように笑みを漏らす。

首を傾げるようにして真雪の瞳を見つめる。

「これで心置きなく彼女を私のものにする事が出来ます」

「そんなの……勝手に、すればいいじゃないか」

呟くように吐き捨てる。

見つめる沈黙と、無言の時間。

遠くで時計の針が時を刻む音を聞いた気がした。

動きが止まった空間で。

「……なんてね。冗談ですよ、レイヴン。そんな顔をしても嘘をつき続けるつもりですか？」  
笑いながらノクティルカが真雪の肩を軽く叩く。

重かった空気が一気に変わる中、戸惑ったような表情を浮かべた真雪。

次第にその顔に照れと気まずさに似た何かが広がっていく。

「まだまだガキですね。嘘をつくのが下手だ、貴方は」

「悪かったな」

「好きなら好きだと素直に言えばいいじゃないですか」

「うるせえ。ほっとけよ」

拗ねたように顔を背ける様子にノクティルカが笑いをこらえたような表情を浮かべた。

真雪は窓の外に顔を向けたまま、視線だけを動かして笑う顔に睨む真似をする。

そして、何かを考えるように再び視線を戻し。

「……しっかし、お前も美冬の事が好きだとはな」

苦笑を漏らし、俯き加減で呟いた。

指で髪をかくとそのままの姿勢で止まる。

「どうなるか分からないものですね。貴方と三角関係だなんて」

「全くだ。でもまあ、いい趣味してるわ」

「それは貴方もでしょう、レイヴン」

おどけた口調。

二人で顔を見合わせて、吹き出すように笑う。

離れた位置から炊飯器が蒸気を吐き出す音が聞こえた。

真雪は髪をかきあげて、目を細める。

「まあ、ノクティルカの敵は美冬の鈍さだな。アイツは強敵だぞ」

「貴方ではなくて、ですか？」

「俺なんて敵じゃねえよ。第一、俺らがいがみ合う必要なんてねえじゃん。」

誰を選ぶかはアイツ次第なんだから」



「それは確かにそうですね」

軽く頷いて、目を伏せると微笑みながら壁にもたれかかる。そこで何か気が付いたように動きを止めた。

「ですが、ラプターはそんなに鈍いでしょ？確かに多少鈍い所はあるとは思いますが」

「いや、アイツの鈍さを甘く見ると痛い目に遭う。話にならねえほど鈍いんだって！

あんなんで生活に支障がないか心配になるくらいだ」

「そんなに酷いんですか？」

「だって、今日ノクティル力が……」

と、言いかけた真雪の言葉を飲み込んだのは。

「肉のありがたい匂いがするにゃー」

聞こえたのは遠くでドアの開く音と、聞き慣れた少女の声。思わず真雪とノクティルカは顔を見合わせた。

間をおいてから、同時にその方向に視線を転じると。

「何してんだ、美冬」

「ごはんを恵んでくださらんか」

欠勤しているはずの美冬がドアにしがみつくようにして顔半分を出して

二人のいる方向を伺っている。

「……お前、俺の部屋で休んでるんじゃないのかよ」

「お腹すいたし、寂しくなったから来ちゃった」

「大人しく休んでろっつーの。こっちの仕事は心配すんなって言っ  
たじゃねえか」

呆れた声の隣で苦笑が漏れる。

目の前にいるのは、いつも通りの調子の彼女だった。

静けさに支配された事務所の雰囲気が変わるのが分かる。

楽しいな音を立てて駆け寄る靴音が一つ。

「だって時間持て余しちゃうんだもん。真雪の部屋の工口本あさりも成果ゼロだったし」

「お前、勝手に家捜ししてんじゃねえよ！」

「ラプター、もう大丈夫なんですか？」

心配そうに眉をよせるノクティルカに、美冬が苦笑混じりの笑顔で頷いた。

一瞬、何かを思うように目を伏せてから見上げる翡翠色の瞳。

「一人だと余計な事まで考えちゃうから事務所に来た方がいいかなって。」

大丈夫って言い切れないけど……まあ、平気だと思っよ」

「そうですか。無理はしないで下さいね」

「うん、ありがと」

口元に笑みを浮かべる。

そして、視線は呆れた表情のままの真雪に向けられた。

「真雪、ごはん作ったの？あたしの分ある？」

「いつも余分に作ってあるから残ってるぞ」

「やった！今日は何？」

「……お前、マジで飯食いに事務所来たワケ？」

脱力したように呟く声で尋ねられ、嬉しそうに何度も頷く。

3人のたたずむスペースの後方から電子音が響いた。

音の主は炊飯器。

真雪はその方向に目を向けた後、吹き出すように小さく笑いを漏らす。

「とりあえず飯にするか。美冬、手伝え」

「いいよ。っていうか今日の献立なに？」

「獣らしく匂いで当ててみるよ。その位、ワケねえだろ」

「誰が獣よ！……ノクティルカさん、真雪がむかつくー！」

笑いながら台所に向かう真雪の背中を指差し、頬を膨らませた。話を振られたノクティルカは美冬の頭に手を置くと目を細める。

「ほら、当てないと食べられませんよ？頑張らなくては」  
「うわああ、ノクティルカさんまでー！二人とも死ねばいいのに！」  
両手に握りこぶしを作って喚く声。  
それに笑い声が重なった。

「あ、そういえば」

思い出したように動きを止めたのは美冬。

表情を引き締め、唇を固く結ぶ。

今までは打って変わった空気。

「どうかしましたか？」

「……今日の飛び降り自殺」

独白のように。

「何か変だっと思ってたけど、やっと分かったんだよね」

その言葉に離れた真雪が菜箸を持つ手を止め、顔を向ける。

見つめ合う視線。

「なんだよ」

まるで何かを警戒するような声音で問う。

大きく瞬き、数秒黙った後に唇を開く美冬。

「真雪は気付かなかった？あのね」

## 6 - 1 AFTER GLOW

まるで世界が偽りに包まれたような。

異世界になってしまったかのような色をしていた。

世界が死んでいく夕暮れの中で人々は帰路につく。

世界がオレンジ色に染まった時間を楽しむわけでもなく、むしろ恐れているかのように。

スーツ姿の男は誰もいなくなった廊下を歩いていた。

その廊下も例外なく黄昏のオレンジ色に侵されている。

目がくらみそうな色彩に足をとめることもなく

何かを考えるように書類の束を脇に抱えたまま歩調を速めた。

「樋口先生、まだいらしたのですか」

突然かけられた声に気がつかなかったのか、数歩進んだところで足をとめる。

「具合が良くないとおっしゃっていたから、病院にいったと思っていましたのに」

近づく足音に振り返り、ぎこちなく微笑んだ。

「いやあ。採点を済ませてから行こうと思っていたのですが結局こんな時間になってしまいました」

脇に抱えた書類をわずかに掲げてみせる。

チャイムと、どこか遠くに聞こえる歓声と足音。

「そうだったんですか。でも、大丈夫です？」

「ええ。具合が悪いといっても頭痛ですし、

どうせ気温の変化についていけなくて風邪でもひいたのでしょう」  
照れたような苦笑混じりの笑みを浮かべる。

「でしたら無理はしないほうがいいですね。風邪は万病の元ですから」

落ち着いたアルトの声は会釈して、遠ざかっていく。

靴音を残して。

男は、名残を惜しむかのように後姿を見送ると視線をそのまま窓の外に転じた。

人のいなくなつた校庭。

「……夕焼けか」

男の口から言葉が漏れる。

立ちつくすように、視線がそらせなくなったかのように何も無い光景を見つめた。

この世界に音はない。

ただあるのは色だけだ。

不意に。

男は違和感を覚え、現実に戻された。

「……」

自分を見る瞳。

抗議でも興味でもない、温度のない視線を感じ自分の中で何かかざわめくのがわかる。

「……どなたですか」

漆黒の袴姿の少女が少しはなれた距離から彼を見ている。

歳は小学生くらいであろうかという、あどけない顔立ちにも関わらずその雰囲気は子供のそれではない。

袴と同じ色の長いストレートの髪と、感情の見えない瞳。

ただ肌だけは陶器のように白く。

「ここで何をしていますか？」

男は沈黙に息苦しくなりながら、平静を保とうとしているかのよう

に。

世界はいつそう強いオレンジに包まれていた。

見慣れた風景をいとも簡単に別世界にしていく。

彼女は黙ったままだった。

「答えてください。貴方は、ここで何をしているのですか？」  
瞳に引き込まれそうになる。

凝視する瞳に息苦しくなって目をそらしたくなるが、身体がそれを許さない。

まるで今日の夕焼けのようだ。

音を発するのは世界で自分だけしかないかのような錯覚。

唇が動く、音にならない言葉が発せられる。

彼女は男を見つめたまま何かを伝えようと小さく唇を動かしていた。

「なんですか？」

『ぬ』

「え？」

手を伸ばしても届かない距離に、何メートルも先にいるはずの彼女の声は耳元で響く。

耳に息がかかりそうにほど近くに。

彼女は止めることを知らないかのように唇を動かしていた、絶えず。男と彼女の間に風が通り過ぎようと。

次第に世界に夜の色が忍び込んできても。

『死ぬ』

繰り返し、呪文のように呟いていた言葉がなんであるか知ったときに。

男は気がついた。

彼女の瞳に楽しげな光が宿っていることを。

「し……ぬ？」

無意識に口にした言葉。

問うても出ない答えだと分かっているながら。

『人が、黄昏を、愛するのは、それが、終末ではないと、知ってい

る、から』

「……」

『繰り返し、日は、自分の前に、現れると、信じている』  
『何か外れたかのように、言葉は紡がれていく。』

声は男の中で幾重にも響いた。

「貴方、は」

『君も、そう、信じている、の、だろうか？』

気がつけば手のひらには汗がにじんでいた。

『でも、今日の、黄昏が、終わり、もう、朝はこないと、知ったら  
この場所がどこで、』

今まで自分が何をしていたかという事を男は忘れ。

『君は、泣く、だろうか？』

彼女は袴のすそや袖を風になびかせることもなく静かにたたずんでいる。

『……吾は、ウタカタ』

気がつけば脇に抱えていたはずの書類は床に散乱していた。

『意識には消え、無意識には映る』

目の前に彼女は、先ほどと同じように立っているのに。

『死近し者に死期を歌う』

背後にたたずんでいる錯覚すら覚える。

男は、呆然と宙を眺めた。

状況も自分に何が起こっているかも分からない、そんな瞳で。

一陣の風が男の頬を撫でるように吹いた。

その風の向こうで彼女は、身を翻し振り向きざまに男を見た。

そのとき、彼女の唇が動いた気がしたが何を言っただかは男には分からなかったという。

次の日の朝刊の隅には次のような記事が掲載された。

『東京都霧島区で14日未明、私立高校で男性教諭(36)が倒れているのが発見された。』

発見時には既に呼吸は停止しており、死因は

「突然死症候群(不整脈による急性心不全による疑い)」  
と、診断され教育委員会では 『



「美冬っ！美冬、聞いた？」

「おはよー。由香、どしたの？」

「……っで、あんた朝から何でそんなヘビーなモノ食べられんだよ」  
チーズかつサンドを手に持った美冬が自分の席に手をつき  
身を乗り出す少女に穏やかに笑う。

私立東ノ宮大付属高等学校、3年2組。

普段なら授業の時間だというのに、一向に始まる気配はなく。

教室全体に広がるのは違和感と大きなざわめき。

誰もがいつもと違う空気を感じていた。

「美味しいよ。ひとくち食べる？」

「食べない！っーか美冬、食べてる場合じゃないの」

「何で？」

「現国の樋口、死んだんだって！」

一呼吸おいて吐き出された緊迫した言葉に、口を開いたままの表情  
で固まる。

大きく数回瞬いた。

「……食あたり？」

「ちっがーう！真面目に聞け！」

だからあ、なんかの例えとかじゃなくてマジで死んだらしいんだっ  
て！

一気にかくし立てる苛立った声。

自分の席に座っている美冬は周囲を見渡し、  
目の前で険しい表情を浮かべるショートヘアのクラスメイトを見つ  
める。

聞き耳を立てるとクラスのあちこちで同じような会話をしているの  
が聞こえた。

「何それ。死んだのって、今日？」

「そ。なんか朝、廊下でぶつ倒れてたんだって」

「何でまた。誰かに刺されたとかいうオチじゃないよね？」

「いや、よく分かんないけど病気らしいよ……ってかさあ」  
急に小声になる。

由香は美冬の前の席に座ると、美冬の方に身体を向けた。

他人に聞かれたくない話なのか深刻そうな顔を近づけてくる。

「実は、ソレ絡みで変な話聞いちゃったんだよねえ」

「変な話？」

口を動かしながら美冬が首を傾げる。

由香の視線が伺うように動き、短い沈黙。

つばを飲み込む動作が見えた。

「黒い袴の女の子見ると死ぬらしいよ」

その言葉に動きを止めたのは美冬だった。

ひそめているはずの声が内側で大きく、何度も響く。

「職員室で聞いちゃったんだ。」

樋口が黒い袴の女の子がどーのって数日前から言ってたんだってよ  
由香は黙りこくった美冬の様子を気にするわけでもなく

椅子の背もたれを抱くような格好のまま視線を宙にさまよわせた。

「んでね、更にさ。あーちんの知り合いの友達も黒い袴の女の子見  
えるって言ってる

いきなり死んじゃったらしいんだわ。おっかなくね？」

「……」

「あれ？美冬、どした？」

身体を起こし、自分を睨むように凝視する瞳に尋ねた。

けれど、それは自分の方を向いているのに見えていないようでもあ  
り。

由香は美冬の顔の前で手を振ってみせる。

「おーい？」

「あ」

「美冬どしたの？中の人、留守になってた？」

「いや、そうじゃないんだけど」

我に返った美冬は、上の空のままできこちなく笑って唇を噛んだ。

一昨日の花屋の隣のビルからの飛び降り自殺に続き、また人が死ぬ話だ。

こんなにも立て続けにこんな話を聞くなんて。

しかも、由香の言っていた『黒袴の女の子』の噂。

それはウタカタという名の死兆星の事ではないのか。

以前の彼女の言葉やダンテライオンの語っていた内容を思い出せば、あながち自分の憶測は間違っていない気がする。

美冬の頭の中に疑問が駆け巡った。

疑問の中に浮かぶのは漠然とした不安に似た予感。

打ち消そうとしても、それは雲のように広がっていく。

「……立て続けにそんな話聞いたなって思ってた」

ため息混じりに呟くと、由香は好奇心をたたえた目を向ける。

所詮ごく身近な人間のものでない限り、死は他人事なのだ実感する。

手に持ったままのかつサンドを頬張りながら、指で唇をぬぐった。

「一昨日も飛び降り自殺の現場に居合わせてさ。あたしは直接見えないんだけど」

「ええ、マジで?!どい?」

「緑ヶ丘の花屋さん。ほら、奈々ちゃんが好みだった店員さんのいるお店だよ」

肩を掴まんばかりで食いついてくる声に、苦笑する。

美冬の顔に広がるのは憂鬱な色。

「あたしの友達が見ただけで、なーんか変だったらしいよ?って、  
というのがさ……」

声にかぶるようにして聞こえたドアが開く音。

ざわめきを断ち切るそれに視線が集中し、

クラスメイト達は自分の席に慌てたように着席した。

「おら、席付けー！ホームルームはじめっぞー」

室内に響く太い男の声。

驚いたように静止していた美冬は、慌ててパンを口に入れようとする。

「藤堂！おめえ、家で朝メシ食って来いって言うてるだろーが」

呆れた声と共に壇上から視線を向けられ、肩をすくめた。

「むぐう」

「……コイツ、家でも朝飯ちゃんと食べてんだけどね」

前の席の由香の背中が小さく呟くのが聞こえる。

離れた位置に見えるジャージ姿の男性教師の話に耳を傾けながら

美冬は咀嚼を続けていた。

### 3時限目。

美冬は通り抜ける声を聞きながら窓の外を眺めていた。

校庭では体育の授業をしているらしく鮮やかな色の点が散らばっているのが見える。

朝から学校は奇妙な雰囲気のまま、どの授業でも話す話題は同じ。生徒も教師も興味は男性教師の突然死に向けられていて、どこか上の空だった。

美冬は無意識のうちにため息をつく。

黒板に書かれた文字をノートに写しつつ、頭の中に浮かぶのは今朝聞いた噂。

そして、一昨日の飛び降り自殺。

「……ページ、3行目。この文が示すのは」

眠気を誘う声の中で周囲を見渡すと、広がっているのは相変わらずの風景。

机に突っ伏している者、ノートに写している者や  
引き出しに隠した何かを読んでいるらしい者の姿が見える。  
けだるささえ感じる静寂に満ちた空気。

気が付くと答えが出そうもないことを考えている事に気が付いた。

こんなにも立て続けに人が死ぬものなのだろうかと心の中で呟く。  
偶然か、それとも必然か。

真雪に聞いた話では一昨日の飛び降り自殺も異常なものであったら  
しい。

花を持ち、童話を語る飛び降りた男。

死は美冬にとつて身近なものだった。

此岸に身を置き、チェイサーという仕事をやっていれば嫌でも死を  
見ることになり

自殺のニュースも毎日のように報道されている。

けれど何なのだろう、この違和感は。

漠然としていて分からないが、どうしても

「……ハーメルンの街に、一人の笛吹き男がやってきた」

静寂をざわめきに変える声。

美冬が弾かれたように視線が集中している方向を見た。

席を立つ音。

教壇の目の前の席の男子生徒が机を見つめたまま呆然と呟いてい  
る。

まるで、夢でも見ているかのようだ。

「ネズミの被害に悩む人々に彼は言う『残らずネズミを退治しまし  
よう』」

「椎名?どうした、椎名」

周囲の人間が恐る恐る声をかけても反応はない。  
その様子は声が聞こえていないようでもあった。

波のように広がる戸惑いと不安、そして戦慄。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

教師が肩を掴んで椎名を揺すっても反応はなく、  
されるがまま、力なく身体が揺れる様は人形を思わせた。  
顔を上げる。

気が抜けた表情、焦点の定まらない瞳。

「それと引き換えに望むのはお金」

何処か遠くを見つめ、どこか微笑む声で言葉をつむぐ。

美冬は、数メートル先の椎名を怪訝な目で見つめた。

心が揺れているのが分かる。

「人々は笛吹き男に頼んだ」この町のネズミを一匹残らず退治して  
くれ」と『「

静かな声が夢心地で言う。

この教室からまどろみの時間は消えうせ、全ての目が椎名に向けら  
れていた。

「椎名！おい、しっかりしろよ！」

「……何アレ。ちょっとヤバくない？」

クラスのうちこちらから漏れる言葉。

息を飲み見つめる美冬の腕をつつく指。

我に返って顔を向けると由香が身体ごと振り返り、眉間にしわを深  
く刻んでいた。

「ねえ、どうしちゃったの？」

「……由香」

「あんなクソ真面目な椎名が、あんなになるとか有り得なくね？」

「ねえ、由香」

小声につられるように、つい声を潜め名前を呼ぶ。

周囲を見渡して前かがみになった。

そんな真似をしなくても周囲の人間の耳に届かないと思いつつも。

「同じだよ」

「へ？何が」

「同じなの、椎名君が」

「だから何と？」

訴えるような声に由香が困惑気味に聞き返す。

美冬と椎名を交互に見る視線。

「……笛吹き男はねずみを笛でおびき寄せた」

「飛び降り自殺した人とだよ。椎名君、多分その人と同じコト言ってる」

「はああ!？」

「川に沈め、人々の望みを叶えた」

声が入り混じる。

騒然とする教室。

椎名の肩を男子生徒が掴んで怒鳴るように声をかけるが反応はない。声の調子も音量も変わらず、淡々と語り続ける彼は機械を思わせた。

「ちよ、ちよと待って。どういう意味？」

「だってハーメルンって……真雪が言ってた」

怪訝な視線に畳み掛けるように。

「真雪が飛び降り自殺の人がハーメルンの話してたって言ってたんだよ」

美冬が張り詰めた声で自分に言い聞かせるように呟く。

その視線の先。

椎名は不意に右手を上げた。

彼を囲むように立っていたクラスメイトや教師は一瞬、怯んだような動きを見せた。

次の瞬間、美冬が見たのは。

握られた右手をゆっくり開く椎名。

舞い落ちる、目に染みるほど白い花一輪。

スローモーションで踊るように床に落ちる。

誰もが目で追った。

「！」

美冬は目を見開いたままで思わず口に手をあてた。驚きの声を上げるのを抑えるように。

「けれど人々は……金を……は」

突如、椎名は視界から消え。

糸が切れたように足元から崩れ落ちた。

叫び声と机や椅子がぶつかる派手な音が混じりあい、更に教室は騒然する。

追い討ちのように大きく響く床に倒れこむ音。

ここに日常はない。

動揺は感染し、大きな波となった。

「椎名！おい、椎名！！」

「救急車！」

「しっかりしろよ！」

一拍置いて怒号に似た声が飛び交い、足音が激しく行き交う。

ドアを力任せに開け放ち、廊下を掛ける音。

強い口調で指示する声、悲鳴に似た呼びかけ。

混沌の中

美冬は固まったように微動だにせず、ただ呆然とするしかなかった。

「ハーメルンの笛吹き男の話して倒れた？」

昇降口から出た所で真雪が顔をゆがめて声に戸惑いを滲ませた。

ブレザーとワイシャツの前の開け、制服を着崩した彼の隣で

沈んだ表情の美冬はうなだれるように頷く。

下校時間には早すぎる昼前の時刻、校舎から吐き出される無数の生徒。



多くの人影に追い抜かされながら一人は今にも止まりそうな速度で歩いていた。

「その話はよく知らないんだけど……多分、そうだと思う。ハーメルンの街って言ってたし」

「またその話かよ。なんなんだ？ 一体」

空を仰いで、顔をゆがめると苛立ったように呟いた。

「……しかし、人が倒れたぐれーで臨時休校ってのも変な話だよな。」

いや、倒れたくらいって表現はちょっとおかしいけど」

「言ってる意味は分かるよ。普通じゃ考えられないよね」

「ああ。確かに動揺してるからつー理由は分からないでもないけどどーも過敏すぎる気がすんだよな、反応がさ」

自分を包むような暖かな日の光も今は感じる事が出来ない。

周囲の笑い声混じりの話し声も耳に入った側からすり抜けていった。

「それは樋口先生が亡くなったからでしょ？」

同じ日に二人もそうなっちゃったら仕方ないんじゃないかな」

ため息混じりに呟く。

真雪が動きの動きが止まり、顔を向けた。

「……今日倒れた奴、死んだのか？」

「助かる可能性は低いんじゃないかって言ってた。教室で倒れた時点で呼吸とか止まって……」

美冬の足が止まる。

考え込むように何も無い前方を睨むように見つめていた。

視線が何かを求めるように動き、唇を噛む。

「どうした？」

数歩先で立ち止まった真雪が振り返った。

何か言いたそうに見つめる顔に視線を向け、言葉を待つ。

「真雪、やっぱり椎名君は飛び降り自殺した人と同じだと思うんだ」

「なんだよ、急に」

「共通点多すぎるの。どうしても偶然には思えなくて」

「今回は自殺じゃねえじゃん。倒れたんだろ？」

「そうだけど」

下校する生徒の視線を感じる。

人通りの多い校門までの道で男女二人が立ち止まり、

深刻な顔をしていれば興味をひくのは当たり前かもしれない。

「でも、白い花持ってたしさ。それに……」

「天使じゃなかった」

歩き出そうとした真雪の動きが止まる。

静止する時間。

「天使のベールが見えなかったの。」

普通、呼吸停止するような瀕死の人だったらベール見えるのに」

「またか？」

搾り出すような声に美冬が無言で頷く。

真雪の脳裏に浮かぶのは血にまみれた飛び降り自殺の光景。

あの時は気が付かなかったが、

考えてみれば息も絶え絶えだった彼にベールは見えなかった。

死期の近い人間であれば見えるはずの白いベール。

それは一時的に死に直面した人間にも見えるはずなのに。

「一回ならともかく2回もなんて。」

しかもベールだけじゃなくて白い花も一緒なんだよ？」

不安げに瞳が揺れ、伏せられた。

視界の端で身を踊らせた木々の葉ずれの音が聞こえる。

押し黙る二人の間に割り込むように吹く風。

俯いたままで唇を噛む美冬の頭に手を乗せた。

驚いて顔を上げた先にあるのは、軽く息をつく穏やかな顔。

言葉を選ぶ無言の後、真雪が口を開きかけると。

「立花君、彼女を泣かせてはダメよ？」

二人を追い抜く微笑を含む楽しげな声。

その声の方向に思わず顔を向ける。

真雪の顔に広がる苦笑と呆れ。

「泣かせてねーっつーんだよ！」

「ユキの浮気者。僕がいながら他の女の子に手を出すなんて」

「変な事言っんじゃないやねえよ、千里！お前がそっという事言っから……

！」

黒髪の女子生徒と中性的な顔立ちの男子生徒が並んで校門へ向かうのが見えた。

ため息をついて髪をかきあげる。

振り向き笑う二人に、苦笑しながら小さく手を振ってみせる真雪の隣で

美冬は不思議そうに見比べていた。

「浮気者？」

「違っつて、あれは俺の友達とその彼女だ。あーやって俺の事よくからかうんだよ」

「……僕がいながら？」

「だーかーら！……だー！もう、あいつらのせいで完全に調子狂った！」

怪訝そうな声に答える疲れた声。

真雪は美冬の髪を乱すように強めの力で頭を撫でる。

「考えるのやめだ！こんなの俺達が考えても分かりやしねえよ」

「え？！つてか、髪の手毛ぐちゃぐちゃにしないでよお」

「出かけんぞ、美冬。付き合え」

頬を膨らませて髪を手ですく美冬を真雪が笑う。

今までの重い雰囲気を変えようとするかのように。

「どーせ事務所に行くには早い時間だからどこか行こう。気分変えようぜ」

「へえ?! い、いいけど……でもさ」

「『でも』はナシだ。このままだと必要以上に暗くなっちまいそうだしな」

背中を軽く押すように触れる手。

真雪は口元に笑みを浮かべて歩き始めた。

呆気を取られたように呆然と見つめ立ちつくす美冬に振り向く。

「笑え。しかめっ面ばっかしてんの、かわいくねーぞ」

笑いを含んだ声が前を向き、歩き始めた。

数秒の沈黙。

光を放つような緑の中、美冬は慌てたように前を歩く背中を追いかける。

アスファルトを叩く靴音が周囲の笑う喧騒の中に溶けた。

真雪は隣を歩く美冬を眺め、思わず笑みを浮かべた。  
もし尻尾がついていたら、ちぎれんばかりに大きく振っている事だろう。

見ている方にまで伝染する内側から染み出すような笑顔と、まさに尻尾のように機嫌よく揺れるポニーテール。  
靴音までが嬉しげに聞こえるから不思議だ。

「楽しそうだな」

「だって真雪と一緒に出かけするの、久しぶりなんだもん」

「ああ、そういえば久しぶりかもな」

普段は学校にいるはずの時間に、こうして外を歩いていると不思議な気分になる。

開放感と違和感が混じり合った非日常さえ感じる空気。

そんな風に思うのは光が溢れるような、この天気のせいもあるのか  
もしれない。

「ね、どこ行く？ゴハン食べるのは決定だとして」

「んー。美冬が行きたい所あるなら任せるけど、その辺で買い物でも……」

考えながら視線を道沿いに並ぶ店舗の列に投げた。

二人の歩く通りには映画館やゲームセンター等のアミューズメント施設が多く

賑やかに告知をするポスターやのぼりが目に付く。

耳に届くのは、煽るように自己主張を繰り返すアナウンスや音楽の洪水。

真雪はわずかな静止の後、美冬に顔を向けた。

その顔には何かを見つけたような表情が浮かぶ。

「そついえばお前、今日誕生日だよな？」

「え？」

「違ったか？確か18日だったと思うんだけど」

美冬は瞬きも忘れ、目をわずかに見開いて真雪を食い入るように見つめた。

数秒間の沈黙。

口元に浮かんでいた驚きは次第に花が開くように笑顔へと変わる。

「ええ？！やだ、覚えててくれたの？」

「当然。相棒の誕生日くれー覚えとかねえとな」

「うわー、ビックリした！真雪って自分の誕生日も覚えてないのに顔を覗き込むようして言われた言葉に苦笑する。

ほのかに感じる甘い香りは美冬の香水だろうか。

「誕生日おめでとう。一歳お姉ちゃんになったな」

「ドウフフ、ありがと！ってか、微妙に子供扱いしてない？」

「気のせいだろ」

頭上から降り注ぐ太陽の光に目を細めた。

車通りがなく、歩行者天国と化している道を駅を背にして歩く。そろそろ昼食時なのだろうか、人の姿が増えてきたように思う。

気がつけば近くのビジネスビルの群れから出てきたらしいスーツ姿も多く見受けた。

「よし、今日は美冬の誕生日プレゼント選ぶか。お兄ちゃんが何か買ってやるう」

「ええ？！いいよ、そんな！誕生日覚えててくれただけでも嬉しいのに」

「遠慮すんなよ。何か欲しいモンねえの？」

横からポケットティッシュを差し出してくる手を軽く一瞥して言う。隣を見ると困ったように眉をひそめ、唇に指を当てている姿がある。「何でもいいから言ってみる」

真剣に考え込む姿に吹き出しながら真雪が美冬の頭を数回軽く叩いた。

答えを待つ静寂が流れる。

すれ違う人々や店のディスプレイを機嫌よさそうに眺める視線。

まるで何かを口ずさみそうな表情で。

不意に視線を感じて顔を向けると美冬が見上げていた。笑みの中に混じる、どこか真剣な眼差し。

「お、浮かんだか？」

問いに頷き。

「お前」

真雪が歩きながらバランスを崩した。

ため息をついた後、何か言いたげに呆れたような視線を向けるが言葉は伴わず。

迷うように髪をかいてから一拍置き。

「……上等だ。のし付けてくれてやるうじゃねえか」

わずかに身体を屈めるようにして美冬の顔を覗き込む。

「言ったな。後で嘘でしたとか言うんじゃないぞ、真雪」

「男に二言はねえっつーの。ほら俺やるって。どうしたいのか言ってみるよ、ん？」

二人で睨む真似をするものの、強い語気とは裏腹に目が笑っていた。そして同時に顔に笑みを広げる。

「……ごめんなさい、嘘です」

「おっし俺の勝ち！」

声を震わせながら笑う美冬の横で、真雪が身体をそらせて笑った。

「で、何が欲しいんだっつーの。塗り絵か？魔法のステッキか？」

「がー！だから子供扱いしないでって言ってるでしょー！？」

肩を揺らして笑う真雪の腕を掴んで前後に揺らしながら歩く。

前方に見えてきたのは先月オープンしたばかりの大型ショッピングモール。

人が少ない平日にも関わらず、その周辺だけは混雑している。

美冬は何かを思い出したように真雪の腕を軽く叩いた。

「あ、そうだ！」

笑い声を引つ込めたものの、目が笑ったままの真雪が顔を向ける。

「真雪の誕生日も一カ月後だよね」

「そう……だったか？」

片方の手をポケットに突っ込んだ真雪が首を傾げて上空を睨んだ。視線の先には、天へ向かって伸びるような建物達と晴れていてもくすんだ色の空。

「んもー、自分の誕生日になるとコレだよ」

「そんなモンよ？自分の誕生日なんざ、あってねえようなモンじゃん」

「なんだかなあ……まあ、いいや。今日、真雪の誕生日プレゼントも選びたい！」

嬉しそうに袖を引つ張る美冬の顔から横に視線をそらす。

何かを思案する表情。

再び視線を戻すと、その顔には苦笑が広がっていた。

「全然先じゃん。つーか別にいらねえって」

「いいの！あたしがあげたいんだもん」

「いや、いいから」

「そんな事言つと勝手に選んじゃうからね。」

どーせ真雪だから『別に欲しい物ない』って言うんでしょ？」

頬を膨らませて、更に強い力で引つ張る手。

ショッピングモールの入り口の前で、美冬を促すように背中を軽く押す。

入ると同時に空調から吐き出される冷気混じりの微風を感じた。

真新しい白が眩しい空間。

吹き抜けになっっているせいか、都心の店舗とは思えないほど広く感じる。

「勝手に選ぶって、ハムでもくれんのか？」

「……それ誕生日プレゼントっていうか、お歳暮じゃない？」



午後2時45分。

頭上にあつた太陽は傾き、世界は午後特有のゆっくりと流れる時間に支配されていた。

「清掃局の煙突があそこに見えるから、事務所はあの辺かな？」

霞んだ景色を指差して振り向く顔が笑う。

シヨッピングモールの屋上は四方を高いフェンスが囲み、緑に溢れていた。

遊具やフードコートがあるせいか子供の歓声で満ちている。

「しくじった。お前と買い物行くとすげー歩くの忘れてたわ……」

「疲れるの早すぎない？体力なさ過ぎ！」

「お前みたいに元気有り余ってるワケじゃねえんだよ。」

仕事行く前から疲れるとか勘弁してくれ、マジで」

美冬から少し離れた位置のベンチ座る真雪が脱力した状態でうめくように言った。

ベンチにもたれ、仰ぎ見る。

空にはカラスが笑いながら通り過ぎていく。

「ちよつと歩いただけでそんなんだから、スタミナないとか言われちゃうんだよ」

「お前、ためにしに万歩計つけてみる。普通の奴より全然歩いてるはずだぞ」

「そんな事ないもん。真雪がもやしっ子なんだ」

少し離れた位置でフェンスを背に美冬が唇を尖らせた。

そんな様子を苦笑気味に眺め、ポケットに手を突っ込む。

美冬がいつものように笑っている事に真雪は安堵を覚えていた。

昨日の今日で2回も人の死に直面してシヨックを受けるのは当然だ。死神である自分とは違い、人の死は身近なものではない。

けれど美冬には笑っていて欲しかった。

彼女が笑えば自分も笑えるから。

他人の表情一つでこんなにも気持ちが変わるものなのかと、心のどこかで呆れる。

「こんな所で寝ちゃったら日焼けしちゃうよ？」

自分を覆うような影に気が付き、視線を向ける。

美冬が目の前に立って前かがみになって覗き込んでいた。

「寝てねえって。つうか俺、日焼けしねえんだわ」

「きい、憎い！死ねばいいのに！」

「いつてえ！何で叩くんだよ」

屋上の片隅で子供の笑い声に混じり男女のやり取りが響く。

周囲に人の姿はなく、あるのは仕切るように並べられた植物の壁。

この一帯は、屋上というよりも庭という表現が合っている気がする。

「美冬」

「なによ」

「手、出して」

突然投げられた言葉。

首を傾げるような仕草をしながら華奢な手が戸惑い気味に差し出された。

全身から漂う怪訝そうな雰囲気に、思わず笑みが漏れる。

「ちょっと握ってみ？」

「何するの？」

「いいから。ほら、拳作れ」

ゆっくりとした動作で手を握る。

真雪はポケットから拳を出し、美冬の手の上に乗せた。

ちょうど拳が上下に二つ並んでいる状態。

不思議そうに見つめる目と、笑いをこらえるように細められた目がぶつかる。

空気が変わっていく。

「美冬」

穏やかな中にも漂う緊張に似た何か。

「お前と会って1年くらいしか経ってねえけど……なんつーか運命の出会いっつーの、した気がするんだ」  
赤紫色の瞳に引き込まれそうになる。

「お前はキレやすいし、暴走するし、血の気も多いけど俺にとつちや最強の味方で最高の相棒だ」

視線をそらせず、息をする事さえ忘れそうになった。

「俺は、お前の剣になりたい」

二人は固まったように微動だにしない。

「守り、支え、一緒に戦う剣だ」

二人だけではなく、景色や時間でさえも。

「だから」

「だから？」

聞き返す声に微笑む。

無言の時間は重苦しいものではなく見つめ合う時間。目を伏せて、もう一度視線を向ける。

「これからも、ずっと一緒にいよう」

美冬はわずかに目を見開いたまま、止まった。

内側で大きく響く声。

身体が動悸に合わせて脈を打つように。

視界の端、スローモーションで緑が揺れるのが見える。

「真雪」

「ん？」

落ち着かない視線の中で呟いた声は、相手に届いていた。優しげな眼差しが問う。

「それってプロポ……」

「ち、ちが！」

言いかけた言葉を真雪が慌てたように打ち消す。

思わず大きな声を上げる。

「違う！ち、違うからな！違うんだ」

真雪は視線をせわしなく動かしながら同じ言葉を何度も繰り返した。声に滲む焦燥と紅潮する顔。

落ち着かない動作で周囲に視線を巡らせたり、髪をかき上げる動作をするが

美冬と視線を合わせようとしない。

「真っ赤になってる」

「う、うるせえ！ほっとけよ！」

「そんな真雪、久し振りに見たかも。あの時以来？」

「おま……っ！そんなん忘れる！だーもう、恥ずかしくなってきた！」

あからさまに動揺する様子に美冬は小さく笑いを漏らした。

二人の視線が合っても、すぐに真雪が視線をそらす。

「そ、それより……手！」

「え？」

「手、開けるって」

ふて腐れたように、ぶっきらぼうに放たれた言葉。

今まで握ったままだった右手に気がつき、美冬はゆっくりと手を開く。

恐々と開いていく動作はまるで怯えているようでもあった。

「……え？」

思わず声が出る。

開いた手、視線の先。

手のひらにあるのは日差しを受けて黒い光を放つ指輪。

「ええ！？」

指輪と真雪を何度も交互に見比べながら、驚きの声を上げた。今まで何も持っていなかったはず。

いつの間に手の中に指輪が入ってきていたのか。  
美冬は啞然とした表情で状況を把握しようとする。

「何これえ！？あたし、なんで指輪持ってたんのぉお！？」

「ま、こんなの魔法使いレイヴン君にかかれれば楽勝だな」

「どうなってるのー?!」

「さーあ？」

混乱した様子を笑いながら眺める真雪。

足を組んで、彼女の手のひらの上から指輪をつまみ上げる。

美冬の左手を取り。

「……どの指がいい？」

「左手の薬指って言ったら、はめてくれるの？」

「サイズが合えばな」

「さつき小指のサイズ計ってたじゃん」

笑い合い、交わされる言葉。

真雪が美冬の小指に指輪をはめると、その手を両手で包むように。

口の端を上げて、おどけた瞳を向けた。

「契約完了、なんてな？」

にわかに強く吹く風に髪を巻き上げられる。

美冬は首を傾げる動作をしながら、右手を唇に当てた。

目を閉じたままで微笑むように。

ベンチに座り、見上げる真雪に顔を近づけるように前かがみになる。

「じゃあ、あたしも」

「ん？」

不思議そうな視線。

真雪の視界に影が出来た。

美冬の垂れた髪が頬に触れ、その感触に目を細める。

至近距離に見えるのは笑う顔。

「あたしは君の剣だよ」

額同士を付け、まるで体温を確かめ合うように。

囁くような声が耳元で溶けていく。

「君で強くなる、いつでも一緒にいる」

触れた場所から相手の感情が流れ込んでくるような錯覚さえ覚えた。うるさいくらいに聞こえていたはずの歓声も聞こえない。

「君は運命の相手ってヤツなんだ、多分」

どちらからともなく、こぼれるため息のような笑み。

視線がぶつかる。

「……もつと仲良くなるうぜ、相棒」

美冬の声に、口角を上げる。

一番近い距離。

「オーケイ。望む所だ、相棒」

真雪が目を伏せるように微笑んだ時。

「あー！あの人達、ちゅーしてるー！」

無邪気な子供の声が屋上に響き渡った。

遠慮のない視線が向けられているのを感じる。

不意に目の前にあつた気配が離れたと同時に。

「してねえよ！」

二つの半笑いの怒鳴り声が重なり、答えた。

同じタイミングで同じ言葉を。

一瞬の沈黙の後、思わず顔を見合わせて声を上げて笑う。

「同時に言ってるし」

「さっすが美冬。こんな時まで同じとはな」

子供の駆ける足音が聞こえる。

目に映るのは灰がかかった曖昧な色の青空。

だが、その色でさえ綺麗だと思った。

「指輪、ありがとね」

ベンチの背もたれに肘を乗せた真雪に投げられた声。  
答えるように軽く頷く。

「なんだか、二人して告白っぽい事しちゃってたね」  
「だな」

「真雪はむしろプロポーズしてたけど」

「それは言うな。つーか、お前だって似たようなもんだろ」

決まりが悪そうに拗ねた口調で言うのに対し

美冬は、その様子を楽しむかのように目を細めた。

「いや、真雪の方がプロポーズ度は高いね」

「プロポーズ度って何だよ」

呆れた声が呻く。

不意にリズムを取るように身体を動かしていた美冬がフェンスの側  
へと向かう。

自然と目で追っていた。

言葉などなくても伝わる気持ちはある。

けれど口に出さなければ相手には伝わらないとも思う。

だからこそ言いたかった、彼女に。

決意に似た想いを。

何がそうさせたのか。

何か予感めいたものを感じたのか。

それは真雪本人も、まだ気付いてはいなかった。

7 - 3 比良坂

いつもと同じはずの比良坂事務所に微量の違和感を感じた。戦闘服とも言える黒いスーツに着替えた美冬はネクタイを締めながら辺りを見渡す。

いつもの夜の匂い、窓の外の毒々しい色彩のネオン、笑う喧騒。整然と並ぶデスクも、室内の様子もいつもと変わらない。違おうとすれば。

「珍しいね、みんながこの時間に揃ってるなんて。何かあるの？」  
窓の外を眺めていた長身の男　ウォークライに並ぶと見上げて尋ねる。

声に気付き、視線が向けられた。

不気味なほど黒い瞳は更に威圧感を与える。

比良坂にいる人間が皆そうであるように、彼もまた黒いスーツを身にまとっていた。

「……客だ」

「お客さんが来るの？」

黙って頷くと視線を再び外へと向ける。

美冬は言葉の続きを待っていたが、補足される様子もなく。ただ不思議そうに見つめる翡翠色の瞳。

「客つてのもちよいと違うんだが、説明が難しいねエ」

甘い香りに気がつくくと視界の端に黒い着物が映った。

隣に並んだサーペントがキセルをふかしながら首を傾げて、何か考えているように。

「そうなの？」

「ああ。しかもいつ来るか分からないのさ。あの人は神出鬼没だからね」

「で、ずっと待ってるの？」

「そうさね。まったく困った人だ」



言葉と裏腹に唇が楽しげに微笑を浮かべる。

美冬が納得したかのように鼻に抜ける声を出した。振り向くと揺れる髪。

見え隠れする人影や遠く感じる気配を一瞥してからウォークライとサーペントを交互に見比べる。

「じゃあ、お客さんが来る前に軽く掃除した方がいいよね？」

「そうだね」

「よっし！あたし掃除しとくよ」  
どこか楽しげな声。

言葉が終わるか終わらないかのタイミングで身を翻した。靴音が室内を横切っていく。

「ラプター、レイヴンはどうした？」

美冬を視線で追っていたウォークライが気がついたように。

「隣の部屋で着替えてる！」

姿が見えない状態で、声を張り上げるように答える。

落ち着きのない様子に二人は笑い混じりで顔を見合わせた。

閉ざされた洗面所という名の空間。

水の音と共に美冬の鼻歌が聞こえる。

その声は表情と同じく、楽しげで笑っているようだ。リズムを取っているようにわずかに首を左右に動かす。

隔絶されている、この静かな場所の空気を彼女が変えていく。

「まずは掃除機かけて、それから机を拭いて……」  
手を洗いながら何気なく鏡を一瞥する。

写るのは動かない無機質なトイレの個室と

ドアを開けっ放しで洋式便器に座る金髪の青年。

「ふええええ?!」

思わず声を上げた。

美冬は全身に電気が走ったかのように凍りついたまま動かない。ただ聞こえるのは出しっぱなしの水の音と、背後から聞こえるペーシをめくる音。

「あ、え！？いや、ええ！？」

動揺を隠しきれない様子でせわしなく周囲に視線をめぐらせ、言葉にならない声を上げる。

鼓動が早くなるのを感じた。

思いがけない事に思考が抜け落ちてしまう。

落ち着け、と美冬は繰り返した。

深呼吸一つ。

自分がここに入ってきた時に彼は居ただろうか？

居なかった気もするし、もしかしたら気付かなかったただけかもしれない。

チエイサーである自分が気配を感じないなんて滅多にある事ではないと思うが。

……いや、そもそも彼は何者なのだろう。

美冬は戸惑いと動揺を顔に広げたままで鏡越しに彼を観察した。ドアを開けっ放しでトイレの個室に入るといふ行動はともかく、この界限ではよく見かける風貌の若者だ。

中途半端に伸ばした肩にかかる長さの金髪。

細身の体型と、カジュアルでスリムな印象の服装。

一言で言うところ『ギャル男』だ。美冬が心の中で呟く。事務所に無断で入ってきたのだろうか。

それとも、考えにくいが事務所の誰かの知り合いか。

「水、出しっぱなしだぞ」

思考を破った声は上の空の口調だった。

感情が読み取れないアルトの声。

「あ！ごめんなさい」

我に返った美冬が慌てて水道を止めて、一息つく。そこで更に何かに気がついたように。

「って、ちよつと待てーい！」

勢いよく振り返り、美冬はのけぞるように洗面所に手をついたままで目の前の青年を睨んだ。

「あんた、何してんのよ！」

「でかい声出すなって、もう。ビククリするだろ」

逆上する美冬とは反対に青年は読んでいた雑誌から視線を上げると眉間にしわを寄せたまま、たしなめるように言った。

「……何してるって、ウンコだよ」

ごく当然のように吐き出される。

美冬は啞然とした表情のまま口だけを動かしていたが。

「そうじゃなくて！」

「そうじゃなければ何だって言うんだ。皿洗ってるように見える？」

「そうじゃなくてよ！」

怒鳴るような声に、更に言葉を重ねようとしてため息。

怒っている理由が分からないらしい青年は不思議そうに美冬を凝視する。

相変わらずジーンズと下着をふくらはぎの辺りまで下ろし、雑誌を持ったままで。

「なんでウンコすんのにドア開けて入ってんのよ！」

「そのほうが気合入るんだもん」

「知るか！あんた、ばっかじゃないの!？」

この場所に静寂の気配はどこにもない。

一方的な美冬の怒鳴り声ばかりが響く。

「あんたは気合が入っていいかもしれないけどね。」

こっちにしてみりゃ見たくもないキバる姿見せられて気分悪いっつ

「の！」

腰に手を当てた美冬が一気にまくしたてる。

「ドアくらい閉めなさいよ！」

まるで相手を殴るような口調。

言い放った美冬は息切れをしていた。

その向かい側では呆気にとられたような表情を浮かべる顔。

勢いにか、それとも言葉にか。

そして数秒後。

「なるほど！なるほどな！」

聞こえてきたのは爆笑と、その狭間で漏れた言葉。

身体をのけぞらせるようにして天井を仰いで青年は笑っていた。

声が反響する。

「笑い事じゃないんだってば！」

「うん、悪い。悪かった。ふふ、なるほど！」

「何がおかしいのお!？」

笑っている理由が分からず不機嫌になる。

頬を膨らませて美冬が拗ねた口調で問うた。

そんな彼女の様子を気にする様子もない青年は目を擦りながら肩を

揺らして笑っている。

笑いを収めようとしているのに、こみ上げてくるようだ。

「とりあえずさ」

長い指がドアを示す。

「パンツとズボン上げるから出て行ってくれない？」

俺のブラブラしたモン見たいなら別だけど」

軽いため息をつき、おどけるような言葉に美冬の動きが止まる。

口が開いたまま静止。

そして

「あんだ最低！言われなくても出て行くわよ！」

捨て台詞のように言い捨て、ドアの閉まる音。

密室の中、再び青年の笑い声が聞こえた。

「どうした？美冬」

全身から怒気を発しながら一同が談笑する輪の元へ大またで歩いてくる美冬に

真雪が戸惑いがちに尋ねる。

無理もない。

無人であるはずのトイレで美冬の怒鳴り声が響いていたのだから。

「ウンコがムカつく」

「は？」

口の中で苛立ったように繰り返す美冬に、怪訝そうな声と視線が向けられた。

「お嬢、あんた誰と話してたんだい？」

「……それ以前に女の子なんですから、あまりそういう事を言わない方がいいですよ」

首を傾げるサーペントと眉をひそめるノクティルカ。

その二人を、ふて腐れたように髪をいじりながら上目がちに見つめる。

「だーつてえ。さっきトイレに行ったら……」

「なんだ。みんな揃ってたのか」

声が重なる。

いつせいに視線がそちらの方向に集中する。

洗面所のある方向から歩いてくる青年が、口の端を上げた。

わずかに驚いたような表情を浮かべる一同の中で、美冬だけは怪訝な色を滲ませる。

「閻王。いつ、こちらにいらっしやったんですか？」

「ん、少し前。悪かったね、急に呼び出して」

「それは構いませんが……おいでになっているのなら声を掛けて下さい」

苦笑混じりのダンデライオンの声に閻王と呼ばれた青年は片手を上げてみせた。

会釈をする周囲に頷き、止まる視線。

視線の先には美冬がいる。

「紹介しますね、閻王。彼女の名前はラプター。」

カルラの所から派遣されたB＋クラスのチェイサーです」

視線に気がついたダンデライオンが美冬の背に軽く触れた。

注目される中で戸惑いがちに会釈をする。

けれど、美冬の瞳は閻王を探るように。

怪しい人物ではなく、比良坂の関係者だった事へと安堵感と共に閻王と呼ばれる青年の正体への疑問。

他のメンバーが会釈をし、所長であるダンデライオンが敬語を使っている所を見ると

それなりのポジションの人間であるようだ。

それに加えて美冬に戸惑いを与えるのは彼の持つ空気だった。

人間でもなく、今まで感じた事のない漠然とした威圧感。

それは彼自身の口調や振る舞いから、かもし出される物ではない。

「おー、お前がラプターか！話は聞いてるぞ。」

なんだ猛牛って言うからすっげーの想像してたけど可愛いじゃん！

なあ、レイヴン？」

「……なんで俺に話を振るんですか」

観察していた美冬の頬を閻王が両手でつまみ、左右に広げるように引っ張る。

慌て、戸惑う様子を気にする事もなく頬の感触を楽しむように。

「ほっぺ柔らかいなあ。うはは、びろーん」

「あつっ」

「びろろーん……ん？」

頬をつまんだまま、不審そうな声を上げた閻王が身をかがめるようにして覗き込む。

顔を近づけられた美冬はのけぞりながら身体をこわばらせた。

普段なら手が出そうなものだが、相手の正体が分からない以上無闇に手を出せない。

「ひ、ひはいれふー」

「ダンデライオン、こいつは一体なんだ？」

デスクとデスクの狭間の開かれた空間、まるで円陣でも組むかのような状態。

その中で閻王は眉をひそめた。

それを見つめる周囲の視線。

「人間、じゃないよな。死神に似てるがそれとも違うし。

人外？……それも違うか。合う言葉がない」

「面白いでしょう？」

その言葉どおりの声だった。

「人間と呼ぶにはかけ離れている、死神と呼ぶには能力がない。

人外生物とも違うんです。ラプターは元人間としか言いようがありません」

「私共も調べてみたのですが、詳しくは分かりかねます。

ただ彼女は、かつて死兆星にキスをされた経験があるとの事ですが」  
ダンデライオンの言葉にノクティル力が付け加える。

閻王の水色の瞳が覗き込むたびに、美冬は目をそらしたい衝動に駆られた。

後ろめたい事などあるわけでもないのに心を見透かされそうで怖くなる。

けれど、そらせない。

固まったように見つめていた、お互いを。

「ふうん、相変わらずお前達は変な人材ばかり集めてくるね。

……って、そうだ！用事忘れる所だった」

頬を掴んでいた手を離すと、身体を起こしその場の人間に視線をめぐらせる。

「今日は俺、パシリで来たんだよ」

「旦那を使いつぱしりに使ったアとんでもない話だねエ」

「だろ？あいつらに言つてよ、サーペント。俺だって暇じゃないのにさ」

肩をすくめて見せた後、閻王は笑った。

そして、依然として不思議そうに自分を見つめる美冬の視線に気付くと

右手を差し出す。

「ああ、悪い。自己紹介がまだだったっけ」

閻王の肩越しにネオンの海が見えた。

整然とした室内、穏やかな中にもわずかな緊張感が漂っている。

それは彼がいるからなのだろうか。

「周りの奴等は俺の事を閻王とか閻魔とか呼ぶね。」

仕事は冥府の管理と死神のボスって所かな。まあ、仲良くしてよ」

美冬は恐る恐る手を差し出した。

わずかに力を込めて握られる。

見上げた先の顔は、その役職や名前とはかけ離れた人懐っこさがあった。

「よ、よろしくお願いします……あの、先ほどは失礼しました」

「あ？いいって、そんなの。ドア開けてウンコしてた俺が悪いんだし」

笑いながら顔を扇ぐように手を振ってみせる。

周りから漏れるのは苦笑。

どうやら彼の行動は今回だけの事ではないらしい。

美冬はこっそりと周囲を見渡し、片眉を上げた。

「ってというか俺、叱られたの久し振りだ。レイヴンに初めて会ったとき以来かな？」

ホント、お前ら似てるよ」



「その話はやめて下さい」

真雪がうつむき加減で視線をそらして気まずそうに呟く。

その様子をからかうような視線で一瞥した閻王が表情を引き締めた。美冬から離れる手。

「さて、本題に入ろっか。今回俺がここに来たのは……」

閻王はソファに座ると足をテーブルの上に投げ出し、書類をめくり続けていた。

まるで睨むような視線。

その他の人間はそんな彼の前に立ち、何かを待つように様子を伺っている。

「やっぱり」

考えの中呟く、心こころあらずな声。

「はじめはエラーだと思っていただけ、そうじゃない。

ノクティルカからの報告書読んだ時点で違和感があったが、これで決定的だ」

「どつという事ですか？」

張り詰めた声に見えない不安を感じて恐る恐る尋ねるダンデライオン。

閻王は頭を抱えるように、空いた手で自分のこめかみを指で等間隔に叩き続けていた。

「秩序が狂わされている」

書類を凝視していた顔を上げて正面を睨む。

その声に答える者は無く、誰もが次の言葉を待った。

「死亡予定表と実際の死の辻褄が合わない事が多くてね。

まだ命数があるはずの人間が死んでるんだよ。予定外の死が多すぎる」

かぶりを振る。

機嫌のよさそうな口調はどこにも無く、怒りを押し殺しているように聞こえた。

「予定外の死なら、死神が戻せばいいって思うだろ？」

「ええ」

「それが出来ないんだ、困った事に。」

どこかの悪い子が生き返れないように器用に壊してやがる」

不意に聞こえた何かが叩く音。

風が強くなったらしく、窓が震えた。

そんな音でさえも大きく聞こえる静寂の中。

「しかも戻せたとしても、お前達の手には負えない数だ」

この部屋で動いているのは閻王のみ。

「それが発生しているのは東京……しかも霧島区、もしくは近隣のみ」

息を飲み、驚いた。

そんな様子を知ってか知らずか閻王は思案顔のまま視線を横に投げる。

「はじめはツクヨミ 死亡予定表を管理してるマシンのエラーだ  
と思っただよ。」

それにしちゃ数が多すぎるし、明らかに何者かが手を下してる形跡があるんだ」

「それで……」

「そう、他部署と冥府が共同で調査してるってワケ。」

でも俺達だけじゃ手が足りないから、こっちで動けるお前達に頼みに来たんだな」

どこからともなく、ため息が漏れた。

確かに最近はこの岸だけでなく社会全体が妙な空気に包まれている。

それは口に出さなかったが、死神だけではなく此岸の住人が感じている事だった。

いいようのない不安と根拠の無い予感。

「でさ。お前達、なんか思い当たるフシない？なんか変だって思う事とか」

その言葉に真雪と美冬が顔を見合わせた。

まるで目で会話をするように。

「……閻王。死に瀕した人間にベールが見えない事はよくある事ですか？」

「と、言つと？」

「昨日と今日、2日続けて死に瀕した人間を見たのですが

兩名共にベールが見えなかったんです。しかも俺だけじゃない」

まるで咎めるような視線をまつすぐに受けたまま、真雪が顔をしかめて言った。

隣に立つ美冬の頭に手を乗せる。

「普段、俺達と同じように死期が見える美冬にも見えてなかった。

しかも揃いも揃って童話を話した上に、花持って倒れたんです」

啞然とするように言葉を失う室内。

押し黙る沈黙。

世界中から音が消えたように、耳には何の音も届かない。

「どういう事だ？」

独白がこぼれた。

「死神が死期を見る事が出来ない事は稀にある可能性はあるけど、しょっちゅう起こるわけじゃないし、二人とも見えないって事はなにに等しいはずなんだ。

それが……」

「これも秩序が狂わされている事と関連があるのでしょいか」

「まだ何とも言えないけど、可能性はあるな」

うなだれるように頭をかいていた閻王が顔を上げて深刻そうな目で

美冬を見つめた。

「猛牛」

「ラプターです」

「ああ悪い。」

「じゃあ猛牛、お前はベールの見えない奴が死にかけた現場にいたんだな？」

「……はい」

美冬は一瞬、何か言いたげな顔をしたが諦めたように頷く。

「話してくれる？という状況だったか教えてくれ」

「はい。今日の……」

美冬の言いかけた言葉を飲み込んだのは、遠くでけたたましく鳴り響く電話の音。

一同の動きが止まる。

視界の端にノクティルカが電話に向かう姿が見えた。

数コールの後、聞こえてきた話し声。

それを聞きながら美冬は閻王の視線に促されて、口を開きかけた。

「お話中、申し訳ございません」

受話器を持ったノクティルカが遠慮がちに離れた場所から切り出した。

口を開けたまま顔を向ける。

「仕事かい？」

「ええ、チエイサーギルドの方から緊急討伐の依頼が入ってきているのですが」

ダンテライオンと閻王が苦笑混じりに顔を見合わせた。

「俺のほうも大事な用ではあるけど、そっちほど緊急じゃないし行つて来いよ。」

なあ、ダンテライオン？」

「はい。ノクティルカ、ギルドの方には引き受ける旨伝えておいてくれ」

「了解しました」

ダンテライオンの視線が真雪と美冬に向けられ、微笑むように。

「仕事だよ、僕の可愛い天使達。行ってくれるかい？」

「あいよ。すぐに行つてくるわ」

美冬が頷きながら閻王を見ると、肩をすくめるようにして口角を上げて笑っていた。

「また後で話は聞かせてくれよ」

「はい」

事務所内がにわか慌しくなる。

空気が掻き回されるように。

「ノクティルカ、場所は？」

「天野駅の近くだそうですよ。詳しくは後でメールしますので」

「おう。とりあえず天野駅に向かえばいいんだな」

ネクタイを締めなおし、伸びをする真雪の後ろを動き回る美冬。

靴音が部屋中を行ったり来たりしている。

「おい、美冬！準備できたか？」

「投げナイフ、まだしまつてないよう」

「今日は使わなきゃいいだろ。どうせ投げた後、回収出来ねえんだから」

「真雪、待つてっば！」

「早くしろよ」

ドアを開けて今にも出て行く格好のまま静止した真雪。

今までの重い空気は消えうせ、事務所に日常が戻ってきたように見える。

美冬の焦る声と足音を耳にしながら、電話をしているノクティルカや台所に立つサーペントの姿を眺め。

退屈そうに待つ真雪に美冬が駆け寄った。

「おせえよ」

「何を言うか！全力で急いだもん」

「じゃ、行くか」

「うん。いつてきまーす！」

ドアの大きく閉まる音が静けさを呼んだ。

閻王は書類を手にしたまま、身体をひねり二人が消えたドアを見つめる。

小さく笑みを浮かべ、聞こえない音に耳を澄ましているように。

「……祈ろう、お前達の未来に」

人の波は途切れる事を知らず、何かに恐れるように先を急ぐ。

それはまるで川のようにであり自分達もまたその一部であるのだと。

中央改札を抜け、真雪と美冬は誰かに背を押されるように出口へと向かっていった。

「場所は天野区立岩戸小学校の駐車場だつてさ。岩戸2丁目っつー事は結構近くだな」

真雪は携帯の液晶を眺めたまま、小さく唸る。

頭の中で地図でも広げているのだろうか、何かを考えているような顔つきで。

「岩戸小学校？」

「ああ」

「あそこつて去年廃校になった所だよね、確か」

帰宅ラッシュが過ぎた時間だというのに、ターミナル駅である天野駅は人で溢れかえっていた。

週末であるせいか行きかう人々の雰囲気はどこか浮ついているように思える。

構内アナウンスや雑踏に紛れそうになる声。

「そうだったっけか？」

「うん。覚えてない？ 都会の真ん中で学校が消えるとか言ってるニユースになつてたじゃん。」

建物どうするんだーとかさ」

「あー、はいはい。誰かがそんな話してたな。」

何かに使いたいけど』出る』噂があつて放置されてるってヤツだろ片眉を上げる。

「そりゃ出るだろうなあ。なんせ討伐依頼が出るくらいだし」

真雪は退屈さを滲ませた声で言った。

自分を追い越し、すれ違う人々の楽しげな顔を一瞥する。

目の前に伸びる階段の先には穴が開いたような漆黒の夜が広がっていた。

「ね、ターゲットの情報は？」

「まだ来てない。向こうに着いたら連絡してくれって言ってたからその時に知らされるんだろ」

「今日はどんな奴かなあ。簡単な仕事だったらいいんだけど」

「ああ。でも緊急でウチに回ってくるっつー事は十中八九、面倒な案件っぽい気がする」

階段を上る無数の靴音の中で美冬が大げさにため息をついた。うなだれるように俯くと髪が前に垂れる。

「あとでギルドの連中シメてやるつかしら。」

毎回毎回、人に変な依頼ばっか押し付けやがって」

「やめとけ、美冬。更に面倒な仕事しか来なくなるぞ」

「むぎー！なんだよ、こんちくしょーめ。死ねばいいのに」  
ふて腐れた声に苦笑を漏らす。

階段を上り終えて目に飛び込んできたのは

大通りを挟んだ目の前のビルの壁に張り付く大型スクリーン。

待ち合わせ場所の定番であるその周辺は、ひときわ人の多さが目立つ。

『緊急特番、東京ミステリースペシャル！こんばんはあ、司会の綾崎ルナでえすっ！』

大画面から聞こえる甲高く甘ったるい女性タレントの声があたりに響き渡る。

小規模な公園のような、開かれたこの場所にたたずむ人々は

スクリーンを眺める者、電話をかける者、

足早に立ち去ろうとする女性に声をかける者と様々だ。

『今日は東京の都市伝説や、最近頻発する突然死などを

あたし達、ミステリーハンターが検証しちゃいたいと思いまーす！』

『突然死』の単語に反応し、真雪は思わず仰ぎ見たが。

その内容と場違いなほど明るい声に、いぶかしげに目を細めた。



「どうしたの？」

気がつくとも美冬が真雪の腕を掴んで不思議そうに見上げている。

彼の目線の先と顔の間を、せわしなく行ったり来たりする視線。

「いや、なんか内容と雰囲気全然あってねーなと思ってさ」

「ルナさんの空気の読めなさ加減はいつもの事じゃん。何を今更」  
苦笑混じりの声。

「どうせああいう番組は面白半分なんだし、いいんじゃないの？」

「まあな」

「身近な人が死なない限り、普通の人にとって他人事だよ」

どこことなく寂しげにも聞こえる声。

視線を向けるが、突風に巻き上げられた髪で美冬表情をうかがい知る事は出来なかった。

自分達を包むのは夜の空気と、眠らない街の喧騒。

熱に浮かされたように華やぐ雰囲気の中にも此岸の匂いは立ち込めている。

「そういえばさ」

突然、声のトーンが変わる。

翡翠色の瞳は何かを思い出したようにおかしそうに笑っていた。

「ねえ、今日会った閻王って本当に閻魔様なの？」

数秒の間、真雪もつられるように笑う。

二人の足は自然と、人ごみから外れるように西のビジネス街へと向かっていった。

「ああ。信じられねえだろ？」

「うん、正直いまだに信じてないかも。普通の人じゃないって言うのは分かるけどさ」

「あの人はこっちじゃ、ただの無邪気な兄ちゃんだから仕方ねえか。閻王は冥府じゃ真正銘おつかねえ閻魔様なんだよ」

「ふええ。じゃあ元の姿は全然違うの？」

「そう。アレは人間の中に紛れるための変装みてえなものだ」

今までのネオンに支配された街の色から一辺、周囲は高層ビルの群人もまばらで、閑散としてるように感じる。

「美冬は何で閻王があんなギャル男っぽいんだと思う?」

笑いをこらえる表情で尋ねられ、唇に指を当てて空を睨む。眉間にしわを寄せたまま首を傾げた。

「分かんない。どうして?」

「それがさ、閻王って」

喋る前から肩を震わせながら笑う声。

「どんくらい前の話だったかなあ。」

こつちに来る前に人間のフリしなきゃいけないーってんで、部下に東京で雑誌買って来るように頼んだらしいんだよ」

「うん」

「よりにもよって、その部下が買ってきたのがギャル男の雑誌でさ。それに載ってた『東京では今、これがスタンダード!』っつー文を信じて、

あんな兄ちゃんになったんだと」

「ええ?!ええええ!?!」

驚く声の隣で背をそらせながら笑う声が響く。

髪をかき上げながら、美冬を見る楽しそうに細められた瞳。

「で。こつちに来てみたら自分と同じカッコしてる奴は少ねーわ

道聞こうとしてもキャッチセールスと間違えられてシカトされるわですっげー文句言ってたらしいんだ」

「そつなのお?」

「面白いだろ。まさか閻王が、そんな目に遭ってるなんて誰も想像しねえよな」

美冬が驚きと笑いの混じった表情のまま、口元を手で隠す。笑う二人の間を通り過ぎる夜気。

日中感じる事のない、わずかな肌寒さを感じた。

「っていうか、違う雑誌買ってたらどうなってたんだろ」

「さあ、アニメのコスプレでもしてたんじゃないかねえか?」

……それはそれで見てみたい気もするけど」  
まっすぐ伸びる道の先の景色が緑の多くなってきた事に気がつく。  
真雪は浮かべていた笑みを引っ込めると前を見据え。  
鼻につくイレギュラーの匂いと背筋に走る緊張感。  
もうすぐ目的地に近いことは、住所表示を見るまでもなく分かって  
いた。

『ノクティルカです。今、どちらですか？』  
着信音に気がつき、インカムを耳に装着すると聞こえてきたのは  
ノクティルカの無感情な声音だった。

一切灯りのついてない夜の学校というのは妙に威圧感がある。  
なるほど、確かにこの雰囲気であれば『出る』と噂になるのは無理  
もないかもしれない。  
使われていないというだけで、こんなにも寂しく感じるものなのだ  
ろうか。

「こちらレイヴン。目的地の岩戸小学校に到着……前方には美冬の  
パンツが見えるな」

「ちよつと！見ないでって言ってるじゃない！」  
校門によじ登り、乗り越えようとしていた美冬が声を押し殺して怒  
鳴った。

闇の中、睨んでいるのが分かる。

真雪の目の前にあるのは、短いスカートから伸びる  
ガーターベルトでニーハイソックスを留めた足。

「ノクティルカ、パンツの色聞きたい？」

『結構です』

「今日は水玉」

「ぶっ殺すぞ、真雪！」

「……そう言うんだったら少しは隠せよ」

呆れた声に美冬が地面に着地した靴音が重なった。

重々しい黒の門を挟んだ、学校の敷地内に美冬がスカートを手で払いながら立っている。

周囲を見渡し、匂いを嗅ぐように深呼吸。

「やっぱりイレギュラー、いるみたいだね。匂いがする」

『なるほど。それでは事前情報は確かなようですね』

「どうやら近くにいらっしゃるっぽいな。」

ノクティルカ、イレギュラーのステータス教えてくれ」

校門から飛び降りた真雪が空を仰ぐ。

黒い革の手袋をはめながら、いぶかしげに目を細めた。

離れた場所に住宅地があるらしいが、この周囲は建設途中のマンション。

それ以外は夜と同じ色の揺れる木々のみ。

何も無い上にオカルトじみた噂のある場所に、好き好んで来る人間もいないだろう。

『ステータスです。イレギュラー認定番号、D+04180025。物理・スキル共に有効ですが、備考としてまして』

不意に言葉を切り、何かをためらうかのような沈黙。

『このイレギュラーは人型であり、コミュニケーション能力を有しているようです』

言葉もなく二人は顔を見合わせた。

感情の浮かばない表情はただ前を見据え、何かを考えているかのよう。

真雪は小さくため息を漏らした。

認定番号のアルファベットが示す強さの度合いも

ステータスが示す武器との相性をみても、特別強いというわけではない。

けれど、これは誰もやりたがらない仕事だ。

面倒な案件ばかり割り振られる自分達の所に来るのも納得できる。

……それは何故か？答えは簡単だ。

ターゲットが、人と同じだから。

チエイサーにとって最大の敵は人と同じ形をし、人の言葉を話すこと。

それは罪悪感を駆り立て、罪の意識は躊躇いを生み。

『自分が殺しているのは化け物だ』という思い込みをいとも簡単に壊す。

「……なるほど。やっぱり俺達に回ってくるのはこんな仕事ってワケか」

自嘲気味に呟く声は、木々のざわめきに飲まれた。

何か言いたげに幾重にも広がる音。

「確かに人型のイレギュラーなんて誰もやりたがらないわね」

美冬は真紅の手袋から1対のシヨートを出すと薄く口元に苦笑を浮かべた。

射るような光を放つ月を見上げ、等間隔で踵で地面をならす。

『ごきげんよう、僕のかわいい天使達』

不意に聞こえた声の主はダンデライオン。

インカムの向こうで微笑んでいるのが容易に想像できた。

『今回の仕事のターゲットはノクティル力が言ったとおりだよ。』

少々やりにくい相手だけど、出来そうかな？』

「やらなきゃいけねえんだろ？やらなくて済むなら、いくらでも駄々こねるぞ」

『子供じゃないんだからやめてくれ。では、そちらの状況を教えてくださいるか？』

離れた位置に感じる気配。

何者かが二人を伺っているのが分かる。

身体にまわりつくような視線を感じ、自然と顔が嫌悪で歪んだ。

「今、真雪とあたしは小学校の校門近くにいるんだけどイレギュラーーらしき気配が一つ。」

距離にして数十メートルつてところかな？事前情報通り駐車場にいるらしいや」

美冬は声をひそめ、インカムを指で押しつけながら話す。神経は見えない敵に向いていた。

「さつきからすっごい視線感じる。相手はあたし達に気付いてるっばいね。」

……面倒だから向こうが動く前にとっとと始末しちゃいたいかも」  
『なるほど、それでは早速仕事に取りかかってくれ。愛しているよ』  
「ラプター了解。愛してるわ」

「おう、レイヴン了解。愛してるぞ」

合言葉と化した言葉を交わし、通信が切れたインカムを一瞥する真雪。

内心を表すような深いため息の中、眠ったように静まり返る駐車場を見据えた。

さながらそこは、あらかじめ用意された試合場だ。

「とっとと片付けるぞ、美冬」  
隣で頷く気配。

重い足取りを隠すように平静を保ち、向かう。

目の前のイレギュラーらしき淡い光しか、今は見えていなかった。

「レイヴン、前方一体イレギュラーを確認」

背筋に走る緊張感に思わず唾を飲み込む。

十数メートル離れた位置には真雪と同じくらいの身長の方が立っていた。

ストレートの黒髪を高い位置で縛り着物を身にまとつ。

一見すれば人間そのもので、この人外生物特有の臭気かなければイレギュラーであると信じないかもしれない。

月光を受け淡く光を放つ。

その姿は幻想的でした。

『……来たか、魔狩りよ』

手には何も持たず背筋を伸ばした姿勢のまま、目を閉じて微動だにしない。

武器はなんだろうか？

キャスターか、それとも。

真雪の視線が探るようにイレギュラーを観察した。

「ずいぶん派手にやらかしちゃったみたいね。

なんか貴方が邪魔らしくて始末して来いって言われてるのよ。

だから、大人しく死んでくれない？」

リズムを取るように鳴らされた靴音。

美冬は仁王立ちの姿勢のまま退屈そうな表情をあらわにした。

それでも全身からは殺気混じりの警戒感がみなぎっている。

「ってというか、殺すけど」

木々が目隠しをするように周囲を囲む空間。

どんな音を立てても不気味なほどに響く。

ここに存在するものは全てが死んでいるのではないかという錯覚。

十数台分の駐車スペースがあるであろうこの広さが、更に非現実的

な景色にしていた。

イレギュラーはゆっくりと目を開くと、美冬を凝視する。

まるで真雪のことを視認していないようだ。

食い入るようにつめる目を、美冬もまた睨み返す。

イレギュラーが唇を薄く開いた。

『恋をしたのか』

突拍子もない言葉に思わず眉間にしわを刻む。

聞き間違いかとも思ったが、確かにイレギュラーはそう言っていた。

『人に恋をしたのか、同胞よ』

「……何、言ってるの？」

『それが故に同胞を殺し、人に味方すると言うのか』

怒りを押し殺した声。

美冬の目にわずかな動揺が走る。

迷ったように視線が動き、言葉を探すように黙った。

「言っている意味が分かんない。同胞って何？」

『何をとぼけた事を。お前は私と同じ人外ではないか』

「はあ？ふざけないでよ、あたしは人外じゃないわ」

美冬の後方に立つ真雪は彼女の背中を眺めながらいぶかしげに目を細める。

強く握られる武器、怒気を含む声音。

顔を見るまでもなく美冬が苛立っているのは明白だ。

『ふざけているのはどちらだ。目を覚ませ、同胞よ。』

人の形を成し、人に憧れ、人に紛れても異形の者には変わらない』

「人外なんかじゃないって言ってるでしょ!？」

怒号。

抑えられていた苛立ちが一気に噴出す。

静寂を破り、その声は辺り一帯に響き渡った。

歯を食いしばる表情のまま、瞳で射殺そうとするかのように睨んだ。

『何処に根拠がある？お前の何が違うというのだ？同じではないか！』

お前も、お前が退治しようとしている私も同じ魂の色を持ち、同じ

名を持つ生き物だ!』

「うるっさいんだよ！ぶっ殺すぞ、バケモノ！」

「美冬、落ち着け！相手のペースに嵌まるぞ！」

真雪が背中に向かって怒鳴る。

それでも美冬は真雪の声など聞こえていないように、イレギュラーだけを覗いていた。

イレギュラーは美冬を動揺させて隙を作ろうとしているのではないだろうか。

真雪にとっては、そうとしか考えられなかった。



美冬はこのままだと怒りに任せてイレギュラーに突っ込もうとするだろう。

相手がどんな武器を持っているか分からない今、それは得策ではない。

ならば、この状況で自分がスキルを撃つのが一番の……

「真雪、スキルは撃たないで。コイツはあたしがやる」  
殺気に支配された声に真雪が我に返った。  
まるで心を読まれたようなタイミング。

「あたしが殺すわ」  
念を押すように、自分に言い聞かせるようにゆっくりと吐き出される。

それに答えたのは真雪ではなく。

『殺すと！同胞殺しの人外よ。』

お前はお前と同じく人の形を成すものを殺せるというのか？』  
イレギュラーは赤い目を見開くと微笑さえ浮かべた顔で言った。  
周囲の空気が揺らめき、髪が揺れているのが分かる。

この場の緊迫した雰囲気と呼応するように聞こえる葉ずれの音。

「殺せる」

今までの激しさは身をひそめ、歌うように呟く。

「ほう？」

「殺せるわ。お前が誰かを傷つける可能性があるなら迷わず殺す」  
真雪は固まったように動けずにいた。

自分はどうするべきかと考える思考のどこかで思い出す声。

葬儀会場、吐き気をもよおす死臭、チャリオットの顔が鮮明に蘇る。

『息をし、動き、人の形を成す者をお前は殺せるか？』

脳裏と現実の声は重なり、揺さぶるように。

無意識のうちに考え込んでしまいそうになる自分を必死で現実に取り戻した。

「それが何であつてもか？」

「そう」

「それが人であつてもか？」

「そうよ」

ややあつて、イレギュラーは美冬の答えを笑い飛ばした。音もない空間に嘲笑に似た笑い声がこだまする。

無彩色の夜、死んだように動かず眠る景色。

「笑わせる！……聞くぞ。ではお前がやっている事はなんだ？」

お前のほうこそ誰かを傷つけているのではないか！危険なのはどちらだ！？」

まるで一撃のような言葉だった。

二人の距離は離れているにもかかわらず、

その声は耳元で叫ばれたように大きく聞こえる。

止まる時間。

美冬は何かに耐えるように目を伏せていた。

震えるほど強く握り締める手は怒りを必死にこらえている事を表し。

「……分かつてるよ」

この場所は墓のように思えた。

闇に溶けかけた校舎は大きな墓標のようにも見え。

どんな音も飲み込み、死んだ静寂が支配していた。

「分かつてるよ、そんな事！」

あたしがヒト殺しなのも、いっぱい傷つけてるのも分かつてるよ！

あたしが信じてるモノがアヤフヤなのも分かつてるよ！」

動揺と怒りが混じり合った大声は、まるで泣いているようにさえ聞こえる。

イレギュラーは美冬を見つめたまま動かずに聞き入っていた。その顔に感情はなく心を読むことは出来ない。

「けど、その上で言ってる」

美冬の片足がわずかに後退する。

ショートソードが月の光を鋭く跳ね返した。

「だからどうした！」

空気が大きく動いたと思った次の瞬間。

見えたのはショートソードが描く銀色のライン。

赤い飛沫が衣のようにスローモーションで宙に舞う。

一気に間合いを詰めた美冬は薙ぎ払っていた。

そして間髪入れず、もう片方のショートソードでイレギュラーの腹部を勢いよく突き刺す。

噴出す鮮血は美冬を赤く染めた。

「ぐ、ああああ！」

耳元の断末魔が耳鳴りを誘う。

湿った手元が滑りそうになるが、力込めて肉体に刺した状態で刃物をえぐるように動かした。

「勘違いしないで。人外だからってゲーム感覚で狩ってるわけじゃない」

美冬は返り血が口に入るのも厭わず、囁くように言う。

表情の消えた顔と声。

目の前のイレギュラーの膝が落ちる気配を見せるまで、ショートソードを食い込ませ続ける。

「ま、さか……おま、え」

糸が切れたようにイレギュラーは地面に崩れ落ちた。

その音は美冬の耳にこびりつく。

周囲に立ち込める生臭い血の匂いと、死臭。

血の海の中央には全身に返り血を浴びた美冬が、力が抜けたように立ちつくしていた。  
黒い闇に赤が浮かぶ。

「必要なら神様だって殺すわ」

俯く横顔を真雪は魅入られたように見つめていた。

何か言葉をかけようと唇が動くが、声は発せられず。

ただ、黙りこくる。

聞こえるのは美冬の額から地面へと滴り落ちる赤い水音。

そこにあるのは笑うように照らす月と

その光を受けて輝く血だまりだった。

「なんだよ、真雪のケチ」

面白くなさそうに吐き出された声に真雪はため息をついた。

声の主である美冬はソファに座ってクッションを抱きしめたまま拗ねた表情を浮かべる。

「お前な。遊びに行くんじゃないぞ？」

「分かっているもん、そんなの」

「わざわざ人が死ぬのを見に行く事ねえって」

真雪はネクタイを締めながら窓辺に立ち、外を眺めた。

土曜日だからだろうか、いつもよりも穏やかな雰囲気を感じる。

まるで時が流れている事すら忘れてしまいたいほど。

遠くに聞こえる鳥のさえずりと、子供達が歓声を上げて走り去る気配。

「でも、一緒にいけば何か助けられるかもしれないでしょ」

「これは死神の仕事だ」

「そうだけだよ」

「気持ちだけ受け取っておくわ」

ため息混じりに口元に笑みを浮かべてみせる。

これからの事を考えると気が重く、無意識に表情が曇った。

もしかしたらうまく笑えていなかったかもしれない。

真雪は重い足取りで、黒で統一された自室を歩き回る。

『4月19日 14時02分、東京都中津区 須藤明美』

テーブルに置かれたメモを見て軽くため息をつく。

この場所に待ち受けているのは死であり、死神としての役割。

命数が尽きても生き続ける者が予定通りに死を迎えたかどうかを見届ける

死亡確認という仕事が続いているのだ。

目の前で、自分の死亡宣告を引き金に人が死ぬ。仕事だと言いつても、いつまで経っても慣れる事は出来ず何度も目をそらしたい衝動に駆られた。

「美冬は留守番しててくれ」

「……本当に一人で大丈夫なの？」

遠慮がちに伺う声。

その顔は心底不安そうな色が浮かんでいる。

「何だよ。今までも一人でちゃんとやってたっつーの」

「だって、すごく辛そうな顔してる」

「これから人が死ぬの見に行くのに鼻歌混じりでいく奴なんざいねえだろ」

「そうだけどさ」

言葉を飲み込み、何か言いたげな表情のまま黙りこくる美冬。

真雪は苦笑を小さく漏らすと彼女の柔らかなストレートの髪を撫でた。

「大丈夫だから。心配すんな」

曖昧に頷く様子を見て寂しげに口の端をあげる。

頭を数回叩くように手を置き、気配は離れた。

物憂げな空気を身にまといながら。

「さて、と。ちょっと早いけど行ってくるか」

ジャケットを羽織り直す仕草、壁に掛けられた時計に視線を走らせる。

独白の隙間のため息。

言葉少ない重い沈黙の中で足音ばかりが部屋を動く。

見つめる視線は彼を追い続けていた。

「じゃあな、美冬。ちょっと行ってくるわ」

決して広いとはいえない玄関のスペース。

髪をかきあげると首を傾げるようにして言った。

美冬は相変わらず何か言いたげな表情のまま頷く。

分かっている、何が言いたいのか。

おそらく彼女は真雪を心配しているのだろう。

自分が同行した所で何も出来ないのも、

何度聞いても同じ答えが返ってくるのも承知の上なのだ。

交錯する気持ちの中、二人は黙る。

「気をつけてね」

「ああ」

短いやり取りの後、真雪は背中を向けた。

ドアノブを掴む手。

けれどドアは開かなかった。

長い静止と沈黙が続く。

考え込んでいるような様子に、美冬は不審な眼差しを向け。

閑散とした室内。

外の平穏な空気とかけ離れた息苦しい沈黙が、この部屋に立ち込めている。

「……なあ」

絞り出す声に顔を向ける。

今までの口調に更に硬さを増した声。

「死んだら、それで許されちまうのかな」

「え？」

言葉の意味が分からず聞き返す。

口の中で何度も繰り返し返し、その意味を探ろうとするが。

「どういう、意味？」

「悪い事しても、死んで地獄に行きや許されるモンなのかな」

真雪が背中越しに顔だけを向けて見つめている。

答えを待つように黙った。

笑い飛ばしたり、かわしたり出来る雰囲気ではないのは

彼の瞳の奥に真剣さが見えたから。

美冬は数秒後、ゆっくりと首を横に振った。

髪がそれにあわせてスローモーションのように揺れる。

何故か口を開くのもためらう。

「そんな事ない」

声は呟く。

「死んで解決するワケないじゃん。だって、地獄なんてないし」

真雪は動きを止めたまま、耳を澄ませるように。

色濃く漂う疲労感に似た何か。

「この世が天国で地獄だから」

そういうと、美冬は自分を見つめる瞳が微笑んだように感じた。

それにつられて口元だけで微笑む。

突拍子もない問いの意味を聞く事も出来ずにただ佇んでいた。

そして聞こえた、ドアが閉まる音。

真雪が部屋を出て行く時に見えた背中越しの空の色は

恨めしいほどに澄み切った青だった。

真雪はジャケットの内ポケットから取り出した紙に視線を走らせた。

無感情でそっけない、印字された文字が並ぶ。

けれど、そこにあるのは紛れもない人の運命。

日時や住所を確認すると元の場所へ戻し、目的地を目指す。

徒歩10分ほどの距離であるはずなのに妙に長く感じるのは

気が進まないからだともいうのか。

「……この世が天国で地獄だから、か」

すれ違う人々を眺めながら小さく漏らした。

笑顔やはしゃぐ声に、自分が浮いている事を痛感して自嘲気味に微

笑む。

こんな顔をしているのは、この世界で自分だけなのではないかと。



やはり美冬と一緒にの方が良かったのだらうかと真雪は思い返した。同行して欲しいと頼めば彼女は断らないだらう。

二人の方が自分の気持ちも楽だと思う。

けれど、これは死神の仕事だ。

何より彼女にこんな物を見せて辛い思いはさせたくなかった。

電信柱に張り付いた住所表示を眺め、目的地が近づいている事に気が付く。

おそらく今回のターゲット 須藤明美の自宅はこの辺らしい。

部活動をしているらしい学生達の声が響く校庭の脇の歩道を歩きながら

真雪は空を仰いだ。

微笑む日差しが穏やかに降り注いでいる。

光を浴びた木々の緑はまぶしいほど鮮やかな色で輝いていた。

自分の靴音ばかりが大きく響く。

考えたくもないのに次々と浮かんでは消える憂鬱な考え。

丸みを帯びた暖かな風は真雪をあざ笑うように駆け抜けて行った。

「……………ん？」

大通りを左折し、細い道に入った所で思わず声を漏らす。

視線の先には閑静な住宅街とは似つかわしくない光景が広がっている。

ある住宅の入り口を固めるように群がる人々。

「なんだ、ありゃ？」

疑問を口にした所で合点がいった。

よく見ればそれがどんな場所で、群がる彼らが何者なのかが分かる。家を縁取るように置かれた脚立、路上に駐車された見覚えのあるテレビ局のロゴマーク。

そして、まるで武器のようにカメラや照明等を構える大勢の人間。

立ち止まっている事に気が付き、我に返ったように歩を進めると。人垣の隙間から『須藤』と書かれた表札が見えた。そう、ここが夢で話した須藤明美の自宅だ。

「東京都中津区で発生した会社経営・須藤邦明さんが死亡した事件はここに来て保険金殺人の疑いが出ています。」

邦明さんの妻であるAさんは警察から任意同行を求められています  
が」

明美の自宅の塀を背にしたりポーターらしき女性が深刻な顔つきで語る姿を

真雪は近所の人間らしき人々に紛れて遠巻きに眺めていた。

漏れ聞こえる声から察するに、どうやら明美は重要参考人という扱いらしい。

好奇心を滲ませた声は彼女は犯人なのではないか、前夫達も彼女の仕業だろうと推測を口にかけている。

「だって須藤さんちの奥さんって、よく若い男と一緒にいるって言うじゃない」

「旦那さんが亡くなって間もないのに、ねえ」

真雪は、そんなやり取りを聞くともなしに聞きながら視線は明美の自宅を凝視していた。

まるで混雑した電車の中のような周囲。

小さな動作で時計を見ると、針は13時49分を示している。

おそらく明美は自宅にいるのだろう。

直接彼女の死を確認する事は出来ないかもしれないが、そうなった場合は死臭が漂い

何よりもマスコミが黙っていないはずだ。

自分は野次馬を決め込んで、ここ見ていればいいと心の中で呟く。

時間が経つのを待つ沈黙の時間。

真雪は波のように遠慮がちにざわめく声に囲まれながら、あの光景

を思い出していた。

死亡宣告、明美の夢の中。

『そうよ……けれど、それが何？だから何だって言うの？』

ここで私が貴方に罪を告白しても、誰にもどうすることはできないわ。そうよね？』

彼女は確かにそう言った。

真雪に怒りをぶつけるように、怯えを隠した目で。

『私は逃げてみせる』

決意であり、自信。

その声が幾重にも自分の内側で響き渡り、支配するように。

彼女は何故、自分に罪を告白したのだろうか。

自分に言っても罪から逃れられるからか？

それとも内に秘めた真実に耐え切れなくなったからか？

そもそも明美の告白は真実なのか、真雪には知る由もなく。

また、知った所でどうする事も出来ない。

「須藤さん！須藤さん！」

突然、あたりが騒然となる。

顔を上げると玄関が開き、人垣からは多数のフラッシュが焚かれていた。

人垣の中央、視線の集まる場所にいたのは。

「お話伺えませんか？」

「もう何度も同じ事言わせないで！私から話す事なんてないわ！」

赤い唇を歪ませて怒りをあらわにした女、明美だった。

以前よりやつれ、疲れているように見えるが派手な印象は相変わらずに思える。

「貴方達、迷惑なのよ。お願いだから帰ってちょうだい！」

人の隙間から見える鮮やかな赤はワンピースの色だろうか。

真雪は無表情のまま、ただ前を見据えた。

離れた位置でも明瞭に聞こえる声に耳を澄ませる。

「逮捕は時間の問題なんですよ？」

「ねえ。毎日警察の人が来てるし、ずっと張り込んでるじゃない」

「須藤さん！保険金殺人の疑いが掛けられています！」

あらゆる距離から飛び交う声。

「帯は死んだように静まり返っているというのに、この周囲だけは異様な雰囲気だ。」

「もう勝手にしてよ。私はやってないわ」

「以前にも旦那さんが亡くなられたらという事ですが！」

「穏やかな昼下がりには、ここには微塵もない。」

「ただ明美を囲む人々は罵倒するかのよう同じような質問を投げるのみで。」

「須藤さん！」

「貴方達、名誉毀損で……」

「本当に殺したのですか！」

動きが止まった。

「今まで苛立ちを隠そうとせず方々に怒鳴っていた明美が口をつぐみ、目を見開いたまま。」

「その声は他の声に紛れて飲み込まれかけていたが、」

「明美にはどんな声よりも大きく聞こえたようだった。」

「今……なんて？」

震える声。

「誰が、さっき言ったの？」

「人の中心で、視線だけをせわしなく動かして恐々と問う。」

「周囲は突然訪れた明美の変化に啞然とした様子で」

「先ほどもまでのように問い質す者は誰一人いなかった。」

「張り詰めていく空気を感じる。」

「わずめきと戸惑いが辺りを支配し、人は明美を食い入るように見つめた。」

靴音一つも響く静けさ。

「……死神が、私に言ったのよ」

明美は俯きがちで落ち着きなく辺りを見渡し、自分を抱きしめる。

「死者は真実を語るって。」

私が嘘を付くなら暴いて、隠そうとすれば真実を語るって」

「死神、とは？」

「死神は死神よ」

真雪は数メートル先の動揺した明美を見つめていた。

彼女の全身を包むベールは時間が経つにしたがって色濃くなっ  
ていく。

死神の能力が見せる幻は、彼女に死が迫っている事を饒舌に語る。

「でも、私はやってない。嘘なんかついてない。隠してる事なんてない！」

だから怯える事なんてないの！怖がる必要なんて何処にもないわ」

親指の爪を噛む仕草。

目を見開いたまま、汗を滲ませて早口でまくし立てた。

立ち込める怯えに似た感情。

憑かれたような様に、周囲は押し黙る。

「だから大丈夫。死ぬなんて嘘よ。」

あの人が言った事は全部デタラメ。怖くないわ。そう、何も怖く…

…」

何かに呼ばれたように顔を上げる明美。

その瞬間、彼女は。

人垣を挟んで離れた位置に自分を見つめる黒いスーツの青年を見た。

こられきれず、あげる悲鳴。

口を押さえるが声は周囲に轟く。

何事かと顔を見合わせ、問い、いぶかしげに見つめる視線を気にする暇はない。

ただ震え。

あの夢は真実であった事を、その身で知る。

「は！あ……ああ！あああ！死に、し、死神！死神が！死に……！」

「須藤さん！大丈夫ですか！？」

「しにが、死神が！死神！来ないで、お願い！私を殺さないで！」  
肩を揺さぶられても顔を真雪から離そうとせずに絶叫するように懇願する。

流れる涙は何を意味するのか。

震え、泣き叫ぶ明美を真雪は凝視した。

家々に反響する声、それでも焚かれるフラッシュと、

人々の恐怖と興味の入り混じった視線。

「……10秒前」

真雪は腕時計を一瞥し、低く呟いた。

周囲の人間はまるで明美の視線の先の彼が見えていないかのように関心を持つこともなく。

ただ狂ったように我を忘れる女を見、立ちつくした。

「何でも話すわ！本当の事！お願い、殺さないで！嘘でしょう！？」  
髪を振り乱し、首を横に振る姿。

人を掻き分けてスーツ姿の男達が明美に何かを言い、なだめようとしているのが見える。

「死ぬのは罰じゃないんでしょ！？」

「3」

「死にたくない！嘘だつて言つてよ！」

「2」

重なる明美の声と真雪の声は、対照的に聞こえた。

動かず、作り物のようにさえ感じる世界の中で二人は見つめ合う。

「答えて死神！」

「1」

「死……！」

「ゼロ」

その声と共に明美の叫び声は途切れ。

この場から音も動きさえも消えた。

目にしみるような赤が地面に倒れている。

明美を囲んでいた警察関係者らしい男たちですら、動けずにいた。

「救急車！！急げ！」

「須藤さん、須藤さん！？」

一瞬の静寂から一転、周囲は再び騒然となる。

真雪は俯いたまま動かなかった。

手を強く握り締めて懸命に何かに耐えるように唇を噛む。

空気ですら、己を攻撃する刃のように感じた。

「4月19日 14時02分、確認完了」

身を乗り出し状況を把握しようとする輪の中で呟く声。

俯いた顔は髪で隠され、真雪がどんな顔をしているのか知る事は出来なかった。

ただその声は何かを押し殺すようでもあり。

それを聞いた者はなく、

彼を死神と知る由もない。

やがて人の輪から離れ、聞こえる足音。

黒いスーツの姿は小さくなる。

「……所詮、俺は人殺しだよ」

漏れた声は誰にも届かなかった。

何度目かのため息。

美冬は海のように広がる街の灯りを気が抜けた瞳で見つめていた。いや、正確には見ていたかは定かではない。

正面を向いているものの、その横顔は何かを考え込んでいる風で。手すりに手を置き、ストレッチをするように腕を伸ばす動作。俯いて軽く頭を横に振る。

「……悩み事か」

突然聞こえた低い声音。

驚き、振り返った先にいたのは今にも闇に溶けてしまいそうな風貌のウォークライだった。

黒い瞳が美冬を見据える。

一見機嫌が悪いようにも見えるが、それが彼にとっては普通であり。

「うーちゃん」

隣に並び、彼女に影を落とす。

美冬は取り繕うように微笑もうとするが、それは口元を歪ませただけだった。

「何で分かるの？」

「比良坂の人間がここに来る時は、大抵悩み事か考え事がある時だ」  
そう言つて、眉を上げてみせる。

ここは比良坂事務所の入る雑居ビルの屋上。

確かに言われてみれば自分を含め、他のメンバーもその傾向がある気がした。

特別、珍しい景色が見えるわけでもない殺風景な場所ではあるが  
気分が沈む度に自然と足が向く。



灰色の空を見上げ、ビルに囲まれて排ガス混じりの風を吸う。こつと言つと味気なく感じるが、美冬にとっては十分に気分転換が出来た。

「それに、そんな顔をして隠してるつもりだったか？」

「え？」

「まるで電池切れだ」

苦笑混じりの声に、つられて困つたように微笑んでみせる。雨を予感させる風になびく髪を押さえ、見上げた。

「……何ていうかな。あたしじゃなくて、真雪の事なの」

数秒後、迷つたように黙りこくつていた美冬が言う。

コンクリートの地面を打つ靴音。

「先週、真雪が死亡確認に行つてさ……すごくへこんでたんだよね。詳しくは聞いてないんだけど、

ターゲットが保険金殺人事件の犯人じゃないかって言われてた人らしくて」

ウォークライは美冬を見下ろしたまま、わずかに顎を引くようにして頷いた。

これから夜の始まる時刻、薄暗い屋上に遠くからの灯りが届く。

横顔を照らす、昼間を思わせるようなまばゆい光。

「その人、死亡宣告の時に『自分が殺した』って言ったんだって。

でも真雪はソレを知つたのに何も出来なくて悩んでたみたい」

沈む声、暗いだけの空を見上げる顔。

「それに、いつも人が死ぬ所ばかり見て壊れちゃいそうって。

自分はチェイサーとしてイレギュラーを、死神として人を殺す人殺しだつて」

美冬が眉間にしわを寄せたまま、硬く目を閉じた。

痛みを堪えているかのように。

聞こえるのは他人事な下界からの街の声。

耳に入るそばから抜けていく。

「あたし、何も言えなかつたんだ。

真雪があんなにへこんでるのに励ます事が出来なかつたの」

沈んだ表情でため息をつく美冬を、ただ見つめるウォークライ。

その表情から感情を読み取る事はできず。

「どうして…… ホント、自分が嫌になるよ」

力がこもる手。

その声は自分を責めるように強い口調で吐き出した。

「死神の仕事なんて人殺し」

不意に頭上から降り注いだ声に美冬は顔を上げた。

ぶつかる視線は寂しげに微笑み、遠く離れた光の洪水に向けられる。

「死亡宣告しなけりや、そいつは生きていられる。

俺の言葉で人が死ぬんだ　これは、以前レイヴンが言った言葉だが」

「俺の、言葉で」

「そう。確かにその通りかもしれないが、その考え方は悲しすぎる。

俺達は好き好んで人に死を与えている訳ではなく必要に迫られての事だ」

頬にかかる髪をかきあげる姿勢で静止した。

不意に訪れる静寂。

ウォークライは言葉を選んでいるのだろうか、口をつぐんだまま。

「奴は正直言つと…… 死神よりも違う仕事の方が向いているかもしれない」

「そうなの？」

「優しすぎるのだ」

二人の間を風が通り抜ける。

夜気の中に混じる此岸と人外の匂い。

苦笑混じりの言葉に、美冬も小さく頷いた。

「優しすぎて、死にドライになる事が出来ずに苦しむ。

不器用だから目をそらす事も出来ずに悩む」

「うん」

「……だが、奴は死神として生きる。道はそれのみななのだから」  
美冬は見上げたまま、視線をそらす事も出来ずにただ見つめた。  
口の中で言葉を反芻するかのように。

「死神という仕事は」

何かを考えるような無言の時間が数分続いた後、  
ウォークライは口の端をあげて話し始めた。  
それは自嘲的な小さな笑み。

「人の夢の中に入って死を宣告するだけの仕事と言ってしまえばそれまでだが

決して、そうではない」

「うん」

「そこには感情がある。命数が尽きた人間にも、死神にも」  
低く呟く。

その声は何気なく話しているようでも、何故か心を揺さぶるような響きがある。

「機械であれば、どんなに楽だろうと思う。

絶望し、泣き、懇願する人間を何人も見る羽目になるからな。

自分の言葉が引き金となり死ぬ人間や、

その倒れた者にすがって泣き叫ぶ人間も見なければならぬ」

伏せられる瞳。

「レイヴンではないが、まるで自分が殺す気分になる事もある。

気分が良いとは言いがたい」

淡々と話す声が美冬に向けられた。

ウォークライは自分を見つめる顔を凝視した後、ちいさく苦笑を漏らす。

「……何て顔をしている」

「だ、だって」

「俺はお前を泣かせるつもりで、こんな話をした訳ではないぞ？」

美冬はうるむ目をこすり、唇を噛んだ。

気を緩めてしまえば涙が出てしまいそんな気がする。

目元が熱を帯びているような錯覚。

「笑え、ラプター」

「え？」

「お前は笑っていればいい。

死神がどんな生き物か知った上で笑っている事が、何よりの助けになる」

意外な言葉に美冬は驚いた表情のまま、目を大きくしばたかせた。その表情を楽しむようにウォークライは口元で笑う。

「お前は何も出来ないと思っっているようだが、それは大きな間違いだ。

奴にとつて、お前が側にいる事がどんなに大きいか」

「そう、なの？」

「無力を恥じるな。その才能を誇れ」

「え？ええ！？意味分からないよ。どついう意味？」

「分からなくてもいい。その方がお前らしい」

美冬の頭に手が置かれる。

怪訝そうに首を傾げる姿に、喉を鳴らすような笑い声が聞こえた。

「それに、お前がそんな顔でいてはレイヴンも元気になれないだろ  
う」

「そうかなあ」

「……もし、元気になるきっかけが必要なのであれば力を貸すが  
下には光の川のような車の流れ。

驚いたように、ウォークライを見つめた。

「え？」

「お前を元気にする為なら、言霊の力を使うのも悪くない」

美冬は思いがけない言葉に動きを止める。

言霊 それはウォークライが持つ、此岸でも珍しい能力。

言葉に宿る力を使い、  
発する事でその表す事柄を具現化するという。  
確か彼は過去に起きた何らかの事件がきっかけで  
言霊の能力を使う事はあまりない筈だったが。

「でも、うーちゃんって言霊の力は……」  
と、美冬が言いかけた時。

背後で鳴くような硬質な音が聞こえた。

「失礼、お話し中でしたか」

聞き慣れた冷たさを含む声と共に、夜に支配された屋上に光の帯が  
差し込む。

振り向くと、ドアを掴んだままの姿勢でノクティルカが立っていた。

「……来たな、サド眼鏡」

「サド眼鏡と呼ぶのはやめて下さい」

近づいてくる足音。

眼鏡を指の腹で押し上げる動作をしながら、ウォークライを軽く睨  
むように一瞥する。

「ウォークライ、所長がお呼びですよ。」

プラモデルの組み立てが終わったのでスミ入れを手伝って欲しいと  
の事ですが「

「ああ」

ウォークライは口元を歪ませるように、苦笑を浮かべると片手を拳  
げた。

「ノクティルカ、手を出せ」

「はい？」

戸惑いがちに左手を顔の横に上げたノクティルカ。

そして、すれ違いざまにウォークライの手が彼の手をハイタッチす  
るかのように叩く。

「子供のおもり、交代だ。喋りすぎて具合が悪くなってきた」  
大きな背中が笑いながら言う。

振り向き、楽しげに目を細める顔。

ノクティルカはわずかに驚いた顔をしていたが、意味を理解したように笑った。

「了解です、お大事に」

それまで、ノクティルカとウォークライを交互に見比べていた美冬は、やっと意味が分かったのか、我に返ったように頬を膨らませてみせる。

「ちよつとお！それってどういう意味　！？」

「怒るといふ事は自覚しているのか」

「キィイイ！もー、うーちゃんのバカ！」

辺りに響く怒鳴り声に笑う声が重なる。

黒い影が消えると、ドアの閉まる音を合図に再び闇と静寂が訪れた。

「まったく！ノクティルカさん、うーちゃん酷いと思わない？」

「そうですね」

ドアを指差しながら不満そうな表情を浮かべる美冬を

口に手を当て、笑いをこらえながら答えるノクティルカ。

肩が小さく揺れていた。

「もー、ノクティルカさんまで！なんだよ、みんな子供扱いしちゃうてさ」

「子供じゃないですか」

「子供じゃないもん！」

「大人は、人が座ろうとしている椅子の上にコケシを置いたりしないんですよ？」

ノクティルカが美冬の隣で手すりを背もたれ代わりにすると、首を傾げて見せる。

にわかには強く吹いた風に、ジャケットの裾がはためいた。

遠くから届く大型量販店の看板の明かりは影を作り出す。

視界に広がる無数の灯りの群れは、眠る事を許さないとも言っている。

いるように。

「失敬だな。それはお茶目さんだもん」

美冬は唇を尖らせ。

「でも大人だつて悪戯するでしょ。」

ほら、前なんて所長が麦茶のボトルにウィスキー入れてたし」

「あれはダメな大人の例です」

「うーちゃんだつて、ノクティルカさんの眼鏡を鼻眼鏡にすり替えてたじゃん」

「ですから、あれもダメな大人の例です」

ため息に一緒に言葉を吐き出す。

額に人差し指を当てると、首を横に振る仕草。

何かを言おうとしたノクティルカは口を開きかけた所で、動きを止めた。

目を見開くようにして真正面を凝視する。

「ん？どうしたの？」

笑みを浮かべたまま美冬がノクティルカを見、そのまま視線を辿った。

ゆっくりと振り返る。

そこに居たのは、黒い袴姿の少女。

一見すると闇と同化しているように見えるが、彼女は強い視線をこちらに向けていた。

……正確には美冬を。

息をするのも、瞬きも忘れ。

一切の音が自分の耳に届かなくなるのを美冬は感じた。

そればかりか隣にノクティルカがいる事さえも頭から消え去る。

この世界に立っているのは、ウタカタと自分のみであるかのように。見つめあい、無言の言葉を交わす。

「……ウタカタ」

無意識に言葉が滑り落ちた。

早まる鼓動を抑えようと胸に手を当てるが、視線はそらせない。風の温度も分からない。

ここが何処であるかも一瞬、曖昧になった。

「聞きたい事がたくさんあるの」

呆然と呟く。

目を開けてみる夢だ、と心のどこかで呟いた。

「あたしは、何？」

長い沈黙の後、唇が動く。

本当に声を発しているかどうか定かではない。

そして、その声は相手に届いているかどうか。

「あたしは人間じゃないって本当？」

ウタカタは動かずにただ見つめていた。

美冬をすり抜けて、さらに奥の景色を見ているようにも思える。

風が吹いても髪も着物も動いていない。

「答えて」

音は全て消え、自分の声が大きく響く。

「……人が死ぬのは、貴方のせいなの？」

知らない間に拳を握っている事に気が付いた。

「人が変な事言っただけ死んだりするのは、貴方のせいなの？」

この世界から色が全て消えてしまった錯覚の中、問う。

足元から力が抜けて今にも倒れそうな気がして必死で意識を保とう

としていた。

「答えてよ」

『夜は 万人に 訪れる』

美冬は息を飲んだ。

耳に息がかかるような感触に思わず顔をゆがめる。



『夜と 朝の 狭間に 在るのは』

ウタカタの唇は動かさず、声は頭の中に響く。

その声は頭を揺さぶり眩暈を誘った。

『君だ』

「あた、し？」

『君が 人を 殺したの だろう？』

「……………何言ってるの？」

『君が 人を 殺すの だろう？』

途切れがちにつむがれる声に戦慄を覚える。

驚きを滲ませた表情のまま、首を小さく横に振る。

「違う、違う。あたしは殺さない」

不意に美冬を見つめていた感情も光も宿さないウタカタの瞳が隣に移った。

視線の先はノクテイルカ。

目が合い、彼はわずかに眉を寄せる。

『次は 彼を 殺すのか』

表情は驚きのまま、凍りつく。

美冬がシャツの胸元を強く握った。

声なく動いていた唇から、小さくうめくような声が発せられる。

「……………がう。違う……………！」

『彼を 食らうのか』

「違う！あたしは、あたしはこの人を殺さない！誰も殺さない！」

『ならば 他に 誰が 食らうと？』

「あたしはこの人を殺せない！」

耳元にまとわりつく声を振り払おうとするかのように首を大きく何度も横に振った。

半ば叫ぶような美冬の声があたりに響く。

「どうしてそんな事言うの！？あたしが殺すって根拠はなんだって

言うのよ！」

ウタカタが目を細め、微笑んだ。

ゆっくりと口角を上げるように。

そして。

『死と 共に 生きる』

その言葉が何もない空間で響いた。

気が付けばウタカタの姿はどこにもなく、全てが幻であったかのよう  
うに。

美冬が崩れ落ち、地面に座り込んだ。

うなだれ、俯く。

「……違う……あたしは違う」

足元から体温を奪われるようなコンクリートの冷たさも、

視界に散らばる光も今は感じる事が出来ない。

考えては消えていく思考の中で、状況を把握しようとする事に必死  
だった。

「ラプター」

まるで夢から覚めるように現実へ意識を戻したのは心配げに降り注  
ぐ声。

視界にうつるのは自分の前に片膝をついて、しゃがみ込んでいるら  
しい

ノクティルカの足だった。

ゆっくりを顔を上げると安堵したように息をつく顔がある。

「……良かった。ずっと声をかけても返事がないので心配しました」  
今まで感じなかった湿気を多く含んだ風。

少し前よりも濃い雨の匂いを感じ、思わず空を仰いだ。

「大丈夫ですか？」

美冬は肩を落とすように頷く。

「さっきの見たよね？」

「はい」

「そっか。じゃあ、やっぱり夢じゃないんだ」

うなだれる、沈んだ声。

俯いたままで髪に触れた。

「ねえ、ノクテイルカさん」

長い沈黙を破つたのは聞き逃してしまいそんなほど小さく切り出した美冬の声。

ノクテイルカは返事をしようとした瞬間、すぐるように腕をつかまれて目をわずかに見開く。

美冬の口が震えるように動き、眉がゆがんだ。

今にも泣き出しそうな顔を見つめるノクテイルカの瞳。

「あたし、ノクテイルカさんの事を殺そうとなんてしてない」

まるで痛みを伴うように、言葉を搾り出す。

「本当だよ。ウタカタはあんな事言ってたけど、あたしは人を殺そうとした事なんてない。

殺さないし、殺せない。違う、違うの！」

「……ラプター」

「あたしはノクテイルカさんを殺せないよ。殺せるワケなんてないのに！」

「ラプター」

「どうして？どうして、あたしが殺すって言うの！？」

声が聞こえていないかのように苛立ちを口にする。

俯いたままノクテイルカの胸元に頭をつけ、目を硬く閉じた。

震える、スーツを握り締める手。

何かに耐えるように身体を縮める。

「少し落ち着きましよう」

ノクティル力は軽く息をついて、美冬の背中を軽く叩くように触れた。

「……確かに死兆星は貴方に殺すのかと尋ねました。

けれど彼女が何を指し、どんな意味で言ったのか現在の私達には分かりかねます」

なだめ、言い聞かせるように穏やかな口調が語りかける。抱きしめるように腕が回され。

「あんな事を言われたら動揺するのは当たり前かもしれませんが、今の貴方は冷静さを欠いている」

「でも」

美冬は顔を上げて唇を噛む。

視線の先には、眼鏡の奥の微笑む瞳。

「怖くないの？ウタカタは、ノクティルカさんをあたしが殺すのかって言ってたんだよ。」

どうして普通でいられるの？」

数秒考えるように視線をそらした後、もう一度美冬に視線を合わせる。

おかしそうに笑う口元。

「分かってるつもりですから」

「え？」

「貴方が、そんな事が出来ない事くらい分かっています。

少なくとも死兆星より、貴方の事を知っているつもりなんですけどね」

悪戯っぽく微笑む顔につられ、泣きそうな顔のまま小さく笑う。

髪を撫でられる感触に目を細めた。

「大丈夫ですよ、ラプター。何も怖がる必要はありません」

言い聞かせるように繰り返す言葉。

ノクテイルカは美冬を自分の胸元に押し付けるように柔らかく後頭部を抱える。

下界に広がる光の海、頭上に広がるのは漆黒。

暗くなる事も眠る事さえも忘れた夜の中、二人はたたずんだ。

「ノクテイルカさん」

「はい？」

「もし、ウタカタが言った事が本当だったらどうする？」

真剣に見つめられて動きを止める。

口の中で小さく唸り、片眉を上げる仕草。

「そうですね。選りすぐりのラプターの弱みを此岸中にはら撒きます」

「……何それ」

「あー！アブちんだあ！」

比良坂事務所を出て歩く事5分、風俗街と呼ばれる界隈を歩いていた美冬が

人ごみの中で誰かを見つけたらしく嬉しそうな声を上げた。

まるで町全体が光を放っているようなネオンに彩られた場所。

夜は更け、数時間も経てば日付が変わるというのに人通りは絶えそうもない。

「ちよつとお。無視しないでよ、もう！」

20代後半から30代前半あたりの年恰好の長髪の男は美冬を見定めると顔に嫌悪を滲ませた。

去りかけた男を美冬の声が追うが聞こえない振りをしているかのよう。

「あからさまに嫌そうな顔しなくなっただっていいじゃんか。こんばんは、アブちん！」

「……嫌そうなのではなく、嫌なのだ」

「またまたあ。本当は会えて嬉しかったりするんじゃないのー？」

「ええい、鬱陶しい！近づくな、くっつくな、まとわり付くな」

小走りで男に追いついた美冬は彼の腕を掴むと、しがみつくように身体をくっつける。

見上げる瞳の奥にはからかうような色が宿っていた。

「アブソルトが嫌がってんぞ。離れてやれよ、美冬」

腕を振りほどこうとする鋭い瞳の男　アブソルトを一瞥し、遅れて二人のもとに到着した真雪がため息をつく。

笑いながら腕を放そうとしない美冬と、彼女を睨むアブソルト。周囲の人間は二人が見えていないかのように通り過ぎた。

それはまるで川の様でもある。

まったくもって美冬の物好きにも呆れる。

真雪は髪をかきながら視線を上空に投げると、ため息をついた。

この男は此岸で知らない者はいないというほどの有名人だ。

夜毎、此岸のルールを侵すチエイサーを狩る

死刑執行人と呼ばれるグループのリーダー格の人物。  
エクスキューション

その役割と冷酷無常で容赦ない性格から

ほとんどの人間は彼を敵視し、関わりを持ちたがらない。

その中で美冬だけは彼を友人と言い、嫌がる彼をよそに他の人間と同様に接していた。

「この時間にアブちゃんが普通に道、歩いてるなんて珍しいね」

「我を珍妙な名で呼ぶでない」

「なんて呼んだっていいじゃん。ねえ、これから仕事？どっか行くの？」

「答える義務などない。我が何をしようと、うぬには関係ないであらう」

怒気が混じるため息。

感情を押し殺すように話しているが顔は明らかに苛立っていた。

真雪は美冬の隣に立ち、アブソルートをひそかに観察するように見つめる。

全身から発散される殺気と、常に緊迫感を漂わせる彼の周りの血の匂いがする空気。

ここが一般人が多く行き交う道でなければ美冬に武器を向けていそうな気さえする。

当の美冬は、それに気付いているか否か。

機嫌のよさそうな笑顔を浮かべていた。

「相変わらず愛想ないんだからあ。仲良くしようよ」

「断る。馴れ合う気など毛頭ない」

「ひやはは、フラれちゃった！そうやってツンツンしてんの、かわいくないぞー？」

アブソルートはその声に答えるかのように美冬の手を邪険に振り払う。

眉間に深く刻まれるしわ。

瞳が睨むように細められた。

「用がないのであれば失礼する。うぬに構っている時間などない故」

「あ、待って！」

きびすを返しかけた足を止める声。

二人の視線が集中する。

その中で美冬はジャケットから赤いパッケージを取り出しアブソルートに握らせた。

騒ぐような喧騒の中で黙る。

握らされた本人は怪訝な表情を浮かべた後。

「……これは何だ」

「何って魚肉ソーセージだけど」

「それは分かっておる」

「それ以外、何だっていうのよ」

呆れ返った視線と不思議そうな視線がぶつかる。

始終を見守っていた真雪が頭に手をあて、俯き加減でため息をついた。

「何のつもりだ！毎回毎回、顔を合わせる度に魚肉ソーセージを押し付けおって。」

「そんなに我はこれが好きそうにみえるか！」

「いやー、いつも手元にあるのが魚肉ソーセージなのよね」

「いらん！うぬの施しは受けぬ！」

「とか言って、いつも貰ってくれるじゃん。」

魚肉ソーセージでも食って仕事に……あだっ！」

短い悲鳴で消される言葉。

真雪が美冬の頭を軽く叩いたのだ。

睨むように一瞥し、アブソルートに肩をすくめてみせる。

「いい加減にしろ、美冬」



ため息混じりの言葉。

「悪いな。コイツ、妙に馴れ馴れしいけど悪気はねえんだわ」

「何すんだよ、真雪！頭叩かないでよー！」

「……このハタ迷惑な暴れ馬の飼い主は、うぬか」

「暴れ馬って何！？訂正しろー！」

アプソルトと真雪の顔を交互に見上げながら美冬は抗議するが。

二人は聞こえてないかのように表情を崩さず佇む。

近くのパチンコ店の音や、あらゆる場所から流れてくる音で声が聞き取りづらい。

近づいてくるサイレンに真雪は視線を投げた。

それはまるで、どう返答しようか考えている風にも見える。

「残念ながら違うな。いつも噛みつかれてはいるけど」

「同情するぞ、死神。こやつが他人を噛まないよう手綱をつけておく事を勧める」

「へえ？あんたが俺の事を知ってるとは光栄だね」

ふて腐れた様子で身体をぶつけてくる美冬の頭を手で押さえつつ、眉を上げた。

「だけど、そりゃ出来ない相談だ。手綱つける前に暴れて蹴り殺されちまう」

「違うない」

「ちよっと、二人して失礼なコト言わないでよ！本気で噛むぞ！」

息を漏らすように小さく浮かべた笑みを残し、アプソルトはきびすを返した。

雑踏に紛れる濃紺の影。

此岸の者には見える、他の者とは違う殺伐とした空気をまとい。

「気をつける。今日は死臭が濃いぞ」

幻聴のように聞こえた声。

二人の前には、いつもと同じ日常の風景だけが残った。

「さすがアプちゃん。見事なツンデレだわ」

アブソルートの姿が見えなくなっても、消えた先を見つめていた二人。

沈黙を先に破ったのは誰ともなしに呟いた美冬だった。ややあつてから美冬を呆れたように見つめる視線。

「俺には全力で嫌がつてるようにしか見えなかつたけど」

真雪は、美冬を促すように軽く背中に触れて歩き始めた。慌てたようについてくる靴音が一つ。

美冬が真雪の隣に並ぶ。

「しっかしお前、よくアブソルートに絡もうと思うよな。命知らずつつーかバカつつーか」

「何それえ？」

「アイツって片っ端からチエイサー狩るらしいじゃん。怖くねえの？」

「そんな、野犬か何かじゃないんだから。」

アブちゃんは目が合った奴は誰彼かまわず殺すようなタイプじゃないよ」

駿河通りを横切り、ビルとビルの隙間の細い路地に入る。

大通りや繁華街は人の姿を多く見受けられたが

企業のビルが多いこの周辺は眠るような静けさが広がっていた。

「そんな怖い人かな？仕事柄ちよっと損してるってだけだと思っただけだ。」

友達になつちやえば、すごく面白い人だよ」

「……お前は人懐っこすぎるんだよ。一度会ったら友達だと思ってるだろ？」

「そんな事ないもん。まあ、2回あったら友達だと思っかもしれない」

笑いを含んだ声が答える。

真雪は髪をかきあげて喉を鳴らすように笑った。

遠くを見つめる、細められた赤紫色の瞳。

「ま、俺は『危うきに近寄らず』だな。」

これで討伐の現場に着いたらアイツがいるってオチがない事を祈るわ」

微風に冷たさを暖かさが同居する。

二人の靴音が更に静寂を誘うように響いていた。

暗闇の中で歌う声。

美冬は空を覆うような木々に囲まれた並木道を歩きながら歌っていた。

その隣には苦笑を浮かべる真雪の姿がある。

近くに民家はなく、まるでゴーストタウンのようだ。

「今回討伐するイレギュラーは弱いってさ。」

準備運動にもならねえだろうって所長が言ってた。とっとと片付けて帰ろうぜ」

その言葉に美冬は口ずさみながら頷く。

彼女の声に合わせるように木々はざわめき、葉ずれの音を広げた。

不気味な雰囲気漂っている。

外灯は点在してはいるが薄暗く、普通の人間であればこの道を使う事はためらうだろう。

ただでさえ、この周辺は都内有数の治安が悪い地域としても有名で特にこの道の先にある公園は事件や犯罪が頻発する場所なのだから。

「怪力、短気、破壊神っ」

「……美冬」

「パンチラあ、女の勲章だー」

弾むように頭を左右に振り、リズムを取りながら歌う声。

見えない何かを掴むように拳を握る、どこか楽しい彼女はその事に関係ない様子で。

「『やめて！それは子供のミルク代なの！』」

「美冬、あのだ」

「ああ、ラプター……って、何よ。人が気持ちよく歌ってる時に額に手を当ててうめく真雪を睨む顔。」

「頼むから、その歌だけはやめてくれ。しかも毎回セリフまで入れてるんじゃないよ」

「人のテーマ曲に文句つけるの、やめてくれない？感じ悪いわよ」「大体なんなんだよ、その曲。聞いてると疲れるんだけど」

脱力したようにうなだれながら黒い革手袋をはめる。

隣の美冬は不満そうに唇を尖らせ。

「だから、あたしのテーマだっつーの。ちなみに2番は真雪のテーマなんだよ。」

聞きたい？」

「いや、いい。むしろ歌うな」

「そんな遠慮しなくてもいいのに。多分、感動して泣いちゃうと思うな」

「絶対にそれはねえから」

疲労した表情を浮かべる。

顔の横で手を振る動作の後、口を開きかけた真雪は眉を寄せた。

靴音が止まり、本当の静寂が訪れる。

辿り着いたのは公園の入り口。

目の前には更に暗い闇が広がっていた。

それを囲む今にも朽ちそうな錆びた柵と、覆い隠す雑木林のような深い緑。

傍らにある看板には消えかかった公園の名前がかろうじて見える。

「……ねえ、今日の敵って準備運動にもならないんじゃないの？」

機嫌よさそうに歌っていた美冬はどこにもいない。

警戒した視線で周囲を見渡し、声をひそめた。

「おかしいぞ、どう考えても」

「うん。ハメられた？」

「さあな。この気配、かなりマズい」

頭から爪先まで一気に電気が走るように寒気が駆け抜けていく。張り詰める空気と辺りに漂う臭気。

事前情報の通り、敵となるイレギュラーは確かにここにいるらしい。けれど一つ予想外なのは。

『それは異常な殺気と、死臭を撒き散らしていた。』

「今回のイレギュラー、Eクラスじゃねえのかよ。どういう事だ」「強いね、こいつ。やるってなったら、かなり骨が折れるかもしれない」

今までの経験と自分の中の何かが危険だと喚く。

足がすくんでいることに気が付き、唇を噛む。

「ってかさ、真雪」

「ん？」

「……この匂い、嗅ぎ覚ええない？」

睨むように見つめられて真雪は動きを止めた。

身体の内側がざわめき始める。

確かに言われてみれば、この眩暈をさそう強い死臭は覚えがある。

脳裏に浮かぶ景色。

匂い、色、音　まるで目の前で起こっているかのように鮮明に思い出した。

葬儀会場、鳴動する棺、鋭く光るナイフ、舞う鮮血。

吐き気をもよおす死臭、憑かれたような笑い声。

蘇る、死んだはずのチャリオット。

「まさか」

呆然と、そして警戒心を滲ませ眩く。

自由が利かない身体を無理矢理動かすように、ゆっくりと美冬に顔を向ける。

「忘れるワケない。こんな匂い、普通のヤツは出せないよ」

「ああ。おそらく、ここにいるのはチャリオットだ」

「……あたし、悪いけど事務所からの指示待っていられるほど余裕ないわ」

美冬は真紅の手袋からショートソードを取り出すと、目の前をにらみつけた。

周囲は凍るように動きを止める。

今宵、蠢くのは死人とチェイサーのみ。

「同感だ。それに所長やノクティル力は接触するなって言うはずだからな」

「みすみす見逃せつて？そんなのゴメンだ」

「ああ」

閉じられていた瞳が開く。

真雪はスラックスのポケットに手を突っ込むと、一步踏み出した。響く靴音。

それはまるで何かの合図でもあるかのように。

「行こう、美冬」

その言葉を残して二人は闇の中へと溶けた。

遊具もなく、朽ちるのを待つ忘れられた公園に足を踏み入れると一層、死臭が濃くなる。

嗅覚は麻痺し、頭痛を覚えた。

美冬は顔をしかめたまま口を手で隠す。

縁取るように植えられた緑は、完全にこの場所を孤立させていた。ここは現実から隔絶された別世界。

「グッド・ピープル、いい夜だな」

笑うように吐き出された言葉に真雪が眉間にしわを寄せる。

目の前の景色が過去と重なった。

気が付けば二人の目の前にはモスグリーンのミリタリーコートを着た筋肉質の大男が立ちはだかる。

彼こそが死臭の発生源、チャリオット。

遠目から見れば普通の人間と大差ないが明らかに顔色は生きているそれとは違う。

コートは血でまみれ、口元も血で汚れていた。

まるで何かを食らったかのように。

「イレギュラー討伐、ご苦労だ。お前達が来る前に俺が食べてしまったが」

足元に転がった肉片をコンバットブーツが軽く蹴る。

薄ら笑いを浮かべる口元。

音も色も、ここには届かない。

あるのはモノクロームの世界と、対峙する彼らだけ。

遠くにある外灯は薄暗く照らすのみで、闇の暗さを今更ながらに知る。

真雪と美冬は黙って、目の前の男を見据えた。

「なんだ、挨拶もなしか？愛想がないガキだ」

「……ふざけないで。殺すわよ、チャリオット」

「そんな怖い顔をするな。せっかく会えたんだ、ちよつと話でもしよう」

緊迫感を全身から放つ二人とは裏腹にチャリオットは穏やかに言う。

以前会った時の狂気をはらんだ雰囲気はどこにもなく

まるで生前の彼を思わせるようでもある。

「話？あたしはそんなの……」

美冬の言葉の端々に宿る殺気。

真雪がそれを察知し、止めようとした時には既に。

「しに来た覚えはない！」

地面を踏みしめる音、風が大きく動く気配。

気が付くと刃物同士がぶつかり合う鋭い音がほとばしった。美冬とチャリオットは再び睨み合う。

葬儀会場でのあの鏢迫り合いが再び繰り広げられていた。

ショートソードを押し付けて歯を食いしばる美冬。

けれど押し返されているのが分かる。

チャリオットとの力の差は歴然だった

「ほう、あの時の女か……確か美冬という名前だったな」

「お前にその名前で呼ばれたくない！」

「いい顔をしている」

「黙れ！」

額をくつつけるような会話。

目の前から吐き出される頭痛を引き起こす死臭に懸命に意識を保とうとする。

美冬は異常に気が付いた。

目の前の男は葬儀会場で対峙した男であり、また別人だ。

言いて妙だがその表現が一番合っている。

あの時よりも格段に強さが増している気がした。

今にも力で負かされそうなのは事は明白で。

勢いに任せて突っ込んだものの、この男に好機を与えるだけに過ぎなかったのではないか。

震えるほどの力を武器を持つ手に込める。

こうして鏢迫り合いをしている隙にチャリオットに攻撃を与え、距離をとった方がいい。

美冬は笑みを浮かべるチャリオットを睨み、タイミングを見計らっていた。



「だが、頭はあまり良くないようだ。何でも突っ込めばいいと訳ではない」  
ふと。

死臭の中に違う匂いを嗅いだ気がして、注意がそがれた。  
重い臭気の中に何かが漂っている。  
この匂いを嗅いだ、しかも最近になって。

その時。

硬質な音共に美冬の武器が弾かれてバランスを崩した。

チャリオットが力を緩めたと思うと、瞬時に力を込めて押し返したのだ。

「ん、く！」

気が付いた時はもう遅い。

チャリオットの大型軍用ナイフの束が美冬の腹部を力任せに打つ。  
その衝撃に顔はゆがみ、地面に投げ出されるようにしりもちをついた。

「そそられる声だ」

声に笑みが混じる。

チャリオットはナイフを持つ手を下ろすと、美冬にゆっくりと近づいた。

足音と同調する鼓動。

「……っ」

「もっと痛めつけたら、どんな声を出すのだろうか？」

笑う声に、その瞳に狂気に似た何かが広がっていくのを感じた。  
顔を覗き込まれて美冬は悔しさを滲ませる。

この状態では完全に不利であり、どうにか逃れる方法を考えなければいけない。

「試してみ……」

ナイフを持つ手が美冬の顎を持ち上げるように触れた。

驚くほど冷たい手に生気はない。  
立ち上がる為に地面についた手が嫌悪で震える。

「やめてくれねえか」

頭上で聞こえる押し殺した声。

真雪が美冬の後ろに立ち、チャリオットの喉に人差し指を突きつけていた。

「あんまり調子に乗ると手が滑っちゃうぜ、先輩」

チャリオットは眼前に何かを見たかのように、動きを止めた。

顔からは笑みが次第に消えていく。

「大丈夫か、美冬」

「う、うん」

美冬が啞然としたままで立ち上がりかけた所に、ナイフが突きつけられ。

その動きを止める。

細い首筋、紙一枚挟んで刃がある　そんな状態。

「武器を下ろせ。話すんじゃないやなかったのかよ」

「それはこちらのセリフだ。この指を下げる」

「この状態で素直に従うと思うか？」

睨みつけたまま口の端を歪ませるように不敵に小さく笑う。

美冬はナイフのエッジから逃げようとするかのように顎をわずかに引いた。

唾を飲み込む動作さえためらう。

「でなければ彼女の首が飛ぶぞ」

「そうなたらお前の首も飛ぶな」

けん制する言葉。

美冬は真雪の言葉を聞いた気がして小さく頷いた。

もう少し待て、と。

ざわめく自分の体内に鼓動が大きく響く。

静寂の中、その音が辺りに響かないのが不思議なほど。けれど美冬は不思議と恐怖感を感じていなかった。何故だか分からず、この緊張感の中で自身も戸惑うほど冷静で。

「何故、お前達は」

数分が経過しても破られない均衡。

お互い微動だにしない中でチャリオットが静かに口を開いた。

真雪は前を睨み続けたまま。

「俺と対峙する？俺が何をしようと思関係ないだろう」

にわかに関風が強く吹いた。

景色さえ見えないこの暗闇で木々が何かを伝えるように、その身を揺らす。

気を張り巡らせた中では風の温度も感じない。

いつもは気にも留めない、風ですら今は邪魔に感じた。

「職業柄、人の生き死にに敏感でね。

死んで生き返るなんてフザけた真似する奴を見過ごせねえんだわ」

「なるほど」

「……なあ、俺も聞いていいか？」

チャリオットが真雪を見つめ返す。

ぶつかる視線をそらす事も出来ず、そらせようとしなない。

「お前、何をしようとしてる？生き返ってまで何がしたいんだよ」

「愚問だ」

「はぐらかしてんじゃねえ」

「ならば死神、お前達に話した所で何になると？願いを叶えてくれるとでも言うのか！」

チャリオットという言葉が次第に熱を帯びていく。

向けられる怒り。

目に宿る狂気じみた色。

「理解できない物は排除するしか頭がないお前達が！」  
肩を揺らし、笑う声が吐き出される。

真雪は唇を噛んで見つめていた。

どんな行動にでるか予想できず警戒感をみなぎらせる。

自分から動くわけにもいかず、ただこの均衡を保つしかない。

アクシヨンを起こしてチャリオットを刺激し、その結果美冬に被害が及ぶのは避けたい。

だからと言って、いつまでもこの状態を続けるわけにもいかないが。

「欲しい物があるのだ」

独り言のように。

「叶えたい事がある。やらなければならない事がある」

「欲しい、物？」

思いがけない言葉に聞き返す。

「多数から一つを手に入れる。

まるで花畑に埋もれた、たった一つの自分の宝物を見つけるように」  
死人は歌うように言葉をつむぐ。

「その為ならお前達とだって踊ってみせよう」

挑むような目を向けられ、真雪は眉をひそめた。

チャリオットの口元は笑うようにゆがむ。

その顔から何かを読み取る事は出来ず、心の中に戸惑いが生まれた。

「なあ、エニグマよ」

聞き覚えのない単語。

「エニ、グマ？」

「……生と死の狭間、夜と朝の間。それはまるで夕日のように」  
何故か心が沸き立つ。

その意味を問おうとするが、縛られたように身体の自由が利かない。  
唇だけがむなしく動いた。

「死ぬ一方で生まれる それは、お前達の事だろうか？」

「何言つてんだ。それはどういう……！」

「ごまかすな。お前と、その女が何よりの証明だ」

「意味がわからねえ。エニグマってなんだよ！」

訳も分からず、声を荒げた。

空いた左手を握り締める真雪の足元で

美冬は座ったままの姿勢でチャリオットを見つめる。

その目で言葉の真意を確かめようとするかのような強い眼光で。

「説明しろ、チャリオット！」

「無自覚ながら覚醒するエニグマか……面白い。次に会う時はどんな風になっっているだろうな」

「逃がさねえ！絶対に逃がさねえぞ！前みたいに逃げられると思うなよ」

「まったく……全て奴の言う通りとは。相変わらず、この世界は粹な真似をする」

チャリオットが言葉を言い終わるか否かのタイミング。

均衡が崩れた。

真雪はチャリオットの首に触れていた指先をまるで文字を書くかのように動かす。

動く唇。

「真雪、ダメ！」

その声は刃同士がぶつかり合う音でかき消された。

薙ぎ払うように手を空へ掲げて自分の首元に突きつけられていたナイフを弾く美冬。

わずかな痛みを感じたが、それに構わず跳ねるように立ち上がる。

「怒った状態でスキル出すと暴発する！抑えて！」

「知るか！」

怒鳴りあうように交わす声。

周囲が鳴動した。

真雪の瞳が、後ろに跳んで間合いを広げるチャリオットを捕らえる。少し離ればたちまち闇が飲み込んだ。

かろうじて蠢く影はみえるものの、まるで幻のようにも見え。

「ダンスはまた次の機会だ」

「させねえっつーんだよ！」

その声と共にかざした手に淡い光が宿る。

周囲に広がる爆音。

それは波のように周囲に幾重にも響き渡った。

立ち込める土煙が更に視界を奪い、目を凝らしても何も見えない。

チャリオットの気配はなく。

彼がこの場から消えた事を表す、次第に薄らぐ死臭。

肩で息をする真雪は辺りに静寂が戻ってもなお、眼前を見据えた。

無言の時間。

言葉は存在しない。

ただ二人は立ち尽くし、どんなに時間が経とうとその場を離れようとしなかった。

頬をなで、髪や服を揺らして通り過ぎる風。

夜は全てを染め、全てを飲み込む。

ソファに座るダンデライオンは、  
口元を片手で隠したまま思案するように一点を見つめる。

それと向かい合いように座った真雪と美冬は、無言で何かを待っているかのよう。

街は深夜と呼ばれる時間。

窓の外には何の変哲もない夜の景色が広がっていたが  
事務所は重くのしかかるような雰囲気満たされていた。

「なるほど、状況は分かった」

苦々しく発せられた声に、思わず座りなおす。

聞こえるのは、やむことなく流れるタイピングの音のみ。

「討伐に行ったらチャリオットがいて、イレギュラーを既に処理していたという事か。」

それなら君達の百鬼夜行の列に突っ込んだような酷い死臭にも説明がつく」

肘掛けに置かれていた指がリズムをとるように動いていた。

それは、どこか怒っている事を表しているようにも見える。

「けれど、何故チャリオットがいる事に気付いていながら連絡をしなかったんだい？」

危ないという事は分かっていたはずだよな」

「だからー。そういうんじゃないかねえって言うてんだろ。」

俺達は気付かねえで公園に入って、そこで初めてヤツだって分かったんだっつーの」

「……それは嘘だな。君達はそんなに鈍感じゃないだろう？」

仮にも一度チャリオットと会っているんだ、彼独特の強い死臭に気付かないはずがない」

「買い被りすぎだって。まあ、交戦したのはまずかったと思ってるけどな」

真雪が天井に視線を向けながら、ため息をついた。

チャリオットと遭遇し、事務所に帰ってきた真雪と美冬の異変に瞬時に気付いたのはダンデライオンだった。

異常なほど濃い死臭と血の匂いのしない様子に違和感を感じたらしい。

事情を聞くとダンデライオンの表情は一変した。

いつもの穏やかな様子はどこにもなく、何かを考えているようにも見える。

天井から吐き出される乾いた微風が、灰皿の上のタバコの紫煙を揺らした。

溜息一つ。

「まずいというレベルではない。いいかい、軽はずみな判断は命取りになるんだ。

君達に何度もそれを伝えているつもりだったが、どうやら分かっていないようだね」

「そうかもしれないけど、目の前にいるのに見逃すなんて……」

「彼を殺す事は僕らの仕事じゃないだろう、ラプター」

「でも！」

「前にどんな会話があったのかは知らないけどね。

万が一、何かあったらどうする？ そうなってからでは遅いんだ」

ダンデライオンの目が睨む。

有無を言わさぬ視線の強さと、冷たさを帯びる声音に反論しかけた言葉を飲み込んだ。

「とにかく勝手な判断、軽率な行動は避けてくれ。いいね？」

「ああ」

真雪が数回軽く頷き、窓の外を眺める。

少し離れた位置でサーペントとノクティルカがパソコンのディスプレイを見ながら



話しているのが見えた。

さすがにこの時間となれば人の流れは減ったらしく、街の声も静かになりつつある。

「まったく、何かあったらと思うと気が気じゃない。

僕がどんなに危険な目に遭わせないよう注意を払っていても

君達が無茶をしていれば意味がないじゃないか」

「だから悪かったつつってんじゃない。これから気をつけるって」

「本当かなあ。前も同じ事を言っつて大変な事になった記憶があるんだけれど」

今まで睨んでいたダンデライオンの表情が緩む。

うなだれるようにため息をついて苦笑を浮かべた。

「……しっかし珍しいじゃアないか。お嬢はともかく坊主が独断で動くなんて」

「そうですね。ラプターはともかく」

「ちよつとお！何で二人して、あたしはともかくって言うのぉ!？」  
近づいてきた足音がかすかに笑みを浮かべて言った。

見れば、ダンデライオンの後ろにサーペントとノクティルカが立っている。

不満そうに頬を膨らませる美冬。

「ラプターの戦闘スタイルは闘牛だからね。牛の方だけ」

「むー。何よ、人を敵に突っ込むしか脳がないみたいに!」

「その通りじゃないですか」

「きい！真雪、聞いた!？みんな酷くない?」

一瞬の沈黙。

何かを考え込んでいたらしい真雪は突然話を振られ、我に返ったように。

数度瞬いて自分を見つめてくる瞳を見返した。

「……え?あ、ああ」

ぎこちなく微笑む。

「良かったな、美冬。褒めてもらって」

「褒められてねーっつーの！ちょっとお、話聞いてなかったでしょ！？」

睨んで、隣にいる真雪の腕や背中を軽く叩く。

しかし彼はそんな美冬をなだめるように頭に手を置くと、顔を正面に向けた。

真剣な面持ち。

まるで意を決して何かを切り出そうとしているようにも見える。

目を伏せ、再び視線を持ち上げた。

「なあ、親父。聞きたい事あるんだけどさ」

「なんだい？」

ためらう空白に、穏やかならぬ気配を感じる。

そして。

「エニグマって何？」

その言葉が一切の音を消し、世界を停止させた。

今まで聞こえなかった空調の音が響き始める。

質問を投げかけられたダンテライオンの顔から笑みが消えていく。

顔はこわばり、驚きや困惑を隠そうとせず。

ただ言葉を失う。

「……何故、その言葉を知っている？」

数秒後、やっと絞り出した声は聞き取りづらいほどに小さかった。

独白のように呟く。

まさか、こんなにも過敏な反応をするとは。

真雪は目の前の光景を眺めながら心の中で呟く。

タブーを口にしてしまったのかと思うほどに。

ダンテライオンだけではない、サーペントとノクティルカも普通の反応ではない。

一様に動揺し、愕然としているように見える。  
彼らは何かを知っているのだ。  
そして、それは良い意味を持っていない事は明白だった。

美冬と真雪は思わず顔を見合わせる。

エニグマという単語が事務所の空気を一変させた。

まるで強烈な一撃のように。

3人は押し黙り、何かを考え込む。

「何故、エニグマの名を？」

「チャリオットが言ったんだよ、俺達はエニグマだって」

戸惑いがちに言葉をつむぐ。

何故だろうか、無言の驚きが肌を刺すように伝わってくる気がした。  
更に空気は何かを含んだように重くなっていく。

息を飲む気配。

誰かのため息を聞いた。

「確か……そう」

真雪が宙に視線をさまよわせ。

「『生と死の狭間、夜と朝の間。それはまるで夕日のように』」

真雪と美冬の声が重なった。

驚いた視線で睨むように見つめられ、思わずすくみそうになる。

言葉が地面に落ちる音さえ聞こえるような静寂。

「チャリオットがそう言ったの。」

意味が分からないんだけど、何だか確信してるっぽい言い方だった。  
ね、真雪」

「ああ。無自覚ながら覚醒するエニグマだとかワケ分かんねー事言  
ってたな。」

なあ、エニグマって何だよ。知ってたんだろ？」

その問いに、サーペントとノクティルカが険しい表情のまま

目配せし合っているのが見えた。

「……狂人の戯言だ。君達は気にしなくていい」

「嘘つけ。言えないような事なのかよ」

「いずれ分かる事だ。今、君達を知る必要はない」

「あんたはいつつもそうだ。大事な事は隠して俺はいつだってカヤの外だよな」

ダンデライオンの言葉に真雪が身を乗り出すようにして睨んだ。

静かな口調の中に苛立ちが宿る。

時計が等間隔で時を刻み、それが静寂を更に引き立てた。

「そういう訳じゃないよ。本当かどうかも分からない事で君達を振り回したくないだけだ」

「じゃあ俺達が何も分からずにイライラしてるのはアリなの？」

「レイヴン。分かってくれ、これは……」

無機質な物に囲まれた生気を感じない室内。

不意に窓の外で何かの咆哮のような音が響く。

こんな時刻に飛行機でも飛んでいるのだろうか、それとも夜の住人の声か。

「本当だと思つよ」

ダンデライオンの言葉を遮る美冬の声。

驚いたように周囲の視線が集中しても、それに気付いていないかのように小さく頷く。

自分の言葉に納得するかののような動作に見えた。

「ノクティルカさんは知ってるけど今週の火曜日にウタカタに会ったの。」

その時に彼女も同じような事を言ってたから、あながち間違いじゃないんじゃないかって」

「死兆星が？という事だい？」

「夜と昼の狭間に在るのはあたしだって言ってたんだ。あたしが人

を殺したのかつて

……また人を殺すのかつて」

向けられる視線に耐え切れずに、俯いて途切れ途切れに話す。

蘇ってくる無感情な声に心が騒ぎ出すのを感じた。

落ち着きなく髪を触り、指に絡める。

「同じ様なことを違う人から言われるなんて普通はありえないよ。

どんな意味かは分からないけど、多分あたしや真雪がエニグマと関係してるんだと思うの。

だから、あたし達は知る権利がある」

まっすぐに見つめてくる瞳にダンデライオンは視線をそらした。

灰皿に置かれた火の付いたタバコをもみ消すと、微かなため息を漏らし。

「……あの死兆星までそんな事を言うとはね。困ったものだ」

窓の外を見つめる横顔が一人ごちた。

首を静かに横に振る動作の後、真雪と美冬を見つめる。

「まったく、この世界はどこまで人をもてあそばせば気が済むのだろう」

ダンデライオンを後方から見つめるノクティルカ。

彼は黙りこくりに、鋭い眼差しのままで何かを考え込んでいるようだった。

話を聞いているにもかかわらず心は何処か違う場所にいつている。

「そんなの今にはじまった事じゃアない。ダンデライオン、話しておやりよ。

お嬢と坊主はエニグマの話聞くまでデコでも動かないだろうし？」

「そうだな……では、エニグマが何かをお話しよう」

苦笑するサーペントの声に頷き、まるで宣言するように言う。

真雪と美冬は、どこか緊張したような面持ちで正面を見つめた。

「エニグマはジョーカーだ。有益であり有害、使いようによっては毒にも薬にもなる」

その意味を把握しきれず静止する。  
この場にいる人間は皆、申し合わせたように苦々しい表情を浮かべていた。

思案するように忙しく視線を動かす美冬と、微動だにせず目を伏せて聞いている真雪。

「ジョーカー？」

「そう。そして……」

ダンデライオンが屋上のドアを開けると

まず飛び込んできたのは街の灯と湿気を多く含んだ空気。

にわかに強く吹く風に目を細める。

不意にかすかに死臭を嗅いだ気がした。

何処かでイレギュラーが発生しているのだろうか。

「やはりここにいたのか、ノクテイルカ」

漆黒の中に紛れる黒いスーツ姿の青年は手すりにもたれかかってタバコを吸っているようだった。

小さく赤い灯が浮かんでいる。

「君の姿が見えなくなったから、屋上で考え事でもしているのかと思っていたよ」

靴音が止まり、ノクテイルカと並んだ。

口角を上げて顔を向けると、そのまま小さく苦笑を浮かべる。

ノクテイルカはタバコをくわえたまま、まるでダンデライオンがいる事さえも

気付いていない風で。

見えない敵を睨むように、ただ前を見据えていた。

「……嬉しいですか」

表情を変えず、唇だけが動く。

怒りのこもった声を怪訝に思い、顔を向けると視線がぶつかった。

「貴方の探していたエニグマが見つかりそうで、ですよ」

自嘲的にも不敵にも見える笑みを浮かべ、静かに言う。

手すりに置かれた灰皿に灰を落とす仕草。

「良かったですね。まるで世界が貴方に味方をしているようではありませんか。

長年探していた物はすぐ近くにあり、しかも貴方を慕っている」

街の灯りがまるで死に行くように数を減らしていく。

けれど、微かに聞こえる人の声と街の息吹。

「とんだ笑い話です」

「ノクティルカ」

ダンデライオンは手すりに背を預け、睨むように目を細めたまま空を仰いだ。

今にも落ちてきそうな空を見つめる。

視界の端でノクティルカが見ている気配があった。

「君は、僕がこの状況を楽しんでいるとでも？」

「……」

「僕はそんなに血も涙もない男に見えるのかい？」

その声は、どこか寂しげに響く。

靴に視線を落としたダンデライオンの表情は見えない。

後頭部を掻くように手を当てたまま動きを止めた。

「確かに長い間エニグマを探していたよ。けれど、こんな事を望んだ覚えはない」

湿気が肌にまとわりつく。

目を凝らさなければ見えない闇の中にたたずむ二人は、どちらからともなく黙り込んだ。

ダンデライオンがスーツの内ポケットから取り出したタバコをくわえると

隣から手が伸びる。

闇に浮かぶ小さな火。

空へ細く伸びる煙と微かに笑って見せる顔に  
ノクティルカはわずかに目を細めてライターをしまった。

「二人がエニグマ？そんな事がありえるのか？」

かつて僕は彼らを奇跡に例えた。けれど、本当に奇跡だともいう  
のか」

「チャリオットと死兆星の発言を考えると可能性は高いですが、私  
は認めたくありません」

「それは僕も同じだ。もし仮に彼らがエニグマだったとしても  
その力を知る事なく生きていて欲しい……僕の勝手な願いかもしれ  
ないが」

指にタバコを挟んだまま、溜息混じりに言葉を吐く。

自分の脳裏に浮かんだ考えを振り払うように首を横に振った。

「彼らをこれ以上暗い場所へ追い込みたくない」

目を伏せたノクティルカの口から漏れる呟き。

メガネを押し上げ、そのままの姿勢で固まる。

そして、視線を上げた彼の目に宿るのは殺気を帯びた何か。

「……俺は何としてでもラプターとレイヴンを守る」



「メシおごるって言われて牛丼がいろいろって言うかね、普通」  
丼を持ったまま真雪が眉間にしわを寄せたまま呟いた。

「相変わらず安上がりだな」

「別にいいじゃん。急に食べたくなる時があるんだって。

それに牛丼屋さんって女の子一人じゃ入りづらいんだよ」

五条駅前、15時22分。

混雑のピークを過ぎ、人もまばらな牛丼店のカウンターで真雪と美冬は並んで

遅めの昼食をとっていた。

カウンターのの中では手持ち無沙汰な店員が出入り口の大きなガラス越しに

行き交う人々を見ている。

美冬は牛丼を頬張りながら、牛丼店とはつくづく不思議なシステムだと考えていた。

誰とも向かい合う事なく、全ての客が肩を並べてカウンターで食事を取る。

食事を楽しむというより効率よく食べる事に重点を置いているのだろう。

気兼ねしなくて済む所は嬉しいが、どことなく味気なくも感じる。

現に会話をしているのは美冬達だけであり、店内で他に話している者はいない。

美冬がどんぶりを置き、水の入ったグラスに手を伸ばした所で視線に気がつく。

見れば隣に座った真雪が不思議そうに凝視していた。

「何？」

「いや、お前って女だったんだなーって」

「何それえ！？ケンカ売ってんの？」

怒っている事を表すかのように腕を叩く。

不満そうに睨みつける様を見て、真雪は肩を揺らして笑った。

「てかさあ、真雪」

「ん？」

「何で急にゴハンおごってくれるの？何かあった？」

近くにたたずんでいた店員が声を張り上げたのにつられて、視線をドア付近に走らせる。

店に人が入ってくると同時に街の喧騒も流れ込み、にわかには賑やかになった。

そういえば今日は祝日であった事を思い出す。

「何でって……お前、最近元気ねー気がしたからさ。」

とりあえずメシ食わせて元気にしとこうかと

「へ？」

「ま、あんな事があったんだから無理もねえんだけど」

真雪は正面を向いたまま、美冬と視線を合わせる事なく言った。

漬物を咀嚼しながら何かを考えているように見える。

「しっかし、この漬物しょっぱいな。塩効きすぎだろ」

何かを誤魔化すように発せられた言葉に

小さく笑いながら店内のポスターに目を走らせる美冬。

真雪の方へ顔を向けた。

「何言ってるの、元気ないのは真雪の方じゃん」

「そうか？」

「そつだよ。まあ、どっちかって言うと」

事務所全体が元気がないって言う方が正しいかもしれないけど」

店内には軽快な音楽に合わせて、女性の声が新商品を宣伝している。それが静かな店内が重苦しい雰囲気にならない原因の一つに思われた。

「おかしいよな。あいつら、絶対何か隠してるって」

「そうだね」

「先週の金曜に親父がエニグマの説明してたけどアレだってよく分からねえし。」

抽象的な事ばっか言ってる肝心な事は一つも言ってるなかったじゃねえか」

「だねえ。微妙にポエムチックだったもんね、あの説明」

いらだった表情を浮かべる真雪とは裏腹に美冬が楽しげに笑う。

その様子を怪訝に思ったのか、箸を持つ手を止めて見つめた。

「……お前、気にならねえの？」

「そりゃ気になるけど、教えてくれないんだから仕方ないじゃん。

言いたくない事を無理に聞くわけにもいかないしね」

箸をくわえたままで唇を曲げる。

視線はそのまま、窓の外の景色へ。

「あの人達の事だから気遣ってるんでしょ。」

うちの事を思って言わないんだと思うよ。

あの様子だとエニグマは良い事じゃないって感じたし」

汁で色が変わった白米の上に載っている肉を口に入れると、嬉しげ

に目を細める。

「悩んだ所で何も分からないし、変わるわけじゃないからね。」

あたしはあんまり考えない事にしたの。何かあったら、そんな時考え

よっかなーって」

「そうか」

「それに、考えても答えが出ない事で悩むなって死んだじー様に言

われてんのよ。」

あたし4時間以上考えると具合悪くなるし」

それまで何処か呆然と隣に顔を向けて話を聞いていた真雪が急に吹

き出した。

それを見て困惑したような表情を浮かべる美冬。

「悪い。いや、お前らしいなと思ってさ」

「何で笑うんだよお。こっちは結構マジなのに」

「さすがアホの子」

「ちよつとお、どういう意味　!？」

怒ったように腕を掴んで左右に揺さぶる。

その問いに答える事なく、ただ笑う顔。

自分以外は他人事といった風の店内で

真雪の笑い声と美冬の不満そうな声が響いていた。

十分後。

真雪は湯飲みに入った緑茶をすすりながら、カウンターに肘を乗せて依然として牛丼を頬張る美冬越しに景色を見ていた。

街はゴールデンウィーク中で、どこか浮ついた空気を発散している。それは、行楽日和という言葉が相応しい天気も関係しているのだろうか。

自分はそんな気分とは無縁だというのに。

思いをめぐらせるのはチャリオットの言葉とエニグマの話。

確かに美冬の言うとおり、考えない方が賢明なのかもしれない。

けれども仕方がないと分かりつつも考えてしまう自分がいた。

エニグマと呼ばれるジョーカーに例えられた何か。

自分たちがそう呼ばれた事を知った時の周囲の反応。

そして、チャリオット。

分からない事が多すぎて苛立ちすら覚える。

だからと言って何か知る術がないのは真雪自身よく分かっているのだが。

「そつえばさ」

現実に引き戻したのは、どこか嬉しそうな声。

「昨日テレビ見てただけけど、ちよつとやってみたい事があるんだよね」

美冬が箸を持ったままで嬉しそつに宙を見つめていた。

真雪の動きが止まる。

大抵、彼女がこんな顔をして『やってみたい』という事は口クでもない事だ。

微量の嫌な予感を感じ、わずかに眉間にしわを寄せた。

「……なんだよ」

「よくさ、バーとかで『あちらのお客様からです』ってマスターがお酒出すのってあるじゃん？」

「よくはねえけどな」

「あれ、やってみたいんだよね！面白そう！」

はしゃぐようにカウンターの下で足をバタつかせている。

その様子を苦笑混じりで頬杖について眺める真雪は、軽く息をついた。

「お前ね、プレゼント交換とかじゃねえんだぞ？つーか、未成年だろ」

「そう！そうなんだ、問題はそれなんだよ」

小さく唸り、目の前の割り箸の入った入れ物を睨むように凝視して考え込む。

「でもね、やったら面白そうだと思うない？」

「面白くねえよ。第一、やられた方が迷惑するぞ」

「そうかなあ」

唇を尖らせながら箸で井についた米粒をかき集める仕草。

真雪は湯飲みに口をつけながら、開いた自動ドアの方へ視線を向けた。

動きが止まる。

「美冬」

小声で短く名を呼ぶ。

向けられた視線に、顎で示す。

「チャンスじゃん」

「え？」

「『あちらのお客様からです』」  
真雪の言葉の意味が理解できずにいた美冬は、一瞬驚いた顔をしていたが。

彼の視線の先と顔を見比べているうちに合点がいったらしい。

「すいませーん！」

カウンター内の制服姿の店員と目が合う。

隣では真雪が手を挙げて挨拶しているのが見えた。

近づいてくるのは長身、黒髪を一つにまとめた黒いスーツの男。

「あの黒い兄ちゃんに牛井特盛り、卵付き、肉多めで！」

美冬の甲高い声が店内に響き渡る。

周囲の視線が一斉に注がれたが、すぐに何もなかったかのように平静に戻った。

店員は呆気にとられた顔で美冬を眺めていたが、すぐに弾かれたように動き出す。

「よお、ウォークライ。お前もメシか？」

「……オヤツだ」

周囲を見渡した後、美冬の隣の席に座ると呟くような声で言った。  
睨むような視線が向けられる。

「お前達も？」

「いや、オヤツで牛井は食べねえから。ちょっと遅い昼メシ」

ウォークライは、その答えに頷きながら

隣で機嫌よく身体を左右に揺らしている美冬を不思議そうに見つめていた。

ややあつて、目の前に人の気配がある事に気が付いて顔を向ける。  
何かを告げようと口を開きかけた時。

「お待たせしました！牛井特盛りと卵です」

遮る声と、目の前に置かれた丼。

怪訝そうに丼と店員を見つめる様子に真雪が身体をそらして笑って

いた。

顔の横で手を振った後、美冬を示し。

「こちらのお客様からです」

その声に美冬が真顔で軽く手を挙げてみせる。

今まで怪訝そうな表情を浮かべていたウォークライはうなだれるような動作を見せた後、声もなく笑っていた。

「良かったな、美冬。夢が叶って」

「うん！」

黙々と食べるウォークライの横で美冬は満足そうに口を紙ナプキンでぬぐっていた。

彼女の目の前には空になった丼がある。

「あたし、夢も叶ったし死んでもいいね」

「死ぬなよ」

「いやー、なんか違うような気がするけど満足だよ！」

「まあ、カウンターで牛丼滑らせたら倒れちまうからな。満足で何よりだ」

感慨深げに頷いてみせる美冬の隣で、真雪も笑いをこらえながら頷く。

ふとウォークライの箸が止まった。

わずかに眉間にしわを寄せて向けられる顔。

「……そんなに俺に牛丼を？」

「お前に牛丼食べさせるのが夢ってどんなんだっつーの」

「愛されているな、俺」

「話聞けて」

二人のやり取りに美冬の笑い声が重なる。

穏やかな午後の日差しが笑うように窓の外で揺れていた。

ドアを開けると、そこにあつたのは静まり返つた空気。

まだ昼間であるこの時刻は比良坂事務所にとつては夜にあたる。閑散とした室内は殺風景に感じた。

「あれ、ノクテイルカいねえのか？」

真雪が髪を掻きあげながら辺りを見渡す。

その問いに答える声はない。

返ってくるのは静寂のみ。

「うっん、そんな事ないよ。ほら」

真雪のジャケットの背中中の辺りを掴み、美冬が身を乗り出した姿勢で前方を指差した。

視線を向けるとディスプレイ越しに立ち上るタバコの煙と銀髪がわずかに見える。

「あ、ホントだ」

「また居眠りしてんのかな。んもー、タバコに火いついたままとか危ないっての」

ぼやくように呟く声が靴音と共に部屋に響いた。

整然と並べられた事務機の島を回り込むように歩いていく美冬。

黒いスーツの背中は窓の方を向いたままで微動だにしない。

眠っているようにも見える。

「ノクテイルカさんっ！」

美冬が背後から近づき、のしかかるように抱きつく。

楽しいげな声。

突然。

弾かれたようにノクテイルカが持っていた書類を膝の上に伏せた。その行動のすばやさには眠っていないことを知る。

表情こそ見えないものの全身から緊張感に似た穏やかならぬ雰囲気漂っていた。

「い、ごめん！大事な書類読んだ？」



慌てたように美冬が身体を離す。

けれど彼女は見てしまった、彼の読んでいた書類を。

それは英文で敷き詰められていたが上部に書かれた見出し部分だけが読み取れた。

report on the ENIGMA エニグマに関する  
報告書

「あ、おかえりなさい」

椅子を回転させるとノクティルカは顔を上げて微笑を浮かべる。

その笑顔はいつものそれとは違う気がした。

どこかわざとらしい、作ったような。

「ノクティルカさん、どうしたの？」

「何がですか？」

「具合悪いの？ちょっといつもと違うみたい」

「そんな事はないですよ」

背に光を受け、表情は見えずらい。

視線を合わせてもすぐに反らしてしまうノクティルカを

美冬は心配そうに首を傾げて見ていた。

椅子を引くと聞こえるのは鳴くような小さな音。

かける言葉が見つからずに黙り込む。

何かを言わなければと話題を探すが、パソコンに向き直った彼を見ていると

まるで『話しかけるな』と言われている気さえ。

袖を引つ張ろうとして、伸ばしかけた手を止めた。

確かにこの数日のノクティルカは様子がおかしい。

黙る回数が増え、何かをずっと考えているようにもみえた。

ダンテライオンと二人きりで会話をしている姿を多く見かけ、

美冬や真雪にそれを知られたくないように。

初めは単に仕事が多いただけだろうと思っていたが、それは違つと気付いてしまった。

いつからだっただろうか。

美冬は思い出そうとして、一つの答えに行き着く。

それはさつき見た単語。

エニグマ。

エニグマが、彼を変えたのか？

「ラプター」

見つめられている事に気付き、我に返る。

美冬は言葉もなく顔を向ける事でその呼びかけに答えた。

「……いえ」

何かを言いかけて視線がさまよう。

開きかけた唇が再び硬く閉じられ、その様子に不安を覚えるが。

互いに言葉はない。

「すみません」

「なあに？気になるよ」

「忘れて下さい。何でもないんです」

遠くから視線を感じるが、気にしている余裕はなかった。

問いたかった。

その謝罪の意味を、飲み込んだ言葉を。

美冬は見つめるしか出来ず、唇を噛んだ。

「レイヴンと遊んできたらどうですか？」

ノクティルカはディスプレイに視線を戻すとタイピングの音の中で言う。

その横顔からは表情が読み取れない。

美冬は何か言いたげな表情のまま曖昧に頷き、身を翻し。

遠ざかる靴音。

ノクティルカは彼女の背を一瞥すると、軽く息をついた。

「珍しいですね、ラプターから呼び出すなんて」

「ごめんね、仕事してたのに」

「構いませんよ。ちょうど気分転換をしようと思っていましたから」  
美冬とノクティルカは屋上にたたずんでいた。

まだ夕暮れの気配も感じない空。

雲の隙間から見える空は不気味なほどに青く感じた。

風が強いせいだろうか、まるで水に流されたかのように雲が移動していく。

美冬はノクティルカに話を切り上げられた後も気になって仕方なかった。

聞いた所で納得できる答えが返ってくるとは期待していない。

おそらく話を誤魔化されて終わりだろう。

けれど彼の様子が気になる。

いつもと違うのはエニグマが原因なのか、それとも。

消化できない感情を抱いたまま、気付けば彼を屋上に誘っていた。

「少し気になっちゃったんだ。ノクティルカさん、最近変だから」

「変なのは前からですよ」

「そうじゃなくて!」

屋上の真ん中付近で向かい合い、たたずむ。

目の前でおどけたように笑うノクティルカに上目がちに睨むように見た。

真面目な話をしている、と伝えるように。

「なんかずつと考えてるみたいだし、普通に話してる時も上の空だもん」

「そうですか?」

「今だって目が笑ってない。怖い顔してる」

下の街路樹がざわめく音が妙に大きく感じる。

ここにあるのは、いつもと違う空気。

「ごめんなさい。今日見てた書類、ちょっと見ちゃった」

「……」

「エニグマなの？エニグマが原因でそんなに悩んでるの？」

問い詰めるように言葉を吐き出す。

ノクティルカは訴えるように見つめてくる美冬を

見つめ返す事が出来ずに目を伏せた。

「ノクティルカさんが、ずっとそんな調子なのは心配だよ。

あたしエニグマとかよく分かんないけど、出来る事なら何でもするから。」

悩まないでって言うのは無理かもしれないけど……」

「貴方はいつもそうですね」

不意に笑いが漏れる。

その笑みが何を意味しているか分からずに怪訝な表情を浮かべた。スラックスのポケットに手を突っ込み、眩しそうに目を細める顔が向けられる。

「見てないようで、しっかり見てるんですから。本当に敵いません  
髪が風に巻き上げられる。」

コンクリートに伸びる黒い影。

ここから見える景色はどれも生気がなく、生きている者が居る気配  
さえ感じられない。

孤立している錯覚を覚えた。

「でも、肝心な事には気付いていない」  
俯いた顔。

口の端が上がっているのだけが見える。

「え？」

「私の様子が変わりしたら……原因は貴方です、ラプター」

「もう、気持ちを隠すことなんて出来ません」

美冬は呆然と見つめるしか出来なかった。  
見つめられ、目もそらせずに。

周りの音が消えていく中で、自分の中の鼓動だけは大きく響く。  
その理由は分からない。

けれど、胸は高鳴っていた。

「見ているだけで満足すると思っていた。思いを告げれば貴方に迷惑がかかると思った」

動きが止まる。

指先でさえも動かさずに。

「でも」

ノクティルカは軽く首を横に振ると、ため息をついた。

「言わなければきつと後悔をするでしょう」

向かい合い、瞬きも忘れた。

なぜか逃げ出したい衝動に駆られる。

けれど動けずに。

鼓動を抑えようとするかのように胸元を手で押さえた。

「私はラプターと出会って本当に幸せなんです」

ノクティルカの顔に不意に笑みが広がる。

まるで堪えきれなかったように。

「貴方がいて笑ってくれているだけで

こんなにも世界は楽しいなんて思いませんでした」

メガネの奥の赤い瞳は笑っていた。

「好きになって良かった」

頭の中が真っ白になる。

呆然と見つめたままで、美冬は薄く唇を開いた。  
笑うノクティル力を見て思う。  
もしかしたら、彼の満面の笑みを見たのは初めてかもしれないと。  
事実が把握しきれていない一方で鼓動は早まったまま。  
美冬は動揺していた。

「え、と……あの」

言葉を発するのにも、どのくらいの時間を要したのだろうか。

美冬は顔を紅潮したまま俯き、しきりに髪に触れる。

おそらくノクティル力はずっと美冬を見つめているらしい。

視線を感じ、顔を上げることはできなかった。

視界にうつるのはノクティル力の足元。

聞こえるのは街の息遣い、自分の心臓の音。

「えーと」

落ち着きなく視線を動かして状況を整理しようとする。

しかし、まとまるはずもなく黙ったまま。

「あのね、ノクティル力さ……」

「何も言わなくて結構ですよ」

意を決したように顔を上げた美冬の唇の前にはノクティル力の人差し指。

見上げた視線の先で彼は微笑んでいた。

「ただ私は気持ち伝えたかったです。」

「……すみません、驚かせてしまって」

ぎこちない動きで頷き、そのまま俯く美冬。

何故、顔を見ると穏やかでいられないのだろうか。

息苦しさを感じる。

「さて、と」

言葉に詰まっていると頭上から聞こえた声。

それは、わざとらしく明るい声を出しているようにも聞こえた。

「所長から頼まれていた仕事を早く片付けなくては」

「え。あ、うん」

「では、一足先に戻りますね」

ノクティルカの手が美冬の頭に置かれる。

困ったような表情のまま見上げる顔に軽く笑みを浮かべて。手が離れると同時に靴音が遠ざかっていく。

「あ、あの！ノクティルカさん」

ドアを半分開いたままのシルエツトが振り返るのが見えた。

「……そ、その。あの、ありがとう」

口ごもったように。

その声の大きさでは数メートル離れたノクティルカには聞こえなかったかもしれない。

美冬が言い直そうとしていると。

「お礼を言うのは私の方ですよ」

「ありがとう、ラプター」

殺風景で、命の感じられない雑居ビルに囲まれたこの場所で。美冬はただ立ち尽くしていた。

呼吸の仕方でも忘れてしまったのかと思うような息苦しさを。  
今日、何度目かのため息。

美冬は机に突っ伏すようにして、事務机と頬をくっつけていた。  
頬に硬く冷たい感触が伝わる。

まるで体温を少しづつ奪われていくかのような。  
視界には窓越しの東京の夜が見える。

明日からまた連休が始まるというのに気持ちは沈んだままだった。

「美冬」

けだるそうに指先でリズムを取る美冬。

呆然とした瞳は本当に見えるのか定かではない。

その顔は気が抜けたようでもあり、今にも泣きそうにも見える。

「おい、美冬？」

窓から染み込むパチンコ店の会話を奪うような音量の音楽も耳をす  
り抜けていく。

自分は抜け殻だと心の中で呟いた。

けれど、この正体不明の切なさをどうする事も出来ずに持て余して  
しまう。

ゆっくりと瞬きをする美冬の目の前に。

何の前触れもなく丸い何かが置かれた。

ぼやけた茶色の物体。

目を凝らすとそれは透明のセロファンに包まれた饅頭だ。

手が伸びては、数を増やす。

何かの境界線のように饅頭が何者かによって並べられていた。

「……何これ」

寝言のように呟く声。



美冬が億劫そうに小さく呻きながら身体を起こすと

隣に黒いスーツ姿の真雪が立っていることに気がつく。

顔を向け、疑問の視線を投げた。

「饅頭」

「そうだね」

「上の階の不動産屋さんが持ってきてくれたんだわ。草津土産だと美冬を凝視していた真雪は大きいため息をつくと彼女の隣の席の椅子に座った。

背もたれを抱えて、身を乗り出すように覗き込む。

「どうしたんだよ。最近、マジで変だぞ」

「変じゃないよ」

「そう思ってるのはお前ぐらいだったっの。呼んでも返事しねえし、メシ残すし。」

「ずっとボーっとしてるじゃねえか」

「そんな事ないよ。全然元気だって」

「……そんな顔で言っても説得力ねえよ」  
軽く睨む視線。

指が軽く美冬の頭をつついた。

「本当に何かあったんだったら相談乗るからな」

「ありがと」

そう言っただきり、美冬は黙る。

椅子にもたれて机の上に投げ出された携帯電話に触れる。

もてあそぶように開閉を繰り返していた。

等間隔で聞こえる無機質な音が静寂を濃くしていく。

「でも、大丈夫だから」

美冬は苦笑を浮かべると、立ち上がる。

きびすを返しかけた所で。

何かにぶつかった気配。

「……っと、すみません」

どうやら応接セットの方から歩いてきたノクティルカとぶつかったらしい。

間近に黒いスーツが見える。

美冬は見上げた視線を咄嗟にそらした。

「あ、や。うん、あの。ごめん、なさい」

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫」

顔が赤くなっているのが分かる。

俯いたままで何度も頷き、鼓動を隠すように息を殺す。

心配そうな目で見つめてくるノクティルカに曖昧に微笑みかけて足早に立ち去る。

真雪は怪訝な表情を浮かべたまま、二人を見比べていた。

洗面所のほうへ消える翡翠色の髪と

身体をねじるようにして、振り返ってそれを見つめる姿。

「何だありゃ」

自然と口から言葉が漏れる。

「もともと変だとは思ってたが、そろそろ修理に出さなきゃいけない。なあ？」

机に頬杖をつき、真雪がノクティルカに言葉を投げたが。

返事は戻ってこない。

目の前で唇を噛んだまま何かを考えるように押し黙っていた。

「ノクティルカ？」

「あ、はい！なんでしょう？」

「話聞いてた？」

「え？……すみません。もう一度言って下さいますか？」

眉間にしわを寄せた顔を見て、取り繕うように。

真雪は何かを考えるように美冬が消えた方向を見つめていた。

「変だよ、あたし……」

洗面所で声が聞こえる。

美冬は洗面台に手を付いて呟いた。

けれど鏡を見つめると、もう一人の自分に何かを指摘されそうな気がして

直視する事が出来ずに。

俯く。

「絶対変だ」

ノクティルカを見るたびに、穏やかではいられなくなる。

原因は分かっていた。

けれど、どうしてこんな状態になってしまったのか分からない。

まるで何かの攻撃を受けているようだ。

息苦しさで動悸、顔が赤くなるのが分かる。

もしかして、これは。

けれど。

「何してるんだい？こんな所で」

不意に斜め前から声が聞こえて美冬は顔を上げた。

見れば入り口をふさぐようにしてサーペントが立っている。

「ああ、便所でする事なんざ限られてるか」

キセルを唇に当てたまま楽しげに微笑む顔。

視線は彼女を一瞥した後、後方に向けられた。

「えーと」

「ねえ、ラプター」

必死で言葉を探していると、それを遮るかのように言葉が重ねられ。不思議そうに見つめる。

「ちよいと外の空気を吸いたくなってね。散歩に行こうと思うんだが」

狭い空間で声がこもるように響く。

白いタイルに囲まれた、この閉ざされた空間は冷たさに満ちていた。

「こんなイイ女が一人で出歩くのも危ないだろう？付き合ってくれないかねエ」

わずかに驚いたように見つめていた美冬が小さく笑う。  
悪戯っぽく微笑んでみせるサーペント。

「……姐さん、あたしも女なんだけど」

「アンタは色んな意味で強いから何の問題もないさね」

事務所から歩いて2分ほどの位置にある、線路に寄り添うようにして作られた駅前の公園。

ビルや店舗ばかりのコンクリートで塗り固められたような界隈の中で異質といえるほど木々の多い場所だ。

等間隔に並んだ外灯が緑を浮かび上がらせる。

線路を挟んで向こう側の光の群れが木立越しに見えていた。

カーテンのように長く伸びる木々の垣根を背にして

ベンチにサーペントと美冬は並んで座る。

周囲に人はない。

もしかしたら他にも人がいるのかもしれないが、薄暗さも手伝って姿は見えなかった。

「ね、姐さん」

美冬は微かに夜の匂いの漂う風に目を細めて切り出す。

瞳は離れた位置にあるイルミネーションを見ていた。

「その人の事を考えただけでドキドキするのは恋？」

膝の上におかれた手が握られる。

「ずっと一緒にいたいって思うのも恋？」

尋ねられたサーペントは言葉もなく、隣に顔を向けた。

背から電車がせわしなく行き来する音が聞こえてくる。

声はそれにかき消されそうになり、会話をしばしば飲み込もうとし

ていた。

「あのね。この前、ノクティルカさんがあたしの事を好きだって言ってくれたんだ。」

あたし、全然そんなコト想像もしてなくて本当にビックリしちゃってさ」

「うん」

「あたしはね、ずっと真雪の事が好きなんじゃないかって思ったの。」

真雪は恋愛対象として見てくれてないって分かってたけど」

暗闇の中で靴音が聞こえる。

公園の前を歩く人のものだろうか。

「……でもあんな事があって、ノクティルカさんを急に意識するようになってっちゃって。」

まともに見れなくなっちゃった」

途切れ途切れにつむがれる言葉に耳を傾けるサーペント。

その唇はかすかな笑みを浮かべ、空へと伸びるようなビルを眺めていた。

「もつどつちが好きだとか、自分の気持ちが変わらなくなっちゃったよ」

「……」

「自分はどう思ってるのか結論出さなきゃいけないし、ちゃんと返事だっしてなきゃ。」

ずっとこのままってワケにはいかないよね。」

「……でも、心のどこかでは結論を出すのを避けてるの」  
痛さを伴う声。

どこか泣いているようにも聞こえた。

暗闇の中では表情は見えない。

俯いたのが分かった。

「最低、あたし。どっちとも距離が出来るのが嫌だなんてムシが良すぎるよ」

拳が更に強く握られる。

何かを言おうと口を開いた所で、ふと気付いたように横を向いた。

「あ、ごめん。あたしばかり喋っちゃって」

申し訳なさそうに謝る美冬に、サーペントが彼女の肩にかかる髪を手で柔らかく払う。

そして、首を横に振る。

「ねえ、お嬢」

「ん？」

「結論つてのア、『出す』モンじゃなくて『出る』もんさね」

目を細めて、言い聞かせるように。

「焦って無理に答えを出して後悔なんざしてたら馬鹿みたいだ。

時間をかけて、納得いく答えを探した方がいいんじゃないかと思うがねエ」

「でも、ずっと返事待ってるの辛いんじゃないかな」

「返事をせかされてる訳じゃないんだろ？だったら、ゆっくり答えをお出しよ」

頷くを見て、つられるように頷くサーペント。

キセルを唇から離すと、ゆっくりと紫煙を吐き出した。

「まア、お嬢が悩むのも分かるよ。

坊主とノク、二人ともいい子だ。どっちななんて簡単に選ばやしな  
いさ」

「……うん」

「だからって、アンタが負担に思うことアないんだからね。気楽に  
いきな」

見上げた先にあるのは細い三日月。

まるでこのまま夜に溶けてしまいそうなほどの。

「ノクはね」

会話が途切れ、沈黙が続いた時。

サーペントが前を向いたまま話しはじめた。

「別にお嬢を困らせたくて気持ちを伝えた訳じゃアない。ずっと悩んでいたんだ。好きだけど、気持ちを伝えれば迷惑がかかるって」

「そう、なの？」

「ああ。あの子は何でもないフリをしているが、ああ見えて後悔したり心配したりしているはずさね」

「どうして？」

驚いたように身体を向ける美冬にサーペントが視線を投げる。風に袂が揺れた。

「自分が言つたからアンタを困らせたって」

「あたし……」

「分かってるよ」

美冬の手の上にサーペントが手を重ねる。

その動作はまるで彼女を落ち着けようとしているように。

「思いつめなくていいんだよ。難しく考えずに自分に素直になりやアいいのさ」

視界の端で木々が揺れるのが見える。

闇と同化した緑は風にその身を踊らせた。

「ほら、笑いな。アンタは笑ってる顔が一番可愛いんだから」

サーペントの指が美冬の口の両端に触れ、持ち上げる。

「むぐー」

「ずーっとそんな顔してたら戻らなくなっちゃうよ？」

その言葉に美冬は曖昧に笑う。

不意に、遠くから聞こえていた靴音が二人の前で止まった。

「あら偶然」

目の前に立っていたのは髪をかきあげ、肩をすくめて笑う真雪。美冬はその姿に驚いたように数度、大きく目をしばたかさせた。「おや、レイヴン。お嬢が気になって探しに来たのかい？」

「んーなワケねえじゃん。俺はコンビニで買い物だ」

「遠回りしなくなたって、事務所の下にだってあるじゃないか」

「……うるせえな。細かい事はどうだっていいだろ」

口ごもり、拗ねたように言う真雪にサーペントが笑う。

そして何か言いたげに美冬の顔を一瞥した後、腰を浮かせた。

「さて、と。それじゃ後は若い二人にお任せしようかねエ」

「何だよ、そのやり手ババアみてえな発言は」

「誰がババアだい、このクソガキ」

そんなやり取りの後、顔を見合わせて笑う。

サーペントは立ち上がると空いた手を軽く振って見せた。

「それじゃア、お嬢。あたしゃ先に戻ってるからね」

「あ、うん。ありがと、姐さん」

「坊主、お嬢泣かしたらタダじゃおかないよ？」

「泣かすかつつーの」

呻くような声に笑いが漏れる。

黒い着物が次第に遠ざかり、人工的な光の中へと消えていった。

残された真雪と美冬は無言で見送り。

どちらからともなく顔を見合わせた。

「まったく、そんなに俺は頼りねえのかよ」

美冬の隣に座った真雪は、数分の沈黙の後独り呟く。

それまで俯いたままだった美冬は意外な言葉に顔を上げた。

「相談に乗るって言ってんじやん」

「だって」

「まあ、こういう問題は俺なんかより姉御の方が相談しやすいんだろうけどな」

駅のホームから聞こえるアナウンスと電車が通り過ぎる音。

動きを止め、見つめてくる視線に思わず笑いを漏らす。

「……知ってたの？」

「そりゃね。俺を誰だと思ってるんだよ」



足を組む動作。

「好きだつて言われたんだろ？……ノクティルカから聞いた」  
言葉につまった美冬の視線がさまよう。

それは、どんな反応をしていいか迷っているようでもあった。

「つーか、聞かなくても薄々気付いてただけだ」

「嘘」

「嘘じゃねえよ。大体ね、お前ら揃いも揃って分かりやすすぎるんだよ。」

アレで何も気付かなかつたら相当バカだぞ」

苦笑混じりの声。

二人はお互いに目を合わせようとせず、それぞれ違う方向を向いていた。

真雪が視線だけで美冬を一瞥する。

「お前はどうかんだよ」

「どうって？」

一瞬、空白が訪れた。

「ノクティルカの事、好きなの？」

二人の間を割り込むように通り過ぎる一陣の風。

周囲は静寂で満ちている。

ここは駅前で、少し歩けばすぐ近くにうるさい位の喧騒があるというのに。

二人は見つめ合ったまま黙った。

「……分かんないよ」

耐え切れなくなったのか、美冬が消え入るような声で答える。

「急にあんなコト言われて、驚いて。もう自分の気持ちも分かんないんだ。」

まさか、ノクティルカさんが好きだなんて思ってもみなかった」

「鈍いんだよ、お前は」

真雪がため息混じりで、俯いた美冬に言葉を投げる。  
髪をかきあげ、呆れた表情を浮かべた所で。

「だって！あたし」

美冬が顔を上げて思いつめたような声を出した。  
思わず動きを止める。

「……あたし、真雪が」

複数の靴音が聞こえ、視線も感じる。

けれど、それらを気にする余裕はなかった。

驚いたように見つめる視線と、何かを訴える視線。

言いかけた言葉の先を待つが、美冬は固まったままで。

何かを迷っているようにも見える。

フェンスと木を隔てて、間近で電車が轟音を上げながら通っていく。  
視界の端で光がスローモーションで走っていた。

「ノクティルカさんとデキてると思ってたから」

頭が真っ白になりかける。

言葉を聞いた側から忘れていくように。

一瞬理解できずに啞然とした。

口は空気を求めるように開き、

目は状況を判断しようと落ち着きなく動く。

「は」

さまざまな事が頭の中を駆け巡るが、どの言葉を口にしたらいいか  
分からず

パニックになりかけた。

無意識のうちに眉間に深く刻まれる皺。

「はあああああああ！？なんだそりゃあああああ！？」

深夜、人の目がある事も忘れて真雪は思わず叫んだ。

「んなワケねーだろ！どこをどう考えてそうなる！？」

「……だって、妙に仲いいし」

「仲いいヤツは全員ホモか！？おかしいだろ！」

「真雪、怖い」

美冬は拗ねたように上目がちで目の前で怒鳴るように尋ねる真雪を伺った。

肩をつかみかかりそうな勢いだ。

「確かに仲いいですよ。ええ、仲いいですとも。けど、お前は邪推しすぎなんだよ！」

「違うの？」

「当たり前だ！俺とノクテイルカができてるワケねーだろ！」

「否定するところが怪しい」

「否定しねえワケにはいかねえだろうが！」

真雪が睨むように美冬を見つめ、ややあって深いため息を吐く。まるでそれと共に力も抜けていくようにうなだれる。

「……一気に疲れた。もう帰りたい、俺」  
疲労感を漂わせた口調。

美冬は困ったように、目の前で力尽きたように座っている真雪を眺めていた。

「だって、そう思っちゃったんだもん。悪気はないのに」

「お前は俺を女だとかホモだとか、一体どんな目で見てんだよ……」

「ごめんってば。そんな落ち込まないでよ」

「落ち込むわ」

再び吐き出される、ため息一つ。

真雪は美冬を一瞥した後、立ち上がると軽くスラックスを手で払った。

見上げる視線に口の端を上げる。

「とりあえず戻ろっぜ、美冬」

「え？」

「ノクティル力がすげー心配してるから。な？」  
そう言っていると俯き加減で苦笑を浮かべる。

「なんつーかな」

風でジャケットの裾がひらめいた。

闇に溶ける風貌の死神は遠くを見つめる。

「……お前は悩んでんの、似合わねえって。お前だって悩む事はあ  
ると思っけどさ」

美冬はベンチに座ったままで、その横顔を眺めていた。

「俺もノクティルカも、他の奴等もお前に笑ってて欲しいワケよ」  
笑うような声。

「お前が笑ってれば大抵の事はどうにかなっちまう気がするっつー  
か」

木々に閉ざされた空間は、まるで自分達にしかないかのようだ。

「ま、いうなら比良坂の最強武器ってヤツだな」

眉を上げて悪戯っぽく笑いかけられ、つられて笑みを浮かべる美冬。

「笑えよ」

「そつすりゃ、俺達も笑う事ができるから」

真雪がソファベッドに寝転ぶと視界に広がるのは白い天井。何も無いはずなのに、つい見つめてしまふ。

どこか憂いを漂わせた瞳がゆっくりと瞬いた。

「よっこいしょーいち」

空気が動く気配と共に自分を影が覆う。

視線を動かすと、美冬が薄手の羽毛布団をめぐってベッドに入ろうとしていた。

「何やってんだよ。やめろって」

「おお、押すな押すな」

ため息混じりの制止が聞こえないのか、身体をぶつけながら割り込んでくる。

気がつけば真雪の身体に密着させるように、隣に寄り添って寝る美冬。

その顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいた。

「ったく、遊びじゃねえんだぞ。こっちはこれから仕事なんだつーの」

疲れたような表情を浮かべる。

夜の時刻、世界を支配しているのは沈黙だった。

気味が悪いほど静かで思わず息を潜めたくなる。

全てのものが眠りにについているのだろうか。

「前の死亡宣告の時、泣いてたクセに何で今回も一緒にいるんだよ」

「だーってえ」

「だってじゃねえ。辛いなら無理して付き合ってくれなくていいから」

抱きつくような形で寝転ぶ美冬は拗ねたような瞳を向けていた。彼女の心遣いは分からない訳ではない。

死亡宣告の度に落ち込み、副作用のような反動に悩まされる自分を心配しているのだ、おそらく。彼女が一緒だと確かに気持ちの面で負担が少ない事は確かだが真雪は出来るだけ、死神の仕事と彼女を関わらせたくなかった。それは美冬自身も辛い事をよく知っていたから。

「あたし、死神の仕事は手伝えないけどさ」  
手が真雪の腕を掴み、強引に横を向かせる。  
向かい合う形。

顔が近づいたと思うと額同士が触れた。

「こうしてれば少しは真雪の痛みをもらえるかもしれないでしょ」  
間近で微笑む。

真雪は一瞬動きを止めた後、あきれたように眉を寄せた。  
けれど、その表情はどこか照れているようにも見える。

「……バカか」  
「やだ、もしかして照れてる？」

「照れてねえよ。顔近づけるとキスすんぞ」

「返り討ちに遭わせてやる。そんな事したら噛み付いてやるんだから」

同時に吹き出すように声なく笑った。

顔に広げた笑みは波が引くように消えていき、二人は言葉もなく見つめ合う。

口の端を上げたまま。

この部屋の空気に重苦しさはなく、どこか穏やかだった。

「じゃ、ちよつと行ってくるわ」

「うん。気をつけてね」

真雪は目を閉じた。

今日は不思議と、死亡宣告前に感じる憂鬱さはなく。瞼の裏に広がる闇は優しくかった。

漆黒の中で体温を感じる。

美冬が手を握っているのだろうか？

身体中の自由がなくなり、まるで浮遊するような感覚に襲われる。けれど、その一方で深いどこかへ沈んでいくような。

現実と夢の境界が曖昧になっていく。

何かに誘われるように意識が遠ざかる。

そして

「……………うわ」

目を開けた時、真雪は小高い丘に立っていた。

魅入られたように眼前に広がる景色を見つめたままで呆然と呟く。

ここは夢だ。

今回の死亡宣告のターゲット、尾上祐一の夢の中。

これから自分がしなければいけない仕事を考えると憂鬱であるはずなのに

この景色を眺めていると、自然と心が躍った。

まるで見えない何者かが駆けているように、風が通り過ぎる。

それと共に聞こえるのは草の揺れる音。

見れば丘を埋め尽くす草は波を思わせ

眩しさに空を仰ぐと、頭上には目にしみるほどの青空が広がっていた。

遠く霞んで見えるのは都庁だろうか？

丘の下にはミニチュアのようなビルの群れが見える。

「ここは東京、か？」

緑と青のコントラスト、わずかに草と水の香りを含む丸みを帯びた風。

真雪は桜と思しき大樹を背に目を閉じた。

見えない分聴覚が鋭くなっているのか、周囲のざわめきが鮮明に聞こえる。

無意識のうちに歌っていた。

初めは唇だけが歌を口ずさんでいたがそれは次第に音となり。

声は風にかき消され、空に吸い込まれていく。

ゆっくりとした伸びやかな旋律を紡ぐ横顔は嬉しそうだった。

歌声は囁くようなもので大きくはなかったが、まるで丘に響くように。

不意に。

真雪は自分の背後のあたりに気配を感じて、動きを止めた。

振り向くとそこにいたのは20代前半の青年。

細身のパターンのシャツにジーンズ、キャスケットを被った彼の顔には

人懐っこい笑顔が浮かんでいる。

事前に知らされていたターゲットの年齢は23歳だったはずだ。

おそらく彼が尾上祐一だろう。

「うまいねー。音楽やってんの？」

草をかきわける音と共に近づいてくる。

真雪は気恥ずかしさを隠すように表情を引き締めて会釈をした。

彼と向かい合うように、身体を向ける。

「尾上祐一様でいらっしやいますね」

「そう、だけど……あなたは？」

表情と声に怪訝が混じる。

真雪を観察するかのような遠慮のない視線。

「失礼しました。私は本日、貴方様の死亡日の件で伺いました死神でございます」

「死神イ？」

「はい」



真雪の顔から感情は消えうせていた。

ゆっくりと瞬きながら、目の前で呆気に取られた祐一を見つめる。この景色の中で死神は異質だった。

生気溢れる色に囲まれた中にたたずむ、ただ一つの死の色。

「尾上祐一様、貴方様は去る5月2日に死亡が予定されておりましてが

何らかの手違いにより死亡日を過ぎました現在も生存が確認されておりまして。

つきましては5月17日、20時23分に死亡処理をさせて頂きます事をお知らせいたします」

唇が事務的に死を宣告する。

そこに感情はなく、まるで機械のように。

「当日は確認に伺いますのでご了承下さい」

祐一に言葉は届いているのだろうか。

彼は魂が抜けたように見つめている。

動揺している素振りもなく、ただ呆然と。

真雪はひそかにため息をついた。

また取り乱し、絶望する人間を見る事になるだろうと。しかし。

祐一は笑っていた。

腹を抱えるようにして前かがみになって肩を揺らしている。

にわかにな強く吹いた一陣の風の中、彼は堪えきれずに笑っていた。

「そりやすッゲーな。どんだけだ、俺！」

笑いの中で吐かれた言葉。

真雪は戸惑いを隠せず、眉間にしわを寄せる。

今まで泣く者、怒る者など様々な人間を見てきたが

死を宣告されて笑う者はほとんどいない。

自暴自棄になっっている風でもなく、彼は偽りなく笑っているように

見えた。

「俺、マジで死ぬの？」

「はい」

「で、本当は先週死んでるはずだったって？」

「左様でございます」

「帯に笑い声が響く。」

音がないこの場所では、どんな小さな音でも不気味なほどに大きく聞こえた。

「ああ、ごめん。死ぬって言われて爆笑するとかありえないよな」  
祐一は笑いを引っ込めると、軽く息をつく。

真雪の顔には怪訝な色が浮かんでいたのだろう。  
肩をすくめて見せた。

「いやー、俺さ。音楽やってて、よく五条の駅前で歌ってたりするんだよ」

強い視線から逃れたいのか、辺りを落ち着きなく歩き回る。

「そんで先々月あたりに声掛けられて、デビューとCD出す事が決まってるね。」

もう超嬉しくて、死んでもいいって思ったんだ。ずっと夢だったから  
「……」

「そしたらコレだよ」

目を伏せて、苦笑する顔。

伸びをするように身体をそらした姿勢のままで空を仰いだ。

「あんたが来て、えーと…… 17日に死ぬって？ほとんど笑い話じゃない！」

もー運がいいんだか悪いんだか分からねーな！死んでもいいって本当に死ぬか、フツー」

視線が動き、真雪を見つめる祐一。

その視線の先に何かを見つけたのか片眉を上げる。

「何？俺、変なコト言った？」

真雪はその言葉に我に返った。

無表情を貫いていたつもりだったが、戸惑いが相手に伝わっていたらしい。

前で手を組み、直立不動の姿勢を保ったままで祐一を見つめる。

「いえ、失礼しました。貴方は他の方とは違う気がしまして、不思議に思っております」

「違ってます？」

「大抵の方は死を宣告された場合、泣いたり絶望される方がほとんどなのですが」

貴方はどれとも違います。かと言って、死を望まれているようにも見えませんが」

「あー、なるほど。そっかそっか」

祐一は身体を起こすと苦笑を浮かべた。

首を傾げ、宙を睨むような仕草をすると。

「俺、よく緊張感ないって言われんだよね。それにホラ、実感沸いてないし」

「なるほど」

「なんつーの？マジだっと思えないって言うか、変な夢みてる感じだもんね。」

これで目が覚めたら『変なの』って思いながらバイト行って、メシ食ってます」

急に祐一の顔から笑顔が消えた。

何かを考えているのか。

真雪が黙ったまま、遠くを見つめるように彼を眺める。

「……でもまあ、何で俺なのかなーとは思っけど。だって俺なんて超生きる気マンマンよ？」

俺より死にたがってる奴だって、死んだ方がいい奴だって腐る程いるじゃんか」

まるでこの場所は草の海だ。

どこかで生まれた風が遊ぶようにすり抜けていく。

遠くで聞こえる鳥のさえずりに耳を澄ませた。

「俺、このまま生きられたら毎日すっげー感謝して頑張るんだけどな。」

一生懸命歌作って、もーボランティアとかもやっちゃうんだから  
唸り声と共に伸びをして、天上へ掲げた拳を下ろす。

祐一は何かに思いをめぐらせているかのように遠くに視線を投げていた。

漂っているのは悲壮感ではないものの、どことなく沈んだ色が見え隠れする。

「なんでだろ。こんなの嘘に決まってるとか、ありえねーって思っ  
てんのに

微妙にへこんでる」

無理して笑おうとしているのか口の端を歪ませた。

そして数秒の間後、真雪に顔を向けると満面の笑み。

「でも、俺は負けない!」

宣言のように言い放つ。

「まだどうなるか分からねーし!諦めたらそこで試合終了だって言  
うじゃん!

へこんでるとか超俺らしくない!」

真雪は何かを思い出したように口元に笑みを浮かべた。

同じような事を言う人物がいた、すぐ側に。

きっと眠っている自分の隣に寝転んで、待っているはずだ。

「ホントのコトを知ってるお前は、俺の言うことなんて

ただのバカに聞こえるかもしれないけどさ。信じてるもん。

どんなちゅえー可能性だって俺は信じてる。その可能性をモノに  
したんだぜ?」

祐一は自分の言葉に頷く。

その動作はまるで自分に言い聞かせているようにも見えた。  
不意に訪れた空白の時間。

「……貴重なお時間をありがとうございました」  
わずかな間の後、真雪は一步退くと軽く頭を下げる。

「それでは死亡日にお会いしましょう」  
きびすを返し、自分を見ているらしい祐一の視線をそのままに丘を  
去っていこうとする。

遠くで聞こえる木々や草の笑う声を背に。

「あのさ、死神！」

呼び止められ、振り向く。

光の加減でシルエツトだけが浮かんでいた。

「お前、死神なんかより歌う方が向いてると思うぞ。もっと歌えよ」  
「……」

「お前が歌えば幸せになれる奴、いっぱいいると思うんだ」  
真雪は驚いたように祐一を見つめ。

ややあつて、目を細めるようにして笑った。

答える言葉はない。

けれど、その笑顔が答えだった。

もう一度お辞儀をすると、背を向けて歩き出す。

遠ざかっていく死神の姿を眺める祐一。

丘の上、取り残された彼が空を見上げて歌う。

それは死神が口ずさんでいた旋律だった。

目蓋を開くのにも力が入れなければならぬほど疲弊した身体。  
その感覚に現実と意識が繋がっていく。  
真雪が目を開くと、目の前にあったのは。

「……寝てるのか」  
手をつないだまま、自分にもたれて眠る美冬の姿だった。  
指を動かすのもだるく、痛みでこめかみが脈を打つ。  
等間隔で繰り返される小さな呼吸を聞きながら真雪は再び目を閉じた。  
こみ上げる吐き気を飲み込み、沈黙に耳を傾ける。  
いつもよりも辛さを感じないのは、この目の前から流れ込む体温のおかげなのだろうか。  
真雪は眠りに身を投じながら小さく笑った。

「やっちゃまった……」  
二つ分の靴音が聞こえる夜道、美冬が肩を落として口の隙間から言葉を漏らした。

隣には苦笑する真雪の姿がある。  
「ありえない。ありえないよ、自分。」

真雪を待っている間に爆睡してた上に、具合が悪い人に送ってもらったか」

緑ヶ丘駅に続く道は人通りもまばらで、街は既に眠りについていて。周囲の家やビルからは灯りが漏れている。

「あああ、あたしのバカ！3回くらい死ねばいいのに！」

「別にいいじゃねえか。俺が送るって言ったんだから」

「でも真雪辛いでしょ？顔色悪いし、無理しちゃ駄目だよ」

「だから大丈夫だって。こんなの毎回だから慣れてる」

歩く二人の歩調はいつもより遅く、まるで散歩を楽しむかのように片眉を上げる真雪を何度も心配そうに見上げる。

美冬が目覚めた時、隣にいた真雪は笑って自分を見ていた。  
待っている間に眠っていた事に気づき、自己嫌悪に陥る。  
その上、起きているのも辛そうだというのに

彼は美冬を駅まで送っていくといって聞かなかった。

少しでも手助けが出来ればと思っっているのに、これでは逆効果ではないか。

そう思うと自分に腹が立ってしまった。

「俺もお前と一緒に寝てたから、それなりに回復したしな」

「でもまだダルそうだもん。あたし、夜歩くのは慣れてるから……」

「駄目だ」

真雪が言葉を遮り、軽く睨んだ。

すぐに視線をそらしまっすぐ前をみつめる。

そこにあるのはまぶしい光に包まれた駅。

暗い一帯の中で、そこだけがひとときわ明るさを放っていた。

「いくらお前が普通の奴より強いっつっても女だろ」

日中は暖かいといつても夜の時間は少し肌寒さを感じる。

美冬は身体をわずかに縮めるようにしながら、驚いたように横顔を見た。

「……なんだ、その顔は。自分が女だつて知らなかったのか？」

「ちっがーう！真雪が女の子扱いしてくれたから驚いただけだよ」

「いつもしてねえみたいに言っなよ」

「してないじゃない」

拗ねるように上目がちに見つめてくる顔に真雪が吹き出すように笑う。

そして、二人は駅の階段の前で立ち止まった。

終電間近のこの時刻ともなれば、いつもはにぎわっている駅も閑散としている。

階段の周辺には二人を除いて数人の姿しか見えない。

「送ってくれてありがと。真雪も気をつけてね」

「気をつけるのはお前だろ。あっちに着いたらタクスのよ」

「もっ心配性なんだから。タクシーなんて使わなくても大丈夫だつてば」

「馬鹿、用心するに越した事ねえだろーが」  
咎めるような口調と共に手が伸びる。

その手から逃れようと美冬は首を傾げるが、乱暴に頭を撫でられて眉間にしわを寄せた。

「……じゃあ帰るね。真雪、本当に大丈夫？送っていいところか？」

「意味ねえだろ、それ。大丈夫だっつーの」

真雪は苦笑を浮かべる。

笑いながら背を向ける彼女に軽く手を挙げて。

「じゃあな。気をつけるよ、誰か襲わねーように」

「あたしを何だと思ってるのよ！失礼ね」

階段を上る靴音が聞こえる。

頭痛の中、翡翠色のポニーテールが遠ざかっていくのを見ている時。

美冬は足を止めた。

何かを忘れたのだろうかと真雪は怪訝に思う。  
静止。

駅の構内放送だけがむなしく響いていた。

「……真雪」

小さく名を呼ぶと振り向く。

「ありがとう」

目を伏せた後、視線を上げると照れたように微笑んだ。  
数メートル離れた位置の二人。

「何だよ、急に」

わずかに驚いた顔に、笑みが広がる。

それを見ていた美冬もつられるように。

「ホントにね。どうしたんだろ？あたし」

肩をすくめる仕草。

そして再び靴音が階段を上っていく。



真雪はしばらく誰もいない階段を見つめていた。

その目にだけ何かが映っているかのように。

瞬き、苦しげにうつむく。

やがて黒いスーツ姿の人影は闇に飲まれるように駅から姿を消していた。

そこに残るのは、微塵の死臭。

向かい合ったソファに挟まれるように備え付けられたテーブルの上には

書類が散乱していた。

『都内で頻発している突然死の原因はいまだ特定されておらず、厚生労働省は』

書類をめくる音とテレビから流れるニュースを伝えるアナウンサーの声が混じる。

事務所にあるのは不気味な静けさ。

どこか張り詰めた色が見え隠れして、何かあったのかと勘繰りたくなる。

「お茶淹れたけど置く場所がねえか」

応接セット付近の有様を目の当たりにし、盆を持ったまま呟く真雪。その声の数秒遅れてダンデライオンが読んでいた書類から視線をはがす。

テーブルに敷き詰められていた書類がまとめられ、深いブラウンの木目が姿を現した。

「ああ、ありがとう」

「なんかテスト前って感じね。何読んでんの？」

マグカップを机に置きながら、ダンデライオンの手元を覗き込む。

軽く睨むように眉間にしわを寄せながら目を走らせた。

「突然死に関する報告書……あー、最近また増えてるもんな」

その発言に答えるのは書類をめくる音のみ。

真雪はダンデライオンと、それと向かい合い書類を読むノクティル力を見比べて片眉を上げた。

手がテレビのリモコンに伸び、持ち上げた所で。

「すみません、テレビは消さないでいただけますか」

「あ、悪い」

ノクティルカの声に制止され、宙に浮かせたままの手を静かに下ろす。

窓の外の誘うような喧騒とは裏腹に、ここは重い静寂が立ち込めていた。

時折、座り直す気配だけが聞こえる。

「分からないですね、やはり。原因も関連性も」

ノクティルカがため息混じりに呟くと、書類を膝の上に置いた。

その声には疲労が滲む。

「関連性？」

「はい。この突然死で亡くなった方々は一様に同じ花を持ち

童話の一説を口に行っているらしいのですが、何故なのかが分からないくて」

「突然死だけじゃなくて自殺した奴でも、そうなってるんだよな」

「ええ。何故プルメリアの花で、ハーメルンの笛吹き男なのか。

……こんなにも事例があるのなら何かが分かってもいいはずなのに、何も分からない」

軽く頭を横に振る動作。

真雪はマグカップに唇をつけたまま机の上の書類をいぶかしげな表情で見つめた。

再び訪れる沈黙の中、考えを巡らせる。

『この突然死は霧島区、天野区、中津区、此花区という限られた地域でのみ発生しています。』

現在死者は34名に上り、その死因は様々で感染症の可能性は低いという事です』

テレビから流れてくる声に誰からともなく顔を向けた。

ここにいる者の表情は硬く、黙りこくつたまま。

「何も分からねえワケじゃねえだろ」

前かがみの姿勢で頬杖をつき、呟く。

真雪は二人から疑問の眼差しを向けられて片眉を上げた。

「事件だっつー事はハッキリしてるじゃん。んで、おそらく此岸絡

みと」

「ええ。同じ死因だったら病気という事で片付けられるんですけどね。

それでも霧島近隣でしか起きていないという点に疑問が残りますか」  
「それが、これが殺人なら分かりやすいんだよ。花持って被害者が死んでましたって。

だったら俺を見て系の連続殺人犯って事で結論が出るのにさ」

「これも立派な殺人だよ、レイヴン」

ソファにもたれて呟いた真雪にダンデライオンが顔を向けた。  
微笑むように目を細めてはいるが、その顔は笑ってはいない。  
机に投げ出すように置かれる書類。

「まあ、そうかもしれないけど」

「何者かが手を下しているのは明白だからね。」

どんな目的があるにしろ、人を殺している事には変わりはない」

くわえたタバコに火をつけると、ため息のように紫煙を吐き出す。

ライターの蓋が閉じられる涼やかな音が大きく響いた。

「ずっと考えていても煮詰まるだけだし、ちよっと今までの情報を整理しようか。」

この事件の共通点は……」

「みんなブルメリアの花を持ってて、ハーメルンの笛吹き男を話してたんだよな」

「そう。そして死因はバラバラで、中には自殺者もいる」

今日に限って妙に殺風景で広く感じる室内。

どこが違うかは分からないものの、明らかに違和感がある。

何かが窓を叩く気配を感じて、その方向に視線を転じると音の正体は雨だった。

予報どおり降り始めたらしい。

「これらの事件が起きているのは霧島区を中心とした近隣のみです。死者は霧島区が一番多いですね。年齢、性別等その他で共通した点は見受けられません」

ノクテイルカが眼鏡を掛けなおし、口を固く結んだ。

「あとは、そいつらは天使じゃないって事くらい？」

その言葉に二人の動きが止まった。

意外な反応に真雪が面食らったように大きく瞬く。

「あれ？その話、言わなかったっけ？」

「聞いてなかったような気もするけれど」

「いえ、閻王がいらっしやった時に話してましたよね。

その後緊急討伐が入ってしまった話が途中で終わってしまいました  
が」

思い出しながら言っているらしく、視線が虚空をさまよう。

時計の音が無感情に時を刻んでいた。

「ああ。先週、電話で聞いたんだけどさ。

……えーと。あの、北関東支部のフィリピンパブ超好きな人って何  
て名前だったっけ？」

真雪が頭を手で押さえながら、片足でリズムを取るように足踏み  
をする。

思い出せないのがじれったいのか、表情をゆがめていた。

「ルークかい？」

「あー、そうそう！ルークのとっつあんも言ってたんだよ。

こつちに来た時に突然死を見たんだけどベールが見えなかったっ  
てさ」

合点がいったのか、一瞬嬉しそうにしたものの見る見るうちに表情  
は険しくなっていく。

「俺が見た飛び降り自殺、美冬のクラスの奴、ルークのとっつあ  
んの件。

こんなに何度もベールが見えないなんて偶然じゃないだろ。3人と  
もだぜ？」

「確かに偶然にしては重なりすぎていますが……けれど、まだ断定  
出来かねるのでは。

仕方がない事です判断材料が少なすぎます」

「でも閻王も言ってたじゃん。

『しょっちゅう起こる訳じゃないし、二人とも見えないなんてありえない』って」

その言葉を残して二人は考え込むように押し黙る。

不意にダンデライオンが何かを思い出したように眉間にしわを寄せた。

タバコの灰を落とそうとしたまま、灰皿の上で手を止めて。

「そういえば」

「はい」

「話は変えてしまって申し訳ないが、ラプターの姿が見えないね。レイヴン、一緒じゃなかったのかい？」

会話に出てきた名前を聞いて思い出したのだろうか。

青い瞳は腕時計を一瞥した後に真雪を見た。

つられるようにして壁にかかった時計に視線を投げる。

わずかな空白の時間。

「そういやそうだな。今日は学校でも会ってねえけど？」

「珍しいですね。何の連絡もなく遅刻するなんて」

「ああ。つーか、アイツからメールも全然なかったな。具合でも悪いのかね」

「ご両親が帰国されている時期でもないですし」  
記憶をたぐり寄せているかのような独白。

にわかに関係を支配していた重い雰囲気はやわらいだ。

「ラプターの事だから、知らない人に焼肉に誘われて

ついて行ってしまったのではないかと心配になってしまったね。

ただの遅刻ならいいんだけど」

「……あー」

「ないと言いつつ切れない所が何とモ」

納得した声を出す真雪と、遠く見るような瞳をするノクティルカ。その様子を眺めていたダンデライオンが苦笑を漏らした。

「つーか、美冬もいねえけどウォークライと姉御もいねえじゃん。あの二人は？まだ宣告か確認にでも行ってんの？」

「いえ。サーペントは買物で、ウォークライはギムレットの所で

す。

どちらもすぐに……」

「いやア、急に雨が強くなって困ったもんだ」

ノクティルカは言いかけた言葉を飲み込み、振り返った。ドアを開ける音共に聞こえてきたのは苦笑混じりのサーペントの声。髪や服が濡れているのが分かる。

「水もしたたる何とやら、という所だね。おかえり」

「おかえりなさい」

「ただいま。まだミーティングは始めてなかったのかい？」

「ああ、まだ揃ってなくてね。もうそろそろ始めるつもりだよ」

「ったく、ここの中は本当に揃うのに時間がかかるねエ」

呆れたような響きのサーペントの声が部屋を横切っていく。

真雪はその言葉に苦笑しかた所で、すぐ側でけたたましく電話が鳴った。

書類をめくる音がやみ、ノクティルカが顔を上げるが。

「ああ、俺出るから」

そう言って、テーブルの上の電話の受話器に手を伸ばす。

しかし。

「……と」

そんな真雪の行動を見ていたかのように呼び出し音が途切れた。沈黙した電話を眺める。

何だろう。

この胸騒ぎは。

真雪はわずかに眉をひそめ、何かを恐れるような動作でボタンを押した。

着信履歴を辿る指。

「どうしました？」

真雪のわずかな変化を感じ取ったのか、ノクテイルカが尋ねる。

けれど真雪は反応せず、ただ液晶に表示された番号と名前を凝視していた。

『05/08 19:28

ラプター』

ただ単に遅れる旨の連絡をしてきたのだ、と真雪は言い聞かせる。

何故こんなに胸騒ぎを感じるのか分からない。

何故そんな事を繰り返し言い聞かせているのか分からない。

けれども何処かで警告していた、何かが。

心の中に不安が流れ込んでくる。

掛け直して安心したいと思う反面、それを恐れていた。

何を？

何を恐れているのか、自分は。

「美冬からだわ、さっきの電話」

小さく呟いた声はまるで自分の声ではないように感じた。

鼓動が部屋中に響き、身体が大きく脈を打っているようだ。

「どうしました？レイヴン」

「分からねえ。分からねえけど……怖い」

「怖い？」

手が、震えていた。

自分でもこの感情が何であるのか分からなかった。

冷静に考えてみれば何も恐れる要素はなく、単に電話が鳴っただけだというのに。

真雪が表示していた着信履歴を凝視したままで通話ボタンを押す。



耳に当てた受話器は驚くほど冷たく、呼び出し音は鼓動と混じり合  
って響いていた。

数コールの無機質な音の後、繋がる気配に安堵のため息を漏らす。

「あ、美冬か？お前どうし……」

『いい夜だな、死神』

一瞬、状況が理解できずに固まった。

聞こえてきた声は美冬のものではない。

掛けたのは美冬の携帯電話だったはずだ。

受話器を握り締め、固まったように一点を見つめる真雪。

唇が動くが声にならず、ただ呆然と。

「……てめえ、誰だ」

聞かなくても分かっていた。

けれど、聞かずにはいられなかった。

「レイヴン、どうしたんだ？」

部屋中の視線が真雪に集中するが、彼にそれを気にする余裕はない。

震えるほど強く握り締められる拳。

雨音が消え去る。

「お前、誰だ？なんで美冬の電話にお前が出るんだよ」

『忘れたのか、俺を』

「チャリオット、答える！何でお前が話してんだよ！」

怒鳴る声が部屋中に響き渡った。

靴音が近づき、ダンデライオンの気配が並ぶと同時に電話に手が伸  
びる。

押されたのはスピーカーと書かれたボタン。

『そう、チャリオットだ』

電話が部屋中に響かせたのは、チャリオットの笑いを噛み殺した声だった。

『一向に姿を見せない美冬、彼女の電話に出る死人。さて、ここから考えられる可能性は？』

「ぶつ殺すぞ、てめえ……！」

周囲は黙ったまま微動だにせず、ただ電話を睨む。

まるでこの光景は時が止まったようだ。

痛いほどの張り詰めた空気の中で齒軋りの隙間から言葉を漏らす。

『ここは悪者らしく常套句を言わせていただこうか。何事にも形式は大事だからな』

楽しげに笑う声。

『お前達の大切な姫君は預かった。返して欲しくば……』

まるでどこからか様子を伺っているかのように。

笑いをこらえながら、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「ふざけんじゃねえ！美冬はどこだ！」

『冷静になれよ、死神。感情的になつたら負けだぞ？』

「この状態で冷静になんざなつてられるか！美冬を出せ！」

ざらついた音声と聞き取りづらいノイズの中で、何かが蠢く気配が聞こえた。

電話の向こうで話し声が聞こえる。

けれど耳を澄ませても何を言っているかまでは聞き取れない。

唇を噛んだまま、テールブルに手を付いた姿勢で真雪は止まっていた。

『姫君、騎士殿だ。助けを乞え』

『……あ、ぐー！』

聞こえたのは美冬の苦しげな声。

まるで喉を圧迫されているかのようにも聞こえる。

爪先から頭まで一気に寒気に似た何かが駆け抜けたのを感じた。

「美冬？大丈夫か！？」

『ま、ゆき……』

苦しげな息の中で囁くように名を呼ぶ。

内側で何かが暴れるような感覚。

背中を汗が伝うが温度は分からずに。

『ごめん。あたしは大丈夫だから』

「大丈夫なわけねえだろ！何があった！？今、どこだ！」

『冷静になつて。だいじょ……は、ぐあ！』

言い聞かせるように聞こえてた声が突如悲鳴に変わる。

『助けを乞え。助けてくれと泣いて訴えろ』

『う、ぐ』

「美冬！おい、美冬！？」

『……ごめん。もう会えないかもしれない』

その声の語尾は震え、何かを堪えているように。

真雪は、そこにチャリオットがいるかのように机を睨んでいた。

狂いそうになる、この沈黙に。

『ちよつとヤバイ、かも』

全てが死んでいるように思えた。

雨が何かを警告するように窓を叩き続ける。

震えを隠すように更に強く握り締める拳。

心の中にある感情が何であるか、もはや分からなかった。

テーブルについた真雪の手が震えている。

それが恐怖感からか、それとも怒りによるものか。

瞬きも忘れ、歯を食いしばったままで凍り付いていた。

まるで自分自身の中の何かと戦っているようにさえ見える。

「レイヴン」

「……分かつてる。落ちつかねえと」

「そつだ。呼吸を整えろ、スキルに飲まれるぞ」

机を凝視したままで口の中で何度も同じ言葉を繰り返す真雪。

ダンテライオンはそんな彼の背中を軽く叩くように手を置いた。

その行為はまるで、現実に留めようとしているかのように。

『姫君の無事も分かった所で死神に楽しいゲームの提案だ』  
何かが崩れ落ちる音の後、チャリオットの声がひときわ鮮明に聞こえた。

美冬の気配が消えたのが電話越しからでも分かる。

「ゲーム？」

ノクティルカが俯いていた顔を上げて棘のある調子で聞き返した。  
電話のスピーカーからは堪えきれずに漏れる笑い声。

『そう。追いかけてこをしようじゃないか』

雰囲気とそぐわない単語に眉を寄せる。

チャリオットは口の端を大きく上げて笑みを浮かべているのだろう。  
容易に出来る想像に腹立たしささえ覚えた。

『姫君の元に彼岸と此岸、どちらが先に辿り着けるか競争をするのだ』

「何だと？」

『ゲームオーバーは彼岸が辿り着いた時……すなわち彼女の死。』  
どうだ、単純明快なルールだろう』

「ふざけんじゃねえ！んな馬鹿に付き合ってられるか！」  
怒号とテーブルを殴る音が同時に響く。

怒りを向ければ向けるほどチャリオットは楽しげに声を上げて笑った。

冷静にならなければいけない事を真雪も分かっている。

これではただ相手を煽るだけだと。

けれど、抑えることなど出来るはずもない。

『お前達の意味は関係ないんだよ。既にゲームは始まっているのだから』

「てめえ……！」

息苦しさの中で呟く。

身体の内側で感情が熱を持っているかのように渦巻いていた。動かすにはいられないのに、まるで頭が真っ白になってしまったかのように動けない。

『……ああ、すっかり忘れる所だった。ヒントを与えなければいけない』

平然とした口調が文字通り思い出したように。

窓の外の轟音。

雨は強さを増し、全ての音を飲み込もうとしている。

『姫君の眠る、茨に囲まれた城の場所を』

言葉はこの部屋から消えうせていた。

『朝と夜の間、光と闇の境界』

以前耳にした言葉に真雪の動きが止まる。

『そこで行われるは狂乱の宴』

その声はまるで旋律。

『笑い、踊れよ 呼び戻す為に』

歌うように紡がれた言葉に唇を噛んだ。

『鏡を向けて 腕を引け』

夢でも見ているかのように。

「ふ、ざけやがって……！」

無意識のうちに漏れる悔しげな真雪の声。

聞いている側から言葉を忘れそうになる。

怒りで我を忘れかけ、必死で踏みとどまった。

この場所も、自分自身でさえも分からなくなりかける。

『もつともエニグマならば片割れがどこにいるか知ることくらい容易いか』

「俺はエニグマなんかじゃねえ！」

『何を言っている？お前達こそが証明だと言っただろう』

ダンデライオンが閉じていた目を開き、何も無いはずの正面を睨んだ。

その目に宿るのは殺気。

『見せてみる、エニグマ！お前達の共鳴を！』  
ノイズ混じりの声が憑かれたように笑う。

どのくらい時は止まっていたのだろうか。

気がつけば部屋には通話が切れた事を表す無機質な音が繰り返して響いていた。

それでも誰も動こうとはせず、黙りこくる。

聞こえるのは土砂降りの雨音。

そして、遠ざかる靴音。

「……………どこに行くんですか、レイヴン」

真雪がドアのノブに手をかけた所で冷気を帯びた声が投げられた。視線だけを動かすと、ノクテイルカの射るような視線とぶつかる。

「どこって、じっとしてられるかよ」

「場所の見当もつかないまま探しにいくとでも？」

言葉の端々に浮かぶのは押し殺した怒気。

苛立った様子で真雪が息をつくとドアを力任せに殴った。

「けど、アイツ放っておくわけにもいかねえだろうが！」

「落ち着きましよう。闇雲に探して見つかるものではありませんし、何も準備していない状態で動くのは危険すぎます」

「うるせえ！この状態で……………」

「殺したいのか、彼女を！」

言葉を遮る怒号。

思わず真雪は動きを止め、声の方向を見つめる。

声を荒げたノクティルカはため息を吐くと、ソファに座ったままで真雪を睨みつけていた。

「俺達の目的は何だ？ラプターを助ける事だろう。怒り任せに突っ込んで、彼女に何か遭ってからでは遅いんだ」  
膝に乗せられた指がリズムを打つように等間隔で動く。

「じつとしていられないのも分かるが、だからこそ用意周到に慎重に事を進める必要がある」

わずかな沈黙の中、真雪は何かを言いかけて飲み込む。  
脱力するようにドアノブから手が外れた。

「……レイヴン、辛いのはお前だけじゃないんだ」  
殺気さえ帯びていた。

ノクティルカはそう言ったきり黙りこむ。  
俯き、ソファにもたれかかって。

この部屋で動くものは何もなく、全てを飲み込む夜だけが存在していた。

痛みを伴う沈黙。

叫んで逃げ出したくなるような。

「サーペント、ウォークライに電話を。すぐ戻ってくるよう伝えてくれ」

ダンデライオンの声が響いた。

平穩ははるか遠く。

ここにあるのは張り詰めた空気と非日常だった。

「諸君」

部屋の中央、円陣を組むように立つ黒い死神の群れ。

ダンデライオンは眉間にしわを寄せたままで静かに切り出した。

「メンバーの一人が拉致されるといふ非常事態により

当比良坂事務所は闘争状態　モード・ラグナロクに突入する」

怒りを抑えた口調は宣言をするように。

「私、サーペントは通常の業務を」

キセルをくわえたサーペントが口元だけで微笑み、返事をする。それに軽く頷いたダンデライオンは、顔を正面に向け。

「レイヴン、ノクティルカ。お前達はラプターの救出を最優先事項としろ」

「ああ」

「了解です」

「そしてウォークライは死神業務のサポートと情報収集を同時進行で行って欲しい」

この部屋と世界を隔てるのは止む事のない雨。

窓の外にはいつもと変わらない光が見えてはいたが、人の気配は全く感じなかった。

全ての人が何処かへ消え去ってしまったのではないかという錯覚。

「これは、その辺の討伐とは訳が違う」

奥歯をかみ締め、遠くを睨んだ。

「賽は投げられた。チャンスは一度きり、失敗は許されない」

黒い革の手袋を嵌めた手が拳を作る。

「何としても彼女を救い出そう」

その言葉に一様に頷く顔。

見渡すと小さく、ダンデライオンも頷いた。

殺伐とした雰囲気は色濃く、重く漂う。

わずかな沈黙。

床を見つめていた視線が持ち上がった。

「そして、誰にケンカを売ったのか教えて差し上げようじゃないか」



時間という物は、まるで河のようだと思う。

常に流れ、同じ物は二つとしてないというのに昨日と何ら変わらぬ  
い錯覚を覚える。

「ん、なあに？何か用？」

普段は足を踏み入れる事がない、高等部教室棟の3階部分。

3年2組の教室を覗き込んだ真雪に声をかけてきたのは  
ショートヘアの快活な雰囲気がある女子生徒だった。

笑顔の中で視線が観察するように見つめている。

「えーと。今日って藤堂 美冬……来てます、かね？」

「美冬？」

授業と授業の境目の時間、周囲は解き放たれた開放感に満ちていた。  
教室や廊下に響く笑いの混じる話し声。

一体何がそんなに楽しいのかとさえ思ってしまう。

沈んだ心の中、自分一人だけが取り残されたような心境になっ  
ていた。

この状態で笑う事など出来るはずもないが。

「高坂あ。美冬、まだ来てないよねー？」

「休みらしいぞ。どーせ肉食ってハラ壊したんだろ」

引き戸に手を掛けた女子生徒が首をひねって教室内に叫ぶように尋  
ねる。

返ってきた答えに苦笑すると、真雪の方へ顔を向けた。

「だってさ。今日は朝からいないんだわ、アイツ」

「あー、そうですか。それじゃ……」

「ねえ！」

気が抜けたように会釈してきびすを返しかけた所を声が呼び止める。  
上の空だったせいか、反応が鈍い。

「あのさ、真雪君でしょ？」

「え」

面食らった表情のまま固まる。

女子生徒は、そんな様子を楽しむかのように笑いをこらえていた。首を傾げ、踵でリズムを取るような仕草をする度にスカートが揺れる。

「やっぱり！ アイツがいつつも真雪真雪つてうるさいんだよー。」

その割には照れちゃって付き合っていないとか言ってるの」

「あー、ははは」

「……もしかして美冬とケンカした？」

ぎこちなく乾いた笑いを浮かべる真雪を伺う。

返答に困り、疲れたようにため息をついた様子を肯定取ったらしく納得したように何度も頷いていた。

「何があったのかは知らないけど、早く仲直りした方がいいよ？」

アイツ、あー見えて超寂しがりだから」

「はあ」

曖昧な答え。

真雪は遠くを見つめたまままで思いをはせる。

昨日の電話、交わされた会話、不意に思い出す後姿。

『……ごめん。もう会えないかもしれない』

夢だと思っていた。

こうして彼女のクラスに来れば、姿を見つけれられるのではないかと。けれど、そこにあったのは。

穴が開いたような空席。

そして知った。

これは、何もかも現実なのだ。

真雪は教室に戻り、自分の席に戻ってから

何かを考えているかのように一点を見つめていた。周囲の音は聞こえるが、たちまち抜け落ちていく。

視界の端には見慣れた景色やクラスメイトの姿は視界に写ってはいたが

彼の目には見えていないようで。

何も無い空間に自分だけが存在しているかのような気がした。

等間隔で指先が机を叩く。

いつもとは違う雰囲気に関わろうとする人間は誰一人としていなく、

遠巻きに盗み見るだけだった。

「……キ」

真雪はともすれば真っ白になりかける頭で必死に考えていた。今、自分がするべき事は彼女を助ける事。

チャリオットが一緒なのだ、一刻の猶予もないだろう。けれど助けに行くには場所さえも分からず。

手がかりは唯一、チャリオットが『茨に囲まれた城の場所』と称した現在の地のヒントのみ。

見れば見るほど詩にしか見えぬ、此岸はおろか東京でも思い当たるフシはない。

「夜と朝の間」

またこのフレーズを聞いた。

前方を睨むようにして唇を噛む。

時間が惜しい、けれど苛立つばかりで同じ場所を回っているだけだ。冷静に考えようとしても、彼女は無事だろうかと思う度に心が沸き立つ。

「ユキ」

真雪は片手で携帯の開閉を繰り返しながらため息を吐いた。

「夜と、朝の……」

「ユキ！」

不意に強い力で肩を掴まれて、驚いたように大きく一度身体を震わ

せる。

目の前には心配そうに眉を寄せる男子生徒　坂上千里の顔があった。

「あ」

「大丈夫？」

「ん、ああ。大丈夫」

夢から覚めたような返答に女性的な整った顔が歪む。

肩にかかる髪を払うと大げさにため息を吐いた。

「そんな状態でどこが大丈夫なんだろ。ゴハン食べないと昼休みが終わっちゃうよ？」

「え？」

真雪はその言葉に一瞬動きを止めた後、周囲を見渡す。

確かに彼が言うとおり今は昼休みらしく教室に残る人影は少ないように思えた。

食事を取る姿や話に夢中な姿など、室内には昼休み特有の平穏な空気がある。

「いつ4時限目終わった？」

「随分前にね。今日変だけど本当に大丈夫なの？」

ずっと上の空だし、話しかけても全然返事しないしさ」

「……変？」

自分を指差す。

千里は緑茶の入ったペットボトルに唇をつけたままで頷く。

そして、肩で息を吐くと呆れた目を向けた。

「さっきの授業中だって、ずっと先生睨んだままで考え事してたんだろ？」

先生、びびっちゃったよ」

「え？」

「指されても立たないしさ。かなり感じ悪かった」

2人の間に空白が生まれる。

真雪は眉間にしわを寄せると数秒、千里を見つめた。

波のように広がる笑い声の中で、この周囲の雰囲気は異質だ。

「言えよ」

「言っただけど反応しないから放っておいたんだ。」

今回は山本先生だったから良かったけど、他の先生だとヤバイよ？」

「そうだな」

会話が途切れ、視線がそらされる。

机に挟まれた細い通路に足を投げ出して頬杖をつく。

心、ここにあらずだ　千里は軽く首を横に振ると目の前の抜け殻を見つめた。

「ねえ」

視線だけが向けられる。

会話のない無言の時間を破ったのは、改まった千里の声。

座り直すと椅子が呻く様な声を上げた。

「悩んでる事、僕は力になれないかな？　ユキも辛いだろうけど、  
見てる方も辛いんだよ。」

出来る事があつたら何でも言つてよね」

「ああ、ありがとう」

再び訪れる空白。

離れた位置から廊下を走る音が響いてくる。

「千里さ」

急に名前を呼ばれ、千里は動きを止めた。

顔を向けて次の言葉を待つ。

「夜と朝の間ってどこだ？」

「……え？」

「夜と朝の間、光と闇の境界。そこで行われるのは狂乱の宴」

突拍子のない答えに目を瞬かせた。

口に手を当てて考え込む姿をよそに真雪は窓の外を眺めたままで歌うように。

何度も口にした言葉。

そのフレーズは脳裏にこびりつき、既に暗記してしまっていた。

「もしかして悩んでたのって、それ？」

「悪いかよ」

「もう、どんな深刻な悩み抱えてるのかって心配して損したよ。

伊緒じゃあるまいし、そんな事で死にそうな顔するのやめてくれな  
いかな」

わずかな間の後、吐き出された思わぬ言葉に真雪は睨むように顔を  
向けた。

一方、そんな様子に気付いていない千里は目を細めて微笑む。

安心した、とでもアピールするかのように胸元に手を当てて。

「あのな。こっちは真剣に」

「それ、ミステリーの暗号でしょ？ 鬼瓦君と伊緒が好きなんだよ。  
解けなくたって小説は面白いのに、毎回二人して必死で解こうとし  
て……」

言いかけた言葉を打ち消したのは真雪の手だった。

千里の両肩を掴んで真顔で見据える。

「……ユキ。僕には伊緒っていう彼女がいるんだ」

「そうじゃねえ！ 鬼瓦か山内はどこだ！？」

「鬼瓦君は厄払いで休みで、伊緒ならそこに……」

呆気に取られた千里が気圧されたままで後方を指差す。

真雪は知らずのうちに千里の肩を掴んだままで立ち上がっていた。

指の示す方に視線を向けると今まで談笑していたらしい伊緒と目が  
合う。

声をかけようと口を開きかけた所で、彼女が黒髪を揺らして歩いて  
くるのが見えた。

「何の用かしら、ホモ野郎」

千里の横に立つと鋭い印象の水色の瞳を細め、挑むように顎をわず  
かに上げる。

「ホモじゃねえ。山内、暗号とかそういうモン好きなんだよな？」

「そうね。それなりに」

「読者に挑戦とか律儀に解くタイプか？」

「微妙に言い方が気になるけど……そうね。解かないと負けた気持ちになるわ」

真雪が、腕組みをしたままで髪を指に巻きつける伊緒の眼前に携帯電話を突きつけた。

一瞬、怯むように顎を引く。

そこにあつたのは受信したメールの画面。

チャリオットが電話で口にした詩が並んでいた。

「何？ これ」

「どういう意味だと思う？ どちらの場所の事らしいんだけどさ」

大きく瞬いた後、凝視。

伊緒は真雪の手から携帯を受け取ると口に手を当てたままで黙り込む。

艶やかな長い黒髪がすべて顔を覆った。

彼女を見つめる二つの視線を気にする事なく、没頭しているようで微動だにしない。

不意に顔を上げる気配。

真雪を見つめ、わずかに眉をひそめた。

「立花君」

「分かったか？」

「……この、送信者の『ノク山テイル男』ってというのは」

「そこは気にするな。一切関係ねえ」

その会話を残して再び沈黙が訪れた。

きつと、この光景は周りの人間からすると興味をそそられるものなのだろう。

先ほどから視線を感じる。

けれど真雪はそれを気にする様子もなく、俯いたままの伊緒を見つめていた。

数分経った頃、伊緒が不意に小さく笑いを漏らす。

「伊緒、分かった？」

「ええ、相変わらず私は深読みしすぎね。置き換えたりアナグラミングしてみたけど」

結局、答えは一番最初に浮かんだ物だったみたい」

当然のように吐き出された言葉に顔に驚きを広げた。髪をかきあげる姿勢のまままで固まる。

「え。分かった、のか？」

「立花君、面白くなかったわ。簡単すぎ」

席に座ったままの千里が伸ばした手に、携帯電話を押し付けると伊緒は肩をすくめるようにして笑う。

視界の端で首を傾げる千里が見えた。

軽い動揺の中、携帯と伊緒を見比べる。

「その暗号を作った人にミステリーを読んだ方がいいって言っておいて。」

そんなんじゃない小説で使えたものじゃないってね」

「ま、待て！ マジで分かったのかよ？ どう意味だ？」

四角く区切られた空が肩越しに見える。

雲の隙間からは目に焼きつくような青。

自分の鼓動で周りの音が聞こえなくなった。

「文の意味、そのままね。岩戸隠れの事でしょう？」

微笑む声の隣で、合点がいったような千里の声が聞こえる。

真雪はワケが分からずに2人を見た。

「立花君、授業をちゃんと受けてないわね？」

「ちゃんと説明しろって。岩戸隠れ？」

「ええ、日本神話に出てくる有名な場面よ。」

『歌い 踊れよ 呼び戻すために』……これはアメノウズメがアマテラスを呼ぶ為に



岩戸の前でストリップまがいな踊りをした所の事でしょ」

「それで『鏡を向けて 腕を引け』は、閉じこもったアマテラスが様子を見るに

扉を開いた時に鏡を見せて、引つ張り出したシーンか。なるほど、確かにそのままだね」

苦笑に似た笑みを浮かべながら携帯電話を閉じると、首を傾げる真雪に差し出す。

受け取った本人は2人の会話が把握し切れていないらしく、虚空を睨んでいた。

「で？」

「……あなた予想以上に馬鹿ね。つまり」

ため息と共に吐き出された言葉。

唇の前に人差し指を立てて、目で笑う。

「この文が言っているのは日本神話の岩戸隠れの事。

そして場所を示しているらしいっていう事は」

「『天岩戸』だ」

千里が肘をつき、顎の前で手を組んで笑う。

横を見上げて伊緒と微笑み合つと真雪に視線を投げた。

「おそらく『夜と朝の間』って言うてるから間違っていないと思うわ。

太陽神のアマテラスが岩戸に引きこもって、世界は夜になったんだから」

「あまの、いわと」

「私達に分かるのはここまでね。後は……」

口の中で同じ単語を繰り返していた真雪の動きが止まる。

瞬きもせず、唇が薄く開いたまま。

まるで何かに取り憑かれたようにさえ見える姿に

千里が机に頬を寄せるように下から覗きこむ。

「ユキ？」

一瞬の沈黙。

ややあつてから真雪はバッグを掴むと、携帯電話を手にしたままで出入り口へと駆けた。

「あ、ユキ！ どこ行くの!？」

「帰る！」

「か、帰るってちょっと！」

腰を半分浮かせたまままで振り返って言葉を投げるが、姿の見えない声だけが返事をする。

何事かと呆気にとられ、次第にざわめく教室。

真雪が廊下で何かを言ったようだが、声は激しい足音にかき消されていた。

残ったのは啞然としたままで入り口を見つめる伊緒と、苦笑する千里。

「……ま、解決したようで何よりだけど」

デスクの上の山のように吸殻のたまった灰皿には、もう吸殻を捨てる隙間はない。

少しでも触れたら崩れそうなのは現在の状況に似ていると

ノクティル力は紫煙をくゆらせながら天井を見つめ、考えていた。

昼下がりのこの時間、いつもであれば緩むという表現が相応しい比良坂事務所は

昨日からずっと空気は張り詰めたままで。

動きたくても動けない状態やこの状況に、何から何まで苛立ってしまふ。

こんな事ではいけない。

ノクティルカは深く息をついた。

「……」

急にノクティルカの動きが止まり、視線が左右に動く。

何かの変化を感じ取ったかのように。

そして。

怒濤に似た音が次第に大きくなると同時に、壊さん勢いでドアが開かれる。

何の音かを考える暇はなかった。

ノクティルカは事務椅子から背をはがすと、ドア付近を凝視する。

そこに居たのは

「天岩戸！」

肩で息をする、高校の制服姿の真雪だった。

「……おはようございます。随分早いですね」

「ノクティルカ、天岩戸だよ！」

「あまの……はい？」

「だから天岩戸！ 場所！ あれだ、その！ あの！ チャリオツ

トの！」

真雪はノクティルカを見定めると呼吸を乱したままで大股で近づいてきた。

背後から聞こえるダンデライオンの声も聞こえないらしく、一直線に歩いてくる。

睨むような眼光。

突然の事にノクティルカは彼の言葉の意味を懸命に考えた。

「あのクソみてーな文章！ あれが！」

「分かりました。とりあえず落ち着きましょう」

目の前に立ちほだかり、殴りかかりそうな気迫を漂わせた真雪に手のひらを向けてみせる。

「レイヴン、深呼吸です」  
ノクティルカは小さく苦笑を漏らすと足を組み替えた。

「なるほど。つまり、チャリオットが言っていたのは日本の神話だったという事ですね」

真雪の説明を聞いたノクティルカは、ため息混じりに頷くと頭を抱えるように

両手で髪をかきあげた。

「どつりで私には分からない筈ですよ。そんな海外の神話まで明るくありませんから」

「へ？」

「いえ、こちらの話です。それでチャリオットの文は天岩戸を示している？」

「ああ、俺の友達はそのなんじゃねーかって言ってた。でさ、天岩戸って言われて思いつくところ考えてみたんだけど」

真雪は背もたれを抱えるように座り、ノクティルカの方へ向いた。身体を揺らすたびに事務椅子がきしむ。

「一箇所しか思い浮かばなかったんだよな」

「ええ、私もその名前を聞いて浮かぶ場所は一箇所しかありません」  
ノクティルカの指がパソコンのキーボードを打つ。

そしてブラウザに表示された文字の羅列を画面上の矢印が辿り、表示されたのは。

『天野区立岩戸小学校』の文字。

忘れもしない。

ヒトと同じ姿で、同じ言葉を話すイレギュラー。

美冬を同胞だと言った彼と戦った場所こそ、そこだった。

「以前、討伐でこの場所を訪れた事がありましたね」

「ああ。あそこは廃校な上に、近くに何にもねーから隠れるにはもってこいの場所だ。

しかも『出る』って噂もあるんだ、普通の奴はまず近寄らねえだろう」

脳裏に浮かぶ、闇の中にそびえる巨大な墓標のような校舎。

木々の葉ずれの音が鮮明に耳の奥で蘇る。

「そうか、廃校ですか。確かにあの場所であれば昨晚の電話での違和感も説明がつかますね」

「違和感？」

「ええ」

遠くでケトルが沸いた事を知らせる悲鳴を上げている。

窓の外で繰り返されるアナウンスも、それに負けじと大きな音量で歌うパチンコ店の声も

今は聞いた側から忘れていった。

この日差しも、街の息遣いも全て他人事だ。

「覚えていませんか？ あのチャリオットの電話は背景の音が一切ありませんでした。

土砂降りだったのに静かでしたよね。そして人の声も、他の音も聞こえなかった」

「そついや、そつだったな」

「はい。雨の音が聞こえないという事は屋内なのでしょう。

街に近い場所であれば、こんな風に人の声や雑音が聞こえるはず」

窓の外を一瞥した後、すぐに視線を真雪に戻す。

爪先が軽く床を蹴って、身体を彼の方へと向けた。

「彼らのいる場所は屋内、かつ街から離れた周囲に何も無い静かな場所……つまり」

「岩戸小学校にいる可能性が高いつて事、か」

「そついう事です」

ノクティルカはディスプレイを数秒間凝視した後、立ち上がった。

せわしくなく靴音が歩き回る。

「おそらくチャリオットは本気で彼女を隠そうとしている訳ではない。」

「どういう目的からかは分かりませんが、我々に探し出して欲しいのでしょう」

真雪の疑問の視線に気付いたのか、ネクタイを締め直しながら口の端をあげてみせる。

けれど、顔は笑っていない。

何かを思案しているかのように眼光は鋭く、遠くを睨んでいた。

「もし、かどわかしたいのであればヒントも言う必要はないでしょう？」

そして殺したかったら彼女を電話口に出さずにすぐに片付けるはず。少なくとも私だったらそうします」

「まあ、そうだけど」

「何かを待っているようにしか見えません。だとしたら……」

言いかけて歯を食いしばるような表情をし、眉間にしわを寄せた。

そしてドア付近に立つと空いた机に投げ出されていたバッグを手に取る。

終始、様子を視線で追っていた真雪は首を傾げた。

戸惑いが浮かぶ。

「ノクティルカ、出かけるのか？」

「ええ。少々調べ物と答え合わせを」

「答え合わせ？」

部屋に立ち込めるのはどこか殺伐とした空気。言葉を繰り返して、尋ねる。

「私達の答えが正しいかどうか、ですよ。」

そして正しかった場合どうやって姫君を助けるか考える必要がありますので

その準備をしておこうかと思ひまして」

真雪はいぶかしげに目を細めた。

確かに岩戸小学校にいる可能性が高いと言ってもそうとは限らない。場所が分かったと思ひ込み、突入するのは危険である上にリスクが高すぎる。

無事に彼女を助けるためには十分すぎるほど準備をし、あらゆる不確定要素を確かなものにする必要があるとは思うものの、それはどうやって確かめるといふのか。

「けど、どうやって岩戸小学校が合ってるかどうか確かめるんだよ。不用意に近づいてバレたら逆に美冬が危ない事になるかもしれないだろうが」

「普通に考えればそうですね」

ノクティルカが口元を歪ませるようにして微笑む。

「ですが、はたして彼は猫一匹入り込んだ所で気付くでしょうか？」

「え？」

「大丈夫ですよ。幸いな事に彼の死臭は強く、離れた位置からでも分かるでしょう。」

それに私は自分がかわいいので絶対に無理はしませんから」

首を傾げて目を細める。

けれど、その目は真剣な色をたたえていた。

「ウォークライ、申し訳ありませんが付き合ってもらえますか」

「……ああ」

ウォークライがスーツのジャケットを羽織ながらドアの方へ向かうのが見える。

冷静な靴音が部屋に響いた。

「あ、行くんだったら俺も……！」

「じつとしていられないのは分かりますが、貴方は備えていて下さい」

立ち上がりかけた姿勢を制止させる声。

開きかけた唇を噛む。

「用事を済ませたらすぐ帰ってきますよ。その後、報告とどう動くか話し合いますよ。」

開かれたドアから柔らかな微風が踊りこんだ。

室内の空気の重さなど知らずに微笑むように間をすり抜けていく。

「お兄さんに任せなさい」

ノクティルカは悪戯っぽい視線を残して背を向けた。

ドアの閉まる音と共に真雪は崩れるように椅子に座る。

時間の止まる空間、思考力が抜け落ちた瞳のまま窓の外を眺めた。

その視線はやがて、握り締めたままの携帯電話に注がれる。

来るはずのない電話を待っていた。

いないはずの気配を感じ、振り返っては苦笑する。

「……お前、どこで何してるんだよ」

その呟きはまるで祈りのように。



不意に思い出すのは最後に美冬を見た、緑ヶ丘駅での光景。階段を上る途中で振り返って笑う。

『……真雪、ありがとう』

今思えば、まるで彼女は何かを予感しているようだった。何を思ったのか。

たった1日会っていないだけだ。

それなのに、何故こんなにも自分でないような感覚に襲われるのだろうか。

真雪はため息をつく。と窓の外に視線を転じた。

四角く切り取られた空の青と、死んだような色のアスファルトの壁。鮮やかな色の輪郭に、違和感さえ覚えた。

こんなに空は青かっただろうか。

「ノクティルカは出かけたんだね」

何を考えているわけでもないのに、無意識に声が思考に飲み込まれかける。

弾かれたように身体をねじって見上げると、ダンデライオンが真雪に薄く微笑んでいた。

「ああ」

「という事は作戦決行が近いな。君も準備をしておいてくれ」

両手に持っていたペットボトルの1本を差し出されて、頷きながら受け取る。

隣に座つたらしく、椅子が小さく軋む音が聞こえた。

「彼はね、どう動くか考える時に外出する癖があるんだ。

突破口が見つかったから動かすにはいられないんだろっ」

「突破口、ね。これが美冬に繋がってればいいんだけど」

考えをめぐらせながら手をひねって上蓋を開ける動作。

「……なんか、やる事ねえのかな。ノクティルカやウォークライとかが動いてんに  
自分だけこんな風に事務所ではけーっとしてんの、辛いわ」

「君はこの後、ラプターを助けるって大きな仕事があるからね。今は無理に動こうとせずに温存しておかなければ」

「そうだけどさ。動いてた方が気が紛れるじゃん」

「それも分かるけれど、イレギュラー討伐って気分でもないだろう？」

苦笑気味に目を細める顔に返事代わりに曖昧な笑みを向けた。身体をそらして天井を仰ぐ。

視界の端で観葉植物が光を反射しながら揺れているのが見えた。

真雪はペットボトルに唇をつけ、その状態でため息を漏らす。

死んだように気の抜けた瞳。

これではいけないと思いつつも、穴が開いているような錯覚を覚える。

「彼らには彼らの、君には君の戦い方がある。大切なのは自分は何をするべきかを考え、

役割を把握する事だ。待つ事も大切な仕事の一つだよ」

「まあ、そうなん……」

言いかけ、止まった。

真雪はペットボトルの中身を口に含んだ所で、目を見開いて口を押さえる。

深く刻まれる眉間のしわ。

短く呻いた。

「レイヴン？」

「まつず！ 何だこれ！？」

咄嗟に身体を起こすと手に持った物のパッケージを凝視した。

「親父！ お前こんなモン飲ませて殺す気かよ！？ すっげーマズ

いぞ、これ！」

「ああ、やっぱり」

「やっぱりって……分かってんだったら飲ませるんじゃないか！ モツ煮ソーダって何だよ！」

乱暴な動作でペットボトルを置くと、噛み付く勢いでダンデライオンに向き直る。

向けられた相手は、その勢いに圧倒された様子で何度か目を瞬かせていた。

「ラプターが数日前に買ってきたものらしくてね。君の名前が書いてあるから」

「でもマズそうだって思ったら渡すんじゃないかよ！」

「レイヴンは珍しい物が好きだし、喜ぶんじゃないかと思ったんだけどな。」

よし、分かった。僕のと交換してあげるから」

「……ちなみに親父のは？」

「焼肉オレ」

真雪は机に突っ伏したまま、微動だにしない。

小刻みに震える肩。

「あの馬鹿、あれほど変な飲み物買ってくんだったのに」

「しかもあと4本あるんだよね。どう処理しようかな」

「口の中で味噌とモツが弾けてるんだけど。この無駄な再現率、腹立つわ」

「……で、レイヴン。話の続きだけだね」

表情を引き締め、口を開いたダンデライオンを真雪の手が制する。

伏せた姿勢のまま手だけが向けられた。

「待って。水飲んでくる」

数分後、2人はソファに向かい合って座っていた。

「背後に誰かがいる？」

真雪が眉をひそめるのを見て、向かい合って座るダンデライオンは

渋い表情のまま頷く。

前傾姿勢で膝の上に肘を置く、顎のあたりに組んだ手を当て。

「うん、今日ちょっとチャリオットの件を整理している時に考えていたんだ。」

一連の動き等を見て、彼を手助けしている何者かがいるのではないかって」

「それも有り得るかもしれないねえけどさ。それっぽい気配でも感じた？」

「まあ、ちょっと考えれば分かる事だよ」

話し声以外に目立った音はなく、静寂が漂う室内。

まるで衣擦れの音でさえ聞こえるように。

「生きる方法はいくらでもあるとは言え、一人で生きられるような世の中じゃないからね。」

まして彼は生き返った人間だ。普通の人間のようにはいかないだろう」

真雪はその言葉を黙って聞いていた。

髪をかきあげ、視線を宙にさまよわせる。

「食べるもの、住む場所などね。彼は通夜の席で生き返り、そのまま逃亡した。」

そんな彼が……」

「次に会った時は死装束ではなく、普通の格好をしていた？」

「ああ、それが何よりの証拠だと思うんだ。」

三途の川の渡し賃で服や食べ物を買えるかい？そんなの無理に決まってるよね」

「それで『背後に誰がいる』って事か」

どちらからともなく、ため息をついた。

頷く動作の後、唇を噛む思案顔。

「路上で生活しているとも考えずらいんだ。何しろあの死臭だ、彼は目立ちすぎる。」

もし、そうだったとしたら僕らが気付かないはずはないだろう？」

「確かにな。此岸が広いとは言え、1人でこんだけうまく隠れられるワケがねえ」

「……これは仮定に過ぎないんだけど」

ダンデライオンの手がテーブルの上に放り出されていたテレビのリモコンに伸びる。

視線がぶつかり、深刻な顔で見合わせた。

「もし突然死とチャリオットが繋がったとしたら、これは一筋縄ではいかなくなる」

ソファの背もたれに腕を乗せたままの姿勢で固まる真雪。

啞然とした表情を顔に貼り付けたまま、凝視する。

空気の流れも止まってしまったかのように。

「突飛な考えだと思うかい？でも、誰もがこの可能性を一度は考えていると思う」

「確かにそうだけどさ。でも、何の証拠も……」

「現時点ではね。けれど、僕はあながち間違っていないと思うんだ。気付いていないかな？突然死が増えたのはチャリオットが生き返ってからだよ」

ダンデライオンは微笑むように口の端を上げた。

「資料は……片付けてしまったか。最初の突然死は先月の9日、霧島区。」

これは彼が生き返った日だ」

窓の外がにわかに賑やかになった。

太鼓やクラリネットの音が次第に近くなっていく。

どうやら何処かの店舗の宣伝をちんどん屋が行っているらしい。

「そして、一筋縄でいかないという根拠だけねど」

「奴を支援している存在がいるからか？」

「そう。それが単なる旧友や、その辺の此岸の人間だったら脅威にならないだろう。」

けれど」

指がリモコンの電源を押した。

それにあわせて部屋の中に響くテレビから吐き出される場違いな笑い声。

せわしなくチャンネルが変わり、画面は報道番組で止まる。

2人は同じ方向に顔を向けた。

『霧島区近隣で発生している突然死の原因は

黒い袴姿の女の子だという事ですが。大西さん、どう思われますか？』

『そんなオカルトじみた話ねえ。だって、その女の子見た人が全員亡くなってるからって原因がそれだって言うのも強引過ぎないかなあ。

それに、それだと解決方法がないじゃないの』

『現在、厚生労働省の特別チームでも事実関係を確認しているとの……』

真雪が視線を向けたままでいぶかしげに目を細める。

「何だ、これ。黒い袴姿って……あの死兆星の事か？」

「おそらくね。事実を知っている僕らはおかしいと思うけれど他の人間はそれを知る術もなく、疑いつつもこの情報を受け入れるしかないんだ」

「だからつつつて、こんな胡散臭い話を普通のヤツが信じるか？」

「確かにそうだ。けれど、世間は突然死の原因を欲しがっている上にこの情報を流しているのは、このテレビ局だけではないんだ」  
張り詰めていく空気。

明らかに雰囲気が変わっていく。

「新聞やテレビ、ほとんどのメディアが同様の事を伝えている。

こんな事があるかい？僕には作為的に思えるんだが」

「作為、的」

「死兆星は確かに死期の近い人間に見えるが、彼女自身に何の力もない。」

ノクテイルカやラプターが以前話してた所によると、死兆星は突然死の原因をラプターだと思っていた節があった」

「そうやって考えると死兆星は突然死の原因じゃねえのは明らかだよな」

ちんどん屋の音が遠ざかり、喧騒の中に溶けた。

テレビの音は流れているが2人の耳には届く事はなく。

「そうだ。けれど、こうして情報は流れている。」

まるで誰かが事実を歪曲しようとしているかのよう」

「いや、待てよ。そんな事……」

「ないと言いつけるかな？」

ため息混じりに体が起こされ、ダンデライオンはソファにもたれた。胸ポケットからタバコを取り出すと、口にくわえる。

「砂粒のような可能性かもしれないけれど頭に入れておく必要はあると思うんだ。」

杞憂であればそれに越した事はないんだからね。

けれど、もしこれらがチャリオットと繋がっていたとしたら……」

「確かにそうなら一筋縄じゃいかねえわな」

疲れた響きの真雪の言葉にダンデライオンが軽く頷いた。

「僕らはヒーローでも正義の味方でもない。」

大義名分振りかざして立ち向かう必要はないけれど、知る必要がある」

こめかみに指を当てて睨むように目を細める。

「生と死の狭間に立つ、死神として」

低く静かに響く声音。

「生き返りに関わってしまった人間として」

ウォークライとノクティルカが帰って来たのは日が暮れ、太陽が死んでからだった。

テーブルに広げられた数多くの書類と地図。

今までダンデライオンからチャリオットの背後に人がいる可能性について

話を聞いていたノクティルカは、小さく唸りながら頷いた。

ソファから背中をはがす。

「なるほど。仮定が多い話ではありますが充分ありえる話ですね。

チャリオットのバックにいる人物、メディアを使った事実の歪曲……

確かに不自然な点も多い。皆が同じ事を叫んでいる時はまず疑うべきですから」

「ああ」

「ああ」

「……それを裏付ける事になるかは分からないが」

それまで押し黙って話を聞いていたウォークライが一同を見渡した後、口を開いた。

「ギムレットから興味深い話を聞いた」

「興味深い話？」

「ああ」

黒い瞳が睨むように問うたダンデライオンを見つめる。

立ったまま腕組みをし、見下ろしていた。

「エクスキューションナーが此岸でチャリオットを探しているそうだ。

理由は不明……だが、エクスの筆頭であるアプソルトを中心に動いているらしい。

ただ事ではないだろう」

「チェイサー オブ チェイサー、ね。確かにただ事ではないな。

しかし彼らが何故手配する必要があるんだろう？

彼らが関与するほど、チャリオットが何かしたとでも言っただろうか」

ダンデライオンが何も無い傍らを睨むように見つめる。

その言葉にかぶりを振ったのは真雪だった。



「もし、そうだったとしたら俺達だって知ってるはずじゃねえか？美冬の一件で動いてるとは思えねえしな。これは限られた人間しか知らない上に」

あいつらは、よっぽどデカイ事件じゃねえと動かないはずだし」

「そうだね。もしくは何かを掴んだのかもしれない」

言葉もなく、顔を見合わせる。

それぞれ考え込んでいるかのような沈黙を破ったのは。

「少し、お話してもよろしいですか？」

テーブルを覆うような2枚の地図を広げたノクティルカだった。

「うん、どうぞ」

「時間が惜しいので報告をさせて頂きますね。先ほどウォークライと件の廃校を見に行ってきたのですが……レイヴン、貴方の読みは当たっていましたよ」

微かに浮かぶ口元の笑み。

指先が天野区の地図の一点を示した。

「天野区立岩戸小学校　ここが『茨に囲まれた城』です」

地図上の地点と顔を思わず見比べる。

真雪の視線に気付いたノクティルカは静かに頷いた。

「『一事はチャリオットはやっぱりここにいたのか？』」

「ええ、校舎の中はひどい死臭です。あれは普通のイレギュラーのものではありません。」

入り口付近を伺っただけですが、おそらく彼はこの場所にいると言っただけで間違いありません。」

「なるほど。それで？」

尋ねられ、ノクティルカが動きを止めた。

言葉の意味を捉え損ねたのか無言で見つめる顔。

その視線にダンデライオンが足を組み、膝の上に手を置いたまま小

さく笑いを漏らす。

「君の事だから、どう動くかも考えてあるんだろう？意見を聞かせてくれないか」

「お見通しなんですわ、ダンデライオン」

「当然だ。何年の付き合いだと思ってるんだい？」

苦笑に似た笑み。

だが、それはすぐに消えていき険しい表情となる。

「今日見て分かったのですが、この周辺は何もないとは言え日中は人通りがそれなりにある場所のようですね。

近くでマンションの建設が行われている関係もあり、車も人も多く見受けられました」

「なら昼間、堂々と入るのは避けた方がよさそうだな」

「ええ。夜でしたら我々も彼らも動きやすいですからね。

問題は視界がどのくらい確保できるかという点ですか。

当たり前ですが、煌々と照明をつけられるはずがありませんから」

「……彼ら、とは？」

ダンデライオンが地図から視線を移す。

それにつられるようにして他の視線も注がれた。

一瞬の空白。

ノクティルカが眼鏡を押し上げた。

目に不敵な色を残したままで。

「エクスキューションナーですよ」

閑散とした室内とは裏腹に、今日も窓の外は賑やかな夜が広がっている。

アナウンスとネオン、誘う店の声。

けれど今は、それらはないと等しく。

「彼らをオトリに使うおつもりですか」

俯き加減で吐き出された声音に、真雪は眉を寄せた。

表情は見えないが、顔を覆う前髪の向こうに見えた口元は笑っているようで。

「チャリオットはおそらく私達が入った事にすぐ気付くはず。エクスキューションナーは、わずかな時間でも彼の気を惹いてくれればいいんです。」

死臭に誘われて集まった雑魚イレギュラーを掃除しながらね」

「利用しようという事か」

「ええ。血眼になって探しているような相手です。」

彼らが用意する駒は中でも戦闘力の高いアブソルートかヴァンガード……

おそらくアブソルートが来るでしょう。あの犬を使わない手はないですよ」

「けど、そんな都合よく奴等来るか？」

ソファの上に片足を乗せ、首を傾げる真雪。

それまで机に両手を突いて地図を食い入るように見つめていたノクティルカが顔を上げる。

どこことなく楽しそうな色の宿る赤い瞳がそこにはあった。

「来るのを待つものではありません。無理矢理にでも呼ぶんです。」

タイミングを見計らってギムレットに情報を流してもらい、おびき出すのがいいかと」

「ふうん、随分自信あるんだな」

「それなりには。彼らは十中八九、乗ってくるはずですよ。」

どんな些細な情報でも欲しいのが本音でしょうから。

もし思い通りに動いてくれなくても別案は用意してありますし」

頬に触れる乾いた微風を気にする様子もなく、考えをめぐらせる顔ばかりが並ぶ。

動く者は誰もいない。

まるで時が止まってしまったかのように。

「それで、校内についてですが」

紙がめくられる音と共にもう一枚の地図が姿を現した。

無意識のうちに額を集めるように身を乗り出す一同。

真雪は眉間に深くしわを寄せて、睨むように目を細める。

「何だこりゃ。本当に学校か？」

頓狂な声上がる。

その声にウオークライが苦笑した。

「それが普通の反応だな。なんでも有名な建築家がデザインした校舎だそうだ」

「不思議な形の校舎だね。随分とユニークな……」

「コレどうなのよ。逆に使いずれえと思うんだけど」

彼らの中心にあったのは校内地図。

そこに書かれていたのは、ドーナツ型の校舎だった。

「全3階で、入り口はひとつ。他にも非常口はありますが現在は封鎖されています。」

破る事も可能ではあるものの、手間がかかりすぎるので正面玄関を使うのが賢明でしょうね」

「微妙に不利だな。相手にバレバレじゃねえか、それ？」

真雪の指が玄関の文字の上に置かれる。

その指は経路を確認するかのように紙の上を滑った。

「確かに敵に見つかりやすいかもしれない。けれど、敵にとっても同条件だよ」

「あ、そうか」

「ええ。万が一、敵が逃げようとしても私達が入り口で見張っていれば」

捕らえる事が出来るという事です。他の方法で脱出するにはリスクが高すぎますから」

自分で言った言葉に頷く仕草を見せる。

つけっぱなしのテレビが誰に求められる事もなく延々とニュースを伝えていた。

その音はこの部屋の空気が重くなりすぎる事を防いでいるようにも感じる。

冷たい雰囲気さえ感じる無感情な室内と、険しい表情。

いつも存在していた温かさなど微塵もなく。

「ダンデライオン、作戦決行はいつもの構成ですか？」

「うん。そうだね。けれど、今回サーペントはノクティルカと事務所待機にしよう。」

死亡宣告で疲れているだろうし、万が一の事を考えてね」

ダンデライオンの視線が真雪で止まり、ぶつかる。

「そしてレイヴンと僕が戦闘要員、ウォークライは入り口で待機だ。サポートと外や入り口の見張りを頼む」

「……了解」

「ああ、分かった」

温度を感じない風が流れた。

まるで色が変わっていくかのように、張り詰めていくのを感じる。

世界と隔絶され、孤立した印象さえある部屋。

「作戦だけだ」

ダンデライオンの言葉に視線が集中する。

次の言葉を待つ沈黙の中、唇が動いた。

「とりあえず全員ぶつ殺す、以上」

「……」

一瞬の沈黙。

「おかしいな。僕、何も間違った事は言っていないと思うんだけど」  
うなだれた真雪と、ため息をつくノクティルカを見比べて首を傾げる。

怪訝そうにしながらも笑みを浮かべていた。

「……貴方はいつもそうだ。毎回言ってますが、それは作戦ではありません」

「言っても無駄だ、ノクティルカ。このオッサンは何も考えちゃいねえよ」

周囲に疲労感が漂う。

「おそらく彼らは最上階にいるだろう。」

死臭を辿りながら、そこを目指せば彼らの元へ行き着く」

ダンデライオンが遠くを見るような眼差しを窓の外に向け、呟くように言った。

その横顔を見つめる。

「そこが茨に囲まれた城であるなら、ラプターはそこに居るはずだ」  
時計が時を刻んでいた。

その音を聞くたびに焦りを覚える。

名を聞く度に思いをはせる。

「決行は24時」

宣言する声音に無意識のうちに背筋が伸びる。

「諸君、今宵も踊ろうじゃないか」

そこに笑みはなく静かに前を見据え。

夜は明けられることを知らず、更にその色を濃くするばかりだった。

終電間際の緑が丘駅。

誰もいないのではないかと思うほど閑散としており、人影は見えない。

美冬が階段を上る音だけが大きく響いていた。

見慣れた場所であるはずなのに何故か違和感を感じる。

背中に感じる視線。

きつと真雪は改札の方へと向かう美冬を見ているのだろう。

死亡宣告を終え、体調が悪い彼は立っているのも辛いはずなのに。

「……真雪」

突然立ち止まった美冬は何かを考えているような間の後、ゆっくりと振り返った。

こわばって見える表情にぎこちない笑みが浮かぶ。

その先にあるのは、不思議そうに見つめ返す真雪。

二人の間を構内放送が通り過ぎた。

「ありがとう」

口にしてから、その言葉の意味を考える。

無意識に突き動かされた。

もしかしたらこれが最後なのではないかと。

長く伸びる土手の遊歩道に響く、一つの靴音。

ほぼ毎日この道を歩いているはずなのに暗闇に支配された今は、まるで別の景色に見えた。

遠くから水の流れる音が不気味なほど静かに忍び寄ってくる。

日中ならば、ゆっくりと流れる川とそこを渡る風、開放感のある景色を楽しめる

格好の散歩コースだが、今はただ恐怖心を煽る夜道でしかない。

「……」

ヘッドホンをつけた美冬の唇が小さく動き、

風の音で消されそうな程の声で歌を口ずさんでいた。

瞳が何も見えない遠くを見つめる。

等間隔で並ぶ外灯が、まるで道しるべのように見えた。

けれど、彼女の足はそれに抗うように。

川の近くへと下りる階段に誘われるがまま、向かっていた。

呼ばれたとでもいうのか。

思い出すのは数十分前の眠りの時間。

草の海の中で歌う死神の夢を見た。

偽り色の空、頬に触れる命の香りのする風を鮮明に感じ。

今、目を閉じて也容易にそれを思い出すことが出来る。

何かが駆け巡るように鳥肌が立つ感覚を覚えた。

あれは一体、何だったのだろうか。

美冬は全てが闇に溶け、同化した景色の中でたたずんでいた。

ある程度舗装されてはいるが周囲を囲むように草が生い茂る場所。

すぐ近くから聞こえる水音に心が揺れるのが分かる。

「……圭一、来たよ」

ヘッドホンをはずし、向こう岸を見つめる顔。

美冬にとって、この場所は幼い頃からいつも見ている景色だった。

この場所に立つ事を禁じられ、訪れる度に様々な感情で押し潰され

そうになりながらも

まるで償いの行為であるかのように何度も足を踏み入れる。

微笑もつとるように口の端を上げてみせるが表情はこわばったま

まだった。

俯き、そこにあるはずの水面を見つめる。

「来るなって言われそうだけど会いたくなかった」



独り呟く声は静寂に飲み込まれる。

時折吹く風、遠くから届く高速道路からの騒音が孤独感を加速させた。

自分だけが取り残され、世界で一人ぼっちであるかのように。

「会いたいのにも夢の中にも出てきてくれないね」

隣に、泣きじゃくる幼い頃の自分がしゃがみこんでいるかのような錯覚。

薄れたはずの記憶は蘇り、過去へと引きずり戻される。

搔きむしりたくなる衝動と叫びたくなる記憶。

忘れる事が出来たらどんなに楽だろうと思つ反面で、それを拒んだ。

美冬は痛みに耐えるように胸元のシャツを掴むと硬く目を閉じる。

肩が小さくわなないていた。

「……願えば会えるものだ」

前触れなく聞こえた、間近の男の声。

戦慄の中で息を飲んだ。

聞き覚えのある声に驚き、動揺する。

何故、どうして、一体。

迂闊だった。

心の中にいくつもの言葉が浮かぶが身体は縛られたように動かなかつた。

今まで感じる事のなかった死臭が鼻をつく。

雨の匂いのする重く、湿った風も音も消えた。

ここにあるのは自分と　チャリオット。

「何で、あんたが」

凍りつく身体を無理に動かしているかのように、顔を恐る恐る後方へ向ける美冬。

その顔に警戒感がはりつく。

「探していたのだ」

「……ふぎけないですよ」

「お前が一人になる機会を窺っていた」

視界の端でチャリオットが笑っているのが見えた。

何故だろう、闇の中だというのにその瞳が鮮やかに赤い光を放っているように。

宿る狂気に身体が反応し、震える。

どんなに押し殺しても湧き上がった、恐怖心が。

美冬は自分の危機感のなさを悔いる。

考えれば、この状況だって想像できたはずで警戒するべきだった。

タクシーを使えという真雪の言葉を笑い飛ばさずに、大人しく従えばよかったと。

チャリオットと自分以外、人影はなく。

しかも自分は彼と対峙出来るような状態ではない。

不利だ、完全に。

「お母さんに言われなかったか？」

背中にチャリオットの気配を感じた。

耳元に唇を寄せているのだろうか、血の混じる死臭の中で笑いを含んだ声が聞こえる。

足が、全身が動かず。

唇を噛む。

唯一自由が利く瞳だけを動かして、背後を睨んだ。

「夜の一人歩きはやめなさい」

武器を収納している真紅の手袋はジャケットの中。

どんなにすばやく動いても、チャリオットの動きよりも早く動けそうもなく

気付かれないはずがない。

動けば必ず一撃が来る。

人気がないとは言え、すぐ近くに民家もある。

ここで戦う事は

「『さもないと、怖いおじさんに連れて行かれるわよ』って

その言葉と共に。

チャリオットが動く気配を感じた。

美冬は咄嗟に離れようとしたが首を凍えるような温度が掴む。

足元から脳天まで一気に寒気が駆け上った。

恐怖心。

動けば命はない、動かなければ死ぬ。

喉を掴まれた状態からどう逃れようというのか。

「あ、ぐ……！」

「危機感がなさ過ぎる。女としても、チェイサーとしても」

死人は笑っていた。

そして、その直後。

抗う事も許されず、美冬の視界は暗くなった。

寝返りをうつた瞬間、感じたのは。

固い床の感触と瞼の裏に浮かぶ光の気配。

目を閉じているにもかかわらず、光は目を刺そうとしていた。

「ん」

美冬は短く呻くと薄く目を開けた。

目の前には何も置かれていない、広いだけのフローリングの床がある。

薄日に照らされて輝くのを呆然と見つめた。

覚醒しきれてない意識の中、痛みで脈打つ頭を押さえて上半身を起こす。

そこで気がついた。

自分に掛けられたモスグリーンの軍用コート。

淡く漂うプルメリアの香り。

殺風景で何も無い、壁と床だけの空間。

「……ここは」

あたりに視線を巡らせる。

大きな一面の窓の外に広がっているのは押しつぶそうとするかのような厚い灰色の雲と

その隙間から差し込む金色の光。

ここは何階なのだろうか、いつも見える景色よりも高い気がした。

「このコートって」

見覚えのある色とシルエットのコートをつまんでいぶかしげに見つめる。

そこから漂う死臭に、美冬の中の仮定が確信に変わった。けれど。

「お目覚めか、姫君。ずいぶんと寝ていたな」

引き戸の開く音に続いて分厚い靴音が近づいてくる。

歩く度に聞こえる金属音はおそらく軍用ナイフが何かとぶつかる音だろう。

視線を上げるとチャリオットが美冬を見下ろし、口の端を上げていた。

「そう睨むな。どうだ？ 目覚めは」

「最悪だわ」

はき捨てる声に笑い声が重なる。

美冬は目の前にしゃがみ、自分の顔を凝視する男を見据えた。警戒感を全身から発散する。

後ろに手を付き、後ずさろうとするかのように身体をのけぞらせ。

「少しは食べておけ。人間は食わんと持たないだろう」

その言葉と共に二人の間に放り出された

見慣れたコンビニエンスストアのロゴが書かれた白いレジ袋。

ビニールのこすれあう音と重い何かが落ちる音が室内に響いた。

思わず、それとチャリオットの顔を見比べる。

美冬は戸惑っていた。

昨晚、彼に喉を掴まれた時は覚悟をしていたというのに。

一体この扱いは何を意味しているのだろうか。

死臭による頭痛以外は痛みもなく、怪我もしていないらしい。

衣類に乱れもなければ、取り上げられた物もないようだ。

一体彼は何を考えているというのか。

「ねえ」

渴いた口の中で唾を飲み込む動作をすると小さく切り出した。

「あんた、一体どういいうつもり？ 殺す気なら放っておけばいいじ

やない」

「俺はそれでも構わないんだが」

不意に探るようにつめ合っていた視線が横へと逸らされる。

数秒の間を置いて、美冬がそれを追うように同じ方を向く。

見えたのは、開け放たれた引き戸の向こうを通り過ぎる残像。

硬質な靴音だけが廊下に幾重にも響いていた。

美冬の目が無言でチャリオットに問う。

「奴が許さないのだ」

その声は苦笑が滲んでいた。

瞳の奥には平静と狂気が同居する。

何かの拍子に攻撃を仕掛けてきてもおかしくはない、そんな雰囲気を感じた。

「どちらにしろ、姫君は丁重に扱わなければならない。それに見極

める必要もあるからな」

「何を見極めるっていつのよ」

「お前が何者であるかだ」

チャリオットの手が美冬の頬に伸びかけるのを、手が払いのける。

拒絶する手、表情。

美冬の眼光は今にも噛み付きそうな勢いにも見えた。

「……あなたはエニグマだって言ってたじゃない」

「そう。そのエニグマの何であるかをだ」

「エニグマの……何である、か？」

今まで警戒感を解こうとせず、手袋が入ったジャケットのポケットに突っ込もうとしていた手が動きを止める。

顔に浮かぶのは戸惑い。

その様子にチャリオットは一瞬驚きをみせたが、それはすぐに笑い声に変わった。

肩を揺らして天井を仰いで声を張り上げ。

ややあつて部屋中に轟いた声は止み、顔は美冬を覗き込むように近づけられる。

美冬はその死臭の強さに何かを堪えるように唇を噛んだ。

「本当に何も知らないとは！ 大事にされているのか、それとも腫れ物扱いされているのか」

向かい合った二人の間に前触れなく訪れた沈黙。

それは、お互い何かを考えている事を表しているかのように。

「いいだろう。まだ時間もある、お前にエニグマが何なのかを教えてやろうじゃないか」

「……時間？」

「ああ。騎士殿が茨を掻き分け、姫君を助けに来るまでの」

今まで跪いていたチャリオットが彼女の前にあぐらをかいて座った。膝の上に肘を乗せると頬杖をついて楽しげに瞳を細める。

四方を白い壁に囲まれた空間にいと、現実を忘れそうになった。時間も状況も曖昧になりかけ。

「エニグマは二つで一つ。それが二つである限り永遠に一つになるうとする」

まるで歌のようだと警戒感も忘れ、美冬は心の中で呟いた。

何かの例えや冗談かとも思ったが目の前のチャリオットは笑っていない。

「片方はヨイ、片方はシノノメ。それが夜と朝であり、生と死だ」

「どういう意味よ」

「それはお前が一番知っているはずだ。そして嫌でも分かるようになる」

温度のない埃っぽい空気が漂う。

不気味なほど静かなこの場所で耳を澄ませても、沈黙の声しか聞こえなかった。

死人の肩越しに見える霞んだ都庁。

そして、それを守ろうとするかのようにそびえるビルの群れと。

「片方は死を撒き散らし、片方は刹那の生を与える」

「……それがエニグマ？」

「そうだ。お互いは相手なしでは生きられない。それらは同じ意味なのだから」

不敵な笑みを浮かべながらチャリオットが言う。

まるで身体の奥からこみあげてくる笑みを隠せないように。

美冬は状況も逃げる事も忘れ、ただ呆然と言葉を繰り返した。

掴み所のない話だと混乱すると同時に

自分の中のどこかで納得している部分もある。

何故か心が沸き立つのを感じた。

自分でも戸惑うほどに。

「姫君、聞くぞ」

気が付くとチャリオットの飢えた目が美冬を睨むように見つめていた。

動けないまま、無言で視線を返す事で答える。

「お前にとつての死とは何だ」

「……常に隣にあるもの」

「では、生は？」

「スタート地点」

答えに満足したように口を大きくゆがめて笑みを浮かべるチャリオット。

けれど、美冬は笑っていないかった。

「なら、あたしも聞くわ」

外に広がる雲は今にも泣き出しそうに見える。

隙間から見えていた光も灰色に飲み込まれていた。

「あなたにとつて死って何？」

「息をするように自然なもの」

「生って何？」

「泣き叫ぶ所から始まる呪いだ」

数秒の間の後、美冬はため息をついた。

苦しげに首を横に振ると眉を寄せる。

座りなおしたときに生まれる、衣擦れの音さえ大きく聞こえる室内。

時は止まっていた。

ここは死んでいる。

「分からない。あなたの目的も、何でそこまでエニグマにこだわるのか」

「分かるはずもないだろう。それは……」

ゆっくりと吐き出される言葉。

その様子に不気味さを感じ、思わず身構える。



しかし、その言葉は吐き出される事はなかった。

チャリオットはまるで全身に電気が走ったかのように。

目は見開かれ、静止する。

震える手が喉を押さえた。

「な」

美冬はどうする事も出来ず、ただ驚いた表情のまま見つめる。

そして数秒後。

糸が切れたようにつながれていたチャリオットが頭を持ち上げる。

そこには強い死臭こそあるものの妙な違和感を感じた。

息切れの中、全身で呼吸をするチャリオットの様子に不安を覚え。

自然と鼓動が高まっていた。

どんな、そしてどこから攻撃は来るのか。

どう動くのか。

美冬の視線がせわしなく動く。

手は無意識のうちにポケットに突っ込まれ、手袋を握っていた。

だが。

「……………やっと、会えたな」

顔を上げたチャリオットは切れ切れの呼吸の中で

表情を歪ませたまま微妙に笑う。

そこに狂気はなく、まるで別人のように穏やかだった。

まるで色が変わったようだ。

目の前の男が滲ませていた狂気は影を潜め、今あるのは『チャリオットという名の何か』

「……誰？」

美冬は彼に視線をこびりつかせたまま後ろに手をついた。

それは後ずさるうとしてしているようにも見えたが、小さな動作で真紅の手袋をはめている。

悟られないように息を殺して。

静止した世界で聞こえるのは自分の鼓動、耳鳴りを誘う沈黙。

そして、目の前の男の荒い呼吸。

「分かつてる事を聞くな」

「あなたなんて知らないわ」

「俺は俺だ。チャリオットだよ」

「嘘」

警戒心を全身からみなぎらせる美冬がはき捨てるように言う。  
すばやく瞳は動き、些細な動作も見逃さないように注意深く見つめた。

確かに目の前の男はチャリオットだ。

けれど彼とは別人であり、今まで発していた危うさは微塵もない。

一体何が起こったというのか。

美冬は攻撃する事も逃げる事も忘れていた。

今、自分が何をすべきかを考える一方で消えていく思考。

ただ胸騒ぎばかりが自分を支配する。

「なんと言えばいいか」

チャリオットは口を手で押さえたままで視線を横に投げる。

空いた手で頭を掻くと、軽く息をついた。

「……二重人格なの？」

「そうなら気が楽なんだが」

美冬が恐々と投げた問いに軽く首を振ると苦笑うように口元を歪める。

地面に座り込む美冬と、膝をつき彼女を見つめるチャリオット。

何も動かない室内で彼らのシルエットも静止する。

「残念ながらアレもコレも俺である事に変わりはない。

内側で暴れるのを抑えられなくなるんだ」

「暴れる？」

「生きる為に必要なエネルギーが足りなくてな」

ため息ですら聞こえる静かな室内。

美冬は言葉の意味が分からずに、わずかに眉間にしわを寄せた。

「人間が飯を食うように、死人は魂を食わなければ生きられない。

動くにはエネルギーが必要だろう？ それを欲して、あんな風にト

チ狂う」

言葉の端々に血の匂いを含んだ咳が混じる。

苦痛で歪む顔。

「人を食らい、何かの拍子に我に返っては罪悪感で吐く………そのの

繰り返しだ。

また人を殺してしまったと悔やみながら、もう何人殺すのも同じだ

とも思う」

美冬はわずかに目を見開いて息を飲んだ。

聞いた言葉を口の中で繰り返す。

何かを考えるように視線はせわしなく動き、無言のまま。

「狂った時の記憶も感触もあるからな。

いつそ狂うのなら、自我を失うほどに狂えたらどんなに楽だろうと」

「……あんたが」

チャリオットの疲労が滲んだ瞳を向けられ、見つめあった。

そらす事なく強い視線で問いただすように。

押し殺した声に感情はない。

「あんたが突然死の原因なの？」

「突然死？」

「花持つて、変なコト言つて何人も死んでるじゃない。あれは皆、あんたがしてる事？」

今見ている景色に動く物はなく、全てに命がないように感じる。

無言の時間だけが流れていた。

チャリオットは強い語調の問いに答える事なく、俯くと小さく笑う。持ち上がると再び向けられる視線。

「……レイヴンそっくりだ」

そう言つと視線を窓の外へと向けた。

蒼白の顔に生気の幻が見える。

美冬はチャリオットの横顔を見つめたまま固まったように動かなかつた。

「ある所に1羽の小鳥がいました。小鳥に恋をした狼はその想いの深さを伝えようと、毎日夜を摘みます」

怪訝な瞳に気づき、微かに笑いながら言葉を紡ぐ。

「彼女の為に、そして自分が生きる為に」

わずかに上がる口角。

「狼は来る日も花を摘み続け、小鳥の幸せを願いました」  
殺風景な部屋にチャリオットの声だけが響いていた。

唇を噛んだまま聞いていた美冬が見上げる。

「小鳥つて誰？」

「さあ？」

「これは、あんたが突然死の原因だつて言いたいワケ？」

「どうだろうな」

肩をすくめるように言つ言葉に美冬が鋭い視線を向けた。

唇を噛み、睨む。

握られた拳が床を叩いた。

「とぼけないでよ！ ちゃんと答えて！」

「とぼけているつもりはない」

「嘘！ あんたは……！」

不意に。

チャリオットは自分の背から大型の軍用ナイフを取り出すと、2人の間に置いた。

床を殴るような音。

その動作に反応した美冬は、咄嗟に武器を取り出そうとするが。

「さあ、狂った死人の戯言はここまでだ」

チャリオットの声に阻まれた。

「頼みがある」

その瞳の奥には覚悟に似た何か。

「俺を殺せ」

空白。

口を開きかけた美冬の思考を遮る声。

一瞬、その言葉の意味が分からなくなる。

短く発せられた有無を言わさない強い口調に

ただ、見つめるしか出来なかった。

戸惑ったようにナイフとチャリオットを見比べる美冬は薄く口を開いたまま微動だにしない。

「時間がない。頼む、美冬」

鞘からナイフを抜き取る音に辺りが張り詰めていく。

チャリオットは美冬にナイフを握らせると自分の首元に刃を突きつけさせた。

まるで自分の手ではないような感覚。

日差しに暖められた空気の中で、チャリオットの体温だけが氷のように冷たく。

「俺が人であるうちに」

首元に、ナイフを当てるポーズの美冬。

穏やかに発せられる声に呆然と首を振った。

「……出来ない」

「人の姿で、人の言葉を話すモノは殺せないか？」

「違う、あたしは何でも殺せる。害を与える可能性のあるモノなら何だって殺せるわ」

「俺は害を与えるイレギュラー……いや、それ以下。ただの亡者に成り果てた」

斬ろうと強く押し付けるチャリオットの力に抗う。

目の前の男は自分に、そして他の人間にも危害を与えていた。突然死の原因は彼なのかもしれない。

けれど、ためらう。

力の均衡の中で、美冬はもう一度かぶりを振った。

「でも」

「何故殺せない？」

見下ろす強い眼差しと苦しげに見上げる視線。

何度か唇が動き、迷った素振りを見せた。

「……真雪の友達だから」

一瞬動きが止まる。

その言葉に目の前の顔は、驚きから次第に笑みを広げた。わずかに困った色が浮かぶ。

「あんたは友達だから、死んだら真雪が悲しむよ」

「こうして生きている方が悲しむだろう」

「でも、あたしは彼の辛い顔は見たくないの。だからそんなコト出来ない」

切なげに瞳を細める姿にチャリオットは苦笑した。

「他の奴等が何人も死んでもか？」

その言葉に唇を噛む。

「レイヴンの為なら、多くの人間を犠牲に出来るのか？」

自分達以外の物が全て色を失ったような錯覚。

時は止まり音は消える。

美冬は何か言いたげに唇を数度動かすが、それは言葉とならず。

ただ、すぎるように視線を返すのみ。

「終わりにしたいんだ、もう。これ以上罪を重ねたくはない」

「でも」

「分かっているだろう？ それしか道は残っていないんだよ」

言い聞かせるような響きの言葉。

ナイフが首筋に触れ、そこが赤く細い線になっていた。

埃っぽい空気の中で視線を合わせる。

「死ぬべき人間が生き、生きるべき人間が死ぬ　こんな事が許さ

れては……」

言葉は続かなかった。

何故か聞こえた鼓動。

目の前の男は死んでいる。

鼓動など聞こえるはずもない。

けれど美冬は聞いた、脈打つ音を。

チャリオットは肩で息をしたままで静止していた。

突然訪れた変化に美冬は戸惑い、ただ見つめるしかない。

無理矢理ナイフを握らせる彼の手が不自然なほど震えているのを感じて胸騒ぎを覚える。

「……る」

俯き、歯を食いしばったままで発せられた言葉は聞き取れなかった。

周囲の空気が変化していくのが分かる。

目の前の男は、まるで何かに耐えているような。

「え？」

聞き返した、その時。

チャリオットが美冬の手を振り払う。

何が起こったか分からず、呆然とした。

目を剥いたままで見つめる。

視界の隅で、振り払った拍子に弾かれたナイフが地面を滑っていくのが見えた。

開けっ放しの引き戸を越え、廊下に転がる。

壁にぶつかる金属音だけが大きく響いた。

「な」

「避ける」

「え！？ 何……」

「いいから避ける！」

刹那。

わずかな沈黙の後、耳元で風が唸る。

美冬は強く掴まれたと思うと同時に壁に叩きつけられ。

背中に、全身に衝撃が走った。

何が起こったか把握できず、混乱のままで懸命に自分を掴む力から逃れようとする。

「ん、ぐあー！」

「……捕まえたぞ」

歯軋りの隙間から漏れる、憑かれたような笑い。

こみ上げるそれを抑えきれない様子のチャリオットは美冬を壁に押し付けたままで

顔を覗き込んだ。

飢えと殺気の入り混じる目に悪寒が走る。

死臭で意識が遠のきかけて美冬は咄嗟に数度頭を振った。

「言っただけだ、避けると」

話す度に血の匂いのする息が肌に触れて嫌悪を顔に広げる。



今までの平穩は奪われ、室内は一気に張り詰めていった。立ち上る狂気に戦慄する。

笑う、目の前の顔。

これこそが美冬の知るチャリオットだった。

おそらく『今までの彼』は、こうなる事を感じてナイフを遠くへ投げ避けるといったのだらう。

「なるほど、これがトチ狂ったって状態ね」

平静を装いながら美冬が呟いた。

頭痛と鼓動が同調し、周囲の音を掻き消していくように。

「狂ってる？ それは俺だけじゃない。お前もだらう」

美冬の手首を掴んで壁に押し付ける。

顔をあわせるような顔の距離、密着させようとすする身体。

「世界が狂っているのに正常な奴などいるものか。」

みんな狂ってるのだ。俺も、お前も、世界も、全てが「

目を細め、歌うように言った。

細い手首を潰そうとするかのように強く握るチャリオットの手。

美冬は前を見据えたまま空いた手をジャケットのポケットに突っ込んでいた。

片手の自由を奪われている以上、武器を出すことも出来ず

また、この状況で交戦するのは得策ではない。

なら自分はどうするべきか？

答えは左手につかんだ物 携帯電話。

どうにか自分の状況を伝えなければ。

「チャリオット」

美冬はこみ上げる吐き気を飲み込むと眉間にしわを寄せた。手を振りほどこうと身体をねじりながら、左手を影に隠す。

チャリオットに悟られないように慎重な動作で携帯電話を取り出し。

「あなたの目的は？ 生き返った理由は何？」

「さつきも言ったはずだ」

「……小鳥？」

「ああ」

視界の端に今にも泣きそうな雲の海が見えた。

それとも、もう降り出しているのだろうか。

二人の位置からは見えないが風だと思っていた物は雨なのかもしれない。

「恋だよ」

窓を叩く音。

「恋が俺を狂わせた」

言葉を頭の中で何度も繰り返すが意味を捉える事が出来ずに。

チャリオットの開いた手が美冬の腰に触れる。

服越しだというのに冷たさを感じて身体を縮ませ、間近の顔を睨みつけた。

「触らないで。放してよ」

抵抗しようにも片手は掴まれ、もう一方は携帯電話を持っている。

全身を駆け巡るのは嫌悪か、恐怖か。

美冬は顔をそむけようとしながらもチャリオットを見据えたままで。

「……そんな顔をされると食いたくなる」

「放して」

息のつまる沈黙に叫び、もがき暴れたくなる衝動。

奥歯が震えて鳴りそうになるのを必死で堪えた。

そんな様子を楽しむようなチャリオット。

手が美冬の身体のラインをなぞるようにゆっくりと撫でていき胸の丸みに触れる地点で止まる。

聞こえるのは喉を鳴らすような小さな笑い。

「お前の半身を呼ぶのだ、エニグマ」

「触らないでって言ってる！」

「呼び、共鳴するんだ。見せてみる、エニグマである証拠を」

「触るなっつってんだよ、バケモノ！」

美冬は身体をよじるように暴れ、手を振りほどこうとするが微動だにせず。

唇を噛んだままで嫌悪感をあらわにした。

動けば動くほど手首に痛みが走る。

けれど、抵抗しないわけにはいかない。

「口だけは威勢がいいな」

「ふざけんな！ 放せ！」

チャリオットの手のひらが美冬の胸に触れたまま弧を描くように動く。

指先の些細な動きですら寒気が身体を支配する。

噛み付く勢いで吐く言葉はチャリオットに聞こえていないらしい。

彼は美冬の顔を見つめたまま目を細めていた。

「ハーメルンの街に一人の笛吹き男がやってきた」

耳を疑った。

思わず動きを止め、息を飲む。

「ネズミの被害に悩む人々に彼はいう『残らずネズミを退治しましょう』」

忘れる訳がない。

チャリオットが口に行っているのは、美冬が目当たりにした突然死の現場で聞いた言葉。

歌うような声が静寂を壊していく。

どんな言葉より、明確な証拠。

美冬は死臭でもうろうとすることで意識を保とうとしていた。

「お前、お前やっぱり！」

「……さすがだな。唱えただけではどうという事はないか」  
夜の公園で対峙した時、そして今。

死臭の中で嗅いだ微塵の違和感はプルメリアの香りだった。

美冬は数度、何かを言いかけて唇を動かす。

視線は虚空とチャリオットの間をさまよっていた。まるで混乱の中で思考を巡らせているかのようだ。

「お前が突然死の原因か！」

「だったらどうする？ 殺すか？」

肩を揺らして笑うチャリオット。

もはや答えなど必要ない。

全ては状況が物語っていた。

美冬は携帯電話を注意深く開くと指の腹でボタンを探る。

窓の外を一瞥しながら考える、必死に。

なんとしても連絡を取らなければならない。

せめて、この場所　いや、自分がチャリオットと一緒にいる事だけでも。

霞んで見える都庁の大きさからいって、ここは天野区。

この視界の高さは、それなりに高い建物だろうか。

しかも室内の様子からすると学校のように見える。

最後に電話をかけたのは誰だっただろう？

真雪、いや比良坂事務所か。

なら

美冬が息を殺して携帯電話のボタンを押す。

何のボタンであるかなど分かるはずもなく、祈るように。

話すことは無理だろう。

交わされる会話から相手が何か察知してくれれば。

この部屋に立ち込める静寂は敵だった。

相手呼び出す微かなコール音でさえ響き渡る。

「何をしている？ 姫君」

その言葉と共に美冬の左手首を掴み、壁に叩きつけるように。

美冬の両手の自由はチャリオットが握っている。  
壁に押し付けられたままで悔しげに唇を噛むと睨み上げた。  
地面に落ちる無機質な音。

目の前の死人の足元に転がった携帯電話の通話は既に切れている。

「助けを乞う気だったか？ それは賢明な判断だ」

不意に土砂降りの雨音が耳に飛び込んできた。

その音は重苦しい沈黙を更に濃くしていく。

暗い室内。

外の外灯からのわずかな光に照らし出される顔は飢えた笑みを浮かべていた。

美冬は自分を覆う体軀から逃れようとするも。

ただ睨む以外、成す術はないと知る。

「だが、電話など使わなくても伝わるだろう？」

まるで子供に言い聞かせるような口調。

逆なでされ、身体の内側で怒りが熱をはらむ。

蹴り上げたたくも身体を押し付けられ、自由が利かない状態で。

突然、足音から聞こえてきた場違いなほど軽快な旋律。

どちらからともなく顔を見合わせた。

埃と湿気、そして死臭の充満する空気の中で。

美冬はわずかに顎を引いて携帯電話を一瞥したが

この位置からでは発信者が誰かは確認する事が出来ない。

だが、何故か確信はあった。

電話をかけてきたのは真雪だ、おそらく。

「相手は騎士殿か」

チャリオットは低く呟くと掴んでいた右手を美冬の首に移動させた。

わずかに力を込める指。

息苦しさを顔を歪ませる美冬を凝視しながら足音の携帯電話を拾い上げる。

「は……っ」

死臭と苦しさと力が入らず、自分の首を絞める手をどこうにも掴むことしか出来ない。

脳裏をかすめるのは想像したくない可能性。

「は、なせ……！」

その言葉は声になっていたのでだろうか。

体を襲う恐怖感を懸命に振り払おうとしながら両手でチャリオットの手から逃れようとする。

目の前にあるのは、携帯電話を耳に当てる死人の姿。

けれど、こめられ続ける力に視界がぼやけかけた。

「いい夜だな、死神」

どこからか入り込んだらしい温度を感じない風が肌を撫でる。

灯りのない闇の中でチャリオットが笑うのが見えた。

何も無いこの部屋は、まるで誰かの心象風景のように。

「忘れたのか、俺を」

内側にあるのは恐怖心、怒り、得体の知れない不安。

美冬は背に冷たく固い壁の感触を感じながら、唇を噛んで睨み続けていた。

「一向に姿を見せない美冬、彼女の電話に出る死人。さて、ここから考えられる可能性は？」

天上からの光は、まるで自分達をせせら笑っているかのように。真雪は月を仰いだ姿勢のまま固まっていた。

『ごきげんよう、僕のかわいい天使諸君。ダンデライオンだ』  
耳に装着したインカムから聞こえた声。

動きを止め、耳を傾ける。

『これより作戦を開始する。ミッション【姫君救出】、クリア条件はラプターを無事救出する事』

目の前にあるのは巨大な墓標のように見える茨に囲まれた城  
とい、廃校。も

暗闇の中でそれが月光に照らされ、浮び上がって見えた。

その景色は不気味にも幻想的にも感じる。

『無益な戦闘は避けて……と言いたい所だが、今回は別だ。』

遠慮は無用。我々の行く手を阻む者は全て握りつぶせ』

周囲に音はなく、小石を踏みしめる音でさえ響き渡りそんな錯覚。ため息でさえ誰かに聞こえてしまう気がする。

『では、始めようか。愛しているよ』

午前0時、天野区立岩戸小学校。

チャリオットによって拉致された美冬を救出する為、

真雪は人気のないこの場所に佇んでいた。

おそらく彼女はここにいるのだろう。

耳を澄まして、目を凝らしても意味がない事は分かっているが無意識にそうしてしまう自分がいた。

何をすべきかは分かっている。

けれど、心の中には言いようのない不安が広がっていた。

『こちらはノクティルカです。』

ナビゲートを担当、作戦終了までよろしくお願いします』

入れ替わるように聞こえた冷たさを帯びた声。

心なしか、言葉の端々に殺気が見え隠れする。

『現在まで作戦は予定通りに進行中です。』

これよりダンデライオンとレイヴンは廃校に突入してラプターの元へ向かって下さい。

遠回りでも確実な道を、冷静な判断を心がけましょう。

それではご武運を。愛してますよ』

真雪はその言葉に軽く頷いた。

黒い革手袋を強く嵌め直す仕草。

前を睨みつける。

『良い夜だねエ、サーペントだ。』

今回は情報収集とノクのサポートに回るとしようか』

神経を研ぎ澄ませると、感じるのはいくつかの気配。

まるで息を潜めて様子を窺っているようにも感じた。

何者かまでは分からないが普通の人間ではないらしい。

『ギムレットには情報を流してある。』

どうやらエクスキューショナーの連中は情報に乗ったようだねエ。

向こうはアブソルートとヴァンガードが動いてるらしい。

少し前に天野駅で見たって情報が入ってきてるよ』

わずかに冷気を含む風がジャケットをひるがえす。

耳元で唸り、髪を巻き上げた。

『じゃ、楽しいダンスをね。愛してるよ』

『……ウオークライだ』

サーペントの言葉を引き継ぐ、ウオークライの声。

インカムの向こうに聞こえるサイレンは、まるで叫び声のようで。

耳障りなノイズにわずかに顔をしかめる。

『現在、城の入り口付近で待機中。』

周辺の監視と邪魔者のあしらいは任せておけ。

確かにこの辺は人の気配がないが微妙に警察が動いているのが気に



なるな。

まあ、大した問題ではないか』

視線を持ち上げると見えるのは夜に溶けかけた校舎。

灯りのともっている部屋はなく、人の気配も感じない。

死角にいるのか、それとも闇が隠しているのか。

『彼女は必ず助けられる……以上。愛しているぞ』

真雪が校舎に向かって歩き出す。

足音が妙に大きく聞こえる。

背中に視線を感じ、目だけを動かした。

「こちら、レイヴン」

インカムを手で押さえながら短く告げる。

自分を取り囲むように存在する木々が葉ずれの音を響かせていた。

全てが黒に覆われたこの世界で。

「現在地、廃校入り口付近。見たところ敵らしきモノはいねえみてーだな。」

ギャラリーはいるけど。まあ、邪魔しなきゃ基本スルーの方向で」

周囲に視線をめぐらせていた真雪の視線が留まる。

数メートル先の駐車場に闇と同じ色をした人影が立っていた。

黒袴に長髪の小柄な少女　ウタカタ。

彼の視線に気付く事なく、ただ校舎を見上げる。

何も無い広い空間にたたずむ姿は、どこか非現実的な光景に思えた。

「これから城に突っ込む」

足は昇降口へと向かう。

靴音は鼓動と重なり、身体の内側で大きく響く。

何かを思うように唇を噛む真雪。

一瞬の沈黙。

「絶対にアイツはぶつ殺す。俺はもう決めた」

『レイヴン』

「分かってるよ。美冬を助けるのが最優先ってんだろ？……けどさ」「たしなめる声に強く歯を食いしばる。」

拳を握り締め、頭の中の考えを消そうとするかのようにかぶりを大きく振った。

「あんな真似されて黙ってられるかよ」

低く呟く声。

立ち止まった足が再び動き出す。

「どんな手段使っても美冬を助ける。愛してるぞ」

視界に写るウタカタはただ一点を見つめ続けていた。

視線の先は3階部分、教室の一つだろう。

もしかしたらそこに美冬はいるのかもしれない。

けれど彼女がずっと見つめている意味は？

あまり考えたくない事だった。

「死兆星」

ウタカタと並んだ真雪が立ち止まり、名を呼ぶ。

二人の間を通り抜けるのは死臭混じりの空気。

お互い顔を見合わせる事なく、正面を向いたままで。

「お前、あいつ連れて行くんじゃないぞ」

履き捨てるように言くと、真雪の後姿は校舎の中へと吸い込まれる。

それはまるで異界への扉。

ウタカタは依然として仰いだままの姿勢で微動だにせず。

唇を動かすものの、それは声になる事はなかった。

青白い光で満たされた世界と、静止した景色。

音もなく。

その中で、一つの影だけが蠢いていた。

自分の背で大きく響く、重いドアの閉まる音。

もう引き返せないと心の中で呟く。

そんな気はないというのに。

息を潜めて周囲を窺うように視線をめぐらせた所で、動きが止まる。見つめるのは正面。

目を見張っていたが、すぐに表情に嫌悪が滲んだ。

「……ふざけてやがる」

歯軋りの隙間から発せられた声。

そこにあつたのは、ただの暗闇ではなく。

緩やかなカーブを描く廊下に等間隔に並ぶロウソクの火。肌を感じない程の微風に光が揺らめく。

「行き先はこちらってか？ どこまで人をバカにすりゃ気が済むんだ」

軽い舌打ちと共に真雪が呟く。

まるで道標のように並ぶ無数のロウソク。

窓から差し込む月の光と日差し似た色のロウソクの灯りが、周囲を非現実的に塗り替えていく。

『どうしました？』

「バカにしてるぜ。校舎に入ったら、すぐに道案内が用意されてんだけど」

『どういう事ですか？』

耳元でノクテイルカが戸惑い気味に問うた。

こみ上げる苛立ちを押し殺すように唇を噛む。

「廊下にロウソクがずっと並んでんだ。まるで姫君はこっちだって言ってるみたいに」

灯りがなく、暗いと思われた屋内は予想以上に明るかった。

足元に並ぶ小さなロウソクは張り詰めた空気など知らない様子で踊るように。

鼻につくのは陰鬱な死臭と、まとわりつくような花の甘い香り。

「死臭と花の匂いがすげえな。匂いを辿ってチャリオットの所まで

行こうと思っただけど、

これじゃ鼻がバカになっただけで分からなくなっちまいそうだ」  
『なるほど。ちなみに何か気配は感じますか？』

「いない、と」

言いかけて止まる。

臭気に顔をしかめながら口元を隠す仕草。

神経を研ぎ澄まそうとしているかのように目を閉じた。

声は消え失せ、静寂が漂う。

「……いや、いるな」

目を開くと素早く視線を左右に動かした。

「遠巻きに見てる奴等を除いて、ずーっと俺の事を見張ってる野郎  
がいやがる」

『姿は見えないんですね？』

「ああ。しかも、俺の気のせいじゃなければ一度会ってるはずだ」  
思い出すのは死臭と読経の声。

チャリオットの葬儀での背後からの射抜くような視線に酷似して  
いた。

「このいやらしい視線は覚えがある……なあ、『ナナシ』さんよ？」  
何処かへ向かって声を投げるが反応はない。

真雪は苦笑すると一歩踏み出した。

それにあわせて小さな炎が、その身をくねらせる。  
床に光の影が舞った。

「わりイけど、お前に構ってる暇はねえんだよ」

靴音が幾重にも響く。

「とりあえず進むわ」

『了解しました。お気をつけて』

不気味な静寂で耳鳴りすら覚える。

こんなにも音のない空間が存在するのだろうか。

歩いてても同じ景色が続く、この廊下は無限に続いているのではない

かと疑いたくなる。

真雪は息を殺し、どこかにあるであろう階段を目指した。数十分前に見た校内地図では昇降口の反対側に階段があるはずだが、けれど、弧を描く廊下は終わりを告げようとしなない。

「なあ」

不意に、真雪が足を止めた。

「一つだと思われた靴音は二つであつたらしい。」

忍び足で自分の後方を歩く足音もまた、彼と共に静止する。

「何のつもりだよ。さっきからコソコソ後つけやがって。」

今氣イ立つてるから、あんまりしつけーと殺すぞ?」

視線だけを後方へと投げる。

目を細めるように睨むが、そこに広がるのは閑散とした景色。

けれど、確信はあつた。

見えなくても絶対に何者かが潜んでいると。

「帰れ。ついて来たって面白いモンなんざ何にもねえよ」

感じる気配は一つ。

おそらく斜め後ろにある教室のドアの陰に隠れているのだろう

真雪は

警戒の中で心中、呟いた。

校舎内を漂う死臭の中で微かに別の匂いを感じる。

今までスラックスのポケットに突っ込んでいた右手を出した。

「それとも何だ? 俺の邪魔しようとしてる?」

注意を周囲に張り巡らせ、右手に精神を集中した。

殺気は感じない。

けれど相手がどういふつもりか分からない以上、無視して進むわけにもいかず。

だからと言って、こちらから確かめるような真似をするのは危険すぎる。

「そう警戒なされますな」

笑みを含んだ声が聞こえた。

真雪の眉間に皺が深く刻まれる。

目を凝らす、この位置からは見える物は何もない。

距離にして後方数メートル。

男にも女にも聞こえるアルトの声音からは、相手が何者か知る事は出来なかった。

「道行の邪魔をしました事、お詫び申し上げます。どうぞ私に構わず先をお急ぎくださいませ」

「誰だ、お前」

「名乗る名を持たぬ者でございます」

窓から差し込む光がまるで銀色の帯のように伸びる。止まる景色。

怒気を隠そうとするが、尋ねる声にはそれは漂う。

まるで真雪の様子を楽しんでいるかのように声は笑いをこらえていた。

「もう一度聞くぞ。俺の後をついて回って何のつもりだよ？」

「この城に人がいるのは珍しく、興味がございます」

「……一度会ってるよな。前もこうやってジロジロ見てただろ」

「さあて。人違いでは？」

些細な動作にもロウソクの火が反応し、揺れる。

いつでも相手の動きに反応できるように、足の位置を少しづつ動かすが。

「聞こえませんでしたか、『私に構いますな』と」

どうやら相手からは見えているらしく、わずかに強い調子の言葉が投げられた。

真雪は唇を噛んだままで微動だにしない。

ただ、右手だけはスキルが詠唱できる状態で。

「あんな、お前……」

「よろしいのです？」

声を遮断する言葉。

意味が分からずに口をつぐんだ。

顔も見えないこの状態で相手の動きや感情を読むことは出来ない。

唯一の手がかりは声。

だが、その声でさえ笑みを浮かべて隠すように。

「こんな所で油を売っていては貴方様の姫君に危険が及ぶやもしれませぬぞ？」

「な……っ！」

「死人に食われ、彼岸にさらわれ……かなしゅうございますなあ」

愕然とした真雪は目を見開いたまま、口を数度動かした。

金縛りにあったように動かない身体。

口を動かしても言葉は発せられず。

自分の内側で何かが沸き立つように、何かが暴れ狂う。

「てめえ、どういう意味だ!!」

『レイヴン、どうしました？ レイヴン!？』

開いた教室への扉を振り返り、怒鳴った。

インカムの向こうで名を呼ぶノクティルカの声は耳には届かない。

真雪が声の方向へと駆けようとした瞬間、見えた。

白いベール　まるで天使のような。

「お急ぎ下さいませ、エニグマ殿。彼岸は思った以上に足がはようございます」

ベールがひるがえり、黒い残像の断片が幻のように写る。

一瞬の事だった。

真雪がきびすを返し、まるですがるようにドアを掴んだ時には声の主の姿はどこにもなく。

目の前に広がるのはがらんどこの部屋。

今までの会話はまるで夢であったのかと錯覚すら覚える。

たった数秒のうちに姿を消した何者か。

まるで自分をせせら笑うような反応、何もかも知り尽くしたような口調。

『大丈夫ですか!?!』

真雪は何もない部屋を睨んだままで壁を殴った。

噛み切りそうなほど唇を強く噛み、怒りで荒くなった呼吸を整えようとすする。

幻ではない。

声の主はここにいて、確かに自分を見ていた。

そして相手は自分の事を知っている。

いや、それだけではない。

美冬の事も、何故自分がここにいるのかも。

真雪は心の中を整理しようとするが思考は苛立ちにかき乱される。

考えれば考えるほど平静は失われ、焦りばかりが生まれた。

自分がどこにいるのかも忘れそうなほどに。

『レイヴン!』

ノクティルカの何度目かの怒鳴り声で我に返る。

「……は」

肩で息をしながら、ドアに向けた手を額に当てた。

指の隙間から見える景色は死んだように眠る部屋。

再び、言葉を忘れそうな沈黙が漂う。

『大丈夫ですか?』

「ん、ああ」

『どうしました? 何があつたんですか?』

その問いに真雪はもたれかかった身体を起こすと深く息をついた。周囲を見渡して髪をかき上げる。

自分を囲むのは闇と、重く立ち込める嗅ぎなれた死の匂い。

「俺達の他に誰がいる」

『何ですって?』



「姿は見えない。知らねえ声で、ニヤニヤしながらムカつく事だけ  
言って消えやがった」

真雪の瞳に怒気がはらむ

「ヤツは俺を知ってる。俺の事だけじゃねえ、美冬の事も」

『……まさか』

「ああ。チャリオットの関係者だろう、おそろく」

ため息混じりの声。

俯き加減で乱暴に頭を掻くと、手袋をきつく嵌める仕草で止まった。

「どっちにしる時間はねえ。急ぐぞ」

『了解です』

「美冬が待つてる」

『ええ』

身を翻し、足早に歩く。

進むたびに香りは一層強くなり頭痛を誘った。

いつもなら夢心地にさせるような花の芳香が今日ばかりはまるで毒  
のように。

伏せた目が持ち上がり、前を見据える。

「俺の相棒に手エ出したらどうなるか分かってんだろつな」

呟く声に宿る殺気。

遠くへ消えていく靴音は、まるで時を刻む秒針のようにフロア全体  
に響いていた。

耳鳴りが脳裏で響き渡る。

何かの音を聞いた気がして振り返るが、そこにあるのは静寂。動いているのは自分と床に落ちるロウソクの光だけだった。

『レイヴン』

数分歩いた所でインカムが名を呼ぶ。

ノクティルカの声は何かを考えているかのようになり、どこか上の空に聞こえた。

『先ほど言っていた姿が見えない誰かについてですが、彼はどんな人物で？』

真雪はその問いに、注意深く周囲を見渡していた視線を止める。

数秒の間。

「彼つつーか、ヤツが男だって決まった訳じゃねえけどな」

『それは性別すら分からないという事ですか？』

「ああ。後ろに隠れてたから姿も見えてねえし、声だって男か女かハッキリしねえ。」

聞き覚えのある声じゃなかったけど」

『手がかりなし、ですね』

自分の足音が幾重にも響き、遠くへ吸い込まれた。

ゆっくりとした足取りで廊下を歩くが、いまだ階段には辿り着いていない。

現在地を知ろうと、真雪の目が教室のドアに付けられたクラスの表示に向けられる。

「美冬が攫われた事と俺がエニグマだって事を知ってるってだけで充分じゃねえか。」

それだけで随分と絞られるだろ」

『……エニグマだと言ってたんですか？』

声音の色が変わった。

過敏すぎる反応、心なしか言葉に棘のようなものを感じる。

「『お急ぎ下さいませ、エニグマ殿。彼岸は思った以上に足がよろこびます』とか

ほざいてたな。まるで全部見えているような言い草だった、気分ワリイ」

『なるほど、確かにそれはチャリオットの関係者という線が濃厚ですな』

「ああ。まあ、ここにいるって時点で……」

前触れもなく真雪が口をつぐんだ。

それまで等間隔で聞こえていた足音も止まり、周囲から一切音が消える。

息を殺した。

『レイヴン？』

呼びかけに答える余裕はない。

真雪は視線をせわしなく動かして状況を把握しようとする。

先ほど聞こえた些細な物音は気のせいではなかったらしい。

自分以外が発した音が聞こえた。

それは何者かが近くに居ることを示している。

『レイヴン、どうしました？』

警戒感を滲ませたノクティルカに沈黙を促す、言葉にならない声を発した。

またヤツか？ それとも別の？

真雪は渴いた口の中で唾を飲み込むといぶかしげに片目を細める。確かに感じる人の気配。

向こうも自分がいる事を察知して様子を窺っているのだろうか。

何も音はせず、探り合う空気だけが漂っていた。

目の前はカーブしていて先が見えない。

壁に背を付けて視線だけを音の発生源へと向ける。  
耳につく鼓動。

真雪が足を滑らせて少しずつ移動していく。  
まるで間合いを詰めるように。

向こうに人がいるのは明らかだ。  
けれど、それが誰かまでは分からない。

神経を研ぎ澄ますが感じるのは

空気が揺れた。

長く続くと思われた膠着状態が動き出す。

見えたのは黒、残像、銀色の鋭い光。

真雪は唇を動かし、淡い光を放つ指先を気配へと向けた。

銀色が近づくのが早い。

どうやら相手は武器を持っているようだ。

赤紫色の瞳が敵を視認する。

それと同時にスキルを撃つつもりだったが。

そこに居たのは。

「……………手が滑るところだったよ」

投げナイフを指の間に数本挟み、切っ先を真雪へ向けたダンデライ  
オンだった。

「何だ、親父か」

「お互い幸運に感謝しなければね。タイミングが悪ければどうなっ  
ていたか」

鋭い眼光がすぐに場違いなほど穏やかな笑顔に変わる。

それを見た真雪は伸ばした腕を引っ込めると、脱力したようにため  
息をついた。

つられたように浮かぶ笑み。

互いが互いの首元を狙い、腕を伸ばす姿勢が解かれる。

『どうしました？』

「ああ、何か気配があると思ったら親父だったわ。うっかり撃ち殺す所だった」

『それは惜しかったですね』

「この状況で洒落にならない冗談はやめてくれないか」

ダンデライオンがナイフを持っていない右手で髪に手をやり、苦く笑う。

地面に落とした視線は真雪に向けられ。

「無事なようだね、レイヴン」

「……無事っつーか、誰もいなくて不気味なくらいだぜ？」

こういう所ならイレギュラーの巣窟になってるのが普通だろ」

「うん。確かにここは異常だ」

笑顔が消え、めぐらせる視線。

死んだ空間に窓から溢れる月の光が降り注いでいた。

宙を舞う埃がそれを受けて輝く。

「イレギュラーが全くないだけでもおかしいのに、ここにはロウソクが灯っている。

明らかに人為的な空間だよ」

「ああ」

「僕らが来るのを予感した誰かが用意をしたようにね。さながら、ここは舞台で」

死臭と花の香りが混じり合う中で紡がれる言葉。

ダンデライオンの表情はいつもと変わらなかったが、纏う空気は殺伐としていた。

常に周囲に気を配っているように。

「僕らは役者なんだ、おそらく」

「誰かの手の上って感じがしてム力つくな。全部脚本どおりっつーかさ」

「確かに気分は良くないね。けれど今はラプターの救出を優先しな

ければ。

それが例え何者かの筋書き通りだとしても」

「分かってるよ、そんなの」

唇を噛み、顔をしかめる。

軽く頷く動作。

「さて、先に進もうか。そこに階段があるから2階へ向かおう」

後方を一瞥したダンデライオンがその言葉を残してきびすを返した。

彼の顔の先には黒い大きな穴のような階段がある。

どこに繋がっているのかと恐怖感さえ覚えそうな。

靴音と共に背中が遠ざかりかけ、立ち止まった。

動かない真雪を不審に思ったのだろう。

振り返り、首をか上げた。

「どうかしたかい？」

「……今、何か言っただ？」

その顔に浮かぶのは怪訝。

真雪は片耳を抑えるポーズのまま眉間にしわを寄せる。

ダンデライオンは数回、大きく瞬くと周囲を見渡した。

「先に進もうかって」

「いや、その後だよ」

不審な視線同士がぶつかる。

お互いの言葉の意味を考える無言の時間だけが流れた。

違和感が広がっていく。

得体の知れない予感めいた物が周囲に立ち込め、膨らんだ。

不意に。

真雪が目を見開いた。

まるでダンデライオンの背後に何かを見たかのような。

振り返るが、そこに広がるのは闇。

気のせいだと笑う事も、その視線の理由を説明する事もない。

何かが見えている。

「……あ」

短く言葉を発するが、また押し黙った。

眼前の何かから逃れたいのか視界を手で覆う。

目を押さえる仕草。

「レイヴン？」

「な、んだ。これ」

真雪はうわ言のように疑問を口にするばかりで。

ダンデライオンの足音が彼に近づく。

肩を掴んでも反応はなかった。

真雪の視界に、まるでフラッシュのような黒い景色が広がる。

一瞬で消えるそれは錯覚かと思ったが。

どこかでそうでない事を知っていた。

息が上がり、視界がぼやける。

自分が見ているのは生氣のない校舎内の景色か、それとも闇か。

幻はどちらかさえも曖昧になる。

「レイヴン！」

『やはり、この姫君は殺した方がいい』

『彼女等は装置の一つ。部品が一つでも欠ければ機械は動きませぬぞ』

耳元で叫ぶ声と何かが重なった。

朦朧とする意識の中。

何かが切れた。

まとう空気が変わるのを感じ、ダンデライオンが眉を潜めた。インカム越しの声が何を言っているのか判別する事も出来ず、ただ目の前の死神を見つめる。

「……………」

俯き加減の顔から吐かれる乱れた呼吸。

肩が激しく上下しているのが見えた。

「レイヴン、意識を保て！ 呼吸を整えろ、飲まれるぞ！」

「あ、く……………」

「返事をしろ！」

視界の端で真雪の手が震えている。

脳裏に浮かぶ『暴走』の二文字。

嫌な予感を覚え、耳元で呼んでも応答はない。

彼は必死で何かに耐えているように。

「……………」

「しつかりするんだ！」

前触れなく、沈黙が訪れた。

苦痛にもがく真雪の動きが止まり、俯いた顔から見える唇が動く。

呼びかけるのも忘れ、直感的に異変を察知しつつも動けずに。

痛いほどの寒気が全身を襲う。

発せられる空気は危うげな殺気をみなぎらせているように感じた。

「……………」

わずかに顔を持ち上げ、睨む金色の瞳。

「ヨイはどこだ」

2人を囲む景色は、先ほどと何一つ変わらないというのに全く違って見える。

敵意をむき出しにした声に問われるが、ダンデライオンに答える事は出来なかった。

「ヨイはどこだって聞いてんだよ」



繰り返される言葉に苛立ちが滲む。

まさか、と真雪の様子を見ながらダンデライオンは心の中で呟く。能力が不安定な彼は今までも幾度かスキルの暴走を起こしていた。力を制御する事が出来ず、我を忘れる。

そして、今になって一つの可能性に気付いた。

聞こえない声を聞き、別人のような雰囲気を漂わせる。

彼が口にした『ヨイ』という名前。

これは暴走ではない。

エニグマなのだと。

「答える」

けれど、目覚めさせていけない。

ダンデライオンは真雪を睨み返すと、彼の右手首を掴んで壁に半ばたたきつけるように押し付けた。

刺激させる事も、臨戦態勢である彼に

攻撃に似た真似をする事も危険であると承知している。

下手をすれば自分に危険が及ぶかもしれない。

これは賭けだ。

「殺すぞ！ 邪魔すんじゃ……」

「真雪！」

遮り、名を耳元で呼ぶ。

「起きろ！」

ダンデライオンを見据える真雪の瞳に正気は見えなかった。歯を食いしばり、今にも噛み付きそうな形相で。

「エニグマを呼ぶな！ 意識を保て！」

「はな……っ！ 殺すぞ、てめえ！」

目の前にいるのは真雪であって真雪ではない。

同じ顔だというのに全く別の人間のように思えた。

掴む手から逃れる為に、のたうつように暴れる姿。  
彼がスキルを放つのは時間の問題だろう。

「美冬を助けるのではないのか！ 起きろ、真雪！」

その声に動きが止まる。

正しくは一人の少女の名で。

全てが凍りついた。

音も、目に映る全ての物が。

「……………あ。お、やし……………」

「レイヴン」

「何……………俺、もしかして」

「ああ、スキルに飲まれかけていたぞ。大丈夫かい？」

息切れの中、真雪は壁に押し付けられたままでダンデライオンの顔を見つめる。

呆気にとられた表情。

数秒の間の後、ようやく理解したのか深く息をついて目を伏せた。

青白い光に全てが塗り替えられ、ここは別世界。

金色に見えた真雪の瞳は赤紫色に戻り、そこには微かな疲労と憂いが宿る。

「こんな時に暴走とか勘弁してくれよ。悪い、怪我とかねえか？」

「僕は大丈夫だけれど……………」

ダンデライオンは真雪から手を離すと言葉を飲み込んだ。

今、エニグマの事を言わない方がいいだろう。

全てを納得するには時間が足りない上に、やるべき事は他にある。

それ以前に真雪を刺激するのは何よりも避けた方がいい。

何の拍子にまた同じように『彼』が現れるか分からないからだ。

まるで時限爆弾のようではないか。

「けど？」

「いや、何でもないよ。」

「どうしようか、先に進んでもいいけれど少し休んだ方がいいかな？」

「行こう。今は少しでも早くあいつの所に行きたい」

髪をかき上げながら壁から背中をはがす。

遠くで聞こえる咆哮に似た音は幻聴だろうか、それとも。

スラックスのポケットに手をつ突っ込んだ真雪の後姿が遠ざかっていくのを見ながら

ダンデライオンは、その場を動けずに。

全身を駆け巡る不安。

このまま何事もなく救出する事が出来れば。

けれど、そんな事は不可能だというのは漠然と分かっている事だった。

「レイヴン」

今にもかき消されそうな声で呟くように呼びかける。

数メートル先で振り返る気配を感じた。

外からの光に阻まれ、真雪がどんな顔をしているのかは見えなかった。

いつもは頼りないほど弱々しい月明かりが、今日は射抜くようにまばゆく。

「これから先、どんな事があっても冷静でいるよう心がけてくれ」

鼻腔をつく死臭が焦りを生む。

「君がラプターを助けなければならぬのだからね」

「なんだよ、急に」

戸惑ったように小さな笑いを含んだ声が投げられた。

真雪はダンデライオンの顔を見ると、笑みを顔から消す。

自分に向けられた視線の強さと、深刻さに。

「例え、そこにあるのが死であっても」

「何言って……」

「13番目の死神が微笑んだとしても、だ」

再び時は止まり、世界が凍りついた。

見つめ合う2人。

今は先を急がなければいけない。

そうは思っていて、ダンデライオンの言葉が呪縛となり  
いつまでも真雪をその場にとどめていた。

床に並べられたロウソクが微笑むようにたゆたう。  
だが延々と伸びるその姿は、どこか葬列のように。

### 15 - 3 Memento mori

インカム越しのやり取りを聞きながら、ドアの近くにたたずむウォークライは空を仰いでいた。

聞こえるのは真雪とダンデライオンの緊迫したやり取り。

自分の背の遠くで行われているであろう光景は想像できない。

あるのは胸騒ぎと、

まるで深淵から何かが這い出してくるかのような不気味な感覚。

おそらく、この予感はあるがち外れていないのだろう。

こんな時ばかり当たる自分の勘を恨みたくなった。

「目覚めつつある、か」

インカムに届かないほど小さな声で呟く。

それが何か、口に来る勇氣などない。

自分が口になれば現実になってしまう可能性があるからだ。

例え無駄な足掻きだと知っていても、口に出す事で呼びたくはなかった。

エニグマを。

それは長らく都市伝説と化していた稀有な特殊能力。

エニグマ、九蓮宝燈、13番目の死神等その呼び名は数多くあれど、見た者はいない。

死を撒き散らす『ヨイ』と、生を歌う『シノノメ』

この2人の能力を合わせて、そう称される。

2人は一つであり表裏一体。

謎が多いながら、何らかの野心を抱く者にとって強力な武器となる為

にそれを利用したいとたくらむ者は多い。

自分を囲むのは月に支配された景色。

遠くで聞こえる葉ずれの音でさえも気にし始めれば全てが不穏な動きに感じる。

ほとんどの者にとっては、いつもと変わらぬ平穏な夜だろう。けれど闇を知る者にとっては別世界に思えるほど異常だ、今日は。

ウォークライの伏せられた黒い瞳が持ち上がる。

音を忘れたかのような静寂の中で違和感を感じた。

姿を確認することは出来ないが男女のやり取りが聞こえる。

耳を澄ますと、それは自分の方へと近づいているらしい。

「お勤めご苦労さんだの。なんじゃ、お主は中に入らんのか？」

口調とは裏腹の若い女の声が投げられた。

靴音と共に姿を現したのは、2つのシルエツト。

まるで地面に落ちた影が立体になったかのような。

5月も半ばに差し掛かる時期だというのに、そろってフード付の黒いコートを着ている。

ウォークライに話しかけてきた女はパニエで膨らませた

フリルのついた少女趣味の服　いわゆる『ロリィタファッション』

で身を固めていた。

「ヴァンガード、無駄話をしている場合ではない」

「分かっておるわい。だが、こういう会話も必要じゃろう？」

ヴァンガードと呼ばれる女は隣の男を見上げると口の端を大きく上げて笑いかける。

一方、苛立った様子の男は肩に武器を乗せたまま深くため息をついた。

フードの下から見える鋭い眼光、手にした死神のような大きな鎌、隠そうともしない血の匂い。

ウォークライの目が2人を観察する。

この者達はエクスキューショナー。

それも、ノクティルカが名を挙げた人物だ。

「アブソルートとヴァンガード、か」

「おお、ワシ等の事を知っておるのか！ なかなか有名人なんじゃのう」

「ヴァンガード」

嬉々とした声を咎めるように名が呼ばれる。

瞳だけを向けて隣を睨んだアブソルートの視線が、正面に注がれた。空気が張り詰めていく。

「そこをどいてもらおう」

「……断る」

背にあるのは体温を奪っていく冷たい鉄の扉。

以前は子供達の声で賑やかだっただろうこの場所も、今は面影もな

ただ廃れていくのを待っているだけののように静寂の中で佇む。

動くものはなく、音を出すのは自分達のみ。

睨み合うように互いの様子を窺っていた。

「中では俺の友人達が肝だめし中だな。部外者は入れるなど言われている。

通りたければ……」

「ふざけた事を言う。素直に仲間を救出中だと言ったらどうだ」

動きを止めたのはウォークライだった。

いぶかしげに片眉を潜めると、身を乗り出すようにアブソルートを覗き込む。

「どこでそれを？」

「我等は影。この世界で影の及ばぬ所などない」

「何故知っているか聞いているのだ」

「うぬに話す必要はないだろう」

等間隔で鎌の柄で肩を打つ仕草。

視線がそらされ、再び向けられた。

苛立ちを覚えているのはアブソルートだけではない。

ウォークライもまた同様だった。

エクスキューションナーがこの場所に来たのは、サーペントが情報を流したから。

そうだとしても何故、彼等はラプターがこの場所に居て更にさらわれた事を知っているのだろうか。

この事実を知っているのは限られた人間のみであり、此岸に広がる程の時間があつたわけではない。

一体どこから漏れたのか？

ウォークライは考えてみるものの、明確な可能性を見出す事は出来なかった。

「うぬ等の仲間の生死など知った事ではない。我等は我等の仕事を片付けるまで。」

……そこを退け、死神」

「断ると言った」

「ならばこの場で切り捨てるぞ」

「勝手にしろ。ただし出来るなら、の話だが」

ウォークライがドアから身体を離して一歩踏み出す。

黒い瞳がアブソルートを覗き込み、笑う。

一触即発の危うげな空気。

小さな動作でさえ、相手の攻撃を誘ってしまう気がした。

アブソルトの手が武器を持ち直すのが見える。

「アブソルト」

空気を変えたのは、ため息だった。

人形のような顔立ちが呆れたような色を顔に滲ませる。

「敵を間違つてはならんぞ。ワシ等の相手はこの若者ではないじゃろつて」

「邪魔者は排除するべきだ」

「そうかもしれないがのう……ほれ、その死神もじゃ。ケンカをし



ている場合ではないじゃろ？」

ウォークライの瞳はアブソルートからそらされる事なく、その言葉を聞いていた。

微動だにせず、目で射殺そうとするかのように。

ヴァンガードは2人の様子を眺めると視線を宙にさまよわせて肩をすくめた。

腕組みをする仕草。

「わしらの敵はチャリオット。お主等と同じモノを狙っておる」

その声と呼応するかのように風が騒ぎ立てる。

視界の端、スローモーションで木々が踊るのが見えた。

硬く閉ざされたドアの前でたたずむ3人もまた、景色と同じように凍る。

「ヤツは此岸全土に指名手配中。報奨金付じゃから賞金稼ぎ共が躍りになってるはずじゃ」

「部外者に情報を漏らす必要はない！」

「これしきの情報なぞすぐに分かる事。それに、こやつは実力行使では動かんタイプじゃ」

漏れる舌打ちを一瞥し、苦笑した。

今までウォークライに向けられていた殺気は

仲間であるはずのヴァンガードにも向けられている。

だが、それを感じてないかのようにまっすぐ前を見つめる瞳。

「わし等にも分からない事が多すぎての。ここを訪れたのはそれを探る為でもある」

「……と、いうと？」

「1、処刑許可が出ているにもかかわらず、ワシ等のボスは『チャリオットをこの場では殺すな』と言った」

相手の反応を楽しむかのように微笑む。

「2、チャリオットが動いている理由」

カールされた髪が月影に照らされ、自ら光を放つように。

「3、ワシ等でも把握しておらん輩が動いておる」

どこか苛立ちを含んだ声で不機嫌そうに言う。

睨むように見つめてもヴァンガードは視線を逸らそうとはせず、動じなかった。

「これで敵ではない事が分かったかのう？ ……そこをどいてくれんか、死神」

考えるような無言の間。

「お主等にとつても損はないと思うんじやが」

畳み掛けるような言葉に、ウォークライはため息をつく。

二つの視線が注がれる中で横に一歩ずれ、ドアの前から退いた。アブソルートとヴァンガードが顔を見合わせる。

「感謝するぞ、死神」

靴音が再び周囲に響き、それはウォークライとすれ違った。

無関心を装いながら横目で眺める。

「……エクスキューショナー」

「なんじや」

呼び止められ、背中を向けたまま答える影。

背中合わせのまま交わされる会話の端々に緊張感が宿っていた。

「もう一度聞く。何故、俺達が仲間を助けようとしている事を知っている？」

訪れた沈黙は何を意味しているのか。

勘繰りたくなる。

「知っているはずじや。お主が思っている『まさか』じやよ」

その言葉を残して、背後でドアの閉まる重い音が大きく響いた。

笑いながら発せられた言葉。

エクスキューショナーが消えてもウォークライはドアを凝視し続け。

「こちらウォークライ。エクスキューショナーが入城した」

インカムを指で押さえ、告げる。

再び、正面に顔を向けて佇む一つのシルエット。

自分の足元から伸びる影を見つめながら口の中で投げられた言葉を繰り返した。

「……サーペント」

『なんだい？』

「調べて欲しい事がある」

何度目だろう、こんな風に眠ってしまったのは。

美冬は眠気に抗おうとしながら意識が遠のくのを感じた。

そして、思い出す。

『まだ眠っていて下され、姫君。起きる時間ではありませぬぞ』

この場所で眠りから覚める度に微笑む声が降りてきた事を。

ぼやける視界の中で見えたのは人の気配と、頬に微かに触れる白いベール。

目をこじ開け、何者であるかを確認しようとする度に視界を遮るように手が置かれる。

誰だと問う声は言葉になっていなかったのかもしれない。

もう一度言おうと口を開くが強烈な眠気に襲われ、そうする事も叶わず。

眠りに身をゆだねる心地よさとは裏腹に意識が警告する。

眠ったら死ぬ。

ここで目を閉じたら駄目だ。

目を開けなければ。

目を

「姫君」

その狂気含みの笑う声に我に返った。自分がどこにいるか、どんな状況であるかを瞬時に思い出す。夢か現実か分からない出来事を思い出している場合でない。だが。

美冬が目を開けても、広がっていたのは闇だった。

「な……っ！」

目元を感じる布の感触に、目隠しをされている事に気がつく。また自分は眠っていたのだ。そして、その間に。

「こんな真似をするのは趣味ではないのだがな」

「あなた、何考えてんの？」

「言った所で理解できないだろう」

美冬が自由の利かない身体を動かそうと身をよじらせるたびに足元から椅子を引く、耳障りな音が聞こえる。

手足に食い込むようにきつく巻かれた何か。

椅子に座らされ、手足を縛られている。

自分の状態に気付いて強く唇を噛んだ。

「あたしをどうするつもりよ」

「どうして欲しい？」

チャリオットの声が間近に聞こえる。

おそらく自分の前に立ち、顔を覗き込んでいるのだろう。

視界が遮られている分、他の感覚が鮮明になっていくのを感じた。普段は聞こえないはずの音や、些細な気配の動き。

それらが自分に嫌と言うほど恐怖感を与えた。

「騎士殿が城に入ってきたぞ。ここに来るのも時間の問題だろう」  
靴音が遠ざかっていく。

美冬は手足を動かしながら、それを聞いていた。

せめて手が交差された状態で縛られていたのなら、この枷から逃れる方法があるのに。

そんな美冬の考えを見透かしたように、椅子の足にそれぞれ足首を固定され、手も触れ合う事が出来ない位置で。

動こうとする度に、軋むような痛みを感じる。

無駄な抵抗をするなという事が。

逃れる術が見つからなくても、抵抗せずにはいられなかった。

「離して！ 離せ！」

「その状態でも威勢がいいとは感心だ」

「ふざけんな、何のつもりよ！」

恐怖心を隠すように怒鳴る。

その声に重なる椅子が移動する音。

美冬の声だけが部屋にこだまして廊下まで漏れていた。

無意識に呼吸が荒くなり、肩で息をする。

まるで呼吸の仕方さえ忘れてしまったかのように。

「目覚めよ、エニグマ。共鳴し、一つとなれ」

「何言つて……」

目隠しの上から手が置かれ、そして空いた手は肩に。

美冬の顔の横にチャリオットがいるらしい。

肌に冷気が触れる。

「思考を、感覚を、景色を共有するのだ。見えぬものを見る、聞こえぬ声を聞け」

「はな、してっ！ 離して！ 離して！」

「お前は半身だ。一人では意味を成さず、もう一人の自分がいる事で完成する」

「触らないで！ 触るなっつってんだろ！」

耳朶に触れた息に恐怖を感じる。

狂ったように怒鳴り、悶えるように暴れた。けれどチャリオットは美冬の様子を見て笑っているらしい。動じる様子もなく、いまだ触れたままで。身体を屈め、同じ目線でどこかを見ている様が手に取るように分かった。

「美冬」

名を呼ばれ、動きが止まる。

今までが嘘のように静まる周囲の空気。

チャリオットの声に、真雪の面影を見た。

彼が呼ぶ声に似た響きに、美冬は息を上げながらも大人しくなる。

「いい子だ」

笑う声。

チャリオットは美冬の背後に立ち、肩に触れたまま顔を横に並べていた。

視線が美冬を一瞥し、それから何も無い目の前の壁を見つめる。

「答える。何が見える？」

上下する美冬の肩。

左手の親指が小指に嵌められた指輪に触れた。

「……ロウソク、の火。廊下と、月」

「何を感じる？」

「怖い。焦ってる……早く、しなくちゃって」

美冬の唇が呆然と言葉を紡ぐ。

チャリオットが俯き加減に口を歪めて笑った。

その顔はどこか満足そうに、けれど目は不敵な笑みを宿し。髪を撫でる死人の手。

冷たい風は、どこから入ってきたというのだろう。

窓はどこも閉ざされ、隙間などないはずなのに。

「真雪が」

そう呟く美冬の唇を触れるのは、チャリオットの氷のような指。その冷たさに美冬は現実に戻されたように、大きく震えた。まるで幻が解けたように。

「は、なして！」

手が頬に触れ、耳へと移動していく。

「怖いのか」

「こ、怖くなんてない」

「震えているぞ？」

その言葉どおり、美冬の手は震えていた。

それを隠すように作られる拳。

歯を食いしばるが、小刻みに震えているのが分かる。

「……怖くなんて！」

「では、試してみようか」

ネクタイがシャツを上を滑り、地面に落ちる音さえも響いた。

青白い光に満たされる室内。

「どうする？」

シャツのボタンが外され、首元が自由になるのを感じる。

「お前は俺と二人きりだ」

全身を襲う寒気は、不安となり内側でのた打ち回った。

「手足の自由はなく、視界は遮られている」

声が鼓動で聞こえず。

「助けも来ない」

我を忘れたように暴れる美冬をチャリオットの手が抑える。

「そして」

胸を抱えるように置かれていた手が下へ移動していく。

呼吸が乱れ、怯え、引きつる声が短く漏れる。

寒気が手と連動し、動いていた。

「……お前は女で、俺は男だ」

「ひあ、やだあああ！ やだ！ やあああっ！！」

プリーツスカートをめくるように、膝の辺りから太ももを滑って上

昇る感触。

耳に触れる声に美冬が椅子ごと逃れようと身体を揺さぶる。

自分の声だけがむなしく響く事に更に不安が加速した。

我を忘れ、こみ上げる嫌悪に叫ぶ声。

遮られた視界の中で一瞬だけ見える景色も。

痺れる死臭、プルメリアの香りも。

全てが消え失せ、感じる事も出来ぬままに取り乱した。

「死人の精を注いだら」

チャリオットの声があざ笑う。

漏れる嗚咽、聞こえる乱れた靴音。

「やだ！ まゆ……… やっ！ 離して！ 離して！ はな………っ！」

肌に伝わる冷たさは死、そのもの。

「どんな子をなすのだろうな？ 姫君よ」

頬に触れる唇が紡ぐと同時に。

轟く。

血を吐くような叫び声。

室内だけではなくフロアを、いや校舎内の空気全てを震わせるように。

それは名だった。

嗚咽の中で吐き出された名は。

「つああああ！」

離れた位置にいるはずの真雪の耳を突き破るかのように。

苦痛に歪む顔。

両耳を強く、手で抑えたままで床に膝をついて倒れこむ。



「く、あ……っ」

「レイヴン！ レイヴン！？」

前触れなく倒れた背後の気配にダンテライオンが駆け寄り、掴む。

『どうしました！？』

「レイヴンが！ ……レイヴン！」

両耳から聞こえる怒鳴り声に近い呼びかけは耳に届いてなかった。

ただ胸元を掻きむしるように、シャツを強く握り。

硬く目を閉じる。

深く刻まれる眉間のしわと、わななく唇。

震える指先を隠すように白くなるまで強く握り締める。

揺さぶっても反応はない。

「レイヴン！」

荒い呼吸だけが答える。

ダンテライオンが真雪の身体を起こすと。

彼の目は潤んでいた。

苦しげに細められた瞳は違う場所を見つめているように、焦点は合  
わず。

意識を引き戻そうと体を揺さぶっても、力なく動くだけで。

「……泣くなよ」

漏れる声に動きが止まった。

「俺、お前が泣くのが一番嫌いなのに……」

俯く顔が絞り出すように言い、唇を噛む。

「レイヴン！」

この不穏な予感に飲み込まれまいと再度、強く名を呼ぶ。

背にのしかかるように不安が身を襲うのを感じた。

脳裏に浮かぶ一つの可能性。

ダンデライオンは、それを振り払うように。  
「しっかりとしろ！」

目の前の死神は、違う空気をまとっていた。  
不安定で、今にもバランスを崩しそうな。

「親父」

真雪が不安げにダンデライオンを見つめた。

訴えるような強い眼差しとは裏腹に、唇が何度も声を発せられない  
まま動く。

「美冬は、ここにはいない」

「……何故分かる？」

言葉を選んでいるかのように視線が虚空をさまよった。

再び助けを求める視線が向けられ。

「呼んでんだよ」

「え？」

「呼んでるんだ、美冬が。あいつ泣いてて、俺の名前を呼んでる。  
早く、早く行ってやらなきゃ……怖がってた。なあ、親父。急い  
う。美冬が……」

「落ち着け、レイヴン！」

うわ言のように同じ事を繰り返す真雪の肩を強く掴む。

睨みつける深い青の瞳。

「聞こえたのか、声が」

頷く気配に、ダンデライオンが息を飲んだ。

自分には声はおるか他の音さえも聞こえなかった。

だが、真雪には聞こえたと言う事実。

それは エニグマの共鳴。

闇の中から這い出すような悪寒を隠し。

「俺の中で美冬が叫んでる。ここにいるって」

天井を仰ぐ真雪。

まるで半覚醒であるかのように立ち上がる。

月夜に照らされる輪郭。

その横顔は遠くを、けれど一点を見つめていた。  
切れた息を飲み込む仕草。

靴音が一つ、大きく聞こえる。

「……………助けてって」

足元から力が抜けそうになるのを必死で堪えた。  
呼吸が乱れる。

内側で寒気が駆け巡る半面、怒りで体温が上がるのを感じた。  
震えるほど強く握り締めた拳。

自分に向けられた楽しいげな視線を今すぐ消す事が出来たら。  
真雪は立ちつくしていた。

児童用らしい椅子に、片膝を立てて座るチャリオットと真雪の狭間。  
目を閉じ、横たわる美冬。

「遅かったな、死神」  
瞬きも出来ずに目の前の光景を呆然と見つめるしか出来なかった。  
むなしく動くだけの唇。  
思考を拒否し、全てが消される脳裏で今の状況を理解しようとする。  
その部屋にあるのは。

部屋中に敷き詰められた白い花。  
大きな窓から差し込む月光。  
静かすぎて何かを聞いた錯覚さえ覚える沈黙。

「最後までお前の名を呼んでいたぞ」  
床と靴底が張り付いたように動かない。  
真雪はチャリオットと向き合い、美冬に視線を貼り付けたままで。  
光に照らし出された横顔に感情は浮かばず。

「レイヴン、大丈夫だ」  
隣に並ぶダンデライオンがチャリオットを見据えたままで呟いた。  
真雪は、どこか上の空の様子で頷く。

「彼女は眠っているだけだよ」

「……ああ」

その言葉は本当だろうか。  
横たわる美冬は確かに眠っているだけに見えたが、そうではないようにも感じた。

この場所から呼吸しているかどうかを確認する事は出来ない。  
いつもの黒い上下のスーツが、彼女を囲むプルメリアの中で浮び上がって見える。

「ゲームオーバー、だな」

膝に手をかけ、こみ上げる笑いを抑えきれないチャリオットが目を細めて言った。

「実に残念だ。お前達には是非とも勝つて欲しかったのだが」  
まるで全てが固唾を呑んで見守っているかのように。

真雪にはチャリオットの言葉が聞こえていなかった。  
唇を噛んだまま視線を落とす。

叫びたい衝動に耐え、固まる足を無理矢理動かした。  
靴音一つ。

何かが落ちる音にも似たそれが大きく室内に響く。  
早く確かめたい気持ちと、恐れがせめぎ合った。  
拒絶するように重い身体。

落ち着こうと深呼吸をしても息苦しい。

ほんの数メートルの距離だと言うのに数秒をかけて近付いた。

「美冬」

真雪が彼女のかたわらにしゃがみこんで、かすれた声で小さく呼びかける。

さまようように伸ばされた手が空中で制止した。  
躊躇っているのか、眠る顔の上にかざされたままで。  
眉間にしわを深く刻む。

呼吸を確かめる指が唇の間近まで降りた。

真雪の表情が一瞬やわらぎ、ため息が漏れる。

それと共に頬に触れる手のひら。

「……親父、大丈夫。寝てるだけだ」

数分前に投げられた言葉を返す。

その声に宿るのは笑み。

「こちらダンデライオン。3階の一室にてラプターを発見、眠っている状態だ」

「美冬。おい、美冬？」

「部屋にはチャリオット、私、レイヴンの3名。彼女を保護次第……」

ダンデライオンの手が後ろに回され、次の瞬間には投げナイフを指に挟んでいた。

目を細め、視線が鋭く睨む。

「チャリオットを抹殺する」

その言葉に、チャリオットは黒板の前に座ったままで口の端をゆがめた。

無言で会話を交わしているかのような。

死臭とプルメリアの香りが嗅覚を麻痺させ、頭痛を誘う。

何も動かない世界の中で対峙した。

「彼女を保護次第、か。随分楽観的に物事を見ているようだな」

「何だと？」

鋭く反応するダンデライオン。

だが、その問いにチャリオットは答える事はなく笑うのみ。

言葉の意味を考える無言の時間だけが過ぎていく。

「……ゆき……？」

それを破ったのは弱々しい声だった。

弾かれたように視線が美冬に注がれる。

薄く開かれた目が覗き込む顔を視認し、力なく微笑んだ。

「大丈夫か？ もう少しだけ頑張ってくれ」

つられるようにして真雪が口元に笑みを浮かべる。

美冬は泣き顔に近い表情で笑っていた。

見逃しそうなほど小さな動作で顎を引いて頷く様子に手を握る。

頬に残る涙の跡と、疲労の滲む充血した瞳。

真雪は力が抜けるのを感じた。

安心するのはまだ早いと自分に何度も言い聞かせ、緊張を保とうとするが。

笑う美冬を見た途端にまるで溶けてしまいそうな錯覚さえ。

「……た」

美冬が真雪を見つめ何度も唇を動かすが、声にならずに。

床に這いつくばるようにして耳を美冬の顔に近づけた。

「また、会えた」

頷き、笑う。

他の全てが消えてしまったように。

「ノクティルカ、美冬は無事だ。意識が戻っ……」

インカムを指で押さえながら、言いかけた笑み混じりの言葉を。

飲み込むのは。

「……怒った、笛吹き男は」

声が重なった。

一つは天井を呆然と見つめる美冬から、

そしてもう一方は離れた位置より見つめるチャリオットから。

愕然とした。

今までの安堵が一瞬にして消え去る。

「美冬。おい、美冬?」

弾かれたようにチャリオットを一瞥した後、美冬の肩を掴んだ。けれど反応はない。

眠りにつく寸前のように生気が失われていく翡翠色の瞳。

戦慄を覚え、震える。

耳元で何かが叫んでいる気さえした。

「また、ハーメルンの……街に」

「美冬! ダメだ、美冬!」

「……戻って……」

「ふざけんな! 戻って来い!」

怒鳴る声が美冬のうわ言のような声を打ち消す。

まるで対岸へと飛び立つのを引きとめるかのように。

美冬の瞳が何かに気付いたように止まり、ゆっくりと顔を真雪へと向ける。

浮かぶのは満面の笑み。

今まで何度この表情を見ただろう。

けれど。

「何言っただよ、お前! 美冬!」

ただの童話の一説だ。

突然死とは関係ない。

夢を見ているだけだ。

自分に言い聞かせながら、真雪は心の中に広がる恐怖感を拭い去る事は出来なかった。

浮かぶ一つの可能性。

自分を笑いながら見ているであろう死人と突然死が繋がったという事実は

目の前の彼女に対する不安が全て壊した。

「……くると」

後頭部を支え、自分を起こそうとする真雪の腕に触れる。

目は取り乱す真雪をなだめるように微笑んでいた。



美冬の冷えた指先が頬に触れる。

そして唇に当てられ、目の下をぬぐった。

その瞬間に入り込んでくる、不気味なほど静かな感情。

食い入るようにつめめる事しか出来ず。

震える手は何かを知っていた。

「美冬！ おい！」

持ち上がっていた腕が、まるで人形のように脱力し垂れ下がった。

動く唇は言葉を紡がず。

瞼が閉じる。

「美冬！？」

自分の声ではないように感じた。

空白。

沈黙。

「……み、ふ……ゆ？」

手に伝わる重さが一気に増す。

問いかけには反応がない。

インカムや周囲から何かが聞こえた気がしたが、真雪の耳には届か

なかった。

色さえも失った世界で。

ただ、佇む。

離れた位置で見ていたダンデライオンの手が震えていた。

それは怒りか、それとも。

投げナイフを挟む拳が動く事はなく。

「……ラプターの意識が途絶えた」

絞り出すように発せられた声が部屋中に響き渡る。

口に出す事さえもためらう言葉。

この位置からでは詳しい状況を知る事は出来ない。

けれど、真雪の様子を見る限りでは。

「親父」

頬同士を触れ合わせるように、顔を重ねていた真雪が呟く。  
顔を上げる気配にダンデライオンが視線を向ける。

呆然としながらも、無感情で静かな声。

「ちよつと美冬、頼むわ」

彼女を抱えながら立ち上がる背中が見えた。

足の踏み場もないほど敷かれた花の上に2人の作る影が落ちる。

動いたびに鼻腔を刺す芳香と臭気。

今までの死臭とは何かが違うように感じた。

沈黙が全てを飲み込む。

「レイヴン」

「二人とも廊下出てて。俺、ちよつとアイツに話があるからさ」

単調な靴音と共に近付いてくる声。

俯いた顔から真雪の表情を伺い知る事はできない。

ただ、わずかに見えた口元は笑っていた。

「駄目だ。レイヴン、待て！」

その声音、表情、身体を包む殺伐とした雰囲気。

ダンデライオンは心の中がざわめくのを感じて、声を荒げた。

脳裏に浮かぶ予感。

「冷静になれ！ 落ち着くんだ、レイヴン！」

「無理言つなよ。この状態で落ち着けるか」

美冬をダンデライオンに預けると、肩を揺らして笑う声が言った。

持ち上がる顔。

流れる髪の向こうに見えた瞳の色は金。

「ていうか、もう限界だ」

髪をかき上げて、肩越しにチャリオットを睨みつける。

何かを言いかけたダンデライオンを一瞥し、ドアを指差す仕草。

「ヒトの女に手エ出した拳句にこんな真似してさ。タダで済むとか  
思ってるワケ？」

向き直った声に怒気がはらむ。

スラックスのポケットに右手を突っ込み、顔を伏せた。離れた位置で立ち上がったチャリオットに向けられる殺気の宿る瞳。

「1回死んでるんだ。もう1回くらい死んどけよ、オッサン」

首の前に横一直線のラインを描いた親指が地面を示した。

真雪を中心に微風が生じ、プルメリアの花が舞う。室内には二つのシルエット。

立ち込める死臭の中で、二つの死が対峙していた。

「……………エニグマが目覚め、シノノメが動いた」  
比良坂事務所。

静寂と張り詰めた空気が同居する中でノクティルカが呟いた。

目の前には付けたまま放置されたディスプレイ、手には校内地図。机の上に置かれた山のような吸殻入りの灰皿が彼の苛立ちそのままに。

インカム越しの沈黙から状況を察する事は出来ず、ただ不安ばかりが掻き立てられた。

「ダンデライオン、状況を教えて下さい」

殺風景な室内が、今日は余計に寂しく見える。

何もかも違って見える景色。

窓の外のいつもと同じネオンの色も今は目に入らず。

『現在、私はラプターと共に廊下へ移動。教室にはチャリオットとレイヴンがいる。』

この状態ではレイヴン本人にも危険が及ぶ可能性があるが……無闇に手は出せないな』

「ええ、下手に頭数を増やすと巻き添えを食らう危険があります」

『だからと言って彼を放っておくわけにもいかないが。何が起こるか分からないからね』

ダンデライオンの声音に、いつもの穏やかさはなかった。時折、声が遠ざかるのを感じる。

おそらく身体をねじって室内の様子を窺っているのだろう。

「レイヴンに話は通じませんか」

『そのようだね。今は頭に血が上って何も見えていない状態だ』

「でしたら、貴方もいつでも退避できるように準備をしておいて下さい。」

彼に全てを任せるのは危険ですが、今は静観する他に手段はありませんね」

『ああ、そうだな。だが……シノノメか』

独白が思考に飲まれたように黙りこくる。

ノクティルカは放り出されていた書類を手に取ると、眉間にしわを寄せたままで

視線を走らせた。

繰り返し読んだ、エニグマに関するレポート。

今まではどうエニグマの覚醒を食い止めるかを考えていた。

だが、今は。

「目覚めたのがシノノメで、まだ2人とも覚醒した訳ではないのが不幸中の幸いだったのかもしれない。問題は……」

唇を噛んで言葉を切った。

不安がよぎり、懸命に振り払おうとする。

「ラプターはどんな様子ですか」

指先が机を等間隔で叩いていた。

落ち着きのない動きは、ノクティルカの胸の内を表しているようで不意に訪れた空白の時間に嫌な可能性ばかりを考えてしまう。

『眠っているよ。だが、あまりにも静かで……すまない。要領を得ない答えで』

「呼吸はあるんですね？」

「ああ。白いベールは見えていないものの、彼女がどんな状況か分からないんだ。」

「万が一……」

「言うな。彼女は助かる」

ダンテライオンの言葉を遮るウォークライの声。

誰もがそのまま押し黙った。

まるで不安を殺し、祈るように。

ノクテイルカは煙草をくわえ、窓の外に視線を転じた。

胸騒ぎに顔を歪ませる。

「私の命などいくらでも差し上げましょう。ですから帰って来てください、ラプター」

呟く声。

「……いや、エニグマよ」

インカムの向こうで風の唸る声が聞こえる。

夜は明ける事を知らず、更に闇を色濃く漂わせていた。

15 - 5 13番目の死神

ドアの閉まる音を一瞥すると真雪は顎を上げ、チャリオットに笑いかける。

見下ろす金色の瞳。

大きく歪む口元は憑かれているようにも見えた。

足元の花を蹴飛ばす仕草に白い断片が楽しげに舞う。

「俺を殺すか、死神」

死臭も花の芳香も忘れた。

ここにあるのは殺気と張り詰めた空気。

チャリオットは壇上から降りると、数メートル隔てて真雪と向かい合う。

中央にある、フローリングの床が見える部分は美冬が横たわっていた跡だ。

そこを見るたびに不安や恐れが残っている気がして、怒りがこみ上げてくる。

「ああ」

首を傾げるように微笑んだ。

「殺せるのか？ お前に」

「殺せるよ」

「息をし、動き、人の形を成す者を殺せるか？」

感情を押し殺した問い。

チャリオットの手が背中へと伸びる。

おそらくそこには彼の武器があるのだろう。

視線を正面に向けたままで、わずかずつ悟られないよう手が動いていた。

「それが何？」

夜明けではないかと錯覚するくらいの明るさが部屋へと忍び込む。

夜はこんなに明るく、静かなものなのだろうか。

埃っぽい空気が肌に触れ、体感できないほどの微風に乗って揺れた。

「人とかそれ以外とか、そんなの関係ねえじゃん」

「……それがエニグマであるお前の答えか」

「うぜーな、お前。エニグマエニグマってうるせえんだよ」

真雪が睨むように目を細め、足元から死人を眺める。

ネクタイを緩める仕草のまま静止。

苛立つ口調が不機嫌そうに吐き出された。

「なあ、俺とやりたいんだろ？」

口元が薄く笑みを浮かべる。

「何度でもイカせてやるつて。あの世で美冬……いや、ヨイに

手エ出したコト後悔しとけ、とりあえず」

手のひらを天井に向け、差し伸べられた右手。

人差し指が誘うように動いた。

「ほら、来いよ」

その言葉と同時に動く。

背中に隠されたチャリオットの腕が振り上げられると同時に生じた

金属音。

鞘から抜かれたナイフが月影を反射した。

真雪は体をそらせながら、声を上げて笑う。

「そーこなくっちゃ！」

腕が左右へと大きく広げられ、まるで何かをばら撒くような素振りを見せた。

拳が開き、手のひらから生まれる光。

一斉に飛び立つ。

蝶の形をしたそれは不安定な動きをしながらもチャリオットめがけ。

「お花畑には、ちょうちよがいねえとな」

室内を飛びまわり、纏わりつく光など見えていないようにチャリオットは一直線に駆けた。

視線の先には死神。

一気に間合いを詰める。

口の端が徐々に持ち上がり、表情を歪ませるように笑った。虚空を切り裂くナイフ。

線を描くそれは、まるで自分の身を守るうとしていているかのように。これは牽制だ。

瞳が素早く動き、チャリオットの腕の動きを辿る。

「本来ならば戦う相手ではないのだがな！」

「なんだよ。負けた時の言い訳か？」

視界の端に鋭い光が見えた。

頭上に掲げられたそれが自分を狙い、斬ろうとするのを。

「見えてんぜ、オッサン」

チャリオットの動きを食い止める真雪。

顔の前に左腕をかざし、チャリオットの腕を受け止めて防御する。

覗き込むように笑った。

振り下ろす力と弾こうとする力がぶつかる。

真雪の唇が大きく歪み、口角を上げた瞬間。

チャリオットがその目に何かを見たかのように後ろへ跳び退いた。

わずかに足を滑らせながらもチャリオットは床に手をつき、着地する。

花と蝶が舞い、二人を遮った。

その隙間に見える舌打ちと怒気をはらむ目つき。

再び距離が生まれ、にらみ合う。

「……さすがにこの程度じゃバレバレか」

死神の独白が漏れた。

ナイフを持つ手を下ろし、チャリオットは血の味がする唾を飲み込む。

前方3メートル先、敵は真雪　いや、エニグマの半身。

普段の彼であれば、戦闘スタイルから癖に至るまで知っている。



だが、目の前にいるのは真雪の外見をした別人だ。どこか不安定な印象を持ち、思考が全く読めない。戦う必要はないが今の状態では戦わざるを得ないだろう。思考を巡らせるチャリオットの目が真雪のわずかな動作も逃すまいと凝視していた。

体に絡みつく蝶を手で払おうとする。

無数の光の塊が視界を奪っていた。

その様子は、命がないはずの物達が離れた位置で笑う彼を守ろうとしているかのようで。

「さーて、どうやって攻撃すればいいかな？」

場違いなほど明るい口調。

腰に手を当て、天井を仰いでいた真雪が目だけを動かす。

「大型の範囲系スキルはヨイを巻き込む危険もあるから使えねえ。

炎系？ それも駄目だ。燃え移る可能性もあるし、何が起こるか分かったモンじゃない」

この部屋は四角く区切られた、二人のために用意された闘技場。

椅子は壇上の上の一つあるのみで、かつて学校であった事を表す物は他に何も無い。

等間隔の靴音が秒針の音のように響いていた。

押し黙る世界の中で。

「じゃあ、どうする？ 他に武器らしいモン使えるわけじゃねえし、ある程度の攻撃は読まれちゃう」

立ちすくんだように様子を窺うチャリオットを気にする様子もなく、言葉を紡ぐ。

まるで音楽を聴いているかのように体を動かしながら。

「その答えは」

真雪の人差し指が自分のこめかみを示した。

銃を真似た手、おどけたように悪戯っぽく笑う顔。

眉間にしわを寄せたチャリオットを覗き込むように前かがみになり、

身を乗り出す。  
唇が笑みを浮かべながら銃声を真似た。

瞬間。

チャリオットの周りを舞っていた蝶が真雪の声に反応し、同時に小さな爆発を起こす。  
耳を襲う爆音に笑い声が重なった。  
赤い飛沫が見える。

チャリオットは咄嗟に防御の姿勢をとったが、体の数箇所に痛みを感じた。

わずかに歪む顔。

けれど、それはすぐにいびつな笑いへと変わる。

辺りに漂う薄い幕のような煙の向こう。

靴音が迫るのを感じた。

自分の前方、いや

「跪けよ、死にぞこない」

「それはお前の方だ」

間近に聞こえる声と共に煙の中から黒い残像が見えた。

それは足か、それとも拳か。

おそらく彼は胸を狙っているのだろう。

自分を狙う真雪の拳をチャリオットは弾くとナイフを逆手に持ち替え、横一直線に薙ぎ払った。

けれど、その攻撃もまた後ろへ跳ねる靴音に阻まれ。

一瞬の沈黙。

軽く息をつくような笑みが見えた気がした。

「ちようちよの他に鳥さんもいた方がいいって？」

さえざえとした夜空が視界の端に映る。

楽しげな声が発せられると同時に自分に飛び込んでくる光。

それは真雪の言葉どおり鳥の形を模していた。

はばたきの音さえ聞こえそうな。

避けるか斬るか、悩んでいる時間はない。

チャリオットは鼻先まで迫ったそれを大きく振りかぶって袈裟切りにした。

瞬間、散らばる残骸。

それは雪のように細かく輝きながら消えていく。

「子供騙しはいい加減にしろ。遊んでいる暇などないのではないのか」

「待ってんだよ、アイツが目覚ますのを」

チャリオットを見つめていた視線がドアに移された。

まるで見えない何かを見ようとしているかのように。

つられて視線を向けても何か変わった様子は見られない。

あるのは沈黙。

人の気配は感じるものの、眠っているのではないかと思ってしまう。

「あんな真似されたんだ。ヨイもお前を殺したいんじゃないかと思つてさ」

苛立ちを示すように足がリズムを取っていた。

睨む視線には肌を刺すような殺気と攻撃性が見える。

「でも、忘れてたわ」

不意に言葉を切り、真雪は苦笑を漏らす。

髪をかき上げる仕草のまま首を横に振った。

「姫君はキスしなきゃ目を覚まさないんだ。おとぎ話のお約束だよな」

軽い口調で言うのと同時に俯いた顔が持ち上がる。

見えたのは飢えたような光を放つ瞳。

刹那、真雪が一気に距離を狭めた。

考えるよりも先にチャリオットの体が動く。

真雪の右手、瞳の動きに目を走らせ。

耳元で風が唸る。

笑う顔、唇が何かを唱えるのが見えた。  
空気が動くのを感じる。

大きく響く、鋭くぶつかる音。

「……エニグマ」

チャリオットが押し殺した声で呟くように名を呼んだ。

眼前にあるのは相手を斬ろうとするナイフ。

鏢迫り合いの状態で止まる。

真雪は球状の光を手に住したままで迫る刃を押し返そうとしていた。  
ぶつかり合う力は均衡を保ち、動こうとしない。

「言っただはずだぞ、戦う相手ではないと。俺達は仲間なのだ」

「命乞いならもつとマシなコト言えよ」

力を込め、震える手。

食いしばった表情のまま眉間にしわを寄せた。

間近で睨み合い、息を殺す。

「力を貸せ。これはエニグマ　いや、お前の片割れが望んでいる  
事にも繋がる」

「お前にヨイの何が分かる？」

「悪いようにはしない。だから……」

耳元で生じた火花が散るような音に言葉が飲み込まれる。

長く続くと思われた膠着した空気は真雪が振りかざした手によって  
消えた。

武器を弾く動作。

チャリオットがわずかにバランスを崩す。

「ふざけんな！　誰がお前なんか手エ貸すかよ！」

怒号が室内に響いた。

感情を爆発させ、睨みつける顔。

まるで光を集めるかのように、真雪の右手に住した光の球が膨らんでいく。

「俺の体も、力も、血一滴に至るまで全部ヨイのモンだ！  
アイツ以外の為に力なんざ使ってたまるか！」

「ならば俺が美冬を操る事が出来れば問題ないのか？」

「そんな真似してみる。判別できねえくらいに刻むからな！」  
その言葉を残して一步踏み出すと、まるで何かを投げる動作を見せる真雪。

めがけて飛んでくる光を避け、チャリオットは懐に入り込む。

一気に動き、張り詰めていく空気。

背後で何かがぶつかったような音が轟いた。

まるで地響き。

ひらめく刃が切り裂こうとするが。

「見えてるつつってんだろ！」

阻止する真雪の手。

それと同時にチャリオットの腹部に拳が食い込む、鈍い痛みが走る。わずかに顔をゆがめるように睨んだ。

まるで『効かない』とでも言いたげに口元だけで笑いながら。

再び、真雪から風が生じるような音が聞こえた。

「お前の動きも見えている」

低く呟く声。

チャリオットが腕を払うように力任せにナイフを振るう。

一瞬見えたのは赤い線。

だが、全てを捉えたわけではないのは手ごたえで分かった。

足止めをさせるほどのダメージも与えていない。

その証拠に真雪はしゃがんで攻撃を回避している。

舌打ちし、再度切り裂こうと身構えた時。

「はい、捕まえた」

真雪は下から中腰の姿勢で、チャリオットに手を伸ばし。

彼の顔を鷲掴みにしていた。

「く……っ！」

「お前の攻撃は大振りすぎる。ま、俺もヒトの事言えねーけど」  
こめかみには締め付ける感触。

真雪は顔を覗き込んで、ゆっくりと口角を上げる。  
頬の血をぬぐう仕草。

小声で囁くような声の中に殺気が見えた。

「どうしたの、オッサン。もうイツちゃう？」

払いのけようとすれば出来ない事はない。

ここから攻撃を仕掛ければ、一気に形勢は逆転する。

だが、顔を掴んでいる目の前の死神はキャスター。

この体勢でスキルを発動すれば、自分の頭を吹き飛ばす事などたやすいだらう。

チャリオットは齒を食いしばった表情のまま、思考をめぐる。  
せる。

「1人だけ気持ちよくなる男は嫌われるぜ」

微笑む声が目の前から発せられる。

ナイフを握り直し、体をわずかにねじった。

出来るとすれば真雪の隙をつく事。

武器の位置は、死角。

ならば。

銀色の光が真雪の視界の端から飛んでくる。

視線が素早く動いた。

真雪の反応が早い、それともチャリオットの攻撃が早い。

死人が笑う。

全てがスローモーションに見える景色。

見えたのは鮮やかな赤。

白い花に鮮血が滴り落ちる。

真雪は眉間に深くしわを刻みながら、ナイフを握るように素手で受け止めていた。

「何、俺もイカせてくれるって？」

肩で呼吸をしながら、乾いた笑いを浮かべる。

けれど目は見据えたままで。

「喘げ、死神」

「……効かねえよ。効かねえんだよ、お前の攻撃は！」

「揃って威勢が良いな。面白い」

無理矢理、真雪の手をこじ開けるようにナイフが動く。

短く漏れる声にチャリオットの目が笑った。

雑ぐナイフと共に舞う、赤い飛沫。

「這え」

その声と共に真雪の足元を払うように蹴った。

真雪はバランスを崩しながらも、チャリオットの眼前に手をかざす

ようにしてスキルを打つ。

放たれる光の球は唸りを上げながら、頬をかすめ。

チャリオットの背後で爆発を起こした。

「痛みでコントロールが鈍ったか？ 意外に傷は深いようだな」

「うる……」

言いかけた言葉はチャリオットの攻撃にかき消される。

体勢を整えようとした真雪を再度襲う、一蹴。

背後からの衝撃に床に崩れた。

「それとも一人では何も出来ないか？」

視界に写るのはチャリオットの物らしいコンバットブーツ。

おそらく真雪を見下ろしているのだろう。

床に手をつき、体を起こそうと力を入れると痛みが波のようにつず

く。

白い花と血が広がっている。

血だまりに月光が浮かび、光を放つように。

「戦う必要はないが、お前がその気であるなら全力で潰さなければ  
ならない」

膝をつく姿勢で軽く息をついて頭上から降り注ぐ声を聞いた。

痛みを意識をとられている場合ではない。

今、するべき事は。

「いずれ脅威となり、俺の行く手を阻む事になるからな」

「勝手にしろ。お前に戦う必要がなくても俺にはあんだよ」  
鼻で笑うように漏らした苦笑。

座った状態から顔を上げ、手のひらをチャリオットに向ける真雪。  
落ちる雫の音だけが耳につく。

自分を狙うナイフの切っ先を睨んだ。  
止まる動きと音。

お互い、視線をそらす事なく。

インカムの向こうで聞こえるやり取りだけが判別不能のまま耳をすり抜けた。

真雪は脈打つ痛みの中で、ただチャリオットを見つめる。  
微動だにせず、息を殺して。

体のどこかで何かが蠢く感覚があるが、それを気にしている余裕はない。

些細な動きにも反応できるように。

また、相手も自分が動けば攻撃を仕掛けてくるだろう。

少しでも隙を見せれば命取りだ。

沈黙と探りあいの中、神経を研ぎ澄ませた。

前触れなく。

視界の端でチャリオットの足がわずかに動くのを見た。

半ば反射的に手が風を生じ、光を集める。

動く唇。

跪いた姿勢のまま眉間にしわを寄せ、瞬きもせず。  
迫る銀色の光。

放たれるスキルとどちらが早いか、真雪にもそれは分からなかった。  
賭けだと脳裏で呟く。

サイドに避け、そこからもう一発

まるで床を突き刺そうとするかのように自分の脳天めがけて振り下



ろされるナイフ。  
真雪が唇を噛んだ瞬間。

聞こえたのは金属音。

その後には衝撃も痛みもなく、遠くに何かか吹き飛ぶ気配と衝撃音が響いた。

視界から消えたチャリオット。

巻き起こる風と浮かぶブルメリアの花の中で状況を把握しようとする素早く瞳が動く。

真雪が間近にある気配に気付き、顔を向けると。

「……非常に嫌な仕事だ」

長い柄をもつ大きな鎌が弧を描き、振り下ろされるのが見えた。

鋭い光を放つ残像に目をいぶかしげに細める。

フードで顔は見えず、黒衣をまとう風貌はまるで死神。

「何が面白くて他人のケンカに首を突っ込まねばならぬのか」

言葉どおり不機嫌そうな声が吐き捨てるように言った。

わずかに顔が向けられ、鋭い眼差しが真雪を見下ろす。

真雪は瞬時に理解した。

彼はエクスキューションナーのアブソルート。

そして、この男が自分に向けられたチャリオットの攻撃を防いだのだと。

確かにアブソルートがいなければ自分はどうなっていたか分からない。

けれど。

こみ上げてくる苛立ちに舌打ちする。

そして、無意識に手はスキルを放とうとしていた。

「お前、助けろつつた覚えはねえ。余計な事すんじゃないよ」

「こちらも助けると言われた覚えなどない」

「邪魔するとお前もぶっ殺すぞ」

「助けられて礼も言えんのか、このクソガキは」

アブソルートは窓の外に視線を投げつつ、独白のように漏らす。

そして、真雪の手元に浮かぶ光を一瞥した。

「敵は我ではないだろう。」

見誤るとお前だけの被害ではすまぬぞ、死神」

冷たさを帯びた声。

顎で示された先にあるのは数メートル先、壁に背中を貼りつけ片膝をつくチャリオット。

ナイフを杖代わりに床に突き立て、立ち上がるうとしている所だった。

真雪は鼻先で笑うと面白くなさそうに視線をそらす。

その無言は、アブソルートの言葉に同意するかのよう。

ゆっくりとした動作で立ち上がり、アブソルートに並んで前を見据えた。

「気が進まんが……あいにく、あの女に借りがあってな」

ドアに顔を向けた後、真雪に視線を投げる。

肩に武器を乗せると顔をしかめたままため息をついた。

「仕事のついでだ。清算させてもらおう」

鼻に感じる死臭、目に映る月光、肌を刺すような殺気。

ここは花が溢れ、寒々しく感じるリング。

真雪の目の前には死があった。

それは彼を見ると目を細め、狂気含みの笑みを浮かべる。

ナイフを握り、ゆっくりと自分の方へと近づいてくる靴音。

それは自分の鼓動と同じリズムで聞こえていた。

「手配第823号、チャリオット」  
低い声が響くと共に、胸元から出した紙をチャリオットに突きつけるように広げる。

射抜く眼光。

アブソルートは無表情のまま、武器を持ち上げると肩に乗せた。

「エクスキューションナーがー、アブソルート。天網の名の下にうぬを捕らえる」

向かい合ったままで景色が止まる。

無言で探り、目で会話をするように。

チャリオットは肩で息をしたままで正面を見据えていたが、

何かを思い出したのか息をつくように小さく苦笑した。

「死人を相手にするとは此岸の番人も随分暇なのだな」

「己のした事くらい分かっているであろう？ 無害であれば屍など相手にはせぬ」

「捕らえる、と。殺さないのか？ エクスキューションナーの得意分野だろう」

交わされる言葉を聞いていない様子で真雪は生み出した光の球を指の腹で撫でて弄ぶ。

部屋には花の白、青い月光と鮮血の赤。

死んだ沈黙の中で、チャリオットが肩を上下しながら呼吸するのが見えた。

「我が主からの命がなければうぬを生かしておこうなどと思わぬわ」  
吐き捨てた言葉と共に鎌を握り直す。

アブソルートが目を細めるように睨み、口を開きかけた所で。  
聞こえたのは退屈を具現化したような声だった。

発せられたのはアブソルートの隣。

真雪は涙を目に浮かべながらあくびをしていた。

集まる視線に背筋を伸ばしながら顔をしかめてみせる。

「話終わった？ 俺、飽きちまったんだけど」

短く呻いて腰に当てた手を下ろし、ため息をついた。

黒いつま先がプルメリアを持ち上げる。

「お喋りしに来たわけじゃねえだろ？ ヤリたきゃヤればいいだけの話じゃん。」

誰がなんて言ってるかなんざ関係ねえよ」

俯き加減で髪が滑り落ちた向こうに見える、不敵な笑みが浮かぶ顔。真雪の右手と遊ぶように周囲を回っていた光が次第に形を変えていく。

細かい粒子を撒き散らしながら舞う蝶の姿へと。

「殺さなきゃ殺されるってな」

漆黒の闇の中で笑いを含んだ声が呟いた。

「少なくとも俺はアイツをぶっ殺すつもりだ。お前が殺す気があるうとなかるうと」

差し伸べた指先に蝶が止まり、羽を休める姿を見つめる。

アブソルートはその様子を黙ったままで眺めていた。

顔を上げた拍子に視線が合う。

「第一、そんな簡単に捕まえられると思ってんの？あの死にぞこないを」

「……確かに」

鎌の柄で肩を打つ度に刃がきらめく。

渋い表情のまま顎を引くように頷くと、目の前に立ちはだかる死人に視線を投げる。

「命じられたのは彼の者の逮捕のみ。」

無傷が条件ではない故、奴の手足が一本や二本なくなった所で問題はないか」

右足がわずかに後退した。

悟られないように体の重心を落とす、身構える。

「もつとも」

チャリオットの動作を見逃すまいと凝視する視線。

「この場では何が起こるか分からぬ。我の意思とは別の、予想外の事態もありうる」

「ああ。例えば手が滑ったり？」

「応」

アブソルートの答えに、真雪が笑いながらチャリオットに顔を向けた。

髪をかき上げる動作。

滑り落ちる音でさえ響きそうな空間の中で。

「良かったな、チャリオット。遊んでくれるお友達が増えて」

ドアの隙間から入り込んだらしい微風が死臭に満ちた空気をかき回した。

頬を撫でる感触に目を細めるように笑う。

「2人より3人の方が気持ちよくなれるかもな？」

間合いを取るように真雪が数歩後ずさる。

靴音だけが不気味に響いた。

「楽しもうぜ。今度はイカせてあげるからさ」

死人を一瞥した後、真雪が後ろへとジャンプする。

それと同時に走る黒い影。

チャリオットに向かって銀色の光が横へ薙ぎ払った。

鋭い音がぶつかり、視界に火花が散るような錯覚を覚える。

避ける事を見透かしていたアブソルトが間髪いれずに大きく一閃。

黒いフードの下、アブソルトが笑った。

息をつく間も与えない攻撃を紙一重で避けていく。

けれど、アブソルトには見えていた。

「死人は大人しく棺で眠っておれば良いものを」

後方から聞こえる真雪の鼻歌を聞きながら呟く。

チャリオットは防御をするばかりで、攻撃を繰り返そうとしない。

口が開いたままの所を見ると、疲労が蓄積しているのだろう。反応が徐々に鈍くなっている気さえする。

「眠る事すら許されないのだよ、俺には」

「誰が起こした？」

「さあな。世界か、もしくは狂気という名の神か」  
荒い呼吸の中で半笑いの声が答えた。

切っ先が赤で濡れる。

衣のように散る飛沫と漂う生臭い血の匂い。

チャリオットが床に手を付いてしゃがんで防御した先。

アプソルートのすぐ近くを風を伴う青白い光の残像が通り過ぎる。  
なびくコート。

風を感じた瞬間、チャリオットが何かによって引きずられるように  
後方へ吹き飛んだ。

部屋全体を揺らす轟音の中、スローモーションで花が舞い上がる。

後方で真雪が笑っている声が聞こえた。

花と埃越しに見える膝をつくチャリオットの姿。

外からのほの暗い光に照らされた口元には一筋の血が滲んでいる。

アプソルートが武器を持つ手を途中で静止させた。

硬直したまま動かない。

鼻歌が止まった。

3人を包むのは静寂。

今までの静寂とは違う、不穏な空気が立ち込めている。

今まで真雪の顔に浮かんでいた、楽しげな色は消え失せ。

警戒したように唇を噛んだまま視線を周囲に走らせた。

そして、動きが止まる。

チャリオットを見た瞬間に。

「……誰だ、お前」

そこにあるのは赤い斑点と、死んだような景色。

今までと変わらないようにも見えるが。

真雪には何かが見えているように一点を睨んでいた。

「いや、さつき会ったよな？」

誰も微動だにしない。

聞こえるのはチャリオットの苦しげな呼吸と、衣擦れの音。そして。

「またお会いしました、エニグマ殿」

聞こえた声に視線を向けると。

何もなかったはずのチャリオットの隣に白い人影が立っていた。些細な変化も見逃さないほど凝視していた筈だ。思わず息を飲む。

「いえ、シノノメ殿とお呼びしましょうか」

白い羽織袴に同色のマント、そして薄いベールを頭からかぶって笑みを浮かべていた。

それはまるで月の光に溶けてしまいそうな印象さえある。

男にも女にも見える姿は、声のイメージそのままだ。

真雪はいぶかしげに視線を投げ、右手に神経を集中した。

「誰だつて聞いてんだよ。何のつもりだ、お前」

「そうお怒りになりますな。チャリオットが貴方様にご無礼を働いていないか心配になり、

ご挨拶がてら様子を見にただただにございます」

この口調と声は間違いなく一階で会った、姿の見えぬ者だ。

眉をひそめ、相手を観察する。

目に見えていながら幻なのではないかと真雪は疑いたくなった。

掴み所がなく、まるで流れる雲のようにも思える。

殺気を感じなければ緊張感もない。

だが、体の内側では絶えず警鐘が響いていた。

目の前の死人の仲間である事は明白だが彼は何者なのか。  
スキルを撃ち、チャリオットもろとも倒す選択肢もあるが  
何故か直感がそれを拒む。

「御仁、無闇に得体の知れぬ者を討とうとするのは控えた方がよ  
しいかと」

目を細めたままで白い者はアブソルートに視線を向ける。  
唇は微笑を浮かべているが、目は鋭さが宿っていた。  
アブソルートの舌打ちが聞こえる。

それでも、彼が隙を狙っているのは武器を構えている姿勢から分か  
った。

「ああ、自己紹介を。私は周囲の者からミロク、トリプルシックス  
等と

呼ばれている者でございます」

わずかに膝を曲げ、胸元に手を当てる仕草。

「チャリオットの友人という事にしておきましょうか」

「つまり俺の敵っつーことだよな？ それなら話が早い」

真雪が天井に手のひらを向け、光の球を生む。

風が唸りを上げる音が広がった。

指の隙間から血が伝い落ちるのも厭わず、チャリオットと寄り添う  
ミロクと名乗った白い者を睨みつける。

それでも、強い視線を向けられた相手は表情を変える事はなく。

笑う口元。

「貴方様はご自分を何者か、分かっていらっしやらない」

「何だと？」

「それとも分かっている上で全てを壊すおつもりか」

「どつという意味だ、てめえ！」

強い口調で吐き出された問いを笑顔で交わす。

口に指を当てて相手の反応を楽しんでいるかのように。

真雪は自分の手のひらに生まれた光を握りつぶした。



瞬間、ガラスが砕け散ったような音が響く。

震える拳に血の筋が出来、等間隔で赤い雫が滴り落ちた。

「それはご自身にお聞きください、シノノメ殿」

返答を待つような沈黙を破る。

不意に。

ミロクの視線が傍らへと移された。

そこに居るのは額から流れた血が目に入る事も気にせず、正面を見据えるチャリオット。

息切れこそしているものの、その顔から戦意は消失していない。

その証拠に目は飢えたような光を放っていた。

「……逃がすわけにはいかぬ」

今まで静観していたアブソルートが何かを察知したように呟く。闇と同化した風貌。

武器を握り締めると、わずかに金属音が聞こえた。

「犬畜生に何が出来ましょう？」

刹那。

視界に硬質な光を放つ残像が横切った。

アブソルートがミロクめがけ、鎌を力任せに振り上げる。

切り裂かれるように空気が大きく動き。

それと呼応するように生じる風。

真雪の手が淡い光を放ち、そこから生まれた光は球の形をなし花を散らしながら真正面へと駆ける。

壁が、ドアが、窓が轟音に震えた。

闇の中で埃が舞い上がり、煙幕のように広がって視界を奪う。

真雪とアブソルートの狙いはただ一つ。  
だが。

「何をしています」

次第に鮮明になる視界で聞こえた小さく笑いを漏らす声。そこに立っていたのは。

「きちんと狙いましたか？」

鎌の刃を親指と人差し指でつまんで受け止め、数秒前と同じ位置に立って微笑むミロクだった。

「な……っ！」

「『得体の知れぬ者を討とうとするのは控えよ』と忠告はしましたぞ」

スキルは外れていなかった。

アブソルフトも攻撃もまた、指で受けられるほどの速さでも力でもない筈だ。

しかしここにある、ミロクは無傷だという事実。

真雪は唇を噛んだまま、笑う顔を睨んだ。

どこかで聞こえる夜の住人のものと思しき声を聞きながら固まる。

「さて、チャリオット」

窓の外を一瞥したミロクが口角を上げ、つまんでいた鎌を振り払った。

「楽しいゲームは終了です。敗者は舞台を去りましょう」

「コイツ等はどうするつもりだ」

「どうしましょうか。もっとも私はどうする気もありませぬが……」

チャリオットに手を差し伸べ、肩をすくめながら目を細めて笑う。

その顔は真雪へと向けられた。

無意識のうちに嫌悪で顔が歪み、奥歯を噛み締める。

漂う不気味さ。

読もうとしても相手の感情も、意図も分からず。

「シノノメ殿。此岸と彼岸の追いかっこは貴方様の勝ちです」

ふらつきながら立ち上がったチャリオットに肩を貸し、寄り添って笑う。

「姫君の救出、おめでとございます」

「逃がすワケにはいかねえな。決着は付いてねえし、俺はそいつを殺すって決めたんだ」

「ええ、決着は付いておりません」

齒軋りの隙間から漏らした言葉に軽く頷く仕草。

思い出したように死臭を感じた。

声だけが響く、探り合いの中で。

「今度はヨイ殿と二人で是非、私達の城へおいで下され。良い所ですよ」

「誰がてめえの……！」

「小鳥はさえずり、花で溢れた楽園にございます」

語尾が遠ざかっていくのを感じた。

気付けばチャリオットとミロクの足元が徐々に消えているように見える。

「させるか！」

怒号と共に放たれるスキル。

けれどそれは目の前の人物をすり抜け、壁にぶつかった。

最後に見えたのは笑みを浮かべる顔と白いベール。

何事かを言っただけらしい声は衝撃音にかき消される。

校舎全体に轟く地響き。

跡形もなく消えたチャリオットとミロク。

それと同時に黒い影が駆け抜けるのが見えた。

消え行く死臭。

花の白さばかりが目には焼きつく。

真雪は肩で息をしながら正面を睨み続けていた。

時折、視線を注意深く周囲に巡らせるが室内にあるのは自分の気配のみ。

アブソルートの声と、廊下を駆ける足音が遠ざかっていくのを聞きながら。

「……ターゲット消失」

舌打ちと共に呟く。

「どいつもこいつも殺してえ野郎ばかりだ。やってる最中に逃げやがって、クソが」

『チャリオットが逃げた、と？ 一体……』

「1階で会ったムナクソ悪い野郎だよ。アイツが出てきて消えやがった」

傷がうずくのも忘れ、握り締める。

窓から差し込む光が死神のシルエットを浮かび上がらせた。

ブルメリアの上に落ちる、長く伸びる影。

再び静寂が訪れる。

『とりあえず彼女を助け、任務は完了した。』

僕らはチャリオットの討伐が目的だった訳ではないだろうか？』

「俺はアイツを殺さなきゃ気が済まねえ」

『今はラプターが最優先事項だよ。』

僕らは車を取ってくるから君はラプターの側にいてあげてくれないか』

名前に反応した真雪が表情をわずかに緩めた。

反射的にインカムに視線を向ける。

「ヨイは？」

『隣の教室に退避中だ。眠っているよ。苦しそうにしているけれどノイズ混じりのダンデライオンの声にため息を漏らした。』

重い足取りで部屋を横切っていく。

『とにかくラプターと一緒にいてくれ。決して動かないように、いいね？』

釘を刺す声と同時にドアが開く音がフロア全体に響く。

不意に何かを思い出したように真雪が立ち止まった。

俯いたままの顔が持ち上がり、固まる。

数秒の間の後再び歩き出す。

残されたのは殺気と不安の残骸の残る部屋のみだった。

白い花ばかりを見ていたせいだろうか。

中央に美冬が寝かされている、この部屋は妙に薄暗く感じた。

床に線のように点々と落ちた染みは真雪の血。

机も椅子もなく、ただ四方を壁に区切られた殺風景な空間に2人はたたずむ。

黒いジャケットがかけられた美冬は時折、表情を歪ませながらも硬く目を閉じていた。

「……ヨイ」

小さく呼びかけた声が不気味なほど大きく聞こえる。

美冬の傍らであぐらをかいていた真雪が、膝をつき四つん這いになった。

動いた唇が発した言葉を聞き取るうと耳を寄せて。

「可愛い顔で寝ちゃって」

呼吸を確かめるように顔を覗き込み、微笑む。

血で濡れた右手で頬に触れようとして空中で止まった。

わずかな逡巡。

小さく息をもらしながら肘をつき、間近で見つめる金色の瞳。

「おはよう、ヨイ」

影が一つになった。

真雪が顔を美冬に沈めると唇を重ねる。

その数秒は長い時間のよう。

不意に、美冬の指が大きく震えた。

その震えが肩に移動し、目蓋が持ち上がる。

驚いたように何度も目を瞬かせていた。

戸惑い、揺れる瞳。

「……本当にキスで目エ覚ますモンなんだな」

気配に気付いた真雪が笑いながら顔を離し、目を細めた。髪を撫でる左手。

その感触に美冬は目を細めながらも頬を紅潮させ、視線を落ち着きなく彷徨わせる。

「え、あの。ま、まゆ……」

何か言いたげに唇を動かした後、呆気にとられたまま美冬が言いかけるが。

その表情は何かを見つけたように警戒感をあらわにした。

「大丈夫か？ 怖かっただろ」

「……違う」

呟く声。

力なく美冬の手が真雪の胸を押し返そうとする。

彼はその手と間近の顔を見比べた。

「貴方、真雪じゃない。誰？」

「何でそういう事言うんだよ」

「だって、違う。あたしの知ってる真雪じゃない。目の色も、雰囲気

気も違うもん」

真雪は自分を見返す目の中に微かに敵意を見つけ、表情を曇らせた。眉間にしわを寄せたまま言葉を選ぶように黙る。

そして、ややあつて。

「俺は真雪。真雪であり、シノノメ。お前が一番知ってて、お前を

一番知ってる」

「……シノノメ」

「そつだよ、ヨイ」

その言葉に美冬が動きを止めた。

脳裏に浮かぶのはチャリオットの言葉、そしてエニグマと言つ単語。耳の中で声が蘇る錯覚に思わず顔をしかめる。

「あ、あの。あのね、突然死とチャリオットの……！」

思い出したように訴える口調で言いかけた美冬の言葉を、真雪が首

を振って遮る。

その様子に薄く口を開いたまま。

「後で聞くから。今は喋らなくていい、そんな事」

「でも」

「それより痛いところは？ 怪我してねえか？」

美冬の上に覆いかぶさるような格好のままでも問う。

硬いフローリングの床の感触と、視界の端に見える月影。

「うっん。でも……」

「ん？」

「怪我してないんだけど何だか右手が痛い。全然力が入らなくて痛みで歪む顔に真雪が顔をしかめた。

軽く息をつき、唇を噛む。

「悪い。それは俺のせいだ」

視線が美冬の顔の横に向けられる。

その先にあつたのは血だまりと真雪の右手。

促されるように顔を向け、美冬が慌てふためきながら真雪の腕を掴んだ。

何度も顔と手を交互に見比べる。

「エニグマは感覚とか痛みも共有するから。痛いだろ、ごめんな」

「そういう問題じゃない！ どうして！？ 怪我ひどいじゃん、血

止めなきゃ！」

「こんなの怪我のうちに入らねえよ。お前が無事ならいいんだ」

「バカ、なに言ってる……！ 手当てしなきゃダメだよ！」

怒鳴る声に苦笑が漏れた。

真雪は左手をついて体を支え、美冬の顔の前に右手を出す。

密着する体に顔を赤らめ、

顔の前にある赤く染まる右手に戸惑いの視線を注いだ。

「じゃあ、舐めて」

「え？」

「舐めてよ、ヨイ。そしたらすぐ治るから」

時間が止まる。

美冬が今にも泣きそうな表情で息を殺し。

無言の中で戸惑いと迷いが見えた。

温度を感じない風が通り過ぎる。

「……や、やっぱり今日の真雪変だよ……」

消え入りそうな声が呟いた。

おそるおそる、ぎこちない動作で口を開けると舌をわずかに出す美冬。

上目がちに伺う視線と微笑む視線がぶつかり、溶ける。

真雪は美冬の口に右手の人差し指を差し込んだ。

「すごいドキドキしてるだろ？ こっちまで伝わってんぞ」

覗き込む視線に耐えられなくなり、目を伏せる。

「かわいい、ヨイ」

「……んく。ふ……」

唇で指に付いた血をしごき取るうとするかのように口をわずかにすぼめる動作。

口の中では戸惑いがちに舌を指に絡め。

「ヨイは」

その言葉と共に口の中に忍び込んでいた指が抜かれた。

反射的に顔を見つめ、そのままそらせなくなる。

「俺のもの。手エ出す奴は許さない」

そう言いながら首を傾げるように自分の下に寝転ぶ彼女の耳元に顔を埋め、頬に唇を当てた。

唇の感触が首筋へと降りていく感覚に、美冬は体を縮める。

無意識に硬く目を閉じていた。

「なあ」

降り注ぐ声に目を開けると、鼻先の触れる位置で自分を見つめる顔がある。

言葉を紡ぐ度に肌に息がとまった。

「誓いを立てよう」



「ちか、い？」

「そうだよ。もう二度と離れないように」

顔が離れ、美冬の左手を取ると薬指に軽く口付ける。

悪戯っぽく笑う顔。

手が赤く染まるのも気にする余裕がないほどに、鼓動が早まっていた。

瞬きも忘れ、時間も状況も全てが消えてしまったかのように。

「それと」

もう一度、顔が近づく。

美冬は金色の瞳に恐れや疑いを持つ事はなくなった。

そして、以前から知っていた気がする。

共有する景色や感覚を。

流れ込む感情を。

「お互いは、お互いのものであると」

真雪は笑っていた。

影が美冬を覆い、触れていなくても体温を感じる唇。

シルエットが同化する。

瞬間。

突然、真雪が引きつった声を上げると同時に大きく震えた。その拍子にぶつかる額同士。

痛みに美冬が言葉にならない声を出す。

「ぶ、あああ！？　ちょ、あれ！？　いや、待て！　なん、なんだこりゃああ！？」

「……いつつう」

「あれ！？ 俺何やって……うお、美冬！ 大丈夫か！？ いや、違う！ あの、俺！」

勢いよく顔が離れた。

呆気にとられている美冬をよそに真雪は赤い顔のまま動揺をしたように周囲を見渡す。

落ち着きのない動作と、何度もつつかえる言葉。

そこに冷静さは微塵も感じられず、普段とはまるで別人だった。

真雪の声だけが室内にこだまする。

「ごめん！ 俺、意識ふっ飛んでて！ どうせなら……いや違う、ごめんマジで！」

冷静になるうとしてしているのか何度も髪をかきあげていた。

視線は一向に美冬を見る事なく、窓の外や壁を見る。

「本当にごめん。つーか、退かなきゃ……」

そう言って軽い唸り声と共に体をはがそうとした真雪を止めたのはジャケットを掴む美冬の手。

床に寝たままの状態で、笑みを広げていた。

「やめちやうの？」

真雪の動きが止まる。

頭の中で言葉を繰り返しているらしい。

赤紫色の瞳が驚いた色を滲ませたままで見つめた。

「……やめちやうのって、何をだよ」

「分かっているくせに聞くんだからな、この人は」  
自分を見下ろす顔に笑みを向ける。

「ちゅう、してくれないの？」

悪戯っぽく瞳を覗き込まれ、小さく息を飲んだ。

遠くで木々がざわめく音が聞こえる。

視界の端に見える闇の中で夜景が浮かび上がって見えた。

そらした視線をもう一度、美冬に戻すと。  
左腕を床につけて顔を近づけた。  
額同士を合わせて、どちらからともなく笑う。  
声を押し殺し。

「……本気にしていい？」

顔を離すと笑いを引つ込めた真雪が尋ねた。

頷く気配、近づく顔。

美冬の手が真雪の背に回される。

その感触に微笑む、2人で。

一つにつながる黒い影。

音のない景色の中、言葉もなく。

「帰るぞ」

突然、足元の方からの雷のような大きな音が沈黙を破った。

それは勢いよくドアが開かれたものらしい。

声の主は聞き覚えのある深く低い声。

黒い瞳が室内の中央に寝そべる2人を睨むように見つめ。

「部屋を間違えた」

その声と同時にドアがもう一度、叩きつけるように閉められた。

真雪は美冬の肩に顔をつけ、力なくうなだれたまま動かない。

なだめるように後頭部を軽く叩く手の感触に小さく頷いた。

「……俺、なんかもう色々ダメだ……」

弱々しく吐かれた言葉に美冬が苦笑を顔に広げる。

顎を持ち上げ、逆さまの夜景を眺めた。

見えるのは出口を示すような月。

その明るさに目を細め。

自分の上に寝そべる真雪の感触と重みを感じながら。

『こちらウォークライ。3階教室にてラプターと水揚げされたマグ  
口を発見。』

これより捕獲し、帰還する』

「マグロじゃねえ!」

「……さすが、うーちゃん。空気読んでんだか読んでないんだか」

「本当に覚えてないのお!？」

響き渡る甲高い声。

テーブルを隔てて真正面からの拗ねた視線に真雪は、わずかに体をのけぞらせた。

気まずさから逃れようと窓の外に顔を向ける。

美冬が救出され、比良坂事務所に帰ってきてから数時間が経過。

ここに漂っているのは日常と言つ名の平穏な空気だった。

「……謝ってんだろーが、さっきから」

「あたしが聞きたいのは謝罪じゃないの! 本当に覚えてないのかつて聞いてんの!」

「だーかーらー」

そこまで言いかけてため息をついた。

言葉を選ぶような無言の時間だけが流れる。

強い口調で問い質す彼女の隣で困った表情を浮かべるノクティルカに助けを求めるように見るが。

「あまり怒ると具合が悪くなりますよ」

「だって! このボケナス、都合が悪くなると覚えてないって言うんだよ!？」

手エ怪我したトコとかは覚えてる癖に!」

「誰がボケナスだ」

「じゃなきゃクソツタレよ!」

美冬はテーブルに手をついて身を乗り出すと、頬を膨らませるようにして睨みつけた。

まるで噛み付きそうな勢い。

けれど、その目には違う感情が見え隠れする。

「だから記憶が抜けてる部分があるつつってんだろ。こっちだって

好きで忘れてる訳じゃねえよ」

「何、逆ギレ？ あんな事しといて忘れたとか信じらんない！」

アレは全部嘘だったとか言うわけえ！？」

「アレってどれだよ。つーか、俺は何したんだって聞いてるじゃねえか」

「…………だ、だから…………っ！ それは、その」

突然、美冬の勢いがなくなる。

口ごもり、顔を紅潮させて目をそらした。

そんな彼女から流れてくる感情は『羞恥』

真雪は何度目かのため息をつくると天井を仰ぐ。

元気なのはいいが、ずっとこの調子で尋問されているのだ。

彼女との間に何があったのかは覚えていない。

気が付いた時は美冬の唇と触れそうな位置にいた。

おそらく彼女と、エニグマの能力 『シノノメ』を発動した自分との間で

何らかの会話等があったのだろう。

聞かれても思い出せそうな気配はなく、一番知りたいのは真雪自身だった。

「あああ、真雪のバカ！ 死ねばいいのに！」

「死ねばいいですよ」

わめく美冬の隣でノクテイルカが頷きながら平然と言う。

なだめようと口を開きかけた真雪の動きが止まった。

「…………待て。美冬はともかく、何でお前が死ねばいいのって言うんだよ」

「それはご自身にお尋ね下さい」

「なんだそりゃ」

「ノクテイルカはね」

首を傾げる動作。

隣に何者かが立つ気配と同時に声が降りてくる。

真雪が首をひねって見上げると、そこに立っていたのは目を細めて笑うダンデライオンだった。

「妬いているんだよ。君がラプターとあんな事になったから」

「だから、あんな事って何よ」

「サーペントの話だと待機中のノクティルカは随分面白かったらしいね。僕も見なかったな」

「……所長」

ノクティルカがダンデライオンを軽く睨んで瞳で何かを伝えようとする。

ややあつて視線をそらし、わずかに息をついた。

「へーえ、妬いてんだ？ 意外と子供なトコあんのね、兄さん」

ダンデライオンから視線を移して意地の悪い笑みを浮かべる真雪。

前かがみになるように膝に頬杖をつき、観察する。

「ラプター、近いうちに2人で夕飯を食べに行きましょうか。ご馳走しますよ」

「わ、ホントー！？ お肉？」

ノクティルカは美冬の方へ体を向けるように座り直し、満面の笑みを浮かべた。

心なしか『2人』という単語を強調しているように聞こえる。

「はい。中津区に精肉店が経営する美味しい焼肉屋さんがあるんですよ。」

特に和牛の評判がいいんです」

「いやーん、ノクティルカさん大好きー！」

美冬が笑顔でノクティルカに抱きつき、胸元に頬をすり寄せた。

そんな彼女の頭を撫でるように手が置かれる。

「……俺は？」

呆れた目で2人を見ていた真雪が自分を指差す。

数秒の間。

美冬は抱きついたままで不機嫌そうな顔を一瞥すると、すぐに上を向いた。

視線に気がつき、見下ろす眼鏡越しの赤い瞳。

「どうしましよつか、ラプター。お邪魔虫さんが来たがってますよ」「どーしよつかのー。真雪は大事なコト覚えてないって言うしなあ」おどけた口調で尋ねられ、大げさに頬を膨らませて顔をそむける動作。

あからさまな拗ねる態度に真雪はノクティルカと顔を見合わせて苦笑する。

何か言いたげな表情のまま、頭を掻いた。

それからダンデライオンに顔を向け。

「親父。俺と美冬、今日休みもらっていいかな」

「別に構わないけれど。どこか行くのかい？」

問いに頷き、伸びをしながら外を眺める。

そこに広がっているのは真新しい空気に包まれた朝の風景。

休日の朝だからだろうか。

人通りはないに等しく、まるで眠っているようにも見えた。

「お姫様のご機嫌取りしてこようかと思っさ」

苦笑みを含む声が答える。

「付き合え、美冬。ちょっと出かけよう」

静かな空気の中で聞こえるのは楽しげなやり取りと落ち着きのない靴音。

開け放たれた窓から入り込む5月の風が、微笑むように部屋を駆け巡っていた。

「海だーっ!」



美冬は手すりに手を置き、身を乗り出すようにしながら目を細める。目の前に広がるのは海と灰色がかった空、そして眼下に広がる公園の緑。

ビルの群れとこの臨海地区を繋ぐレインボーブリッジを眺める美冬の横顔は嬉しそうだった。

「……………そうね」

「夜景も綺麗だけど、昼間もいいよね。お天気もいいし！」

「ああ」

真雪は手すりに背を付けたままで行き交う人の波を眺めていた。繰り返す、気のない返事。

ため息混じりのその顔はどこか疲れているようにも見える。

「ちよつとお。せつかくのお出かけなのに、何シケたツラしてんのよ」

にわかに強く吹いた風にワンピースの裾を押えながら唇を尖らせた。隣に佇む脱力する真雪に身体をぶつけないながら。

「ちよつと聞いてくれ、美冬」

「何よ」

「真雪君はほぼ徹夜状態でお姫様を助けに行っていました。」

お姫様は怪我一つなく無事でしたが、何故かご機嫌斜めです」

「……………あんたのせいでしょうが」

2人を包むのは楽しげな喧騒。

天候に恵まれた日曜日だという事もあり、家族連れやカップルを数多く見かける。

真雪は軽く睨まれ、苦笑を浮かべた。

「そこで真雪君は機嫌を直してもらおうとデートに誘いました。」

風呂に入って着替えるだけだと言うのにお姫様は1時間半の遅刻。ありえませんか」

「しょうがないでしょ。服選ぶのに手間取ったんだもん！」

「心の広い真雪君はそれしきの事ではキレません。」

気を取り直して、可愛いお洋服を着てきたお姫様にどこに行きたい

のか聞きました」

不満そうな視線に、なだめるように手のひらを向ける。笑いを含んだ声で話しながら空を仰いだ。

「真雪君は無難なセンでテーマパークか映画辺りだろうと想像していましたが、

さすが猛牛は一味違います。大相撲春場所と寄生虫博物館を挙げてくださいました。」

デートで行く所でしょうか？ 更にありえません」

「うっさいな！ お前、寄生虫なめんじゃねーぞ！」

「でかい声で言うなよ、んな事。」

……さて、以上の点を踏まえて問題です。可愛いそうなのはどっちでしょう」

その問いに、同時に自分を指差す。

顔を見合わせて眉間にしわを寄せた。

「俺だろ、どう考えたって」

「被害者ヅラしてんじゃないわよ、この乙女野郎。」

そりゃ遅刻したり助けてもらったのは確かだけどさ」

語尾が次第に小さくなっていく。

袖口のフリルを指でいじりながら美冬が不満そうに口の中で何かを呟いていた。

「『せつかく真雪と出かけるんだから可愛い服着たいじゃんか』？」

「なっ！」

ゆるくウェーブがかかった翡翠色の髪に手を置き、真雪が顔を覗き込みながら言った。

美冬の顔に朱が差す。

驚いたように見上げて言葉を失う様子に小さく吹き出した。

「なんで、それ……っ！」

「お前が考えてる事は分かるんだよ」

横顔が笑みを浮かべたままで。

美冬は何かを言おうとしながらも言葉を見つけれないまま口だけ

を動かす。

そして諦めたように視線をそらし、風で揺れる木々を見つめた。

エニグマのせいだ、と心の中で呟く。

それは『シノノメ』と『ヨイ』から成り立ち、2人で一つといわれる能力。

感じるもの全てを共有し、まるで相手が自分の中にいるように。

景色、感情、痛みをはじめとした感覚も分かっってしまう。

隠し事をしているつもりはないが、何から何まで相手に伝わる事に抵抗を感じた。

曖昧になる境目に美冬は戸惑い、怖くなる。

「それにしても気持ち悪いよな。エニグマっつー力は」

眉をしかめて首を傾げる仕草。

「たまーにさ、こっ普通に見ても違う景色が見えたりするんだよな。」

喋ってねえのに、急に美冬の声が聞こえたりとか」

「四六時中じゃないだけマシだけど、すごく違和感あるね。今だつて……」

そう言いかけて口をつぐむ。

隣にある白い包帯が巻かれた右手を見つめた。

美冬の手伝わっているのは波のように繰り返し感じる鈍い痛み。

それは紛れもなく真雪の傷の痛みだった。

「……別にお前が責任、感じる必要はねえんだぞ」

「でも」

「俺がやった事だろ。お前は悪くねえよ」

視線に気付いた真雪が真顔で見つめる。

木で作られた歩道を歩く、数多くの足音で声がかき消されそうになっていた。

まるで周囲の人間には自分達など見えていないように、どの顔も笑

み混じりで。

その中で美冬はため息をついて俯く。

「あたしがチャリオットに捕まらなければ真雪は怪我しなかったじやん。」

うつん、それだけじゃない。みんなにも迷惑かけないで済んだ」

「そんな事言ったらキリねえだろうが。かすり傷みてーなモンだから心配すんなよ」

「こんなに痛いのに、かすり傷なワケないでしょ」

日差しに暖められた微風が頬を撫でる。

たしなめるように睨む視線にため息混じりの苦笑を漏らした。

遠くで水面が光を受けて輝くのが見える。

「強がりが通用しねえのも考えモノだわ」

誰ともなしに呟く声。

「でもな」

真雪は髪をかきあげ、正面に顔を向けたままで瞳だけを動かす。

不意に視線がぶつかった。

「お前が無事なら、この位の怪我なんて何でもねえよ」

どこか照れた様に肩をすくめて笑って見せる。

通り過ぎる風に髪やワンピースの裾が揺れた。

「ありがとう」

見上げる顔が困った色を滲ませながらもつられて口の端を上げる。

そして何かを思うように目を伏せ、今度はからかいの色を含んだ表情で覗き込んだ。

数秒の無言。

堪えきれない笑みを押し殺し。

「『礼を言われるような事してねえし、本心なんだけど』って？」

「……人の心ン中、勝手に読んでじゃねえよ」

薄笑いを浮かべる美冬が小突こうとする手を避けた。

声を上げて笑う顔につられて真雪も同じ表情を浮かべる。

そして、手すりから背をはがし背筋を伸ばす仕草。

「さて、どっか行くか。ずっとここで話してるのもつまらねえだろ」「そだね。真雪はどこか行きたい所とかある？」

「んー、俺は特にねえけど美冬が……」

言いかけた言葉が止まる。

美冬が腕に触れると同時に、真雪は弾かれたような反応。

その様子に美冬は一瞬手を引つ込めた。

「真雪？」

前触れなく訪れた変化に戸惑う。

隣から身を乗り出し窺った。

目が合い、見つめ合った瞬間。

真雪は目を見張り、顔を赤くした。

「ど、どうしたの？」

一歩踏み出しかけた足は止まり、口を押さえて固まる。

心配そうに覗き込む美冬と顔を合わせようとせず。

気まずそうに視線を泳がせて顔をしかめた。

「ちよつと。真雪、大丈夫？」

「い、いや。何でもねえ」

絞り出すように答える声。

取り繕うように何度も頷くが、心ここにあらずといった風だ。

真雪は必死で平静と保とうとしていた。

美冬に触れられ、顔を見た瞬間に視界に飛び込んできたのは。

数時間前に見た廃校の教室、間近で笑う自分の顔、左手薬指に口付けるシーン。

それだけではない。

鼓動や声、指を舐める感触、唇に触れる体温でさえも生々しいほど鮮明に。

これは美冬の記憶であり、抜け落ちた意識の空白部分。

その結論に行き着くまでに時間はかからなかった。

「……………何してんだ、俺……………」

無意識のうちに言葉が漏れる。

「そりゃ美冬が怒っても仕方ねーわな」

「へ？ 何が？」

周囲の人間が無関心を装いながら好奇の視線を向けるのを気にする余裕はない。

手すりにもたれて、うなだれる真雪の腕を美冬が揺さぶる。

しかし、深く息をつきながら一人ごちるばかりで返答はなかった。

「美冬」

「ん？」

発せられた声は小さく、聞き漏らさないように顔を近づける。

「俺を一発殴ってくれ」

「はあ！？ 何、そのマゾ発言。ちょっと、何で赤くなってるの！？」

頓狂な声を上げて顔を歪める美冬。

目が合っても、すぐにそらされる。

言葉を選ぶ沈黙ばかりが押し寄せ、会話は表れた側からたちまち消えた。

「つーか、しばらく俺の方見ないで……………」

「全然意味が分かんないんだけど！ なんかム力つくわね」

赤い顔のまま弱々しく呟いたきり、真雪は手すりに突っ伏す。

何かに耐えているようにも何かを悔いているようにも見える姿。

美冬は状況が把握できないまま、取り残された気分になっていた。

「えーと、つまり」

海岸に沿うようにして作られた公園の遊歩道を歩きながら

美冬は宙を睨んで額に指を当てる。

止まりそんな速度で歩く2人の横を数人の子供が歓声を上げながら通り抜けていくのが見えた。

思わず目で追っていたそれから視線を隣へ移す。

「あたしと目が合った瞬間に、シノノメだった時の事を思い出したの？」

「いや、正確にはお前が見たモンとかが俺に見えたって事だな。

景色だけじゃない、舐めた感触とか温度とか全部分かった」

「ちょっと！　そういう事言わないでよ！」

怒鳴り声と共に腕を何度も叩いた。

真雪は髪をかき上げようとしたポーズで止まったまま、深く息をつく。

疲れたように力なく歩く足。

顔は手で遮られ、表情をうかがい知る事はできなかった。

「……………ごめん」

長い無言の時間の後に吐き出す、躊躇いが混じる声。

美冬は無言で顔を向ける。

どちらからともなく立ち止まった。

周囲の空気が変わっていく。

「マトモな状態じゃなかったとは言え、あんな事するなんて最低だよな。」

お前が怒るのも無理ねえわ」

霞んで見える天を刺そうとするかのようなビル群と長く伸びるレインボーブリッジ。

遠くの商業施設から音楽やアナウンスがすり抜けていく。

まるで全てが作り物であるかのような錯覚。

「何言っても言い訳にしか聞こえねえだろうけど悪気はないんだ。

お前を傷つけるつもりも、そういう欲求を満たそうとしたつもりもない。

覚えてねえクセに何が分かるって感じだけだ」

真正面から見上げてくる視線から逃れたいのか、真雪は顔を上げよ

うとしなかった。

言いずらそうに途切れがちな言葉を紡ぐ。

「本当にごめんな。どんな状況であれ全面的に俺が悪……」

「嘘なの？」

美冬の問いが真雪の語尾と重なった。

驚いた拍子に視線がぶつかる。

遠くに聞こえる足音や人の気配が全て消えていく。

「シノノメとしての真雪が言った事とか、した事は全部嘘なの？」  
言いかけて、止まる唇。

「……あのキスは何？」

怒った風でも、問い質す風でもなく。

美冬は真雪の腕に触れて静かな口調で尋ねた。

大きな声ではないはずなのに、妙に耳に染み付く。

頭上の太陽は地面に一つの影を作った。

日差しの暖かさでさえも感じる事は出来ない。

「どんな状態であれ、俺は俺だよ」

「答えになつてない」

軽く睨むような視線を送ると目の前の顔は困ったような表情を浮かべた。

おそらく、どう答えていいのか迷っているのだろう。

「……嫌いだったら、そんな事するワケねえだろうが」

「じゃあ、嫌いじゃなかったら誰とでもできるんだ」

不貞腐れた響きを持つ、吐き捨てた言葉に美冬が目をそらしたまま  
で言った。

真雪は苛立ったように髪を乱暴に掻くと何か言いたげに息をつく。

2人も周囲の景色も、全て止まってしまったかのようだ。

「馬鹿、何でそうなるんだよ。言わなくても分かるだろ？」

「分かんない」



「分かれよ」

「分かんないもん」

頬を膨らませるのを見て真雪は苦笑した後、横を向いて顔をしかめた。

何かを考えているかのようにつくりと瞬く。

「お前、何が何でも言わせたいらしいな」

「だって」

「困ったもんだ、この理解力のねえ相棒は」

「殴るわよ、真雪」

美冬は真雪の腹部を殴る真似をしながら軽く睨みつける。

しかし、自分を見つめる赤紫色の瞳が真剣な色を宿しているのを見つげ。

息をひそめて黙り込む、言葉を待つように。

人影はなく、周囲を包んでいるはずの木々や水の声も耳に入らない。ここがどこであるかという事も忘れてしまいそうな気がした。

「美冬。あのな」

突然、真雪が何かを思い出したように口をつぐんだ。

美冬を見つめたまま表情をわずかに曇らせる。

訪れた静寂。

真雪は言いかけた言葉を飲み込んだ。

気持ちに嘘はなく、それを伝えるのも簡単かもしれない。

告げれば今までの関係が壊れてしまうかもしれないという不安以上に彼を躊躇させたのは。

ノクティルカの想いを知り、悩んでいた彼女の姿が脳裏に蘇ったから。

自分が伝えれば、また悩ませてしまうだろう。

いや、前以上に辛い顔を見る羽目になるのではないかと。

「……悪い。やっぱり何でもねえ」

向かい合っていた状態から、真雪は逃れるように海の方へと向き直る。

水上バスが横切っていくのが見えた。

平静を装う横顔。

美冬は首を傾げて不審な目で見上げ。

「言いかけて止めるな!」

「気が変わった。これは俺の心の小箱に閉まっておくわ」

「やだ、言っつてば! 気持ち悪いよ。気になるじゃん!」

地団駄を踏んでいた美冬が目の前黒いジャケットを掴んで身体を揺さぶる。

まだ何かを考えているのか、抗う様子もなく真雪はされるがままの状態で。

「言わないと痛い目に遭うぞ」

「へえ。例えば?」

「真雪の死神用のスーツが全て省エネ仕様になります」

「うわ、半袖スーツとかマジで勘弁してくれ」

レンガが敷き詰められたどこまでも続く歩道。

十数メートルほど離れた地点には撮影スポットにもなっているモニユメントがある。

そこに人々は集まっているらしく、賑わいの気配を感じた。

苦笑を浮かべた横顔はその方向を見た後、美冬に視線を戻す。

どこか思いつめた色が見え隠れしたのは気のせいだろうか。

「聞いたら後悔するぞ、お前」

「しないもん」

「言ったな。絶対に?」

「おう」

大きく頷く。

真雪は一步踏み出すと美冬と再び向かい合った。

ためらい、視線がさまよう。

相手と自分の感情が入り混じり、どれが自分の物か分からなくなる。

緊張が感染したように鼓動が早まっていた。

「1回しか言わないからな」

その声に宿る感情は何であるか分からずに上の空で頷く。息苦しさを感じた。

毎日のように顔を合わせ、いろいろな表情を見ているはずだった。けれど、真雪のこんな表情を見るのは初めてだと美冬は心のどこかで思う。

切なさと何かが入り混じる、いつもよりも大人びて見える表情。

「シノノメでも、いつもの俺でもお前に嘘はつかない」  
内側で不安が暴れる。

これは自分の物が、流れ込む相手の物が。  
見つめた先で小さく微笑む瞳。

「俺は、お前が……」

瞬間。

脳天から足元まで一気に突き抜ける寒気。  
刺すような臭気を感じて我に返った。

視線を感じる。

人のものではない、これは

「イレギュラー！」

美冬の表情が一気に険しくなり周囲を鋭い眼差しで見渡す。

「近い。しかも狙われてる」

肌を刺すような殺気を感じ、注意深い動作でバッグの中から手袋と携帯電話を取り出した。

周囲が凍りつくように張り詰めていくのが分かる。

まるで自分達以外は全て静止しているのではないかと思うほど。

「気配は一つ。多分あたしの斜め後ろ……あの茂みの中」

唇を噛んで、視線だけを後方に投げるが。

見えるのは不自然に揺れる一部の緑のみ。

あの木立の向こうにイレギュラーが息を殺して窺っているのだろう、おそろく。

「ね、真雪」

「……前回といい今回といい、絶対世界単位で拒否られてるとしか思えねえ」

「ここだと人の目があるから誘導した方がいいよね。どこかあるかな、人のいないトコ」

「今度こそ立ち直れねえよ、俺」

「……って、ちよつと聞いてんの!? 何してんのよ、あんた!」  
返事がない事を不審に思った美冬が振り向いて怒鳴る。

そこに居たのは。

膝を抱えるようにしゃがみこみ、硬いレンガに指で何かの模様を書き続ける真雪だった。

「美冬、俺もう帰りたい」

「何言ってるのよ!」

「俺が振り絞った気合とか勇氣とか、その他もろもろ返せ」

「いじけてないですよ! イレギュラーがいるんだってば、もう!」

地面を見つめたまま拗ねた口調で呟く真雪の腕を掴んで立ち上がらせようとするが微動だにせず。

焦ったように茂みと真雪を交互に見比べた。

「こいつ、話忘れてんだろうなあ。しかも絶対気付いてないんだぜ? ありえねえ」

「ああああ! もう、早く動いてってばー!」

丸みを帯びた風がすり抜けていく。

降り注ぐ日差しで溢れた景色の中で、美冬の苛立った声だけが響いていた。

起動したノートパソコンが低い唸り声を上げている。

ディスプレイに映し出されたインターネット電話サービスのアプリケーション。

この実態のないプログラムで海の向こうにいる人間と話せる事をいまだに祐一は不思議に思っていた。

「こんな時間まで起きてるなんてどうしたんだよ。寝てないの？」  
通話が繋がると同時にいぶかしげに尋ねる。

反射的にパソコンの向こうに見える2台の目覚まし時計に視線を走らせた。

それぞれ別の時間を刻む針。

見る度に地球の裏側の知らない景色に思いを馳せる。

「んー、何だか眠れないの。眠くなるように本読んでたら逆に目が冴えちゃって」

「馬鹿だな。そんなの当たり前じゃん」

「しかも一冊目読み終わって次の本読み始めちゃったし。何やってんだろ、私」

耳に装着したヘッドセット越しのくぐもった声がため息をついた。

どんな表情をしているか見えるように思わず苦笑う。

彼女 亜矢がいるニューヨークは5時34分。

これから落ちていく闇とは逆に、向こうは眩しい朝を迎えているの  
だろう。

「祐一は何してたの？ もう歌いに行ってるんだと思ってたよ」

「んー、適当にメシ食ったりとかしてた。

出る前に声が聞きたくなってパソコン付けたんだけど、ラッキーだったな」

「……珍しいね。祐一がそんなコト言うなんて」

「そう？」

心底意外そうな口調。

祐一は椅子に座ったままで背を伸ばすと呻きながら尋ねた。

「うん、いつもは私の方がそうやって言うのに。嫌な事でもあった？」

「別に何も無いって。俺だってそう思う時くらいあるよ」

服や楽器、雑誌で溢れた部屋にいるのは1人だ。

けれど、誰かが自分のついた嘘を聞いている気がして誤魔化すように笑う。

視線をディスプレイから落とし、デスクの上に放り出された携帯電話を手に取った。

今日は5月17日。

いつか夢の中で黒いスーツ姿の死神と名乗る青年から告げられた死亡日だ。

普段なら夢なんてすぐに忘れそうなものなのに

まるで瞼の裏に焼き付いたように鮮明に覚えていた。

あんなのは嘘だと言い聞かせても不安ばかりが募る。

何をするのも最後かもしれないと思っでは、どこか上の空で。

平静は奪われ、普段の自分はどこにもいなかった。

「あ、CD届いたよ！　ありがと、すっごい良かった！」

無意識に考え込んでしまいそうになる沈黙を破ったのは、亜矢の嬉しそうな気配。

「本当はデビューしてからと一緒に送ろうと思ってたんだけど。

それ、インディーズでの最後のアルバムだから早く聞かせたかったんだ」

「『今回は自信作！』って言ってたもんね。5曲目の……えーと、ドリーマーが好きだな。

すごく共感できるし、私も頑張ろうって思ったよ」

弾む口調に息をつくように笑みを浮かべた。

窓に広がる、家々から漏れた灯りと人の気配に目を細める。  
頬杖をついた姿勢のまま。

「祐一の歌はポジティブで優しいから大好き。祐一からも歌からもたくさん元氣貰ってるんだよ」

「ん、ありがとう」

「……祐一は夢叶えたんだもん。今度は私が頑張って叶える番だよ  
ね」

心なしか、どこか寂しげな色が混じった気がした。

まるで言い聞かせるような、自分を奮い立たせようとする響きに軽く眉をしかめる。

思わずヘッドセットに視線を向けた。

「どした？」

「え、うーん……思いつき落ち込むような出来事があったってワケじゃないんだけど。」

なんかね、ちよっと考えちゃったの」

声のトーンが変わっていく。

ため息と苦笑の混じる声が躊躇っていた。

「したい事と出来る事は違うっていうか、私はお芝居の才能がないんだらうなあって。」

頑張ってるつもりでも周りとの差がどんどん開いちゃってる気がしてね。

ちよっと、心が折れそうになったっていうか」

彼女は泣いているのだろうか、それとも必死で堪えようとしているのだろうか。

祐一は唇を噛んだままで無言で耳を傾けた。

「こっちに来て良かったのか分かんなくなっちゃったんだ。」

もしかしたら日本に帰った方がいいのかも。そしたら寂しい思いなんてしなくて済むし、

趣味でも演劇は出来るんだしさ」

「らしくねーぞ、亜矢」



「……帰って、祐一のお嫁さんにしてもらった方が幸せなのかもなあ……」  
漏れた独白が心の中に波紋を生み、祐一は動きを止めた。  
その言葉に抵抗を感じるわけではない。

脳裏に死神の姿と言葉がよぎる。

「あ！ や、やだ！ ちょっと引かないでよ、もう冗談なのにー！  
て、ていうか変なコト言っちゃってごめん。私らしくないよね、こ  
んなの」

押し黙った様子に亜矢が慌てた様子で取り繕うように早口でまくし  
立てる。

笑おうとしているらしいが、その声は不自然に聞こえた。

「いいよ」

「え？」

「俺のお嫁さんになる？」

祐一は小さく笑いながら椅子を回転させて身体を伸ばすと写真立て  
を手に取った。

写っているのは彼と、電話の向こうで驚いたように息を飲んでい  
らしい亜矢。

「あのさ、才能って自分で決められるモンじゃないと思うんだけど」

「……」

「自分は自分だ。納得できる所までトコトンやってみろって言うて  
くれたのはお前じゃんか。」

俺は亜矢が居たから頑張れたんだし、諦めなかったんだよ？」

目を伏せ、まるで写真に語りかけるように。

遠くで電車が走り抜ける音が聞こえ、咄嗟に壁にかかった時計を見  
上げる。

「本当に辛くて、もう充分だって自分で納得したならいいと思うけ  
どさ。」

でも後悔するような妥協は絶対にしちゃダメだ」

「うん、そっだね」

「お前は、すっごい輝いてるモン持つてんだから俺的には諦めて欲しくない。  
もったいないよ、それをずっと隠したままなんて」  
詰まりそうになる言葉を無理に吐き出す。

自分の見た夢や死ぬかもしれないという事を亜矢に言おうか、祐一は迷っていた。

けれど言ったら笑われるだろうと。  
笑われるだけならいい。

離れた場所にいる彼女に言って不安な思いをさせたくはない。  
まだ決まった訳ではなく、単なる夢だと何度も言い聞かせながら。

「これから何があっても負けるんじゃないぞ。

俺はやりたい事に夢中になって、夢追っかけてる亜矢が好きなんだからさ」

「……祐一？」

亜矢が怪訝そうに問いかけても返事はなかった。

何かを思っような無言の時間。

平静を装っものの、2人の胸の中に不安ばかりが広がっていく。

『卑怯者ー!!』

耳にあてた携帯電話から聞こえてきたのは、思わず遠ざけたくなるような美冬の怒鳴り声だった。

真雪は歩きながらため息をつく。

まばゆい光で溢れた繁華街も一歩路地に足を踏み入れれば心細くなるほど暗く、静かだ。

『おトイレ行ってる間に出かけちゃうなんて卑怯だぞ、バカ真雪!』

「……お前がウンコしてんのが悪いんだろ」

『ウンコなんてしてないもん！ バーカバーカ！』  
呆れた顔が苦笑を浮かべる。

今にも嘔みつきそうな勢いの美冬は電話口で拗ねた表情を浮かべているのだろう。

聞き取りづらい声の大きさを何かを呟いているのが聞こえた。

「あのな。何度も言ってるけど、これは死神の仕事だから……」

『関係ないって言うんでしょ？ どーせ、あたしは死神じゃないし何も出来ないわよ！』

悪かったね、足引つ張る事しか出来なくて』

言いかけた言葉に重なる不機嫌な声。

そして内側に響いてくる、もどかしさと苛立ちは美冬's 感情なのだろう。

怒りは真雪に向けられているのではなく自分自身に向けられている事に気付いた。

「違うっつーの」

両側から迫る、店舗の裏側部分に視線を向けながら口元に笑みを浮かべる。

「そついうんじゃねえよ。お前が見る必要はねえって話」

湿気を含む重い風が髪を乱しながら通り過ぎていった。

昼間の日差しの暑さが嘘のように肌寒ささえ感じる。

響く靴音一つ。

「好き好んで辛い目に遭う事ねえだろ。こんな思いするの、俺だけで充分だ」

『でも1人で抱える必要もないじゃん』

「気持ち嬉しいけど、マジで大丈夫だから」

一瞥した腕時計は20時10分になろうとしていた。

事前に知らされた目的地へは、地下道を通れば3分ほどで着くはずだ。

死亡宣告の際にターゲットは五条駅で歌っていると話していた。

おそらく彼は今日も歌っているのだろう。

「ありがとな、美冬」

『うっん』

何か言いたげにしながらも頷く美冬に目的地が近いことを告げて電  
話を切る。

携帯のディスプレイを眺めたままで軽く息をついた。

真雪の顔から感情は消え、その瞳には冷たさが宿る。

それはまるで、自分を守ろうとしているかのように。

五条駅西口は待ち合わせや、帰路につく人々で溢れていた。

真雪は瞳だけを動かして周囲に視線を巡らせる。

学生らしいグループ、バスを待つ列、車のクラクションに混じって  
聞こえる嬌声。

そして、一角に何かを囲むような人垣を見つけて動きを止めた。

離れた位置から観察しているとギターの音と拍手が耳に飛び込んで  
くる。

通り過ぎる人は一様にそこで何を行われているのかと顔を向けてい  
た。

その隙間に見えたのは、見覚えのある人懐っこい笑み。

間違いない、彼は尾上祐一だ。

真雪は顎を引くように頷くとその方向へとゆっくりと歩き出した。

「……から、まだここで歌うって！ 誰だよ、俺が五条からいなく  
なるとか噂流したヤツ！」

人の輪から少し離れた位置に立つと、祐一の声が聞こえる。

それにつられるように起こる笑い声。

「五条以外に行く場所なんてないのにさ。追い出されたら泣くぞ」

「えー、でもユーさんデビューするんでしょ？」

「それはそれだよ。俺、出来る限り歌いに来るつもりだもん」

ギターを抱えた祐一は最前列でしゃがみこむ学生らしい女に笑った。  
肩越しに地面に置かれたギターのケース、立てかけられたCDケー

スが見える。

真雪の位置からでは判別できないが彼の前に置かれたボードには名前等が書かれているようだった。

「さつてと！」

視線が腕時計に向けられ、気を取り直すような声を出す。

「いい時間だし、そろそろ最後の曲にいつちゃおーかな」

死期の近い者がまとう、白いベールの奥で笑った。

真雪は黙ったままで彼を見つめる。

死亡宣告など覚えていないような様子に、わずかな戸惑いを感じた。

「……俺、歌えるの幸せだと思ってるのね。」

それだけでも充分なのに、聞いてくれる人がいるなんてマジで幸せ者だよ」

わずかな空白の後、俯き加減で笑うと静かに切り出す。

「どうしたら色んな人ありがとうって気持ち伝わるかなって思った時に

やっぱ歌だつて事になって。結局俺はソレしかないし、それが一番

だと思っしよ」

真雪は目を伏せて耳を傾けていた。

手持ち無沙汰に指が弦を弾く音が聞こえる。

「だから新しい曲作ってきた！これは今日しか歌わない。

でも、だからこそ全力で歌う！」

まるで迷いを断ち切るように顔を上げて笑う祐一。

周囲には夜の気配と相変わらずの街の息遣いが広がっている。

彼はキャスケットを深くかぶり直すと、空を仰いだ。

「今まで応援してくれた人、聞いてくれた人ありがとうの気持ちを込めて。

みんなが毎日ハッピーに、笑って過ごせますように！」

時刻は20時17分　あと6分。

せわしない雑踏に溶けていくようにギターの音色が静かに流れていく。

遠くに聞こえる大型店舗の店内アナウンスも、車の行きかう騒音も耳に入らなくなった。

人垣は無言のまま祐一を見つめる。

『変わらない毎日 当たり前に来ると信じてた君とした馬鹿話 下らない事で笑い転げて』

ゆっくりとした旋律に声が重なり、周囲に広がった。

大きな音ではないはずのそれらがすべての音を飲み込んでいくように。

シャツの裾や髪を揺らす風の感触を楽しむかのように目を伏せる。その横顔は笑っていた。

『明日 君に会えないと知っていたら』

ありがとうって いっぱい言ったのに』

人の輪が厚くなってに気がつく。どうやら帰宅途中の人影が声に引き寄せられるように立ち止まっていた。

言葉もなく、そこにたたずむ。

『大事な事は後回し』

言わなくても 通じると思った』

祐一の笑顔は楽しさの中に何かが含まれていた。

どこか寂しげで切なさが見え隠れする。

食い入るように見つめる真雪の瞳。

耳を傾けながら、考え込むように。

『ありがとうなんかじゃ足りないよ』

不意にまっすぐ前を向いていた祐一が何かに気づいたように視線を動かした。

わずかに動きを止めた空白の後、屈託なく笑う。

その視線の先に居たのは無表情のままに人に紛れて立つ死神。

柔らかな色に囲まれた一点の黒は異質であり、浮いていた。

だが、その光景を当たり前のように眺める。

何故そう感じたのか、祐一自身にも分からないままで。

『僕は君の幸せでしたか 君は僕の幸せでした

この声は届きますか 君に伝わっていますか』

張り上げる訳でもなく見えない誰かに語るような歌声。

無意識のうちに聞き入り、引き込まれてしまう。

時さえ止めた。

世界で声を発しているのは彼だけなのではないかと言う錯覚を覚える。

『ありがとう ありがとう』

真雪は視線をそらす事も出来ずに祐一を凝視し続けていた。

心底、歌う事が好きなのだろう。

どこか潤んだ瞳を遠くへ向けたままで微笑むように歌っている。

何故これから死に逝くのに、そんな風に笑えるのか。

真雪は死神である事も忘れて立ちすくんでいる事に気付いて我に返った。

彼は死亡宣告をいまだに信じていないのかもしれないと思いかけて、打ち消す。

いや、彼は漠然とした確信を持っているのだろう。

その証拠に死神である自分が現れても驚くどころか笑っていた。

そして真雪は知っていた。

彼の目に切なさや諦め、覚悟に似た光が宿っている事を。

『どうか僕が消えても 君は笑って』

歌声が消えていき、それと同時に名残惜しそうなギターの音色が止む。

場が一瞬の静寂に包まれた。

そして、弾かれたように生まれる拍手の波。

祐一は深く頭を下げたまま固まったように動かなかった。

もう、彼の姿は分厚いボールに阻まれて真雪の目には映らない。

「……10秒前」

やむ気配のない拍手の中で真雪の唇が動く。

風に乱れた髪で表情を知る事は出来ないが、俯いて腕時計を見る姿はうなだれているようだ。

痛みを堪えるように唇を噛む。

まるで周囲の人間の嬉しげな表情とは真逆だ。

祐一に対する賞賛の言葉が聞こえる度に心に影が落ちる。

「やー、もう思い残すことないや」

頭を下げた姿勢のまま、呟く声は周囲に届いたのだろうか。

「3」

「……あ。一つだけあった、心残り」

「2」

「もう1回だけ、5分だけでもいいから会いたかったな……」

「1」

無感情な声と涙の混じる半笑いの声が絡み合うように。

真雪は祐一の独白を聞いた気がした。

距離にして数メートル、拍手に飲まれて聞こえないはずなのに。

「ゼロ」

その言葉と同時に祐一の身体は見えない手に引っ張られるように倒れた。

沸き起こる叫び声と空気を揺らすざわめき。

人の波が一瞬広がり、慌しくなる。

乱れる靴音、驚きの表情を浮かべる人垣の中で真雪だけが暗い表情を浮かべていた。

地面に転がったキャスケット、その近くでうつ伏せのまま動かない祐一。

半狂乱の叫び声と判別不能の泣き声が混じり、五条駅は騒然として



いる。

「5月17日 20時23分、確認完了」

視界の端に紺色の警察官の制服が見えた。

真雪は深くため息をつくとき、何か見てはいけないものを見たように祐一から視線をそらし。

混乱の輪から離れる靴音。

闇の中に溶けていくようにその場を立ち去った。

数分歩いた頃だろうか。

人目を避けるように、あてもなく歩いていた真雪の足が止まった。

俯いた視界に見えた見慣れた靴。

まるで自分の行く手を阻むように正面に立ちはだかっている。

思わず顔を上げると。

「お疲れ様」

夜と同色のスーツを着た美冬が口元だけで微笑んでいた。

「あー……」

「どこ行こうとしたの？ 事務所？」

「いや、事務所に戻る気はねえんだけど」

話すのも億劫に感じる。

真雪は黙りがちになってしまふ重い口を無理に開いた。

美冬の言葉に辺りを見渡すと、ここは比良坂事務所に程近い線路沿いの公園。

まっすぐ帰宅する気にならず、歩いているうちにここに来ていたらしい。

「聞かねえんだな。仕事は終わったのかとか、どうだったかとか」

「分かってるもん。聞く必要ないでしょ？」

「……っーか、俺の居場所よく分かったな」

「だからそれも分かっているっーの。あたし達を何だと思ってるの

よ

呆れたように息をついて眉を寄せた。

上の空の、沈んだ声。

目の前にいる真雪はいつもより反応が鈍く、ひどく疲れた空気を発散している。

美冬は心配で真雪の様子を見に来たものの、かける言葉が見つからずに押し黙った。

エニグマの能力は1人の路上ミュージシャンが倒れる瞬間、

真雪の動揺や苦しみまでも鮮やかに映し出す。

以前なら何も知らずに励ませたかもしれない。

けれど自分の痛みのように知ってしまった今は、そんな事が出来るはずもなく。

歯がゆい気持ちで彼を見つめる事しか出来なかった。

公園と道を仕切る柵にもたれ、2人は無言で佇んでいた。

顔を見合わせる事もなく同じ方向を向いて。

「真雪」

長い沈黙を破ったのは美冬だった。

目の前を通り過ぎる人影を眺めていた真雪が力なく視線を向ける。

「あたしじゃ力不足かもしれないけどさ、出来る事あったらなんでも言つてね」

言葉を選んでいるのか途切れ途切れに言葉を紡いだ。

おそろおそろといった風の口調とは裏腹に、その視線は訴えるように強い。

「気の利いた事とか言えないし何か出来るワケでもないし。

気持ちばっか空回りしてて迷惑ばっかかけてるけど、少しでも力になりたいんだ」

動きを止めて見つめる視線から逃れたいのか美冬が目を伏せる。

「……馬鹿だな、俺は」

「え？」

「心配かけたくねえのに、結局心配させて気イ遣わせてるし」  
自嘲気味に口元を歪めて息をついた。

真雪の手が伸び、美冬の頭を乱暴に撫でる。

抗議するような上目がちの視線を向けられて小さく笑った。

「もー、こればかりは仕方ねえって分かってんのよ。」

死神なんて人が死ぬのを見るのが仕事だし、かと言って慣れるのも難しいしな」

ここはまるで隔絶されたような場所。

聞こえるのは駅からのアナウンスと他人事の街の賑わい。

すぐ近くにある外灯が緑に隠されて薄暗く感じた。

「親父にも閻王にも見るとか考えるなって言われてるけど、そんなの無理だし。」

俺には割り切る事なんて出来ねえよ」

「真雪」

「分かってんだわ、どうしようもねえって」

不意に真雪が美冬を見た所で止まる。

「……お前が泣きそうになってどうするんだよ」

「だ、だって」

「しよーがねえなあ、もう」

真雪は髪をかき上げて苦笑を浮かべた。

座っていた柵から腰を上げると、ストラックスを手で払う仕草。

美冬の方に身体を向ける。

「俺は美冬がそんな風に思ってくれただけで本当に助かってるんだ。  
っーか、いてくれるだけで充分なんだけど」

「どうして？」

「どうしてって……どうしてだろうなあ。」

分かってくれる人間がいるのって心強いつーか、それだけで気持ち  
ちが違うモンなのよ」

強く吹いた風の中に死臭を嗅いだ気がした。

線路を隔てた向こうに見えるネオンの海を見て眩しさに目を細める。  
「お前は力不足なんかじゃない。自分が思ってるよりずっと仕事してるぜ？」

「そう、なの？」

「ああ。だからそんなシヨボい顔するのはやめなさい。美人が台無しよ」

おどけたように顔を覗き込まれて、美冬は思わず笑みを漏らした。それを見た真雪は安心したように息をつく。  
ややあつて気配が離れ。

「さて、と。俺はそろそろ帰るとしますかね」

「うん」

「今日は徹夜でパンとケーキ作りまくる。気分転換しないとな」

「いつもの『復活の呪文』だね」

美冬の言葉に頷く顔。

身体を駅の喧騒の方に向けると、振り返るポーズのまま止まった。

「美冬は事務所に戻るんだろ？ 送って行こうか」

「いいよ、すぐそこだし」

「前みたいな事があつたらどうするんだよ」

「大丈夫だつて！ いくら何でも、こんな街中でチャリオットだつて行動起こせないでしょ。」

真雪こそ、大丈夫なの？」

二人で顔を見合わせる。

どこか疲れた雰囲気と沈んだ瞳の色を見る度に不安を感じた。

本人の口からどんな言葉を言われても、疑いの目で見てしまう。

「……それは俺が乙女っばいから、さらわれそうだとも言いたいのか？」

「違う！ 落ち込んでるし疲れてるみたいだからって話だつてば」

「大丈夫だよ。お前の顔見たから」

笑いを含んだ声がそう言い残して黒いスーツが離れていく。

背中を向けたまま包帯が巻かれた右手を上げると軽く振った。

美冬は眉間にしわを寄せた状態で言葉もなく見送る。  
言葉の意味を考えているのか、首をゆっくりと傾げながら。

遠ざかる死神の後姿を見送りながら唇を噛んだ。

胸の中にあるのは空しさと疲れ、苦しさ。

「……………そうやってすぐ平気なフリするんだもん」  
独りごちた。

痛みを堪える表情を浮かべて深く息をつく。

ややあって、美冬はきびすを返すと光と賑やかな喧騒の中へと姿を消した。

喧騒を背に薄暗い雑居ビルへと足を踏み入れようとして立ち止まった。

地面に落とされた視線は不思議そうな色を滲ませたまま空へと上っていく。

「何これ」

無意識のうちに言葉が漏れた。

美冬はしゃがみこむと地面に落ちていた一片の白を摘み上げる。

それはプルメリアの花。

周囲を見渡すが何の違和感も感じられず、ただ疑問だけが残った。

比良坂事務所のある夜見坂本界隈は夜を恐れて足早に帰路につく者、夜を待ちわびる者が入り混じり。

死臭はどこにもなく、怪しい気配を感じる訳でもない。

「……何でこんな所にプルメリアがあるのよ」

全身から警戒感を発する美冬は、慌しい中にもどこか楽しげな雰囲気の中では異質だ。

けれど、内側から溢れる不安にも似た予感を押し殺す事も出来なかった。

はじまるのだ。

どういふ事かと問われても答えることは出来ない。

けれど脳裏で声が聞こえた。

まるで警鐘のように。

「おはよーごじゃまー……うわー!」

ドアを開けながら発せられた弾む声が途切れる。

腕を引つ張られ、よろめいた。

バランスを崩しながらも部屋の中から伸ばされた手にされるがままで。

大きく数度瞬く。

「え！？ あ、あの！」

気が付けば何者かが美冬を抱きしめていた。

斜め上で笑う口元がある。

動悸と動揺の中で状況を知ろうと辺りに視線を巡らせた。

見えるのは、いつもの比良坂事務所の景色と苦笑を漏らす黒いスーツ姿の死神達。

すぐ近くにあるのはカジユアルなシャツの布地だ。

人とは違う、肌に触れる威圧感に似た空気を美冬は知っている。

「え、閻王？」

「いやー、やっぱりハグするなら女の子だよなあ」

頭上の嬉しげな声が何かを噛み締めるように呟く。

背中に回された腕がわずかに力を込めた。

「抱き心地いいし、いい匂いするし。野郎はダメだな、うん」

「あの、閻王」

「硬いし何も楽しくないもんね。なんか木にしがみついているって感じで」

戸惑う様子を知ってか知らずか、閻王は美冬の髪を指に絡めてもてあそぶ。

助けを求めるように顔を横に向け、サーペントを見るが。

彼女はキセルをくわえて笑うだけだった。

「閻王、ですから……」

困り果てた表情で口を開きかけると。

閻王の大きな手が美冬の太ももの辺りに置かれ。

感触と体温は上へと登り、なだらかな曲線を滑るように撫でる。

瞬間。

「何しやがる、このクソ閻魔！」

美冬が怒鳴り声と共にプルメリアを持ったままで力任せに閻王の頭を殴った。

睨み上げ、その視線で怒っている事を伝えようとする。

視界の端で周囲が慌てているのが見えたが、それを気にしている余裕はなかった。

「あは、殴られちゃったー」

「『殴られちゃった』じゃないわよ！ 何、当たり前にも人の尻触つてんのよ！」

「怒るなって。ちょっとした興味じゃないか」

「うっさい、バカ！ 死ねばいいのに！」

身体を剥がした閻王は目の前で怒る美冬を楽しそうに観察している。日差と同じ色の髪をかき上げて目を細めた。

そこで聞こえた、ため息一つ。

「ラプターが怒るのも無理はないけれど、大目に見てくれないだろうか。」

閻王は下心があつてやっているわけではないんだ

「下心がないのに尻触るとかないでしょ、普通は！」

「そうだぞ。俺は純粋な好奇心からケツを触っているんだ、大目に見てよ」

「どんな好奇心だ！」

ダンデライオンの言葉に大仰に頷く仕草。

その一つ一つに噛み付く勢いで反応する美冬の頭を真雪がなだめるように触れる。

何か言いたげな視線を受けて苦笑った。

「閻王。先ほども申し上げましたが、そういった行為は

女性にされますと色々と問題がありますので……」

「そう言うけどさ。野郎のケツ触ると『誤解されるからやめろ』って言うし

女の子だと『色々問題がある』って、一体俺は誰のケツを触ればいいんだよ」



「……何を威張っているんですか」

表情を引き締めた閻王は真正面から見据えてくる美冬を見て肩をすくめた。

困ったように軽く眉をひそめる。

「悪かったって、猛牛」

「ラプターです」

「ああ、そうだったっけ。じゃあ猛牛、お詫びに俺のケツ揉んでいいから機嫌直してよ」

「尻触つて機嫌直るとでも思ってたのか！」

拳を作り、抗議する美冬を見て動きが止まる。

視線は顔を見ていなかった。

「閻王？」

急に睨むように表情をこわばらせたのを見て、怪訝そうに呼びかけるが反応はない。

ただ何かを見つけたかのように一点を凝視し続ける。  
思案する顔が唇を噛んだ。

「どうなさいました？」

賑やかだった室内は静まり返り、途端に窓の外の喧騒が聞こえ始める。

窺う視線が自分に集中していても気にしない様子で。

閻王は美冬の手から目を離そうとしなかった。

「……何故、花座を？」

絞り出すような声。

問おうと唇を開いた美冬の手首を乱暴な動作で掴むと顔を覗き込み、詰め寄る。

「何でお前が花座を持ってるんだ。奪ったのか？ それとも食ったのか？」

そこまでエニグマの力は……」

「え？」

「答える。その花座はどうした？」

有無を言わせない強い口調に圧倒され、口をつぐむ。

まるで自分が悪い事をしてしまったかのような気分になってしまう。

閻王は美冬の顔と彼女の右手を交互に見比べた。

そこにあるのは拳からわずかに顔を出す白い花。

何か話さなければと思う反面、その眼光に言葉が出てこない。

「あ、あの。花座って」

「その花の事だよ」

「プルメリアが……花座？」

静寂の中で恐る恐る問う声が響く。

ぶつかり、混じり合う疑問の視線。

閻王の肩越しに夕暮れが死に、空が赤く染まっているのが見えた。

「つまり事務所の近くにソレが落っこちてたって事か。何だ、早く言うてよ。」

てつきりお前が食べちゃったのかと思ったじゃないか」

閻王はソファに座ったままため息をつき、目の前に立っている美冬を一瞥した。

彼が足を乗せるテーブルの上にはプルメリアの花が乗っている。

頭上の空調からの微風に乗って絡みつくような甘い芳香を嗅いだ気がした。

「食べる？」

「いや、こつちの話……そっか、プルメリアって花座にそっくりなんだな」

独白のように呟く声。

閻王を囲み、黒装束の列が並ぶ。

これから言われるであろう何かを警戒しているのか、その顔は一様に厳しかった。

「閻王。その花座というのは」

「そつか、それを説明しなきゃいけないだったつけ。じゃあ、本題に入る前に説明しとくか。関連がないワケじゃないしな」

軽く数度頷くと首をひねって顔を外に向ける。

言葉を選んでいいるのだろうか、視線が時折虚空をさまよった。

「花座って言うのは」

閻王の指が一同を指した後、自分の胸元を何度か突つつく。微かに不敵な笑みを浮かべる水色の瞳。

「ここにある」

水を打ったような静けさが広がっていった。

言葉を口の中で繰り返すように眉間にしわを寄せて固まる。

真雪と美冬は顔を見合わせたままで。

「まあ、普通の奴等は知らなくて当然なんだけど。

人っていうのは内側に花を持ってるんだ。赤ん坊でもじーちゃんでもさ」

「……花、ですか」

「そ。その花の上に魂を乗せて生きているんだよ。

それが花座　お前らの言うプルメリアの花と同じ形をしているってワケ」

風が窓を叩く。

気が付けば世界は夜に包まれていた。

室内で聞こえるのは淡々と語る声と、座り直した時に生じる革のこすれる音。

「つまり魂の器って事ね。実際見せられれば一番分かりやすいんだけど、

それやったら死んじまうからな」

「と、いう事は」

「さすがノクティルカ、物分りがいいね。  
うん、花座を取り出そうとすれば相手は死んじゃうんだな。  
魂も、そう。無理に取ろうとすれば花座ごと奪う事になって、結局  
結果は同じだ」

美冬はその言葉に動きを止める。

唇を噛んで手で覆うと、プルメリアに視線を落とした。

必死で記憶を手繰り寄せる。

蘇るのは殺風景な廃校の一室、頭痛を誘う死臭、蘇るチャリオット  
の声。

「……魂の入れモンね」

「なるほど。それでしたら何故、突然死の被害者が揃ってプルメリ  
アの花を持っていったのか

説明がつかず。あれは何かのメッセージではなく、抜け殻だった」

「そうだね。魂を強引に奪った末の残骸だという事か」

両側から交わされる言葉が耳をすり抜けて、通り過ぎた。

美冬は上の空の状態で微動だにせず。

「あー、報告書にあったな。『被害者は一様にプルメリアを持って  
おり、

ハーメルンの笛吹き男という童話の一節を口にしていた』 だっ  
け？

プルメリアって言われてピンと来なかったけど、花座だって分かれ  
ば見えてくるものがあるな」

「ああ。だが、まだ分からない事だつてあるじゃアないか」

閻王の言葉にサーペントが頷く。

赤い唇がため息をつくように煙を吐き出した。

「何故ハーメルンか。そして誰が首謀者か」

「つーか、ウォークライ。誰が首謀者かって分かってるようなモン  
じゃねえか。

チャリオットとあのティッシュユみてーな野郎の仕業だろ？」

「まだそう決め付けるのは早いですよ。」

限りなく黒には近いかもしれませんが、何の確証もない状態ですしまるでたしなめるように言う。

言葉すくなに黙り込む一同の中で美冬が顔を上げた。  
どこか思い詰めたようにも見える表情で。

「証拠はあるよ」

一斉に注目されても、見えない何かを睨むような表情を崩そうとしない。

生気がない室内に美冬の言葉だけが妙に大きく響いた。

窓の外のネオンと賑やかな音楽も今は偽りにしか見えぬ。

「チャリオットが言ってたの。狼は小鳥に恋をしたって。

想いを伝えたくて、自分と小鳥の為に毎日夜を摘むんだ。

……狼っていうのはチャリオットの事じゃないかって思うんだけど」

「狼と小鳥？」

「うん。それと、死人は魂を食べなきゃ生きていけないとも」

怪訝そうな視線を向ける真雪を見上げた。

数秒、見つめ合うと軽く頷く仕草。

まるで声を出さずに会話をしているようだ。

「美冬がチャリオットに捕らえられた際に聞いたそうです。

そして彼はハーメルンの一説も唱えていた。それは俺も聞いています」

脳裏に蘇るのは白い花に囲まれた美冬の姿。

次第に生気が失われていく瞳を思い出して、背中に悪寒を覚える。

真雪はわずかに顔を歪ませたまま言った。

「ラプター、小鳥というのは？」

「それが分からないの。聞いても答えなかったし、手がかりもなくて」

「何かの例えなんだろうけどねエ。女って捉えるのが妥当なんだろうが」

「『一羽の小鳥がいました。小鳥に恋をした狼は想いの深さを伝えようと』

毎日夜を摘みます。彼女の為に、そして自分が生きる為に』……うん」

鼻に抜ける美冬の思案する声と閻王を唸り声が重なる。

押し黙ったまま話を聞いていた彼は肘掛けに頬杖を付いたままで一つ頷いた。

死神達の視線が向けられる。

「一旦、冥府に帰ってあつちの連中と話し合ってみるわ。

情報と事実関係を整理した上で、俺達の見解と今後の方針を伝えるから」

立ち上がり腰に手を当てた姿勢で上体を反らした。

天井を仰いだままで何かを思うように止まり、目を閉じる。

その顔から感情を読む事は出来ない。

「近いうちにチャリオット討伐の号令が下されるだろう。

お前等もそのつもりで準備と覚悟をしとけよ」

返事をする顔を眺め、頷く。

聞こえるのは窓辺に向かう閻王の靴音だけ。

その背中をいくつもの視線が追っていた。

窓の外は奈落の闇。

漆黒の空を見る度に、このまま夜が明けないのかとさえ思ってしまう。

「人を救う為に人を殺す、か。難しいね」

独りごちた声が自嘲気味に笑った。

その言葉は美冬の体の内側で不気味なほど響く。

色彩のない、モノトーンの景色。

それぞれが何かを考えるように無言の時間が長く続いた。

重く息苦しい空気から逃れるように真雪は屋上に佇んでいた。灯りのない薄暗いこの場所を照らすのは、遠くから届く眩い光。手すりにもたれて目を伏せる。

耳元で唸りながら通り過ぎる風にジャケットの裾が揺れた。微量の冷たさの中に雨の匂いを嗅いだ錯覚。

「こんな所にいたのか」

ドアの軋む音、閻王の声。

足元まで伸びた光の帯に振り向いた。

逆光気味になって彼の表情は見えないが、そのシルエットは笑っているように見える。

「閻王。まだお帰りになってなかったんですか」

「ん、ああ。猛牛達から詳しい話を聞いててね」

靴音が真雪と並ぶ。

視線に気付いて顔を向けると苦笑の混じる笑みがあった。

指を指されて戸惑う。

「その喋り方、やめてよ。俺は今、仕事で話してるつもりないんだからさ」

肩をすくめる仕草に笑いながら頷いた。

閻王はその様子に満足したように目を細めると、手すりに背中を預ける。

彼の視線の先にあるのは星も月も見えない黒い空。

「冥府に帰るのが嫌で時間潰してるのかと思った」

「失礼な。仕事してるんだよ」

「とか言って事務所のお菓子、ずっと食ってたんじゃないだろうか？」

「そんな事ないもん。ウォークライに貰ったソース煎餅と……だー！  
そんな事言つと減俸するからな！」

不貞腐れたように睨む真似。

唇を尖らせる仕草は、どこことなく子供っぽい印象を与える。

彼が死者を審判する閻魔だと誰が分かるのだろうか。

「今は仕事じゃないんだろ？」

「んまーっ！ 可愛くない！」

ふざけて繰り出される拳を真雪は笑いながら避けた。

息をついて真顔になると、眼下で聞こえたクラクションの方向へ視線を向ける。

不意に訪れた沈黙。

「……討伐大号令か。久々だな、冥府が動くのも」

呟く声がかを思い出すように。

「俺達は手を出せないよ。実際にやってるのはお前等だろ」

「そうだけどな。でも勅命なんて、お前と知り合った時以来だから8年振りか？」

「ああ、もうそんな経っつけ？ 早いなあ」

遠くを見つめていた閻王が急に吹き出した。

怪訝そうに見つめられながらも、笑いをこらえきれない様子で顔をゆがめる。

口を隠すように手を当てて、肩を震わせていた。

「……何よ。思い出し笑いなんてしちゃって」

「いや、あの頃に比べて真雪は随分変わったなーってさ」

「そう？」

真雪はネクタイの結び目に指をかけたままで首を傾げる。

「あのグレてた真雪が今じゃこんな立派なオカんに」

「オカンじゃねえよ」

「じゃなきゃ乙女だ」

「乙女でもねえっつーの！ なんで皆、俺のこと乙女乙女言っただよ。ムナクソ悪いな！」

吐き捨てる口調。

拗ねた表情で顔をそむけるのを見ながら閻王が声を上げて笑った。それを咎めるように軽く腕を叩く。

「お前をそこまで変えたのはエニグマの片割れか？」

「美冬の事？」



笑つのを止め、一息つくると小さく笑みを浮かべたままで問うた。  
時折、車の騒音で声がかき消されそうになる。

夜を忘れた街並を見つめる真雪。  
言葉を選んでいいのか、迷っているのか。

「んー。どっちかつつーと、あいつ含めた比良坂じゃねえかな」  
「事務所の連中か」

「ああ。仕事仲間って事以上に俺にとっては家族同然っつーかさ。  
なんか色々あるけど、あいつ等といれば何でも出来る気がするんだ  
わ」

爪先で硬い地面を蹴りながら笑みを漏らした。

「簡単な事ばかりじゃねえし、うまくいかねえ事だらけだけども。  
でも、この仕事も今の自分も結構好きよ？ ようやく、そう思える  
ようになった」

「なるほどね。それは良い……」

それまで穏やかに笑っていた閻王が固まった。

息を飲み、目の前を見つめ。

ややって顔をしかめたまま視線をそらす。

「どうした？」

「いや、何でもない」

「冥府からのお呼び出しか？ そろそろ帰って来いっつー」

真雪は不思議そうな表情を浮かべながらも、片眉を上げて口元に笑  
みを浮かべた。

そんな彼の表情を見ようとはせず、黙り込む。

視線をそらし眺める先にあるのは五条駅付近の賑わい。

「まあ、どっちにしる事務所には戻るか。

お前が長い時間いねえと、まーた俺が遊びに連れ出したって思われ  
ちまつしな」

促すように軽く背中を叩くと真雪がドアに向かって歩き始めた。

その後姿を見つめる水色の瞳。

遠くなりかける様は何かを思い出す。

それは。

「あのさ、真雪」

「何だよ。つーか早く戻るぞ」

帰りたくないと思つておねていると思つておねているのだろうか。

真雪は微量の苛立ちと苦笑を浮かべて振り返る姿勢のまま、立ち止まっていた。

閻王は真顔で見つめる。

何故こんなにも当たり前に見えている物に動揺しているのだろう。

「お前が死んだら」

閻魔という名を持つ自分にとって死というのは日常的で、それが全てだ。

人は死を悲しいと思うものらしい。

けれど、冥府の審判者にはそれを理解する事が出来なかった。だが。

「俺も悲しいのかな」

言葉を投げられ、一瞬呆気にとられた真雪が困ったように笑つ。

それはどこかくすぐつたそうにも見える表情で。

俯き加減で髪をかきあげた。

「バーカ、何言つてんだよ」

閻王が見たもの、それは。

「そもそも俺が死ぬワケねえだろうが」

真雪を包む、まるで発光するかのような真っ白な薄い衣。

死神達が天使のベールと呼ぶものだった。

そのボールに包まれた者は

日差しの強さに5月も下旬に差し掛かりつつあるのを知る。  
美冬は地上から吹き上がる突風に咄嗟にスカートを押えた。

ここは『会議室』と戯れに呼ぶ、比良坂事務所の入る雑居ビルの屋上。

「昨日ね、アヴァロン行ってきたんだよ。ギムレットさんに会ってきたの」

「……ギムレットの所に？ お独りで？」

「ううん、所長と一緒に」

何気ない口調で話す声に彼女の隣に佇むノクティル力が眉を潜めた。アヴァロンとは比良坂事務所から徒歩数分の、夜見坂本界隈にあるバーである。

その店のギムレットといえば霧島区でも有名な情報屋の一人だ。

「1回行って見たかったんだよね！ あたしだけ行った事なかったんだもん」

「貴方は未成年なんですから当然でしょう。ところで、どんなご用件で行ったんですか？」

「ん、チャリオットの件。もうすぐ大号令が来るから準備の為にね」  
微笑が次第に消え失せ、表情を引き締めた。  
顔を正面に戻して、手すりに頬杖をつく。

「チャリオットの背後に誰がいるのかとか、あの廃校にいたミロクって人は何者なのかとかさ。」

新しい事を知っても、まだ分からない事だらけだから」

「確かに。前よりもピースは揃ってきましたが、まだまだ足りないですね。」

それで、何か新しい情報は手に入りましたか？」

「それが全っ然！ どれも推測と噂話ばかりでコレっていう有力なモノはなかったよ。」

ミロクにしてもそう。名前しか分からないなんてありえる？」

車の騒音と、どこかの店舗のアナウンスが聞こえた。

辺りに散らばる、生気のないコンクリートの屋上がまるで島々のように見える。

「特徴も行動範囲も分からないんだもんなあ。

目撃情報はともかく誰も知らないなんて、一体どういう事なんだろう？  
此岸でもそれ以外でも、生活してたらある程度の情報はあはずなのに」

「ここまで情報が流れていないという事は逆に怪しいですよね。

何者かが隠蔽しているのか、うまく隠れて生活しているのか」

眼鏡を指の腹で押し上げると微かに息をついた。

並ぶ2つのシルエットは動かず、遠くの景色を眺める。

「話では、あのアブソルトの攻撃もレイヴンのスキルも避けたと言っではありませんか。

その能力で、まったく此岸で話を聞かないというのはおかしいです」  
ノクティルカの言葉に美冬が頷く。

何かを考えているのか、視線を手すりに落としたままで固まっていた。

「……ギムレットさんはミロクが何者かは知らなかったんだけどね」  
思考のなかで吐き出された、どこか上の空の言葉。

「なんか見当は付いてるっぽい感じだったな。勘だから口にしなかったんだろっけど」

「そうなんですか」

「うん。最近、妙な動きをしている奴らがいるからソレ絡みなんじゃないかってさ」

「誰の事なんでしょう？」

まだ夕暮れの気配を感じられない空は澄み切っていた。

灰色に包まれている事の多い東京では珍しい、目にしみるような青  
考える静寂に飲み込まれて2人は押し黙る。

どちらからともなく、ため息が漏れた。

「もう少しなんだ。よく分かんないけど、もう少しで色んな事が見える気がするの。」

何かがおかしいと思うのに、それが何だか分からない。すごくじれったいや」

「焦っても良い事はありませんよ。急がば回れです」  
「うん、分かってる」

美冬は前傾姿勢で手すりにもたれて、下を覗き込む。  
ミニチュアの街の中で人が蠢くのが見えた。

「同じ空の下にチャリオットもミロクもいるはずなのにね」  
呟く声にノクティルカが顔を向けた。

「目的地は決まってるのに行き方が分からなくてグルグル迷ってる気分だ」

上空を笑うようにカラスが鳴いて通り過ぎる。  
困ったように苦い笑みを浮かべる横顔。

殺風景な屋上に、靴先が地面を叩く音だけが響いていた。

「あ」

突然、何かを思い出したのか身体を起こす美冬。  
ややあつて不快そうに眉を寄せた。

「そっといえばさ、聞いてよ！」  
沈んだ空気が、風に流されていくように変わっていく。

「アヴァロンで失礼な目にあっただんですけど！」

「どうかしたんですか？」  
「ギムレットさんね、あたしの事子供扱いするんだよ!? ありえないよ！」

訴える様子にノクティルカが一瞬呆気に取られた後、息を漏らすように笑みを浮かべた。

「子供でしょう」

「ノクティルカさんまでそういう事言う! っっていうかさ、あたし

は確かに未成年だけど

年頃の娘にクリームソーダ出すか、普通！？ 小学生じゃないっつーの！」

「牛乳じゃなくて良かったじゃないですか。ちゃんと飲んだんでしよつ？」

笑いながらの問いに美冬は不貞腐れた視線で見上げる。

両手は拳に変わっていた。

「の、飲んだよ！ ……つて、そうじゃなくて！ あたしは子供じゃないもん。」

なんで皆子供扱いするんだろ。まったく」

「大人扱いして欲しいんですか？」

「大人扱いじゃなくて大人なの！ お酒はまだ無理だけど、結婚だつて出来るんだぞ」

「そうですね」

抗議の口調に笑いながら頷く。

俯いて顔を隠そうとするが、肩が震えていた。

それを見た美冬は頬を膨らませたままでノクティルカの腕を叩く。

「やっぱりバカにしている！ 何だよもー！」

「すみません。でも大人は子供だと言われて、そんな風にムキになりませんよ？」

「うっうっうるさーい！」

悔しげな声が辺りに響く。

前かがみで睨みながら覗き込んだ。

「そりゃノクティルカさんと比べたら子供かもしれないけど！ でも……」

「では、大人扱いしましょうか」

「……へ？」

思わず動きが止まった。

意味を捉えそこねて疑問の表情を浮かべる美冬の頬をノクティルカの両手が触れる。

まるで押さえられる格好。

その体温に体をこわばらせた。

笑みを浮かべ、見下ろす眼鏡越しの眼差しが何を考えているのか分からずに戸惑う。

「え、あの。ノ、ノクティルカさん？」

慌てた口調は風に溶けてしまったのか、目の前の相手には聞こえなかったらしい。

硬質な色合いの中で2つの黒い影は動かなかった。

息を飲んだまま。

「お、大人扱って何？」

取り繕うように、ぎこちない笑みを浮かべながら美冬は首を傾げようとするが。

柔らかく包むような感触とは裏腹に逃れようとすると事さえ出来ない。ノクティルカの手をほごうと触れた状態で静止。

「さて、なんででしょう？」

いつもと同じ穏やかな口調は問いをはぐらかせた。

笑いながら、美冬の顔をゆっくりと上へ向かせる。

「あ、あの。あのねっ！ その、あたし！ こういうの、やっぱ…

…」

美冬にはノクティルカが何をしようとしているのか、どこかで分かっていた。

鼓動で自分の声さえ耳に届かなくなる。

顔が熱いのを、動揺しているのを悟られないように息を殺した。

目をそらしたくてもそらせないのは何故か分からずに。

「私の事は嫌いですか？」

「ち、ちが。嫌いじゃないし、でも、こういうの……あ、いや！ したくないってワケじゃ！」

そ、そうじゃなくて。な、何言ってるんだ！ 違う、あのねっ」

慌ててまくし立てる。

遠くに見える霞んだビルの群れも、街の喧騒も全てが曖昧になった。



見上げている事に息苦しさを感じて目を伏せる。

「あ、あの……」

美冬がもう一度、動揺した瞳でノクティル力を見上げた時。

静かに見下ろしていた顔が吹き出した。

「へ！？」

急に笑い出したノクティル力を、頬を紅潮させたまま呆気にとられた表情で眺めた。

「冗談ですよ」

「ええ！？」

「冗談ですって」

そう言つて、頬を固定していた手が離れる。

啞然としたままで止まっていた美冬が状況を把握するように視線をせわしなく動かし。

一瞬の空白。

「はああああ！？」

「いえ、どういう反応するのかなと思つたら試したくなりました」「『なりまして』じゃないよ！ もー、すっごいドキドキしちゃったじゃんか！」

「すみません」

尚も肩を震わせるノクティル力。

拗ねたように睨む美冬の手前、笑いを引つ込めようとするが堪えきれない様子で口元を歪ませた。

「全然悪いとか思つてないでしょ！？　すぐそうやってからかうー！」

「でも、本当にしてしまえば良かったですね」

大きく息を吐いて髪をかき上げると悪戯っぽい表情で見下ろす。それを見た美冬は息を飲んだ後、何か言いたげに唇を動かした。けれど声は伴わずに。

「バ、バカ！ 死ねば……」

手が照れ隠しに叩こうとするのを受け止める、向かい合った手。驚いて表情をやわらげる。

いつものノクティルカであれば美冬にされるがままか、避けるはずだが。

「え？」

不思議に思い、見つめると。

掴んだ手を引き寄せられる。

遠くに見えた鳥の残影。

身をかがめるノクティルカと、動けずにいる美冬。

視界の端で笑う顔が見えた。

頬に触れる温もりと唇の感触。

「隙あります」

楽しい言葉を残して、顔が離れる。

ノクティルカは身体を起こすと啞然とする美冬を観察していた。

「……っ！」

美冬が数秒の空白の後、弾かれたように頬に手を当てる。

動揺した視線が落ち着きなく動いていた。

「まだまだ子供ですね、ラプター」

「ちょ、ええ！？ いや、あの！ わー！ えと、うんと！ あの！」

「……顔、赤いですよ」

「こ、これはっ！ だって！ ああああ、もうノクティルカさんのバカ！」

狼狽した声と共に美冬は顔を赤らめたまま拳を繰り出すが。

笑いながら避けられ、空を切る。

「ゆ、油断も隙もない！」

「修行が足りませんね」

「ノクティルカさんはいつつもそうだ！ そうやって、あたしが…  
…あたしの…バカー！」

「悪かったですって。子供には刺激が強すぎましたか」

「子供じゃないってば！」

喚く美冬が唇を噛んで強い視線で見上げた。

拳を握り締めたまま、肩をいからせる。

「はいはい、そうでしたね。では、お詫びにお茶を淹れて来ましようか。」

リクエストなどありますか？」

それまで、手すりに背中を預けていたノクティルカが背を浮かせた。肩越しに見えるのは速い速度で流れていく雲。

早送りの映像を見ているような気分になる。

からかいの口調に口を尖らせていた美冬は投げかけられた問いに首をひねった。

「今日は少し蒸しますからアイステイーにしましょうか。」

昨日美味しいアールグレイが手に入りましたので、

それを使ってオレンジアイステイーでも」

「わ、おいしそう！」

表情を輝かせて発せられた言葉。

振り向いた姿勢のままで見下ろしていた死神は安堵の息を小さく漏らす。

「やっと笑ってくれましたね」

「……だって、恥ずかしい事するからじゃんか」

気まずそうな声に返答はなく、返ってきたのは相変わらずの目を細めて笑う顔だった。

目の前で黒がひるがえると同時に靴音が遠ざかっていく。

「では作って持ってきてきますので、少し待っていて下さいね」

「ん、ありがとう」

背後で重々しく閉まるドアの音を聞きながら、正面に顔を向ける美冬。

何を思うのか俯いて口元に小さな笑みを浮かべた。  
色濃く漂う春の中に夏の気配を感じる。  
手すりに手をかけ、佇むシルエットはどこか楽しそうに見えた。

それから間もなく。

背後でドアが開く気配を感じて、美冬が反射的に振り返ると。

「ここにいるのは猛牛だけか」

鉄色のドアから上半身だけを出した真雪が眉間にしわを寄せて辺りを見渡していた。

「猛牛じゃないわよ。殴りたいの？」

「なあ、親父見なかった？」

「所長ならアヴァロン寄った後、社長の所に行くって言ってたよ」

「うーわ、マジかよ。お前のボスん所行ったら夜まで帰って来ねえじゃん」

落胆した声と共に真雪が屋上に姿を現す。

後頭部を乱暴に搔きながら思案顔で美冬に歩み寄った。

前を留めていないジャケットとネクタイが翻る。

「どうしたの？ 何か大事な話？」

「あー、まあね。ちょっと気になる事があるっつーだけなんだけど」と

困った様子でため息をついた真雪が美冬の顔を凝視した。

向かい合う状態。

スラックスのポケットに手を突っ込んで考え込む。

「え？ 何？」

不意に変わった空気に戸惑ったように尋ねるが、無言の時間が流れていた。

慌てた様子で美冬は周囲を見渡したり、髪を手櫛で整えたりしている。

「……どうしたの？ お前」

「どうしたのってこっちのセリフだっつーの」

「顔、赤いぞ」

「ええ!？」

顎で示されながら言われ、咄嗟に口元を隠した。

考えなくても理由は思い当たる。

動揺を隠そうと視線をそらす、その動きはどこかぎこちなかった。

「そ、そんな事ないけどな」

「そう?」

美冬が口の中で歯切れの悪い言い訳を呟いていると真雪の手が額に触れる。

驚いて見上げた先にあつたのは、もう片方の手を自分の額に当てている姿だった。

不審そうに首を傾げている。

「多少熱いけど、子供は体温高いモンだしなあ」

「だから子供じゃないってのよ! ム力つくわね、どいつもコイツも!」

「もしかして、また妄想してたとかいうオチか?

一人で赤くなつて悶えてたんだろ、どうせ。

姉御が言つてたぞ、美冬は想像力がたくましくすぎるって」

納得したように頷く真雪の腕を力任せに叩き続ける美冬。

睨んで怒っている事を表現しようとするが、相手には伝わっていないらしい。

「妄想しても捕まらねえけどさ。色々と行動に移すと犯罪になつちまう場合があるから

美冬ちゃんも一歩踏み出さないように……」

「違つてば! 死にたいの!?! 死にたいのね!?!」

襟元を掴んで前後に揺さぶりながら噛み付く勢いで怒鳴る。

真雪は声を上げて笑いながら美冬を楽しそうに眺めていた。

「さーてと! 親父もいねえし、美冬もからかった事だし買い物に行つてきますかね。

そろそろタイムセール始まる時間だろ」

西に傾きつつある太陽を見て呟く。

今まで午後特有の雰囲気を振りまいていた日差しに金色の黄昏が混じっていた。

もうすぐ下界では帰宅ラッシュが始まり、夜の住人が動き出すのだろう。

美冬は掴んでいた手を離し、どこか不機嫌な瞳で見た。

「そんな顔すんなよ。お前に妄想癖があっても今までと変わらねーって」

「妄想ネタはもういいよ！」

噛み付くように怒鳴った美冬の頭を乱暴に撫でる。

無意識に肩をすくめて身構えたが、その先には笑みを浮かべる顔があった。

「今日は水曜日だから魚が安いかしらね。じゃーな、美冬」  
誰ともなしにいいながら手が離れる。

きびすを返す瞬間に小さく笑いかけれ、つられて美冬も笑った。  
明るい光の中でスーツの黒が浮いて見える。

ドアに向かう後姿が軽く腕を挙げた。

瞬間。

美冬の目には見えた。

真雪を大きく包むような白いベール。

「……な」

思わず声を上げた。

目の錯覚でも、気のせいでもない。

確かにこの目には見えたのだ。

どこからともなく舞い降りた衣が真雪を覆うのを。  
何度も見てきた景色。

早まる鼓動の中、足元から力が抜けそうになるのを必死で堪える。  
呼吸が乱れ、瞳の中が熱く潤んでいくのが分かった。  
嘘だと美冬は何度も心の中で呟く。

けれど。

確かに見えていた。

そして、今も。

「う、そだ」

呆然と首を振りながら呟く声。

下界からの喧騒も色彩も一切が消えた錯覚を覚える。

唇がわななき、ともすれば泣きそうになるのを抑えた。

二人の距離は十数メートル。

目の前の死神はそんな美冬の様子に気付かず、鼻歌混じりでドアに  
近付く。

「……嘘だ。こん、なの」

ドアが開く音が聞こえた。

普段なら聞き逃しそうなほど小さな音であるはずのそれが屋上に響く。

それと重なるように聞こえた、駆ける靴音。

空気が動き、黒い残像が横切った。

そこにあっただのは。

屋上を出ようとドアノブを掴んだ真雪を後ろから抱きしめる美冬の  
姿。

まるで、それは何処かに消えてしまつのを食い止めようとしている  
かのよう。

半ば体当たりに近い状態だったせいか、バランスを崩しかけるが。「うわ！……と、あつぶね！」

ドアに手を突いて体勢を整える。

驚いた声と共に聞こえる、ドアにぶつかった衝撃音が響き渡った。

「おい、危ねえだろーが。何すんだよ、もう」

怒気と呆れの混じる声にも美冬は微動だにしなかった。

胸に腕を回し、硬く締め上げるように力を込めたままで顔を埋める。その肩は震えていた。

「ほら、ふざけてねーで離れろって。

抱きついてもいいけど場所とか考えろって言ってるだろ？ 頭ぶつ

けたらどうすんだ」

苦笑いながら美冬の手を軽く叩く。

目の前に迫るドアから逃れるように、首をひねって自分の背後を見ようとするが

翡翠色の髪しか見えなかった。

漏れるため息。

「美冬、どうしたんだよ？」

笑みが消えていく。

聞こえてくるのは賑やかさを増した繁華街のアナウンスや音楽。

視界の端には灯り始める光が一つ、また一つと次第に数を増やしたけれど、ここにあるのは張り詰めた緊張感。

話すことさえ躊躇うような重い沈黙が漂う。

「……か、ないで」

「ん？」

「行っちゃ駄目」

聞こえた、震える声は消え入りそうなほど小さく。

耳を寄せようとするが、美冬の力はそのをする事さえも許さなかった。

「何だよ。買い物行くだけだったっの」

「駄目。行っちゃ駄目」



「…………困ったな」  
髪を掻いて空を仰ぎながら言う。

何があつたのかまつたく見当がつかないと真雪は心の中で呟いた。流れてくる感情は動揺や不安に支配され、取り乱しているのが分かる。

原因も分からず、彼女に言葉は通じそうもない。  
一体何があつたのかというのか。

「美冬」

何度目かのため息。

硬く結ばれていた手をこじ開け、真雪は美冬と向き合った。  
俯いた彼女の前にしゃがみ込むと瞳を覗き込む。

「ちゃんと説明してくれよ。どうしたんだ？」

つとめて優しく問いかけるが、聞こえるのは嗚咽ばかりだった。  
美冬が喋ろうと口を開く度、目を見つめる度に言葉は涙に変わる。

口を押さえたまま首を振る仕草。

「落ち着くまで何時間でも待つから。だから」

「どこにも、行かないって言った」

「…………え？」

「まゆ、は…………どこ、も行かないって」

潤んだ声がしゃくりあげながら途切れ途切れに言葉を紡ぐ。  
言いかけた言葉を飲み込み、言葉の意味を考える真雪。

時間だけが流れる。

言葉を探す無言と、言葉を選ぶ無言が重なった。

「どこにも行かないって言った」

その声は怒っているようだった。

「みんなそう言う。でも嘘だ。みんな平気で嘘をつく」

「美冬」

「みんな、あたしを置いていなくなる。みんな」

美冬の手が真雪の肩を掴む。

まるで助けを求めるような眼差しで真つ直ぐに見つめていた。その中に宿るのは怯え。

「真雪はいなくならないよね？ あたしを置いてどこにも行かないよね？」

頬を伝い、雫が地面へと落ちる。

真雪は見上げたまま、動かなかった。

長く伸びる影。

美冬越しに見えるのは、死に向かう太陽。

その射抜こうとする眩しさに目を細めた。

「言つて、いなくならないって。何言つてんのって笑つて」

美冬は糸が切れたようにその場に座り込む。

弱々しい声で発せられた懇願は祈りに似ていた。

肩に乗せられた手が力なく滑り落ちる。

真雪は目を伏せ、ため息をついた。

屋上からの見慣れた街並みと共に見えた、もう一つの景色。

河岸、白菊、棺、ウタカタ。

そして、白いベールに覆われる黒いスーツを着た

「……ああ、なるほど」

無意識のうちに呟く。

真雪は俯いた格好で自嘲気味に笑った。

何度も頷き、力なく髪をかき上げる。

重苦しい空気の中で。

「泣かせたくねえと思つてる割に、泣かせてるのはいつつも俺なのな」

独白が漏れた。

視線の先にはむせび泣く美冬と、アスファルトの地面に出来た涙の斑点。

景色は止まったまま、時間だけが過ぎていく。

殺風景な屋上が今日はいつもよりも広く感じる。

幾度目かのため息。

この場所にどんな音も届く事はなく、言葉を失った重苦しい沈黙だけが立ち込めていた。

『灰燼宛に手紙だつて？ 一体、誰から？』

耳にあてた携帯電話から聞こえたダンデライオンの声が怪訝そうに問う。

話しながら思い当たる節を探っているのだろうか。

不意に訪れる沈黙。

「差出人は書かれておらず、比良坂事務所気付という形で送られてきました。

筆跡からどんな人物かを探るのも難しいですね。印字されたものですので」

感情を押し殺した声でノクティルカは言った。

鋭い眼光は見えない何かを睨んでいるかのように。

圧迫感を感じる、広いとは言えない給湯室のスペース。

事務所や屋外はやけに静かで、全てが聞き耳を立てているのではないかと思う程だ。

『中身は確認してみたかい？』

「いえ、貴方宛の郵便物ですので。ラブレターだったら気まずいでしょう？」

『ラブレターね。女性からなら歓迎するのだけれど』

相変わらず穏やかな口調ではあったが言葉の端々に緊迫感が漂っていた。

ダンデライオンは外にいるらしく、声の向こうに行き交う車の音が聞こえる。

『消印は？』

「昨日付けで五条本町となっていました」

『思い当たる節がありすぎて見当がつかないな。』

それにしても何故、昔の渾名を使っているのだろう。意図が分からない』

湯が沸く気配を感じた。

それと同時にケトルがけたたましい音を上げて言いかけた言葉を遮る。

長い指が火を止めると同時に、再び静寂が押し寄せた。

「おそらくすぐに誰から分かるのではないのでしょうか。」

差出人は書いてありませんが、それに近い物は残されていなかったか  
ら」

『……どういう意味だい？』

声は何かを予感したように警戒した調子で尋ねる。

流れる無言。

「封筒に死臭とブルメリアの香りがこびりついていましたので」

首を傾げながら頭と肩で携帯電話を挟む仕草。

ケトルを持ち上げようとした所で隣から手が伸びた。

動きを止めて視線を向けると、サーペントが隣に立って微かに笑みを浮かべている。

ティーポットに湯を注ぐ音を聞いて目礼した。

『なるほど、それは差出人を書く必要はないね。これ以上ないくらいの署名だ』

「やはりチャリオットでしょうか」

『そう考えるのが自然だよ。君だって彼以外に考えられないと思っているだろう？』

「ええ。ですが」

言葉を切り、眼鏡を押し上げる。

「何のつもりなのでしょう？ こんな真似をしなくても……」

夕日のような水色を眺めながら呟いた。

遠ざかる足音と共に視界から黒が消える。

『舞踏会のお誘い、といった所かな』

不敵な微笑を浮かべる声。

確信をこめて吐き出されたそれに、心の中が静かに騒ぎ始めた。おそらくダンデライオンは鋭い眼差しを何処かに向けているのだろう。

ノイズ混じりの救急車のサイレンが聞こえる。

『もし、そうであるなら望むところだ。こちらも彼と踊りたいと思っていたしね』

すぐに戻る旨を伝えて切れる電話。

ノクティルカは通話が終了しても携帯電話の液晶を睨み続けていた。街の息遣いも今は耳に入ってくることはない。

考えを巡らせる眼鏡の奥の赤い瞳が持ち上がり、真っ直ぐ前を見据えた。

「間もなく、か」

口から独り言が滑り落ちた。

蒸した紅茶を氷で満たされたサーバーへと一気に注ぐ。

歌うような軽やかな氷のぶつかる音を聞きながら不意に窓の外へと視線を投げるノクティルカ。

間近に鳥の羽ばたきが見えた。

事務所には人がいるものの誰も話そうとせず、離れた位置のパソコンから流れる

場違いなほど明るい音楽だけが頭上をすり抜けていく。

グラスを用意しようと奥へと向かいかけた時。

「もういい加減泣きやめよ。ってーか、歩きずれえんだって」

ドアが開く音と共に真雪の呆れ返った声が姿を現した。

その言葉が冗談ではない事を示すように鼻をすする音が重なる。

怪訝に思い、給湯室の入り口から身を乗り出すと。

「どうかし……」

言いかけて飲み込む声。

釘付けになる視線を無理矢理はがし、平静を装うとするが。

離れた位置に立つ真雪を見たままノクティルカは啞然としていた。

見間違いだ、一体どうして。

彼は死ぬのか？

何度も心の中で繰り返し、動揺を抑えようとする。

「ノクティルカ、ちょっと助けてくれよ。」

後ろのおんぶオバケがくつついたまま離れねえんだわ」

「……」

「いや、見てないで助けるってば」

その声は天使のベールを被っている人間とは思えないほど軽い口調だった。

胸に回された腕は美冬のもの。

離れる気がない事をアピールしているかのように、きつく抱きしめている。

「……レイヴン」

低く名を呼ぶ声に真雪は疲れた目を向けると、苦く笑いながら数度頷く。

視線がノクティルカからサーペント、離れた位置で怪訝そうに見つめるウォークライへと。

部屋を見渡して息をついた。

「その様子だと、みんな見えてるっつー事ね」  
漏れる独白。

蛍光灯に照らされた藤色の髪を指で掻くと眉を上げてみせる。

集まる視線と、重くなりがちな空気を払うように手を振りながら。

「分かってるから」

短く一言告げると、後ろにへばりつく美冬を引きずりながらソファへと移動した。

時折、困り果てたように身体をひねって見下ろす。

それでも美冬は背に頭をつけたまま真雪を見ようとしなかった。

2人を複数の眼差しが追う。

何か言いたげな視線をノクティルカとサーペントが交し合っていた。

「だからさ」

テーブルに置かれたアイスティーを一口飲んだ真雪は、隣に座る美冬に身体を向けた。

何を言おうかと迷っているのか苛立った表情で天井を一瞥して再び視線を投げる。

その先にはハンカチを膝の上で握り締めたまま俯く姿。

髪が肩から滑り落ちて表情を読み取ることにはできないが、時折鼻をすする音が聞こえた。

「心配ねえって言ってるじゃん。見えたからってそれが全てってワケでもねえんだぞ？」

「……ど、という意味？」

「んー、所詮人の死期が見えるって言っても正確なモンじゃないってかさ。」

見えても見えなくても死ぬ時は死ぬっつーか」

背もたれに腕を投げ出して壁にかかった時計に目をやりつつ答える。意識は別の事に向けられているのか、それはどこか上の空にも聞こえた。

だが。

胸元を掴まれる感触と間近からの視線に顔を戻す。

美冬は言葉の意味を問い質すように凝視していた。

赤く腫らした瞳がみるみる潤んでいく。

堪えていた涙が溢れ、歪む顔。

「あー、違う違う！　そういう意味じゃない。違うんだって」

「いなくなっちゃ、やだ」

「まだそう決まったわけじゃねえっつーの。勝手に殺すなよ」

慌てた口調でなだめる真雪が髪を掻きながら俯き加減で息をついた。



そして、そのまま助けを求めるように顔を横に向けると  
向かい合う形で対面のソファに座っていたサーペントと目が合う。  
どちらからともなく苦笑った。

「ねえ、お嬢」

数秒の間の後、声が切り出す。

人がいるにもかかわらず、重く静かな空気の漂う室内。

美冬に注がれる視線。

「少しは落ち着いたらどうだい。動揺してるんだろっが、  
泣いてたってどうにもならないのは分かってるだろっ？」

サーペントはキセルを唇に当てたままで目を細めて静かに言った。

操られたように力なく頷く様を見て、口元に笑みを浮かべる。

「自分の大切な人が死ぬかもしれないと思うのは誰しも不安で怖い  
モンさ。」

それが見えるなら尚更ね」

窓の外にあるのは漆黒の中に浮かぶ街の灯。

それはまるで魂のようにも見えた。

「だからって泣いてたって何も解決しやしない。なら、どうする？」

黒衣着物を着た死神は首を傾げるような仕草をしながら微笑む。

細く揺らめく煙が天井へと消えていった。

流れる空白の時間。

美冬は顔を上げると呆然と正面に座るサーペントとノクティル力を  
眺める。

考えているらしい瞳は、気が抜けたように力を失っていた。

「え、と」

返答を待つ静寂に言葉が飲み込まれる。

美冬の指がスカートのプリーツをしごくように落ち着きなく動いて  
いた。

「そうならないように、頑張る……？」

「そうさね」

今にも消えそうな声量で発せられた答えに満足したように大きく頷

く。

真雪が小さく息をつくように伏し目がちに微笑んだ。

「そうなって欲しくないなら足掻くしかないじゃないか。

自分出来る事やって、誰かが用意した未来を変えちまえばいいのさ」

遠くから階段を上る複数の足音と話し声が聞こえる。

けれど、それも他人事のように耳をすり抜けて。

「いつまでもメソメソしてんのはアンタらしくないよ、お嬢」

悪戯っぽく微笑む顔に美冬が笑って見せようとするが。

それはぎこちなく顔を引きつらせただけで、すぐに視線を自分の膝へと落とした。

そんな彼女の頭を横から伸びた手が乱暴に撫でる。

「な？ もう心配すんな。お前、いつつも『一番アテにならねえのは自分だ』とか言ってるクセに

何でこういう時だけバカ正直に信じてんのよ」

「だって」

口ごもり、顔をあげて見つめる。

「どうして真雪は平気なの？ もしかしたら死んじやうかもしれないのに」

「あ？ いや、それはさ」

ゆっくりと瞬いて口角を上げた。

視線が目配せするように、その場にいる者たちを見渡す。

誰からともなくこぼれる笑み。

「伊達に死神やってねーもん。確かに天使になって死んでいく奴等  
は見てるけどさ。」

その反面、天使になっても生きてる人間だってたくさんいるんだぜ？  
俺らが見えてるモンは結構適当で曖昧だって知ってるから」

「でも」

「だから大丈夫なの。つーか、さっきから死なないって言ってるだ  
ろっつが」

苦笑いながら呟いた。

ため息をついて再び俯いた美冬を見つめ、黙る。頬を指先で掻きながら、かける言葉を探しているかのように。

「……ラプター」

美冬は視界の隅に黒い影が現れたことに気がつき、顔をあげた。名を呼ぶ声はウォークライ。

床に片膝をつき、正面から真っ直ぐに見つめる。

今まで黙って様子を見ていた彼の行動に周囲が注目した。

「レイヴンの言葉は信じられないか？」

「そういうワケじゃないけど」

「理屈ではない、と？」

深く、静かな声に無言で頷く。

「怯え、不安を抱えたままでは潰れてしまう。また、そんなお前を見ている俺達も辛い」

睨むような強い眼光。

その顔に浮かぶ感情は何であるかを知る事は出来ずに。

周囲の空気が更に静まり返った。

「分かっている、みんなの言う事も分かるの。でも怖いんだ。

また、いなくなっちゃうんじゃないかって。前みたいな思いをするんじゃないかって思うと」

窓の向こうで聞こえた笑い声は違和感を感じるほどに明るく。

賑やかな雰囲気窓から入り込む度に室内は重く沈んでいった。

「確かに死ぬって確証はない。けど、死なないって確証もないですよ。」

あたしがこんな風じゃいけないって分かっているんだけど」

「そうだな」

途切れ途切れに言葉を紡ぐ声は些細な音にも消えてしまう気がする。聞き漏らしてしまいそうで、一同は黙って耳を傾けていた。

「確かに確証はどこにもない。けれど、それは誰しも同じだろう。」

俺も、お前も、生きている奴等は皆そうだ」

「そうだ、けど………そうだよな」

「ラプター」

名を呼ばれ、視線を動かす。

その向こうにあったのは微かに微笑む表情。

「では、お前におまじないをかけよう。いつものラプターに戻るよように」

「おまじない？」

「ああ」

今まで成り行きを見守っていたノクティルカが、そのやり取りに動きを止めた。

表情に浮かぶのはわずかな驚き。

その気配を悟ったのか、ウォークライが顔だけで振り向いて小さく頷いた。

無言で交わされる会話に美冬は憔悴の中に不思議そうな色を滲ませる。

再び向けられた顔に疑問の視線を投げるが、返答はない。

ただ時間だけが流れた。

「ラプター。以前、言葉について話したのは覚えているか？」

「言葉？」

「そう、かつて全ての者が持ちながら忘れてしまった能力の事だ。

イメージをし、言葉にする事で具現化する力」

まっすぐ睨むように見つめる黒い瞳に胸騒ぎを感じた。

何故か息苦しく、心が暴れるように平静が消えていく。

視線をそらしたい衝動の中で息を殺した。

「人はそれを言霊と呼ぶ」

大きくないはずの声が室内に響き渡る。

互いの顔を見つめ合ったまま、動きを止めた。

「言葉やイメージは単なる道具ではない。それは翼であり、時として凶器となる。」

「良い事も悪い事も引き起こす強大な力だ」

「力？」

「ああ」

ウォークライの手が美冬の頬に伸び、無意識にそらせようとする視線を固定するかのようについに。

触れる指先の温度に緊張したように背筋を伸ばす。息をするのもためらった。

「目を見る」

短く命じられるままに頷く。

まるで呪縛だ、その言葉は。

「イメージし、願いを口にしろ。お前は何を望む？」

問いに唇が数度頼りなく動いた。

全てが止まり、色彩が奪われていく錯覚の中で。死神達は2人を見つめたまま、微動だにしない。まるで何かの儀式のようにも見える光景だった。

「いなくならないで」

声は痛みを伴う悲しみを含む。

「これ以上、あたしの好きな人達を奪わないで」

時計だけが無感情に時を刻み続けた。

他に音は聞こえない。

普段ならうるさく感じるほどの階下の音楽でさえも。

「死んで欲しくない」

「誰に？」

「……あたしが好きな人達」

ウォークライが死を司る番人であるかのように瞳で訴えた。膝に置かれた拳を硬く握り締める手。

「今一番、そう強く願うのは誰に対してだ？」  
不意に美冬が黙り込む。

薄く唇を開いたまま静止した。  
言葉を紡ごうとする度に涙が頬を伝い落ちる。

答えを待つウォークライは、その様子を見つめたまま顎を引くように頷いた。

「真雪」

聞こえたのは気のせいであったかと思うほど小さな声。

傍らからこぼれた名前に真雪がくすぐったそうに目を細めた。  
息をついたように聞こえた笑み。

「ラプター、よく聞け」

ここにいるのは美冬とウォークライだけであるかのような。  
目が離せなくなる。

鼓動で体全体が脈打つのを感じた。

他の景色が一切目に入らず、音は耳に入った側から忘れていく。  
聞こえるのは目の前から発せられる声のみだった。

美冬は悟る。

これが言霊なのだ。

これが人の内に潜む言葉の力なのだ。

「『レイヴンは死なない』」

耳の奥で幾重にも響き、全身を駆け巡る。

「『お前が愛する者達も』」

麻痺していく感覚。

意識が遠のきかけて、美冬は我に返った。

「『お前を愛する者達もどこにも逝きはしない』」  
感情の見えない瞳が強い眼差しで見つめてくる。

その瞳を見る度に全てを見透かされている気がして心穏やかではない  
られずに。

「何度でも言おう。お前が信じるまで」  
強く発せられる言葉。

それが心の奥深くで溶けていくように。  
身体の内側で痛みに似た感情が次第に消えるのを感じる。

「……本当に？」

今まで呆然としていた美冬が恐々と尋ねた。

その声に、今まで険しい顔つきだったウォークライが表情を和らげる。

「ああ」

頷き、わずかに身を乗り出して顔を覗き込んだ。

頬に触れていた手は頭に置かれる。

「何て顔をしている。お前が笑わなくては誰も笑えないだろう」

驚き見つめる様子に笑いを含んだ声が言った。

「ややあつて立ち上がる気配。」

膝を軽く手で払い、屈んだままの姿勢で美冬に視線を向ける。

「笑え。こんな時こそ笑っている」

「そうですね。笑って下さい、ラプター。」

貴方がいつも『笑ったモン勝ち』だって言っているではないですか」

動きを止めていた美冬が自分に向けられた言葉にため息混じりの笑みを浮かべた。

口元をハンカチで隠しながら、潤んだ目のままで。

「アンタはレイヴンを連れてこうとする死神にだってケンカ吹っかけるような子だろう？」

なんならレイヴンをソイツから守ってやりやアいいじゃないか」

アイステイーが入ったグラス片手に言ったサーペントの言葉。

何かに気付いたような表情を浮かべる美冬に首を傾げて目を細める。

「失いたくないんだったら、しがみついても捕まえてなきやね」

どこからか入り込んだ微風が通り過ぎ、重い空気を消し去った。

モノクロばかりの景色に生気が宿る。

どこからか安堵のため息が漏れるのを聞いた。

「……そうだよ。こんなの、あたしらしくない。  
何びびってんだろ。まだどうなるか分からないのにさ」

涙混じりの声が誰ともなしに言う。

自分に言い聞かせる言葉は小さく笑っていた。

「ごめんね。ちょっと動揺したけど、もう大丈夫だから」  
窓の外に広がる夜の街並みに視線を向けた後、一同を見る。  
顔を見合わせて誰もが同じように微笑んでいた。

「もう駄目だつて思ったら本当にそうなっちゃう。だよ、うーち  
やん」

「ああ」

ウォークライを見ていた美冬の視線は傍らで止まる。

そこにいるのは足を組んだ姿勢で笑って眺めている真雪。  
体を彼の方へと向けて座り直す。

「真雪」

一度俯いた顔が何かを決意したように持ち上がった。

そこに悲しみや動揺はなく、どこか楽しげにさえ見える。

「あたしね、真雪のこと守ることにした！」

「……一応男んだけど、俺」

「絶対にいなくなつて欲しくないから、出来る事を全力でするんだ」  
「そっか」

その声にあるのは明確な意思。

生気の乏しかった瞳に光が宿っていた。

「あたしも頑張るから、お前も頑張れ！」

「お、おう」

「なんだつたら空だつて飛びますよ！」

「飛ぶなよ」

戸惑い気味に頷いていた真雪が呆れたように苦笑う。



目の前の死神はまだ白いベールをまとっている。  
窓の外にあるのは漆黒の闇と夜の匂い。

「ラプター三等兵、頑張るであります！」

「……以前は二等兵ではありませんでしたか」

「コイツ、へこんで復活するとテンションおかしくなるんだった」

19 - 1 今宵、死神とダンスを

他の者は全て眠っているのではないかと思った。  
人だけではなく、街さえも。

それほど全てが静寂に包まれている。

このまま黙っていると言葉を忘れてしまふ気がした。

かと言つて、無闇に言葉を発する事もためらう空気がここにはある。

「これは確かに素敵なラブレターだね。心がときめくな」

比良坂事務所のソファに座ったダンデライオンが不敵な色を目に宿したままで小さく笑った。

言葉とは裏腹の張り詰めた口調。

その言葉に答える者はいない。

原因はテーブルの上に置かれた数枚のカードだった。

昨日、ダンデライオン宛に届いた差出人不明の白い封筒に入っていたそれは

奇異な印象を漂わせている。

真っ白な葉書サイズの紙に印字されたメッセージと2枚のタロットカード。

そこから放たれる、絡むような甘い花の芳香と重い死臭が

離れた位置で佇む死神達の鼻腔にも届いていた。

「差出人は書いていないが、これを見る限り誰からかは明白だ」

「チャリオット」

「ああ。プルメリアと死臭、ここに書いてある文面を見ると他の可能性を考える必要もないな。

むしろ、彼以外である方がおかしい」

蛍光灯に照らされて眩しく光る白い紙に視線が集中する。

「『姫君は騎士のキスで目覚めた。物語は終わっても彼らの人生は

終わらない。

物語に本当の結末を記そう』……確かにこんな事、アイツ以外に言う奴は浮かばねえわ」

「姫君と騎士つてエのはお嬢と坊主の事を指してるんだろうね。でも」

火の付いていないキセルをくわえたサーペントが身を乗り出すと目を細めた。

言葉を切り、カードの一点を指で指す。

「この数字はなんだつてんだろうねエ？ パッと見て、浮かぶのは日付だが」

文の下に書かれていた『0525 26:00 105-0011』の無感情な文字。

どこからかため息が漏れるのが聞こえた。

「5月25日つて明日だよな。で、26:00つていうのは多分時間でしょう？」

つていう事は最後のつて……」

「場所、という風に考えるのが自然でしょうね」

前傾姿勢でソファに座ったまま、唇に指を当てたポーズで

首を傾げる美冬の言葉を引き継いだのはノクティル力だった。

顔を向けられている事も気付いていない様子で顎に手を置いたまま、視線を落とす。

「なるほど。確かにそうだな」

「ええ。そして、場所を示す七桁の数字と言って真つ先に思い浮かぶのは」

見つめてくる複数の顔を見渡して、軽く頷いた。

「郵便番号です」

ウォークライがカードの傍らに置かれた白い封筒を手にとって、睨むように見つめる。

視線の先にあるのは素っ気なく印字された住所。

「……ここは170-0013か。すると105というのはどこになるのだ？」

窓の外には漆黒と人工的な光がどこまでも広がっていた。

いつもなら感じる喧騒を今日は感じることはできずに。

どこか作り物めいた印象で、この世界に存在するのはこの場所のみであるかのような錯覚。

「葦原区豊葦原。増浄寺や葦原公園のある辺りのようですが」

「葦原区ってエト」

「はい。もつと分かりやすい言い方をするなら東京タワー付近です」  
その言葉に事務椅子の背もたれを抱えるようにして座っていた真雪が合点のいった声を上げた。

何かを納得したように何度も頷いている。

「あー、なるほどな。それで塔のカードっつー事かよ」

真雪が手に取ったのは封筒にメッセージの書かれた紙と共に同封されていた

タロットカードの1枚。

鮮やかな色で描かれた崩落する塔の絵を顔の前に出し、睨むように見つめた。

「それを表しているのだろうな、おそらく」

真雪の隣に立つウォークライが静かに言った。

空調にかき回されるプルメリアの香りの中で微かに息をついた。

「塔ってタロットで一番悪いカードだったよね？ えーと」

美冬が顔をしかめたまま天井を見つめる。

思い出せない事にじれったさを感じるのか、足が苛立ったりリズムを踏んでいた。

ややあつて胸の前で手を打つ。

「そう、破滅と危機。それと終わり」

「……アイツが何か言いたげで腹立つわ、微妙に」

「それで塔のカードと一緒に入ってたのが死神のカードだっけ」

真雪の眩きに頷いた美冬がテーブルに置かれたカードに視線を投げた。

その顔には自嘲にも似た正体不明の笑みが浮かぶ。

机の上のカードに描かれた笑みを浮かべる骸骨を見つめたままで。

「13番目の死神ね。これは指名してもらったって取っていいのかな？」

まあ、言われなくてもって感じだけど」

美冬と真雪が視線を合わせて、目で会話するように苦笑した。

それを見ていたダンデライオンは顎を引くように頷くと一同に視線を巡らせる。

前触れなく沈黙が流れた。

「これはチャリオットからの宣戦布告だと思って間違いないだろう。冥府より討伐令が下された今、迷っている時間はない。諸君、やってくれるね？」

「そりゃな。つーか、もともと選択肢なんてねえんだろ？」

「まあね。確かにそうなのだけれど」

「奴にやア喧嘩売られたまんまだからねエ。白黒つけようじゃアないか」

頷く顔と交わされるやり取り。

ダンデライオンは目の前に座る美冬に違和感を覚えて視線を向ける。妙な面持ちで頷く者達の中で、彼女は表情を曇らせていた。

「ラプターはどうだい？ やってくれるかな」

真っ直ぐに見つめ、問う。

顔を上げた美冬は何か言いたげな眼差しを投げたままで無言だった。言葉を選んでるようにも見える表情で。

わずかな間の後。

「あたしは」

硬い声音に周囲の目が一齐に向けられる。

生気のない景色の中、動くものはなかった。

「大号令が出なくても、チャリオットを殺すつもりだった」  
膝の上に重ねられた手を強く握る。

静かに言い放った言葉を脳裏で繰り返していたらしいウォークライが  
思いつめた風の横顔を見た。

「それは報復か？」

問うた声にゆっくりと首を横に振る美冬。

髪が柔らかく揺れ、流れる。

「頼まれたんだよ、チャリオットに」

「頼まれた？」

「うん、あの廃校で『殺してくれ』って言われたの。自分が人であ  
るうちにつて」

思い出しているのか、遠くを見ていた翡翠色の瞳がダンデライオン  
を見つめた。

真雪の中に流れ込むのは静かな決意に似た何か。

おそらく美冬の感情なのだろう。

「あの人も戦ってるんだ、自分自身と。狂気と正気の中で」

「なるほど」

「……でもさ」

頷く声に真雪の不機嫌そうな声が重なった。

背もたれに顎を乗せて虚空を睨んでいる。

身体を前後に動かす度に生じる軋む音が辺りに大きく響いた。

静けさは増し、重く立ち込める。

「なんか今更かもしねえけど、本当にアイツが突然死の原因なの  
かね？」

何気ない口調で吐かれた疑問に一同の動きが止まる。

注目され、真雪は慌てたように身体を起こした。

「あ、いや！ チャリオットが犯人じゃねえって言いたいワケじゃ  
なくてさ。」

なんつーか、本当にアイツを倒して全部解決すんのかなーとか」  
壁に掛けられた時計が等間隔で時を刻む音だけが流れていく。

誰もが考えるように押し黙った。  
空調が灰皿から立ち上る煙を揺らすのが見える。

「全てを解決する事は出来ないかもしれませんが」

無言を破ったのはノクティル力だった。

「突然死の被害を食い止められる可能性は高いです。

けれど全てを暴き、根絶させる事が出来るとは限りません」

「どうして？」

「まだ分からない事があるからですよ。我々に見えていない物がある」

無感情な声が淡々と答える。

けれど、その眼鏡の奥の瞳には怒気が見え隠れしていた。

「ミロクってエ野郎、か」

「確かにな。ミロクとチャリオットとの繋がりには分かってんのに  
奴に関しちゃ、名前と見た目以外は全然分かってねえし」

サーペントの独白に真雪が答える。

曇った表情を浮かべたまま顔を見合わせた。

「……ミロクに関しては分からないが、突然死はチャリオットが原因だというのは

間違いないのではないか」

塔のカードを手にしていたウォークライの声が呟くように切り出す。  
それまで黙って耳を傾けていたダンデライオンはゆっくりと瞬くと  
口の前で手を組み、

困む死神達を見渡した。

「ふむ。では、そう思う根拠を挙げてみようか。

まず、チャリオットが生き返った日に最初の突然死が発生した  
点」

「廃校にはプルメリアが敷いてあった」

ダンデライオンの言葉に続き、ウォークライが答える。

「それから、チャリオットの目撃情報から割り出した行動範囲と突然死の発生地域は、ほぼ一致している事が分かりました」

「あとはアイツ自身もハーメルンの笛吹き男の話をしていただけだっけね？」

「あ、あたしもチャリオットと2人つきりだった時に聞いているの。それ言った後『言っただけでは、どうって事ないか』とか何とか言っていた」

「『』事は少なくとも俺達の前で2回言ってるって事か？ 美冬が聞いたのと、俺と親父が聞いた時と」

「交わされるやり取りに、どこからともなく小さな唸り声が聞こえた。美冬は考え込むように机の一点を見つめていたが、急に顔を上げる。『それと、本人が言っていた狼と小鳥の例え話だ。』

あとは『魂を食べなきゃ生きていけない』って発言も」  
沈黙が流れる。

「……アイツしかいねえって事だな。こんだけ揃うと」  
一拍置いて吐き出された、ため息混じりの言葉。

顔を見合わせて、まるで目で会話するように目配せし合った。

ダンデライオンが座り直し、姿勢を正す。  
それと同時に張り詰めていく空気。

「チャリオットが突然死の原因だとする証拠が揃い、改めて我々の敵になった訳だ」

ダンデライオンの口調は殺気を帯びていた。

鋭い眼差しで美冬の肩越しの夜を見据える。

「確かに彼を倒しても全てが終わるといって確証はどこにもない。だが、彼を倒すべき理由はある」

ここにあるのは息をひそめなくなる緊迫した空気。

ダンデライオンの声だけが響いた。

「冥府勅命だからか？ それは違う」

色彩のない、モノクロばかりの部屋でゆっくりと頭を振る。



「死に関わる存在として、この世界で生きる人間として」  
日常も穏やかな空気も消え去り、殺伐とした雰囲気の中で。  
静寂。

誰も動かずに。

「生き返りを許すな。死人に自由を与えるな。奴を彼岸へ叩き落せ」  
ダンテライオンは立ち上がり、宣言するように強く言った。  
頷く顔に視線を巡らせて口の端を上げる。

「さあ諸君、夜が始まる」

忍び込む死臭を感じたのか、窓の外に視線を投げた。  
浮かぶのは殺気混じりの不敵な笑み。

「今宵、死神とダンスを踊るとしようか」

「な、に……これ」

呆然と前を向いたまま美冬が呟く。

広がっていたのは全てを飲み込む闇と漆黒の天を突き刺そうと伸びるビル群と。

そして人はおろか、車の姿さえも消えたゴーストタウン。

まるで街全体が神隠しにでもあつたように思えた。

車通りのない道で信号が事務的に鮮やかな色の光を放っている。

午前2時、葦原区豊葦原。

ビジネス街である界限は、この時間ともなれば人がいなくなるのは当然かもしれない。

だが、それを差し引いても車の通行が一切ないというのは異常だった。

「どうなつてんだ、これ。人も車も全然いねえじゃねえか」

「うん、これが普通って事はないよね。コンビニとか全部閉まつてるはずないもん」

「ああ。考えられるのは」

美冬の隣に並んだ真雪は注意深く辺りを見渡して、声をひそめる。

ビル同士の間からパトカーの回転灯が周囲に赤い光を振りまいてるのが見えた。

そして、彼の視線の先にいたのは。

「……エクスキューション」

真雪の視線をなぞるようにして顔を向けた美冬が名前を挙げる。

その声は警戒心と怪訝を滲ませていた。

死んだ景色の中で点々と黒いフードをかぶった人影が散らばっている。

十数人の黒いシルエツトが無言で同じ方向へと歩いていく様は葬列を思い出させた。

幾重にも靴音が響き、耳にまとわり付く。

「警察がこの辺りを通行止めにしてんだろうな。理由なんてどうにでもなる」

「普通の事故とか殺人だったら、あたし達も入れないはずだよな？  
それが余裕で入れた。

あたし達だけじゃない、ポリ公がこの人数いる事自体がおかしいよ」

「ああ。多分、お前が考えてる事で間違いねえと思う」  
重く立ち込める死臭の中、深呼吸をするように。  
真雪は顔をしかめたままで髪をかきあげた。

「あの手紙　おそらくチャリオット絡みって事なんだろうな。  
しかも警察はその事実を全部把握してないまでも、どっちかと組んでいる可能性がある」と

頭の中で考えを巡らせているらしく、上の空で言葉を紡ぐ。  
口を開きかけた所で疑問の視線で見上げられている事に気が付き、  
見つめ返す。

「……そんな事も分からねえのかよ」

「人の心の中、勝手に読むな」

「どうして美冬はこんなに馬鹿なんだろう」

「うっさいバカ！　あんた、殴るわよ！」

美冬は睨みながら頬を膨らませた。

怒っている事をアピールしたいのか、何度も身体を隣に並ぶ真雪にぶつける。

「まあ、聞けよ。いいか」

なだめるように頭に置かれる手。

顔は笑みを浮かべる事なく、真つ直ぐ前を見据えていた。

その様子に不満そうな表情を浮かべたまま、押し黙る美冬。

「まず、警察がこの件を知って動くっつゝ事は有り得ねえよな？  
あいつらは此岸にノータッチだし、何よりそんな力なんざねえ」

「まあ、そうね」

「だとしたら、残る可能性は2つだ」

スラックスのポケットに手をつ込み、突風に目を細める。

「ポリ公、もしくはチャリオットと手を組んでいる」

「え、待って。それだと……」

「そ。どっちにする話がややこしくなってるっつー事」

エクスキューションナーが歩く様子を眺めていた赤紫色の瞳が美冬に向けられる。

見つめ合う視線。

耳鳴りが生じるほどの静寂に無意識に小声になった。

美冬が眉間に皺を深く刻む。

「この場合、ポリ公と警察が手組んでるって考えるのが自然だよ  
ね。でも、それだと」

「ああ、何でそんな情報知ってたって事になる。

向こうにも同じモンが届いたなら話は別だけど」

「で、もしチャリオットと警察が手を組んでるとしたら」

「俺達はかなりヤバめな方々を敵に回しちゃってるかもしれないっ  
つー事だな」

人の気配がない街では風の音さえも大きく聞こえた。

辺りを照らすのは、等間隔の外灯が放つ無機質な光。

そして二人の真正面には闇の中でも大きな存在感を放つ、増浄寺の  
大門がそびえる。

暗闇の中でも鮮やかな朱色は浮かんで見えた。

「まあ、俺達の読みが間違ってたっつー事は言えるか。  
このクソ重たい、ひでえ死臭はアイツの……」

「おお、誰かと思えば比良坂の死神と魚肉ソーセージではないか！」

靴音が近づいてくると共に聞こえたのは、どこか嬉しげな女の声だ  
った。

口を開いたままで真雪が顔を向ける。

みれば、駅の方から歩いてきたらしい黒いコートを着たヴァンガード。

かぶっていたフードを取るとカールした髪と少女趣味のアクセサリが姿を現す。

「いつもアブソートが世話になつとるのう！ まったく、あやつはどこに行つたんじゃ。」

さつきまで居たというのに、気が付けばフラフラフラほつき歩きよつて」

「……お前、誰だよ」

「せつかくお友達がおるんじゃから挨拶くらいしたらいいのにおう」「いや、聞けつて」

真雪がため息混じりに声をかけるが相手には聞こえていないらしい。ヴァンガードは形のいい唇を歪めながら、口の中で独り言を繰り返していた。

「あのさ」

「ん、なんじゃ」

「だから、あんた誰だつて聞いてんだよ」

ヴァンガードは苛立った調子で尋ねられて大きく目を瞬かせる。数秒後、ようやく何かを把握したように目を細めた。

「なんじゃ、お主の所の黒くてデカいのは知つとつたんじゃが。」

まあ、いい。ワシはエクスキューショナーがー、ヴァンガードじゃ」片足を後ろに後退させ、膝を曲げる動作。

その顔には笑みが浮かんでいたが、不敵な色を漂わせていた。

真雪はヴァンガードの足元から頭までさりげなく眺める。

黒いコートを着ている時点でエクスキューショナーだと見当は付いていたが 心の中で呟いた。

「で、そのエクスキューショナーがここに何の用なの？ 随分いっぱいいるけど、誰かの逮捕？」

それまで黙っていた美冬が首を傾げる。

そこにあるのは密かに探る視線と、それを隠す微笑。  
問われた彼女は口元に指を当てた。

「さあおう。もしかしたら星を見に来たのかもしれないぞ?」

「通行止めにした挙句に人払いまでして?」

「可能性はあるじゃろう? ワシ等は変わり者ばかりだからの」  
様子を窺うように覗き込むと小さな笑い声と共にきびすを返す。

見えるのは死臭混じりの風でひらめいたコート。

それぞれが何かを考え、沈黙した。

「じゃが」

重くのしかかるような夜気が身にまとわりつく。

時折、目に飛び込んでくる赤い光が何故か不安を駆り立て。

困むように立つ、背の高いビル達は灯りを点す事なく眠りについて  
いた。

今にも倒れてきそうな気がして不安を覚える景色。

「ここでする事といえば一つしかあるまい? お主等と同じ用件じ  
やろうな」

「それは、どうかの誰かさんを討つつつー事か?」

「こんな人っ子一人いない場所でする事なぞ限られておる」

笑いを含んだ声が言う。

「まあ、ワシらの仕事はそれだけではないがの」

「どういう意味?」

首をひねり、顔だけで振り向いていたヴァンガードが身体を2人に  
向けた。

真雪は視線を向けられて、わずかに睨む。

固まったように動かなかつたが、咄嗟の動きに反応できるように警  
戒しているのは明白だった。

「マスターより監視を命じられてのう。『比良坂の死神から目を  
離すな』と言われておる。」

特にレイヴンとラプター エニグマを、と

「何それ?」

「自覚がないんじゃないやろうが、エニグマという力はチャリオットと同等の脅威じゃ。」

前回の廃校での一件では共闘に近い形ではあったが、お主等の動きによってはどうなるか分からん」

それまで笑みを浮かべていた顔が険しくなった。

「心せよ、死神ども。お主等はしつげが行き届いてない狂犬に引かれ、歩いているようなもの。」

そいつは時に飼い主にも噛み付くぞ」  
不意に。

ヴァンガードの言葉を遮るように2つの電子音が鳴り響いた。

それは真雪と美冬の耳元に付けられたインカムから。

思わず顔を見合わせた2人を眺め、一つ頷くとヴァンガードが再び背を向ける。

最後に見えたのは薄い笑み。

「自分だけなら良いが、他人を噛み殺すかもしれん事を忘れてはいかん。」

……さらばじゃ、エニグマ。相対する事がないよう祈っておるぞ」  
靴音が消え行き、ヴァンガードが闇と同化した。

向けられた言葉を脳裏で繰り返しながら見送っていた美冬が、鳴り続ける着信音に我に返る。

慌てた様子で耳元のボタンを押した。

そして、聞こえてきたのは。

『こんばんは、可愛い天使諸君。こちらダンデライオン、良い夜だね』

始まりを告げるノイズ混じりの声。

隣に佇む真雪と目配せをし合う。

『これより作戦を開始する。今宵のダンスパートナーはチャリオットだ。』

彼は恥ずかしがり屋さんだから僕らが来るのを何処かで待っているはずだよ』

ダンデライオンがインカムの向こうで微笑んでいるのだろう。声から容易に想像が出来た。

湿気の混じる風が通り過ぎ、どこかでプルメリアの香りを感じた気がする。

思わず振り返り、誰もいない事を確認した。

『僕らが彼のラストダンスのお相手になって差し上げようじゃないか。』

くれぐれも無理はせず、クールにスマートにね。愛しているよ』

『こちらノクティルカ、改めまして作戦をお伝えします。』

ミッシヨン【死神狩り】、クリア条件はチャリオット討伐です』

言葉が終わると同時にノクティルカの声が耳に飛び込んでくる。

無感情な声が事務的に言葉を紡いだ。

そこから感情を読み取ることができない。

けれど、声に棘に似た何かが含まれていた。

『チャリオットの搜索および、討伐はレイヴンとラプターが担当。』

その他、イレギュラー掃討と2人のサポートはダンデライオンとサーペントに。』

ウォークライは監視と邪魔者の排除を宜しく願います』

誰もいない、この場所に立っていると取り残された気がする。

月さえも隠れた暗いだけの夜。

時間が凍り付き、全てが静止していた。

『彼を彼岸へ送って差し上げましょう。それが我々に唯一出来る事です。』

『ご武運を。愛してますよ』

最後の言葉に小さな笑みが宿る。

真雪は辺りを伺うように視線を動かしながら黒い革手袋をきつく嵌め直した。

『ウォークライだ』



この暗闇の中で警戒するほど全てが敵に思える。

視界の端の街路樹、無機質な物達が目を離れた隙に動き出すのではないかと。

『舞踏会場の外は警察が交通規制しており、一般の侵入は不可能。話によると不発弾処理という理由で人や車の進入を禁じているらしいが。』

爆弾か……言い得て妙だ。アイツは確かに爆弾には違いない』

ウォークライの言葉に美冬が横を向き、狭間に見え隠れするパトカーを眺める。

そして何かを把握するように数度軽く頷いた。

『存分に踊れ。【勝利は我らと共に】……出来うる限りのサポートをしよう。愛してるぞ』

『踊るにやアうってつけの夜さね。入口待機のサーペントだ』  
微笑む声が言葉を引き継いだ。

インカム越しのサイレンと、遠く背後からの音が重なる。

『随分とエクスキューションの小僧がいるもんだ。隠れみの位にはなるかねエ』

美冬が不意に傍らを見上げると、視線がぶつかった。

真雪が片眉を上げて笑みを浮かべると一つ頷く。

淡く発光する白いベールは相変わらず彼を包んでいた。

死期を表すそれが分厚くならない事に多少の安堵を感じつつも消える気配がない事に不安を感じる。

唇を噛んで、心の中で膨らみかける恐れを打ち消そうとした。

『あたしや雑魚掃除をしよう。』

お嬢や坊主は若造の相手に集中しとくれよ?』

サーペントは、まるでこれから祭りでも始まるような口ぶりで楽しげだった。

『積もる話もあるだろう、熱い夜を過ごしとくれ。ふふ、愛してるよ』

視界の端を飛ぶ影に真雪が鋭く反応する。

何かの攻撃にも見えたそれは鳥　カラスらしかった。  
小さくため息をつくとき空を仰ぐ。

「こちらレイヴン、現在地は増浄寺と駅を結ぶ大通り。  
不気味なくらい静かだな。静か過ぎて怖くなるよ」

言葉と裏腹に笑うように口の端を上げた。  
踵がアスファルトを打ち、リズムを取る。

「こんな広範囲じゃ、美冬とは別行動でダーリンを探した方が良さ  
そうだな。」

2人で動いてたんじゃ効率が悪くて仕方ねえ」

『危険ではありませんか？』

「それは二人でも同じ事だろ。俺的には出来るだけアイツを早く見  
つけ出したい。」

ヤツが何かしでかす前に、とつと潰したいってのが本音。どう思  
う、美冬？」

「確かに別行動の方がいいかもね。チャリオットの居場所が見当つ  
いてればいいんだけど」

死臭を辿るにも出所が分からないし」

感覚を研ぎ澄ませて風の匂いを嗅ぐ美冬を一瞥した。

インカムを指で押えて遠くを睨む。

「そんな訳で俺達は別行動でチャリオットを探し出して、見つけ次  
第ぶつ殺す。」

これは生きるモンとして、死神としての意地だ。アイツは逃がさね  
え」

強い口調で吐かれた独白。

「今夜で全部終わりにしてやる、絶対に。愛してるぞ」

「こちらラプター、真雪と同地点に待機中。いつでも動けるよ」  
一拍置いて美冬が話し始める。

彼女の見つめる方向にはエクスキューショナーの姿があった。

無言で佇む黒衣の集団。

その黒いシルエツトが街を非現実的な景色に変えていく。

「真雪の言つてた通り、別行動でチャリオットの搜索するから。見つけ次第、連絡するね」

足元にある自分の影に視線を落として言う。

何か迷っているのか、言葉を選ぶ沈黙が幾度も生まれていた。その姿を真雪は黙って見つめる。

「あの人は終わりにしたがってた。罪を重ねたくないって言ってた。死ぬ事は救いじゃない。でも、それでしか解決できない事だってあるんだ」

インカムの向こうも、美冬の周囲にも音は聞こえなかった。

誰もが耳を澄ます。

「あたしは出来る事を全力でやる。大丈夫、あたし達ならきつと出来るよ。」

……愛してる、みんな。ずっと一緒にいようね」

自分に言い聞かせるような響きを持つ言葉。

俯いた顔から見えた口元にはどこか寂しげな笑みが宿っている。

頭を撫でる手に気付いて顔を上げると。

微笑む真雪が何か言いたげに肩をすくめて見せた。

その様子に困った表情のままに笑おうとする美冬。

作戦開始を告げる声を聞きながら言葉もなく立ちつくす。

遠くで吠える声は幻聴だろうか、それとも。

光のない空を見ていると、夜は明けないのではないかと不安にもなった。

「よし、じゃあ俺たちも動くか」

数分経った頃、真雪は気を取り直したように明るい声で言った。

思考を破られて弾かれた反応を見せる美冬が顔を上げて慌てて頷く。気がつけばエクスキューションナーは視界から消えて、街にいるのは

2人だけになった。

取り越された気分になる。

「お前はどこを回る？」

「え、と。公園のあたり、ぐるっと回ってみようと思っただけど」

「そっか。じゃあ、俺は増浄寺にでも行ってみようか」

ネクタイの結び目を掴んで絞め直しながら小さく唸る声。

周囲の様子を窺っているのか、視線がせわしなく動いていた。

「公園、増浄寺。あとノーマークなのは東京タワー辺りと駅方面か。駅に関してはウォークライがいるから大丈夫かね」

「うん」

「寺付近を一通り回ったら、俺が東京タワーまで行ってみよう。」

親父と姉御、オマケにポリ公もいるから探すのはそんな時間かからねえかもな」

心配そうな表情で上の空を返事を返す美冬を気にせず真雪が話す。

声は普段と変わらないが、そこには緊張感が漂っていた。表情を引き締めたままで。

「じゃあな、美冬。気をつけるよ？」

間違ってもアイツ見つけたからって考えナシに突っ込まねえように。そう言いながら置かれた手に、肩をすくめて身構える。

乱暴に撫でる手が数回軽く叩いて離れた。

きびすを返す動作。

ゆっくりとした靴音が聞こえ、黒いスーツ姿の背中が正面に向かって歩き始める。

背中を向けたままで手を振る真雪。

「あ」

それを見ていた美冬が小さく声を漏らした。

何を迷っているのだろうと美冬は自問する。

伝えたい言葉があったはずなのに出てこない。

声をかけなければと思うのに何を言っているかわからない。

天使のベールをかぶった姿が目奥に焼き付き、もう会えないのではないかと怖くなった。  
足がすくみ、動けずに固まる。  
言いようのない不安で胸が締め付けられた。

突然、真雪が数メートル先で立ち止まる。

何かを思い出したのか。

ややあつて振り返った。

「……これから、でっけー敵倒しにいくってツラじゃねえな」  
遠くに見えた苦笑。

その言葉にも答えず、見つめる美冬を困った表情で眺めた。  
髪を掻きながら空を見上げた後、  
耳に装着していたインカムをはずすと自分の耳を指差した。

意味も分からずに動きを止める美冬は、ようやく何かを理解したように

戸惑い気味にインカムをはずして真雪に視線を投げる。

満足そうに頷く正面にある顔。

そして。

「ほら、来いよ」

真雪は笑って肩をすくめながら両腕を広げてみせた。

次の瞬間。

呆気にとられた美冬が俯きがちに笑みを漏らして、真雪に駆け寄り。  
勢いそのままに抱きつく。

「どうした、ずいぶん弱気じゃねえか。こういう時、いつものお前は  
チエイサーの血が騒ぐとか言って燃えるタイプだろ」

バランスを崩しかけて数歩よろめきながら、苦笑した。

顔を埋めたままで硬く抱きしめる美冬の様子は何かを必死に堪えているようにも見える。

伝わるのは不安と恐れ。

「……怖いのか」

問うとポニーテールが大きく揺れた。  
なだめるように抱き返す。

道の真ん中でシルエットが一つになった。

「どうすればいいか、何をしなきゃいけないかも分かってるのに足がすくむんだ。

こんな事、無かったのに。こんな事考えてちゃいけないって分かってるのに」

「そっか」

「たまに気持ち揺らぎそうになる、間違ってるんじゃないかって本当にこれでいいのかって何度も聞いて不安になるの」

「俺達はキリングマシンじゃない。そう思う事だつてあるさ」  
鼻腔を突く死臭が十数分前よりも濃くなっている事に気がつく。

それは単に風が運んでいるだけなのか、『彼』が近くにいる事を表しているのか。

「大丈夫だ」

「ん」

「アイツを止められるのは俺達だけで、この方法しかない」

「そう、だよな」

不安げな様子で曖昧に頷く声。

美冬の頭を見下ろしていた真雪が何かに気付いたように動きを止める。

「美冬」

「ん？」

「ちよつと顔、上げてみ？」

美冬が不思議そうに顔を上げると、伸ばされた手が前髪をかき上げた。  
た。

不可解な行動に数度大きく瞬く。

「な、なに？」

問う声を無視して真雪が顔を近づける。視界が影に覆われる前に見えたのは笑う口元。額に柔らかい感触と体温が伝わった。顔が一気に赤くなり、息苦しさを感じ。美冬は目を見開いたまままで固まった。数秒の空白、その後。

「なっ！　　いいいいいい！？　　ちょっと！　　何コレえ！？」

真雪の顔が離れると同時に頓狂な声上がる。

死んだ街並みの中に美冬の声だけがこだまし、響き渡った。

「……デコにちゅーだけど」

「何やってんスカ！　何のつもりよ！？」

「元気出るかなーと思って。っーか、なんで微妙に喋り方が体育会系なのよ」

動揺したように辺りを見渡しても、真っ直ぐに視線を合わせようとしない様子に

真雪が笑いをこらえながら答える。

落ち着きなく髪に触れ、拗ねたような視線で一瞥するもすぐに顔をそむけた。

「こ、こんな時に何してんのよバカ！　もう信じらんない！」

「口にした方が良かった？」

「む、むぎー！　死ね、死ねばいいのに！　ていうかヤツより先にお前が死ね！」

怒気混じりの声と共に繰り出された拳を真雪が笑いながら手のひらで受け止める。

からかうように薄笑いを浮かべて美冬の頭に触れた。

顔を紅潮させたまま、悔しげに唇を噛む顔を窺いながら。

「うん。やっぱりお前は、そっちの方がいい」

その言葉に一瞬動きが止まり、徐々に表情が和らいでいく。

「元気でたか？ 相棒」

肩に垂れたインカムから何かを言っているらしい判別不能の声がした。

静まる夜の中で佇む。

モノクロームの景色で2人は笑った。

「出来るって思ったら出来るし、その逆もしかりだ。

信じるよ、美冬。自分の決断を、自分が正しいと思った事を」

「うん」

「とりあえず前に進もうぜ。俺達は俺達の仕事をしよう」

影が蠢き、死臭が立ちこめる。

誰もいない死んだ街。

そして、火蓋は落とされた。



聞こえない音に耳を澄まし、いないはずの気配に振り返る。  
見るものが敵に見えた。

全てが動き出して自分に迫ってくるのではないかという錯覚。

離れた位置にあるはずの大殿が間近に感じるほどの存在感を放つ。

外灯はなく、月明かりもない。

真雪は誘われるがままに門が開け放たれた増浄寺に入り込んでいた。

「なあ、ノクティルカ」

辺りを注意深く見渡しながら小声で切り出す。

聞こえるのは正面に向かって階段を登る自分の足音と駆け抜ける風の音。

何者かの気配を感じては立ち止まる、そんな行動を幾度も繰り返していた。

『はい』

「俺さあ。やっぱり増浄寺回るのが、パスしていいかな」

『何故ですか？』

言わずらそうに吐き出された言葉にノクティルカが疑問の色を滲ませる。

わずかな沈黙。

真雪は軽く眉を寄せると髪を指先で搔いた。

「ここ、怖いんだもん」

『……はい？』

「直感がここはやめとけって言うてんだよ。もー、こんな所にアイツがいるワケねえし」

俺はとつと別の所に行きてえんだけど」

『なに子供みたいな事を言ってるんですか。増浄寺に行くと言ったのは貴方でしょう？』

駄々をこねてないで真面目に仕事して下さい』

インカムの向こうの無感情な声のため息混じりに言い放つ。

ノクティルカが呆れた表情を浮かべている事は容易に想像できた。

「お前はこの場にいねえからそんな事が言えるんだって！ ずっと誰かに見られてるし、

むちゃくちゃ威圧的なオーラ感じるしさ。第一、こんな所で戦つたらバチが当たるよ」

『それは敵の気配ですか？』

「敵じゃねえな。こんな綺麗な空気のトコにイレギュラーなんて入れっこねえ。」

チャリオットの死臭ですら届かねえような場所よ？」

その言葉どおりだった。

先ほどまで立ち込めていた、重くのしかかるような死臭はどこにもなく

ここにあるのは凜とした鋭さのある空気。

色に例えるなら白だ。

他の何色をも染め替える強さを持つ。

「なんつーのかな。多分、普通の人間に対しては優しいんだと思うけど、俺達みたいに戦う意思のあるヤツは嫌いみてーだな。すげえ敵意感じるもん」

『敵意？』

「帰って無言のプレッシャー感じるんだわ。仕方ねーな、場所が場所だから」

『なるほど。しかし、万が一漏れがあつてはいけません。』

一応、念の為に彼がいなか確認して下さいますか？』

参道の両側を縁取るように植えられた木々が闇に同化しながら歌うように揺れていた。

それは笑い声か、それとも警告か。

音と静寂に囲まれ、ここが東京である事も忘れかける。

「まあ、そうね。そうするわ」

『よろしく願います』

会話が終了すると共に真雪は軽いため息をついた。

インカムを手で押えたまま、辺りに視線を巡らせる。

時間は止まり、景色は凍りついた。

静止画の中に迷い込んだ気になってしまう。

「そんなカリカリすんなよ。探しモンがねえって分かったら、すぐ出て行ってくて」

苦笑気味に独りごちる。

どこまでも広がる寺の境内。

その中で死神の黒いシルエットだけが闇の中で歩き回っていた。

「こちらレイブン、増浄寺は異常なしだ。チャリオットらしき気配も匂いもねえ」

『了解です』

「これから東京タワーに向かうわ。誰もそっちには行ってねえんだよな？」

数分後。

門を背に真雪がスラックスのポケットに手を突っ込んだまま言った。寺の敷地を越えた瞬間から強い死臭が身体にまとわり付く。

こころなしか、寺内に入る前より臭気が濃くなっている気がする。

無意識に息を殺して周囲を窺った。

『そうですね』

「なーんか大本命って感じだよな。いかにもアイツがいそうな場所だ」

『あ、レイヴン』

足を踏み出しかけて、そのままのポーズで固まる。

「何？」

『……いえ、何でもありません。お気をつけて』

無言に逡巡が見えた。

言いかけた言葉は吐き出される事なく、押し黙る気配。

真雪はその様子に息を漏らすように笑った。

「おう、お前も気をつけるよ？ 車の中で煙草ばっか吸ってると煙製になっちまうぞ」

『……いえ、そもそも私は食べ物ではありませんから』

片眉を上げて軽口を言うと、耳元で笑いを含んだ声が答える。

外灯に照らされた朱門を横目に。

普段は交通量が多く、話し声ですら車の騒音でかき消されてしまう程の道も眠っていた。

どこからともなく不安が沸き起こり、それを打ち消そうと正面を見据えて唇を噛んだ。

そして真雪は歩き出す。

聞こえる靴音は自分の物だけであるはずなのに、時折二つ重なって聞こえた気がして

動きを止めた。

「ビビり過ぎだったっの、俺」

気配も音もなく、静まり返る。

違う。

気のせいだと笑いかけて表情が固まった。

静止する真雪の背後には明らかに何者かの気配がある。

相手は気配を消しているらしいが、隠せないほどの圧迫感が背に伝わっていた。

1人、いや2人か？

真雪は心の中で呟き、視線を背後に投げる。

異変は見えなかった。

けれど直感が告げている、何かを。

息を殺してスラックスのポケットの中で拳を握り締める。

スキルがいつでも発動できるように右手に神経を集中した。すると。

「おや、坊主じゃアないか」

聞き慣れた、笑みを浮かべる声。

張り詰めた緊張が途切れて真雪はバランスを崩すような仕草をみせた。

肩で大きくため息を吐く。

「姉御、驚かすなよ」

「アンタが勝手にビビってるんじゃないか。人聞きの悪い事を言わないでくれ」

振り向いた先にいたのは。

朱門を背に微笑み、キセルをくわえるサーペントと　その傍らには翼を持つ白い大蛇。

その非現実的な光景に一瞬言葉を失った。

大蛇は彼女に寄り添い、真雪を睨むように見つめている。

時折赤い舌が覗いた。

「オロチ出してんだ？　久し振りだな、本気モードの姉御見るのなんて」

「ああ、この子の食事をかねて雑魚のイレギュラーを狩ってたのさ。

……まア、こんな時くらいヤル気出さないとねエ？

手加減してあの若造に勝てるとは思っていないさね」

サーペントが目を細めて笑う。

口調は楽しげだったが、言葉の端々には不敵な色がひそんでいた。

普段、チェイサーである事を隠して生活しているサーペントが

こうして召喚士としての顔を見せているという事実。

それは、この一件がどれほど大きな事件であるかを表している気がした。

この夜は分水嶺なのだ、おそらく。

「ところで」

サーペントの指が自身のインカムの通話を切り、真雪の方へと伸びた。

耳に触れ、インカムが肩へと滑り落ちる。

「ダンドライオンがどこにいるか、知らないかい？」

「親父？ 分からねえけど、その辺にいるんじゃないのか？」

「それが、少し前から行方不明でね。インカムで話しかけても反応がないし、

携帯に電話しても出やしない」

気持ち良さそうに目を細める大蛇の喉を撫でていた真雪が首をひねった。

「事務所でフラッと居なくなるなんざ、日常茶飯事だから気にしないんだけどねエ。」

今回は状況が状況だろう？ ちよいとばかり気になってさ」

真雪に近づくと声をひそめる。

サーペントは微笑を浮かべた声で話していたが、表情は険しかった。どちらからともなく、視線を合わせる。

「……姉御、変な事考えてない？」

「さアて。あたしだって、身内を変に勘繰るような真似なんざしたくないよ？」

だが、疑いたくなる材料が多すぎるんだ」

赤い唇が空に向かって白い煙を吐き出した。

空を仰いだままで視線だけを真雪に向ける。

微風に袂が揺れた。

「どっから仕入れたのか、エクスキューションナーがコレだけ兵隊を揃えて集まっている上に

警察まで出てきて舞踏会場を用意してるだろう？ 今回だけじゃない。

お嬢が攫われた時だって、エクスは知らないはずの情報まで握ってたってエ話じゃないか」

「で、親父疑ってるってワケ？」

「可能性を探ってるだけさね。どうも、どっかに穴が開いている気がして仕方ない」

遠くで咆哮に似た声上がり、それと同時に胸元に垂れたインカムから声が聞こえた。

甲高い声　おそらく美冬だろう。

真雪はそれが聞こえないかのようにサーペントを静かに見つめる。

「笑えねえ話だわ」

数秒の無言を破ったのは、苦く笑った声。

俯き加減で軽く息をつくと髪をかき上げた。

「でも、あの人はわかりが怪しいってワケでもないんじゃないの？

確かに親父は何かと隠したがるトコあるけどさ」

「坊主、何が言いたいんだい？」

言葉の中に何かを感じたのか鋭い眼差しをサーペントが向ける。

闇の中でキセルの先に灯る赤い炎が浮かんで見えた。

「あんたも同じように怪しいって事だよ」

真雪の瞳がサーペントを睨み返す。

「姉御もヒトの事言えねえんじゃないの？　結構聞くよ、あんたの

黒い噂。

考え方によっちゃ、姉御が影で手エ引いてるって風にも見えたりするぜ？」

サーペントの動きが一瞬止まった。

空気が変わっていく事を感じたのか、威嚇の声を低く上げる大蛇。

真雪は片眉を上げた。

「オロチ、別に喧嘩してるワケじゃねえんだから怒るなよ」

ため息混じりの声に、サーペントが大蛇に顔を向けて頷く。

再び訪れる沈黙。

不意に、キセルを手にしたサーペントが小さく息をつくように笑った。

「無闇に疑うと見えるモンまで見えなくなっちまうよ?」

「そりゃそうだけどさ」

「それ言ったら同じ事が皆に言えるだろう? 坊主だって怪しいって事になる」

視界の端にエクスキューションナーが動いている気配を感じ、同時に視線を向ける。

内容までは聞き取れないが、何かを話す声が微かに聞こえた。

「アンタの知らないアンタが情報を流してる可能性だってあるじゃアないか。」

そして顔の広いお嬢、何を考えているか分からないウォークライ、行動の読めないノクだつて」

今までの張り詰めた空気が遠くへ流される。

サーペントは楽しげに目を細めると真雪の瞳を見つめた。

「疑い始めたらキリがないさね。」

やめときな、下手な事考えてたら自分以外信用できなくなっちまうよ?」

「……姉御が言うなよ。そもそも、こういう話の流れになった原因は姉御の発言だろうが」

「おや、そうだっけね?」

呆れた顔の真雪にサーペントが声を上げて笑った。

そして、インカムに触れると通話ボタンを押す。

空を仰ぐ横顔。

「風の匂いが変わってきたねエ」

誰ともなしに呟いた。

肩にかかる髪を指に絡め、きびすを返す。

「ここで油売ってちゃ怒られちまう。あたしゃ、仕事に戻るよ」

「ああ」

「あんまり無茶するじゃないよ」

「あんたもな、姉御」

草履の音と重いものを引きずる音が遠ざかっていった。



漆黒の中では白が目には焼きつくほど鮮やかに写る。

まるで自ら光を放っているかのよう。

真雪はサーペントと大蛇の後ろ姿を長い時間、眺めていた。

何かを考えているのか、微動だにせず。

「……本当の事なんて知りたくねえよ」

低く呟く声が空へと消える。

「醜い部分なんて、見たくなけりや見なきやいいんだ」

石段を叩く靴音が辺りに響いた。

門を通り過ぎ、終わりの見えない垣根の横を進む。

ひらめく黒いジャケット。

真正面の見えない何かを睨むように。

「俺は目の前の敵を倒してりゃいい。余計な事は考えずに」

死神が細い脇道へと消え、自身に言い聞かせる言葉だけが残った。

目の前に立ちはだかるのは夜空に身を隠す塔。

その姿は今にも朽ち、崩れ落ちそうな遺物のようにも見える。

増浄寺の脇にある道は東京タワーへと真っ直ぐに伸びていた。

両サイドから伸びる木々が周囲を更に暗くする。

生垣から覗く幾つもの視線を浴びながら真雪の足は等間隔のリズム

を刻んでいた。

歩く度に死臭が強くなり、頭痛を覚える。

どんな証拠よりも明らかだった。

この先に『彼』がいると。

「美冬、大丈夫か？」

口ずさんでいた鼻歌を止め、インカム越しに尋ねる。

先ほどから聞こえる、ノイズ混じりの風の唸り声や何かを切り裂く

音は

彼女から生じているものなのだろう。

返答を待ち、押し黙った。

耳を澄まして些細な音から状況を知ろうとする。

『……つは。だ、大丈夫。ぜ、全力で生きてる』

「全然大丈夫には思えねえんだけど。どうした？ 何かあったか？」  
言葉とは裏腹に美冬の声は息が切れていた。

息を整えようとしているのか、つばを飲み込む気配がある。

真雪は無数の敵の気配があるにもかかわらず、思わず立ち止まった。  
『さっきまで公園にいたんだけどさ、もう最悪。チャリオットはいない上に』

そこ、イレギュラーの巣になってんだもん。死ぬほど敵出てきて全部片付けた』

「怪我は？」

『怪我はないけど、こんなのが続いたらチャリオットに会う前に力尽きちゃいそうだよ』

「それじゃ一旦合流した方がよさそうだな。今、増浄寺から東京タワーに向かってんだけど」

どうやらビンゴっぱいぞ。多分チャリオットがいるのは東京タワーだ」

視線の先の塔を睨みながら顔をしかめる。

手袋を嵌め直すと、素早く視線を周囲にめぐらせた。

敵が忍び足で近づいてくる感覚。

お互い息を殺す。

音はなく、風が目の前を通り過ぎた。

『そっか、じゃあそっちに行こうかな』

「今どこにいる？」

『え？ えーと、ここは……』

美冬の声は何かを探すような調子で途切れる。

真雪は上の空で美冬の手紙を聞いていた。

正面を向いたまま、静止。

「美冬」

名を呼んだ。

木々がスローモーションで揺れている。

『何？　どうかした？』

変化を察知して美冬の声音がこわばった。

真雪は睨むように目を細め、右足をわずかつつ後退させる。

敵に悟られないように構え。

「話は後だ。ちょっと待っててくれるか」

『イレギュラー？』

「ああ、囲まれてんな。二桁は久し振りだ」

小声で言った。

背中に両腕を隠し、目を閉じる。

目蓋の裏に敵の残影が見えるようだった。

気配が蠢き、間合いをつめているのを感じる。

息をするのもためらい、大きく内側で脈打つ鼓動。

一切の音が消えた。

刹那。

「先制攻撃によりイレギュラーと判断！」

目を開くと同時に言い放つ。

周囲に飛び交う影。

垣根が揺れた。

真雪は大きく後ろへ跳ねると両手を大きく振りかぶる。

空気がかき回され、耳元で風が叫ぶように聞こえた。

「手加減なんざ出来ねえからな！」

両手で何かを投げつけると青白い光が木の葉や枝を巻き込みながら前方へと駆け抜ける。

耳をつんざく叫び声と、数秒遅れて聞こえた地響きを伴う轟音。

「残数7！」

インカムの向こうの声は聞こえない。

複数の声が耳元で叫んでいるが、たちまち耳をすり抜けていく。

真雪は身体をひねり振り返った後、片手を大きく振り上げた。  
地面から生まれる光の柱に複数の影が突き上げられ、宙を舞うのが見える。

視界を遮る、血の飛沫と葉。

「4！」

周囲に聞こえるのは真雪の声と衝撃音。

そして断末魔の叫び声だった。

周囲に立ち込める生臭い血の匂いと死臭が混じり合って吐き気をもよおす。

再び轟く爆発に似た音。

幾重にも響き、身体の奥を揺さぶるように。

「敵の沈黙を確認」

尾を引くように消えていく音と入れ替わり、静寂が戻った。

真雪は頬を拭いながら一息つく周囲を見渡す。

地面を塗らす血は、まるで雨上がりのようにも見えた。

転がる碎けた何かと塊を直視できずに視線をそらし。

『レイヴン、大丈夫ですか！？』

「まあね……コイツら、死臭に誘われて出て来たヤツっぽい。

馬鹿だな。大人しくしてりゃ生きてられたのに」

声に混じるのは微量の悲哀。

『考えてはいけません、レイヴン』

「分かってるよ。分かって……」

不意に。

真雪が何かに気付いて俯いた顔を上げた。

息を飲む。

唇を噛み、周囲を見渡した。

「まずい……」

咄嗟に構えた右腕に伝わる重い衝撃。

何かに体当たりでもされたかのように後ろに引きずられる。

鈍い痛みが広がり、痺れを感じた。

無意識に漏れる舌打ち。

目の前にあるのは今までと同じ景色と

「違う！」

思考を打ち消す怒号。

動揺の中で必死に状況を把握しようとしていた。

耳元で怒鳴るノクティルカの声は届かず。

敵の気配は感じる。

けれど姿は見えない。

これは。

おそらく敵は『インビジブル』と呼ばれる、姿を消す事のできる能力の持ち主だ。

しかも先ほどの攻撃から、物理攻撃を得意とするタイプなのだと推測する。

スキルを使うタイプであれば間合いを計りつつ、位置を読んで攻撃すればいい。

だが、今回は違う。

スピードも速く、位置を把握する前に攻撃を食らう可能性が高い。

勘で避けられたとしても、次の攻撃は避けられるとは限らない。

不利だと真雪は呟き、前方を睨んだままで唇を噛んだ。

しかも、下手をすれば。

「気配消してやがったな、透明人間！」

真雪は右手に神経を集中するも、既に何かが迫っている気配を感じた。

振り下ろされる威圧感。

空を切る音。

音の気配は頭上にある。

「このまま、やられてたまるかってんだよ!」  
怒鳴りながら眼前に手をかざした。  
肌を感じる風圧。

そして。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4079e/>

---

今宵、死神とダンスを

2010年10月22日03時42分発行